

東海大学大学院令和3年度博士論文

親の保育参画促進におけるコミュニティ形成過程と
子育ての心理に対する影響

指導 芳川 玲子 教授

東海大学大学院文学研究科
コミュニケーション学専攻

尾近 千鶴

本論文は東海大学大学院文学研究科に博士(文学)
授与の要件として提出した博士論文である

尾近 千鶴

審査委員:

浅井 千秋	教授	(東海大学, 主査)
近藤 卓	教授	(日本ウェルネススポーツ大学)
菅沼 真樹	准教授	(東海大学)
中島 由宙	講師	(東海大学)
芳川 玲子	教授	(東海大学, 指導教員)

親の保育参画促進におけるコミュニティ形成過程と 子育ての心理に対する影響

尾近 千鶴

内容梗概

本論文の目的は、子どもの養育者である親が主体的に保育の企画・運営に携わる「保育参画」を効果的に実現している保育所に着目した事例研究を通して、親の保育参画の仕組みと形成・維持および、コミュニティ形成の過程を明らかにすること、そして、保育参画とその促進による親の心理的影響を明らかにすることである。

昨今、都市化により地縁が希薄化し、地域コミュニティでの交流の機会が減少している。また、核家族化が進んでいることから、親兄弟といった血縁からの扶助が受けにくい。そのため、子育て世代の孤立化の傾向が進み、心理的な負担や不安などの心理的ストレス、虐待などが社会問題となっている。親の役割負荷による心身の不調や不適切な養育の予防のため、そして、子どもが健やかに成長する「子育て」のためには、子育ての価値観や子どもへの関わり方の肯定的変化のような「親育ち」による子育ての質の向上が必要と考えられる。

またそのためには、地域との交流や家族のつながりの変化、共働き世帯の増加など、子育て環境の変容に伴う親の孤立化や役割負荷、心理的ストレスなどの問題解決に対して心理的社会的側面からサポートする方略が必要である。そこで本研究では、子育てをする親の心理に注目した問題解決の方略と同時に、上記に挙げた社会集団の問題にも注目し、その解決に向けた方略も検討する。

我が国においては、親は保育サービスの利用者、サポートの対象とみなされる。通常、ほとんどの保育施設が、保育サービスを親へ提供している。共働き世帯の増加により、保育所の在園児数は増加し、保護者である父母から保育者に対する乳児期の子育て支援のニーズは高くなっている。他方、近年の海外での研究から、親が主体的に保育の企画・運営に携わる「保育参画」の実践によって、親が他の親との協働を通じて子育てを学び、親自身の抱え

る心理的ストレスを軽減するなど、子育ての質の向上に繋がることが明らかにされ、我が国においても、保育参画の場が必要であることが示唆される。

こうした状況の中で、我が国において、子育ての当事者である親が運営するプレイセンター、幼稚園を対象とした保育参画の研究が報告されるようになった。これらの研究では、親が集い、学び、助け合う経験は良好な子育て環境の醸成を促すことが示され、我が国においても、親共同保育の可能性を検討する時期にきていると提言されている（池本,2014）。

このように、保育参画は積極的な意義を有しているものの、乳幼児期の子どもを預かる保育所を対象とした「保育参画」に関する先行研究はほぼ見当たらない。それは、児童福祉法に基づき、保育所は、日々保護者の委託を受けて、保育に欠けるその乳児又は幼児を保育することを目的とする施設とされており、養育者である父母が就労をしつつ主体的に保育に関わることが一般的ではないためだと考えられる。しかし小学校には「父母と先生の会」である PTA があり、就労との兼ね合いにより活動の程度に違いがあるものの、親が教職員と対等の立場で子どもの健やかな成長のために活動している。

そこで本研究では、親の保育参画に半世紀近い長い歴史と実績を持ち、保育士・父母・園児の間に独自の関係を構築し保育を展開している保育所である「A 保育園」（以下、A 園と示す）を、保育参画の先行事例として取り上げる。そして、A 園において、親の保育参画の仕組みがどのように形成・維持されているのかを明らかにした上で、どのように親のコミュニティが形成され、親の心理にどのような影響を与えたのかについて検討する。

本論文は2部からなり、以下のように構成されている。

第1部では、幼児教育と保育、子育てをする親の問題を概観した上で、保育参画の効果と課題について論じている。問題提起では、子育てを行う親を取り巻く社会的環境と心理的問題を指摘し、親の保育参画をめぐる問題を提起した。第1章では、幼児教育と保育の成り立ちから、幼保一元化までを概観した。第2章では、子育てにおける親の孤立や役割負担と心理的ストレス、社会的サポートとコミュニティの役割、幼児教育・保育へのニーズについて検討した。第3章では、幼児教育・保育の背景と親に対する保育への関わりの促進と保育参画の実態について検討した。第4章では、親の保育参画促進の意義について論じた。

第2部では、A 園での保育参画に関する4つの調査研究について、それぞれの目的と方法、分析結果を示した上で、考察を行っている。第1章では、保育参画に関する4つの研究全体の目的と方法を概観し、インタビュー調査と KJ 法による質的分析を選択した理由を説明した。第2章では、「園による親の保育参画促進の仕組みと形成・維持の過程および、親に対する心理的社会的影響」というテーマで、園長と主任に対するインタビュー調査の結果について KJ 法を用いた質的分析を行い、園の運営者による親の保育参画を促進する仕組み

の形成と維持の過程、親同士のコミュニティ形成の過程、保育参画が親の心理や子育ての方法に与えた影響について、彼らの視点から検討した。第3章では、「保育士による保育参画促進の仕組みと形成・維持の具体化および、親に対する心理的社会的影響」というテーマで、保育士に対するインタビュー調査の結果について、KJ法を用いた質的分析を行い、保育士による保育参画促進の過程、親同士のコミュニティ形成の過程、保育参画が親の心理や子育ての方法に与えた影響について、保育士の視点から検討した。第4章は、「母親の保育参画によるコミュニティ形成の過程と心理的影響」というテーマで、母親へのインタビュー調査の結果について、KJ法を用いた質的分析を行い、保育に参画した母親の他の親とのコミュニティ形成の過程と、保育参画が母親の心理や子育ての方法に与えた影響について検討した。第5章は、「父親の保育参画によるコミュニティ形成の過程と心理的影響」というテーマで、父親への個別・グループインタビュー調査の結果について、KJ法を用いた質的分析により、保育に参画した父親のコミュニティ形成の過程と、保育参画が母親の心理や子育ての方法に与えた影響について検討した。終章では、保育参画の促進と、それが親に与えた影響、保育参画とその研究に関する今後の展望について述べた。第1部で論じた子育てをする親が抱える問題や保育参画の効果と課題、第2部の研究I～IVを通して得られた知見を統合し、親の保育参画促進の形成と維持の過程および、保育参画が親に与えた心理的社会的な影響について総括した。

上記の研究を通して、園による季節行事の準備や園庭の環境設定といった呼びかけなどの仕掛けによって、親が園に関わる機会を増やし、保育参画が促進された。その中で、親が子どもを見守る保育を理解し、園と協力体制をとり、就労との兼ね合いによる時間的な困難さや葛藤はあるものの、父母は行事などの作業を分担したり、仲間と共に多数の子どもを見るなど、親同士が協働することによって保育参画が維持されていた。また、親同士の関わりを通して、情報提供や相談などのピアサポートを行う相互扶助のコミュニティが形成されることで、子育てに関する負担と折り合いをつけ乗り越えながら、保育の質を向上させていたことが明らかとなった。

保育士による保育参画の促進により、父母は子育ての方法を学ぶことができ、家庭での養育に援用していた。母親は、保育士からの子育ての指南を伝授され、子育てしやすくなったこと、お互いに弱さを出し合える子育て仲間を得たことで、孤立することなく役割負担を軽減し、子育ての負担感や不安など心理的ストレスの軽減も見られた。母親はまた、仲間と共に豊かな保育環境を創り出し、父親を保育に巻き込んでいた。父親は保育参画を通して父親仲間ができ、活動を楽しみ、子どもに興味関心を持ち、子育てを楽しむという子育ての深化が見られ、ソーシャル・キャピタルの互酬性が見受けられた。

そして、母親、父親共に、自他の子どもを理解し成長を認識し、子育てに関する価値観や子育ての方法が変化したり、子育てへの満足感を持つことができ、自己肯定感を高めるなど、親としての成長という心理的な影響があることが明らかになり、親育ちが促進されたといえる。

本研究は、保育参画を実施している一事例のインタビュー調査に基づいたものであり、今後、多くの保育所における事例を調査し検討する必要性がある。また、保育参画の運営に関する課題として、保育士のワークライフバランス、次世代の人材確保、子育てサポートの技能の伝授、共働き増加による保育参画の活動内容の検討が挙げられる。今後一層の増加が見込まれる幼保一体化施設においては、就労などの状況や保育所への期待が異なる親たちが保育に参画する際の問題について考える必要もある。

キーワード

核家族化、子育てを学ぶ場、保育参画、コミュニティ、親自身の成長

Process of Facilitating Participation of Parents in Childcare and its Effects on Community Formation and Parental Psychology

Chizuru Okon

Outline of content

In this study, we aim to clarify the structure, formation, and maintenance of parental involvement in childcare and the process of community building. We use case studies focusing on childcare centers that effectively implement "childcare participation," in which parents and caregivers of children are proactively involved in the planning and management of childcare. We also clarify the psychological impact of childcare participation and its promotion on parents.

In recent years, opportunities for interaction in local communities have decreased because of the weakening of geographical ties caused by urbanization. In addition, as nuclear families has become increasingly common, receiving support from blood relatives, such as parents and siblings, have become difficult. Consequently, the child-rearing generation is becoming increasingly isolated, and psychological stress, such as psychological burden and anxiety, as well as abuse, is emerging as a social problem. To prevent mental and physical disorders as well as inappropriate child-rearing because of the burden of parental roles, and to ensure that children grow up healthy, it is necessary to improve the quality of child-rearing through "parenting," the engendering of which includes positive changes in the values of child-rearing and ways of relating to children.

To achieve this so, it is necessary to develop strategies to psychosocial support parents in solving problems such as isolation, role strain, and psychological stress caused by changes in the child-rearing environment, including changes in interactions with the local community, changes in family ties, and an increase in dual-earner households. In

this study, we focus on the psychology of parents who are raising their children, and, at the same time, we examine strategies for solving the problems of the social groups mentioned above. In Japan, parents use childcare services and are the targets of support. Most childcare facilities provide childcare services to parents. With the increase in the number of dual-earner households, the number of children enrolled in day-care centers has increased, and parents' need for childcare support during infancy has also increased. On the contrary, recent overseas research has shown that the practice of "childcare participation," in which parents are actively involved in childcare planning and management, leads to improved quality of childcare, as parents learn about childcare through collaboration with other parents and reduce their own psychological stress. This suggests the need for more opportunities for childcare participation in Japan.

Under these circumstances, there have been reports of research on childcare participation in Japan targeting play centers and kindergartens run by parents involved in childcare. These studies have shown that the experience of parents gathering, learning, and helping each other promotes the fostering of a good child-rearing environment and they suggest the possibility of joint parent childcare in Japan should be examined (Ikemoto, 2014).

Thus, although participation in childcare has positive significance, there is almost no prior research on "participation in childcare, targeting day-care centers that take care of infants and young children. This is because under the Child Welfare Law, day-care centers are facilities entrusted by parents to care for their infants or young children who lack daily day-care services, and it is uncommon for parents who are caregivers to be actively involved in daycare while working. However, elementary schools have PTAs, which are associations of parents and teachers, and although the level of activity varies depending on the work schedule, parents work on an equal footing with teachers and staff to ensure the healthy growth of their children.

Therefore, in this study, we focus on "Daycare Center A", a daycare center that has a long history and achievements in parental involvement in childcare for almost half a century and has developed a unique relationship among childcare workers, parents, and children. In addition to clarifying how the system of parental participation in childcare was formed and maintained at Daycare Center A, we examine how the parental community was formed and how it affected the psychology of parents.

This study consists of two parts and is organized as follows:

In the first part, we discuss the effects and challenges of childcare participation based on an overview of early childhood education, childcare, and the problems of parents raising children. The problem statement points out the social environment and psychological problems surrounding parents who raise children and raises the issue of parental participation in childcare. In Chapter 1, we provide an overview of the origins of early childhood education and childcare up to the unification of childhood and childcare. In Chapter 2, we examine parental isolation, role burden and psychological stress in child-rearing, the role of social support and community, and the need for early childhood education and care. In Chapter 3, we examine the background of early childhood education and care, the promotion of parental involvement in childcare, and actual state of childcare participation. Finally, in Chapter 4, we discuss the significance of promoting parents' involvement in childcare.

In Part 2, we discuss four studies on childcare participation in Daycare Center A after presenting their respective purposes, methods, and analysis results. In Chapter 1, we outline the overall purpose and methods of the studies and explain the reasons for selecting the interview survey and qualitative analysis using the KJ method.

In Chapter 2, we conduct a qualitative analysis using the KJ method on the results of interviews with the director and the head of the Daycare Center under the theme of "the process of formation and maintenance of the system for promoting parental participation in childcare by Daycare Center, and the psychological and social effects on parents." From their perspectives, we examine the process of community building among parents and the impact of childcare participation on parents' psychology and childrearing methods.

In Chapter 3, we conduct a qualitative analysis using the KJ method employed for the results of the interview survey on childcare workers on the theme of "the embodiment of the mechanism for promoting childcare participation by childcare workers and the formation and maintenance of the mechanism, and the psychological and social effects on parents." We examine the impact of childcare participation on parents' psychology and child-rearing methods from the perspective of childcare workers.

In Chapter 4, entitled "The Process of Community Formation and Psychological Impact of Mothers' Participation in Childcare," we use the KJ method to qualitatively analyze the results of interviews with mothers in order to examine the process of

community formation with other parents and the impact of mothers' participation in childcare on their psychology and parenting methods. In Chapter 5, we examine the impact of childcare participation on mothers' psychology and parenting methods.

In Chapter 5, "The Process of Community Formation and Psychological Impact of Fathers' Participation in Childcare," we conduct individual and group interviews with fathers and conduct a qualitative analysis of the results using the KJ method to examine the process of community formation of fathers who participated in childcare and the impact of their participation in childcare on their psychology and child-rearing methods.

In the final chapter, we discuss the impact of childcare participation on mothers' psychology and parenting methods. In the final chapter, we discuss the promotion of childcare participation and its impact on parents, as well as the prospects for childcare participation and research. We integrate the issues faced by parents raising children, the effects and challenges of childcare participation discussed in Part 1, and the findings obtained through Studies I–IV in Part 2, and summarize the process of formation and maintenance of the promotion of parental childcare participation and the psychological and social effects of childcare participation on parents.

The above-mentioned studies confirm that the Daycare Center's preparations for seasonal events and the setting up of the schoolyard environment increased the opportunities for parents to be involved in the Daycare Center and promoted their participation in childcare. Although parents faced some difficulties and conflicts in terms of time because of their work schedules, they were able to maintain their participation in childcare by sharing tasks such as events and watching many children together with their peers. In addition, we found that parents were able to improve the quality of their childcare while coming to terms with and overcoming the burden of childcare by forming a community of mutual support through peer support, including the provision of information and consultation.

By promoting participation in childcare by childcare workers, parents were able to learn how to raise their children and use this information to provide childcare support at home. Mothers were able to reduce the burden of their roles and the psychological stress of child-rearing by receiving child-rearing instructions from childcare workers, which simplified child-rearing, and by making friends with whom they could share their weaknesses. We further confirmed that mothers create a rich childcare

environment with their peers and involve fathers in childcare. Moreover, fathers deepened their child-rearing by making friends, enjoying activities, taking an interest in their children, and enjoying child-rearing through participation in childcare activities. We also observed the reciprocity of social capital.

In addition, both mothers and fathers were able to understand and recognize the growth of their children and those of others, change their values and methods of child-rearing, have a sense of satisfaction in child-rearing, and increase their self-esteem.

This study was based on an interview survey of one childcare center, and surveying and examining cases in many childcare centers is necessary in the future. In addition, issues related to the operation of childcare participation include the work-life balance of childcare workers, securing human resources for the next generation, imparting skills for childcare support, and examining the content of childcare participation activities because of the increase in the number of working parents. In the case of integrated childcare facilities, which are expected to increase further in the future, it is necessary to consider the issues that arise when parents with different working conditions and expectations from childcare centers participate in childcare.

Keywords.

nuclear family, place to learn about parenting, childcare participation, community, parents' growth

目次

内容梗概.....	I
問題提起（本論文の問題の所在、問題意識と目的、構成）.....	1
第1部 乳幼児における親の関わり —親を取り巻く社会的環境、心理的問題と保育参画の効果と課題—	12
第1章 乳幼児期における教育の成り立ち	12
第1節 世界における乳幼児期の教育である保育の成り立ち.....	12
第1項 世界における保育所の成り立ち	12
第2項 世界における幼稚園の成り立ち	13
小括 第1項と第2項のまとめ.....	14
第2節 日本における乳幼児期の教育である保育の成り立ち.....	15
第1項 日本における幼稚園の成り立ち	15
第2項 日本における保育所の成り立ち	16
第1 託児所.....	16
第2 季節保育所.....	16
小括 第1項、第2項のまとめ.....	17
第3項 社会変化における幼稚園と保育所への分岐と幼保二元体制の固定化.....	17
第4項 社会変化による幼保一元化に向けた動きと現状	19
第5項 認定こども園の現状と課題	22
小括	23
第2章 子育ての心理的ストレスと保育施設におけるソーシャル・キャピタル	25
第1節 親の子育てに関する心理的ストレス	25
第2節 親の子育てに関する心理的ストレスと幼児教育・保育へのニーズ	28
第3節 親の心理的ストレスへのサポートに関する先行研究と保育者への示唆	30
第4節 保育における心理的社会的サポートへのニーズとソーシャル・キャピタル.....	33
小括	36
第3章 親への保育参加・参画の促しと実態	37
第1節 幼児教育・保育における親への関わり	37
第1項 国際的な視点から見た親への関わりと親の役割.....	37
第2項 我が国の幼稚園教育要領と保育所保育指針における親への関わり	39
第1 幼稚園教育要領における親への関わり	39
第2 保育所保育指針における親への関わり	40

第2節	親の保育への関わり方・形態.....	41
第1項	世界における親の保育への関わり方・形態としての保育参画の概要.....	41
第1	韓国.....	41
第2	ニュージーランド.....	42
第3	アメリカ.....	43
第2項	親が保育に関与しやすい工夫.....	45
第3項	日本における親の保育への関わり方・形態について.....	46
第1	保育参観・保育参加・保育参画の定義.....	46
第2	母親の保育参画.....	47
第3	父親の保育参画.....	48
第4	保護者会、父母会での親への関わり.....	49
第5	親が運営に関わる幼児教育・保育施設.....	50
第4章	親の保育参画促進に向けて.....	53
第1節	第三者評価による保育の質確保からみた保育参画.....	53
第2節	保育参画に関する先行研究と今後の課題.....	54
第3節	保育参加から保育参画への過程と本研究の目的.....	58
第2部	親の保育参画促進におけるコミュニティ形成過程と、子育ての心理に対する研究	
	61	
第1章	研究目的と方法.....	62
第1節	研究目的.....	62
第2節	調査対象施設の概要.....	62
第3節	研究方法.....	64
第2章	園による親の保育参画促進の仕組みと形成・維持の過程および、親に対する心理的社会的影響（研究Ⅰ）.....	67
第1節	研究目的.....	67
第2節	研究方法.....	67
第1項	時期、手法、手続き.....	67
第2項	インタビュー内容.....	68
第1	園長への質問項目とその解説.....	69
第2	主任への質問項目とその解説.....	70
第3項	分析の方法、手続き.....	71
第3節	結果と考察.....	78
小括	84

第3章 保育士による保育参画促進の仕組みと形成・維持の具体化および、親に対する心理的社会的影響（研究Ⅱ）	89
第1節 研究目的	89
第2節 研究方法	89
第1項 時期、手法、手続き	89
第2項 インタビュー内容	90
第1 保育士への質問項目とその解説	92
第3項 分析の方法、手続き	92
第3節 結果と考察	106
小括	121
第4節 第2章と第3章のまとめ 保育者の視点から見た親の保育参画	123
第4章 母親の保育参画によるコミュニティ形成の過程と心理的影響（研究Ⅲ）	125
第1節 研究目的	125
第2節 研究方法	125
第1項 時期、手法、手続き	125
第2項 インタビュー内容	126
第1 母親への質問項目とその解説	128
第3項 分析の方法、手続き	129
第3節 結果と考察	140
小括	152
第5章 父親の保育参画によるコミュニティ形成の過程と心理的影響（研究Ⅳ）	156
第1節 研究目的	156
第2節 研究方法	156
第1項 データ収集の方法	156
第2項 インタビュー内容	157
第1 父親への質問項目とその解説	159
第3項 分析の方法、手続き	160
第3節 結果と考察	161
小括	179
終章 保育参画とその促進による心理的社会的影響および、今後の展望	182
第1節 本論文で行った調査の知見	182
第2節 総合考察	183
第3節 今後に向けて	190

第4節 知見を踏まえた保育参画の意義	190
第5節 限界と課題	191
第6節 保育の課題	191
引用文献	193
謝辞	201
巻末資料	- 1 -

問題提起 (本論文の問題の所在、問題意識と目的、構成)

近年、都市化による家族形態の核家族化、地域におけるコミュニティ内の関わりの希薄化が進み、子育て世帯を取り巻く環境は変化している。子育て世帯の約80%は核家族で、共働き世帯は70%以上を占めている(厚生労働省, 2018)。子育てを担う親の多くは、祖父母や近隣の知人など気軽に子どもを預けられることが少なくなっている(厚生労働省, 2018)という。都市化による人との関係性の希薄化という社会的背景から、子育てへ様々な影響を及ぼしていると考えられる。

乳幼児期の子どもを持つ世帯において、子育ての孤立化が社会問題となっている。親になり、子どもを通じた友人や仲間を得る機会が減少している中、「子どもに関連した友人や仲間がいない母親の多くは、孤独感を感じやすい状況にある」(馬場ら, 2013)という。

また、女性は仕事を通し知り合いができた頃とは異なり、子育ての孤立化の傾向がある社会的背景の中で母親となり、慣れない子育てで責務の多さ・重さによる役割負荷の状況となる。そのため、孤独感、子育ての疲労による負担感、親としての自身のなさからくる不安といった心理的ストレスを抱えながら日々を過ごしていると考えられる。

このような現代の親の子育てに関する孤立、役割負荷という困難な状況による心理的ストレスは、「少数の特別な親の問題ではない」(友定, 2004)ことから、子育てに関わる親一般に見受けられると考えられる。

さて、親の子育てに関する孤立、役割負荷による心理的ストレスは、親子共に、また社会面でどのような影響を及ぼすのであろうか。

令和2年度(2020)、全国の児童相談所が対応した児童虐待は2,050,299件で、前年より5.8%で、11,249件の増加となった。32年連続で過去最多を更新している(厚生労働省, 2021 令和3年度児童相談所での児童虐待相談対応件数速報値)。虐待をする親の背景を以下にまとめる。虐待の背景には経済問題、子ども時代に自尊心と自己効力感を高める育ちをしてこなかった、虐待を受けた生育歴、人間関係を構築することやストレスに対処することがうまくできない、支援者のなさや支援の拒否、知的障害、精神疾患あるいは産後うつ、望まない妊娠、愛着形成の問題などの要因が挙げられる。

子育てに関する相談件数とその内容について概観する。厚生労働省(2020)は、平成30年度の福祉行政報告例で児童福祉関係において児童相談所での養護相談が45.3%と最も多いことを示している。養護相談のうち児童虐待相談を被虐待者の年齢別に増減率で比較すると、「3~6歳」、「7~12歳」が20.7%と最も多く、次いで「0~2歳」が19.4%となっている。相談の種別をみると、「心理的虐待」が最も多く、主な虐待者別構成割合をみると「実母」が47.0%と最も多く、次いで「実父」が41.0%となっており、「実父」の構成

割合は年々上昇している。養護相談のうち乳幼児の占める割合は半数近くを占め、実母と実父からの心理的虐待が多いことが明らかとなった。

虐待は、養育者である父母の生育歴、経済的問題、ストレス対処力といった個人的側面だけが要因ではないことが窺える。その要因として、支援者のなさといった父母を取り巻く社会的な背景が考えられる。彼らは、子育ての経験の無さからくる負担を軽減する手立てが限られ、子育ての比重が親本人に集中することによって起こる役割負荷といった困難な状況に陥り、心理的ストレスを抱えている。虐待は、こうした原因によって複合的に引き起こされると考えられる。

幼少期に虐待を受けた子どもは、青年期・成人期に「対人関係や社会適応が困難」になるなど、「心身・社会性の発達が阻害」されるといった影響を及ぼすことが、日本小児科学会（2014）で確認されている。

このように、親の子育てに関する孤立、役割負荷という困難な状況による心理的ストレスは、不適切な養育の要因の一つになり得ること、子どもの今後にまで影響を及ぼすことが導き出されている。

町野ら（2018）は、虐待の増加が社会面でどのような影響を及ぼしているのか、経済的視点から我が国では初めてとなる「社会的コスト」としての児童虐待を分析している。研究結果から、2012年度における虐待コストは、16,028億円であり、東日本大震災における福島県沿岸部の被害額に近い額であることが明らかになった。子どもに資源を投入することが結果として将来の莫大な損失を防ぐという知見から、今後、政策として虐待の長期影響を測定するシステムが必須であるという。

神奈川県調査（2021）では、必ずしも虐待が起きるというわけではないとしつつ、虐待の背景の一つとして、親族や地域社会から孤立した家庭を挙げている。

母親について取り上げると、孤立はもっとも心に悪影響を及ぼし、母親が一人では子育てできないことは明白である（佐藤, 2017）。母親が子育てに関する支援を周囲から得られない状況は、かつて人類が進化の過程で群れの中で子育てしていた状況と違い、一人で子どもに向き合っていることから、心理的に不安や負担を感じ、子どもを健やかに育てることを困難にするリスクをはらんでいると考えられる。以上のことから、虐待に限らず、親の子育てに関する不安や負担感など心理的なストレスの諸問題は、核家族の中で主に子育てを担う母親個人の力だけでは解決できないと考えられる。これらのことから、虐待は親への心理面、親子関係、子どもの心身への影響といった家族間の問題だけではなく、広く経済面、社会面にも影響を及ぼすことが窺える。

厚生労働省（2007）では、虐待の発生を予防するために、家族のストレングス（強み）

とバランスを意識してアセスメントすることが重要であると提言している。以下にそれらについてまとめる。

虐待する父母は、少子化・核家族化の影響から子どもと接する機会がなく、子育てに関する知識を得られないまま親となり、その未熟さ、技術の不足、さらに親自身も被虐待児だったなどの世代間連鎖等多岐にわたる背景を持ち合わせている。

地域社会からの孤立や人的サポートの希薄さも重要な要因となっていることから、不適切な養育を予防する方法としては、援助者が、養育者である父母の相談相手になり、社会的孤立をなくすこと、あらゆる社会資源を導入して生活のストレスを軽減するサポートを提供することが挙げられる。また、子どもに健康問題がある場合は、親へ負担がかからないよう、子どもの状態が改善し、再発を予防することが必要だとしている。

子育てをする親にとって有効な社会資源の一つとして、家族や子育て仲間などのソーシャル・キャピタルが挙げられる。ソーシャル・キャピタルが豊かな地域の人々は、信頼しあい自発的に協力する(Putman, 1993/河田, 2001)ことによって、コミュニティに広く影響する。本論文では、社会的な組織の特徴を表すこの概念を子育て世代の親のコミュニティに用いることとする。

これらのことから、適切な養育が困難な状況にある家庭に対し、心理面・社会面といった多方面からの子育てに関する具体的なサポートが必要と考えられる。また、予防的な視点から、養育の困難度に限らず、家族間の健康度を維持し子どもが健やかに育つため、あらゆる家庭の父母に対し、子育てしやすい環境を整えるためのサポートが必要と考えられる。そのためには、身近で利用しやすいサポートであることが望ましいと考えられる。

まず、身近で利用しやすいサポートについて、家族・親類縁者からのサポートについて概観する。子どもを持つ父母が孤立しないよう、血縁関係、特に祖父母による子育てへの手助けは、父母にとって心強く頼りになると推測される。内閣府(2014)は、「子どもが小学校に入学するまでの間、祖父母が育児や家事の手助けをすることが望ましいかどうか」について親を対象に調査した。その結果、父親母親に大きな差はなく、8割前後が祖父母の手助けを望ましいと回答している。しかし、現状では、ほとんどの子育て世帯は核家族であり、利用しやすいサポートである祖父母は近隣に在住していないことが多い。

そうしたことから、「男女共に過去20年間の育児時間は、増加傾向」(総務省, 2017)となっている。都市化によって、祖父母からのサポートを得られにくい核家族の母親に、子育ての比重が高いことが窺えるが、近年は、祖父母に代わるサポートとして、父親の子育てへの参加が期待されている。

そこで、孤立化の中で子育てをする母親に対するサポートの資源として、父親について

概観する。父親の一日に占める「家事・育児時間」について、内閣府（2018）の「我が国の父親の家事・育児関連時間」を諸外国と比較すると、他の先進国よりも低い水準にとどまっている。例えば、6歳未満の子どもを持つ父母の家事・育児関連時間の1日当たりの国際比較では、我が国の父親は1時間23分、米国は3時間10分、ドイツでは3時間であり、欧米諸国の3分の1程度であった。我が国の一般的な父親は雇用労働に従事し通勤をしている。6歳未満の子どもを持つ共働き世帯の父親の平均就業時間は、8時間31分（総務省, 2017）であることから、子育てに充てられる時間は上記の1時間23分と限られていると考えられる。

近年は、父親が子育てに時間を割り当てられるように、ワークライフバランスの環境整備が徐々にすすめられている。平成29年度（2017年）、男性の育児休暇取得率は民間企業で5.14%であった。令和2年（2020年）では、12.7%で、過去最高となっている。家庭での子育てや家事の役割についての意識調査では、男性は片働き世帯か共働き世帯に関わらず、夫婦の役割は『同等』（片働き 56.7%、共働き 57.1%）との回答が半数以上を占めていた（内閣府, 2018）。これらのことから、父親は、育児休暇を取得し、夫婦で協力し家族の一員として子育ての役割を担いたいと意識していることが窺える。

上記で述べたように、ワークライフバランスの環境整備によって育児休暇取得率は増加し一定の効果はあるものの、一般的に雇用労働をする父親は、前述した家事・育児関連の国際比較から、我が国の父親は子どもに関わる時間は限られている。そのため母親へのサポートのための十分な時間が取れず、実質的には母親が主に子育てを担っていると考えられる。

それでは、母親の子育てについて概観する。母親の家事・育児関連時間は、我が国は7時間34分、米国は5時間40分、ドイツは6時間11分で、他の先進国と比較すると長時間で、一日の約三分の一を占めていた。主に一人で長時間、家事・育児を担うことによる我が国の母親の子育てに関する孤立、役割負荷、心理的ストレスに対し、社会的ネットワークであるソーシャル・キャピタルや、社会的サポートを受けることによる負担の軽減が諸外国と比較して乏しいことが推測される。こうしたソーシャル・キャピタルにおいて子育てのコミュニティが形成され、その中で子育てサポートを受けることができれば、孤立、役割負担からくる心理的ストレスの軽減が期待されるであろう。

そこで、母親の子育てに関する孤立、役割負荷、心理的ストレスに対し、母親はどのように認識しているのかを概観する。

内閣府（2021）による、「子育てに対する楽しさ・つらさの意識について」の両親を対象とした調査結果を過去の結果と比較したものを以下にまとめる。

「楽しさを感じる時の方が多い(計)」は年々減少し、2015年度の86.2%から、2020年では78.9%と、7.3ポイント減少している。「子育てをされていて、自分にとって負担に思うこと」についての回答では、「子育てに出費がかさむ」が55.6%と最も高く、以下、「自分の自由な時間が持てない」(46.0%)、「子育てによる精神的疲れが大きい」(43.1%)、「子育てによる身体の疲れが大きい」(42.6%)の順となっている。これらはいずれも2005年から年々増加していることから、親の80%近くは子育てに楽しさを感じつつも、経済的負担と心理的・身体的疲労による負担を50%近くの親が認識している。それら育児に関する心理的ストレスを認識している親は、増加傾向にあると考えられる。

このように子育てに関する悩み・ストレスがあると親が認識している場合、2020年度では、親は配偶者(パートナーを含む)に相談する割合が81.1%と最も高く、2015年度の62.5%より18.6ポイント増加している。過去の結果と比較すると、「学校(教師、スクールカウンセラー、養護教諭)」への相談が、2015年の6.5%から2020年では18.0%となり、11.5ポイント増加している。また、保育所、保育施設、保育ママへの相談が、2015年の10.3%から2020年では20.2%となり、9.9ポイント増加している(内閣府,2021)。

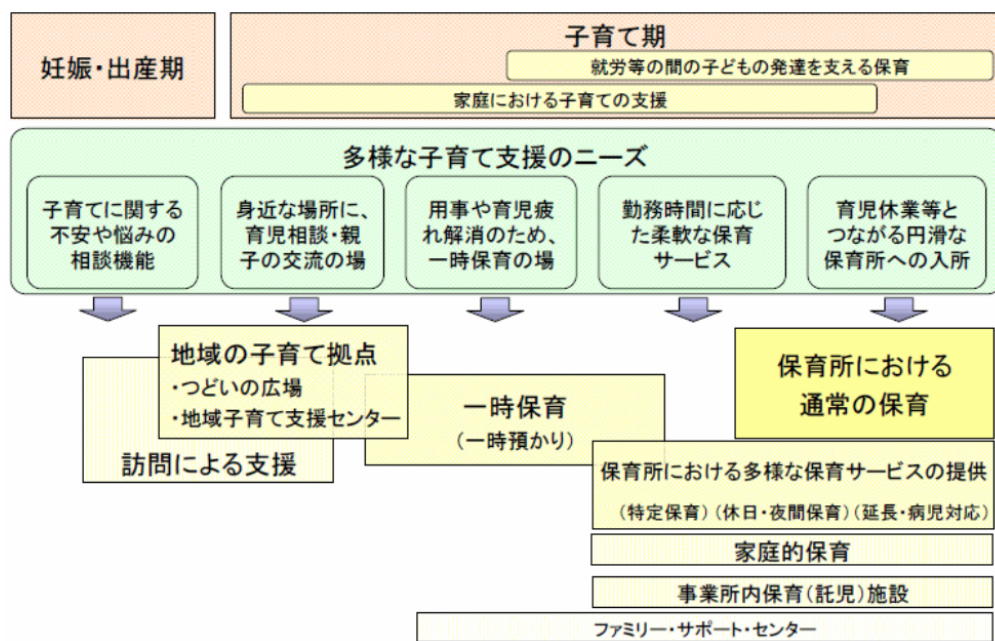
これらのことから、親が子育てに関する何らかの心理的ストレスを認識した場合、相談相手は、もっとも身近な存在である配偶者が大部分を占めていた。また、近年の特徴として、学校や保育関係者といった身近な第三者が相談相手という傾向があった。

上記のような、子育てに関する諸問題の改善やストレスの軽減を図るため、また、深刻化を防ぐため、さらには予防的な観点から、医療機関を含め様々な政策の検討がなされ、行政から親に対し、様々なサポートが提供されるようになった。

行政におけるサポートとして、内閣府(2007)では、「子どもと家族を応援する日本」重点戦略検討会議を開催した。「すべての子ども、すべての家族を大切に」を基本的な考え方に置き、2030年以降の若年人口の大幅な減少を視野に入れ、制度・政策・意識改革など、あらゆる観点からの効果的な対策の再構築及び実行を図るための検討を進めている。行政機関は、子どもの出生直後から切れ目のない子育て支援を親に対して行うが、これは虐待の早期発見、早期介入による予防効果を狙っているものと考えられる。

子ども・子育て支援新制度は、幼児期の学校教育や保育、地域の子育て支援の量の拡充や質の向上を推進するための制度である(内閣府,2017)。必要とするすべての家庭が制度を利用でき、子どもたちがより豊かに育つ支援を目指した取り組みを進めている。また、住民にとってもっとも身近な存在である市町村が地域の子育て家庭の状況や、子育て支援へのニーズを充分把握するために、5年間計画で「市町村子ども・子育て支援事業計画」を作成するとしている。

多様な子育て支援サービスについて、妊娠・出産期から子育て期に渡り、地域の子育て拠点として、つどいの広場や地域子育て支援センターの設置、一時保育、保育所における作用な保育サービスの提供、家庭的保育、事業所内保育（託児）施設、ファミリー・サポート・センターなどが挙げられる。（図1 多様な子育て支援サービス参照）



内閣府(2007)第3回「子どもと家族を応援する日本」重点戦略検討会議「地域・家族の再生分科会」議事次第 多様な子育て支援サービス より引用

図1 多様な子育て支援サービス

都道府県や国は、こうした市町村の取組を制度面、財政面から支えると提言している。具体的には、消費税率引き上げによる増収分を活用し、幼稚園や保育所、認定こども園などの職員配置の改善や、職員の処遇改善を進めることとしている。

地域の子育て支援の量の拡充については、厚生労働省（2018）の待機児童解消加速化プランによる市区町村と企業主導型保育事業における保育の受け皿拡大を合わせ、2013年度から2017年度末まで約53.5万人を達成している。子育て安心プランによる受け皿は、2018年度から2020年度末までの3年間で313.5万人に達している。待機児童数は12,439人と、過去の比較し減少していることから、保育の量の拡充は、一定の効果があると考えられる。

行政の様々な政策により、保育の量の確保は改善傾向を示しているが、それに加えて乳幼児を持ち、負担を感じる親への子育ての指南といった親個人の養育の質の向上が必要と考えられる。

厚生白書（1998）では、これからの子育て支援の課題について、保育サービスの確保・充実と、子育て相談などの支援を総合的に推進していくとしている。以下に、その背景を挙げる。

一つめは、核家族化、都市化による近隣との人間関係の希薄化から、子育てについて大きな不安を感じている。二つめは、児童相談所への虐待相談件数が急増し、問題が深刻化していることから、親への積極的な援助活動が必要である。三つめは、子どもの健全な成長・発達を保障するため、虐待発生の防止、虐待の早期発見と積極的対応が求められている。四つめは、保育所は地域社会の中で最も身近な児童福祉施設であり、子育てに関する豊富な知識・技術を有することから、地域全体の子育て家庭が活用できるよう、幼稚園を含め、その役割を果たすことが求められている。

以前にも増して配偶者間ではお互いを相談相手として必要としているが、身近な第三者への相談相手として、例えば、保育の場で、相談体制を整えることが必要と考えられる。

友定（2004）は、「多くの保育現場では、今の子育て支援の方法では不十分と指摘の声」が挙げられているとし、幼稚園や保育所などが、「いくら親の代わりに保育を引き受けても、保護者が成長変化しなければ、親子関係の質が変わらない」と提言している。

支援側が保育サービスを提供し、親が受給する形が多かった従来の支援策に加え、一層有効な対策が望まれていると考えられる。保育ニーズへの受け皿という量的な確保に加えて、先行研究で指摘しているように、保育職が親への支援サービスとして子育てを引き受けるだけでなく、親自身が保育職に相談しながら子育てを学び、成長していく場と機会を持つことが必要と考えられる。

日本における親の保育への関わりについての先行研究で、笠原（2008）は、芸術をととした教育の場を研究対象とし、幼児と親が共に学び、その育ちの豊かについて考察している。友定（2004）は、幼稚園における保護者成長支援プログラムを通し、子どもの成長時期に応じた親の子育て力を高める実践活動を行っている。保育者と親が有機的に作用し、連携し、相互扶助活動をしていく視点を持つ重要性が提起されている。

池本（2014）は、経済協力開発機構（**Organization for Economic Co-operation and Development**, 以下、OECD と示す）の調査から、我が国では、親は保育サービスの利用者、支援の対象とみなされ、保育の質は主に保育者側の提供するサービスによるところが大きいと考えられる傾向があることを示している。そこで、親をパートナーと位置付けることで、親の力を保育の質の改善に役立てる可能性があるとし、我が国では、親の参画により保育の質の改善を目指す動きが政策上ほとんど注目されていないと指摘している。

現状では、保育の受け皿として保育施設の量的拡大はなされているが、それと同時に保育の質の維持・向上をどう両立させるかが大きな課題であると考えられる。

「保育参画」は、青井・小川（2009）によると、保育参観や保育参加に比べ、より積極的、主体的に保育に関与することを保護者に求めているとしている。その特徴は、保護者が独自の企画を考え、保育時間中に、子どもたちに働きかけるという保育者体験の側面を持っている。保育の一部を担うという点で、保育参観、保育参加とは異なる。

そこで、本研究では、「保育参画」は、親が主体的に保育の企画・運営に携わる保育への関わり方・形態として捉える。

海外での保育参画の状況から、親がより積極的な役割を担えるような機会を授けることによって、子どもの育ちや学び、心身や社会的な健康のためになることから、保育参画することは親と子ども双方にメリットがあると言える。したがって、日本において保育施設で親が協力しながら子育てを行い、その中で子育てについて学び成長し、ストレスを軽減できる場が求められている。

これらのことから、親が気軽に行ける場所である保育施設で悩みや困りごとを相談できる相手として、保育士の存在が重要と考える。保育士の親への働きかけと支援によって、親が保育に関わるようになり、その結果、親が成長することで、その力を保育の質向上に活かすことが可能になるのではないかと考えられる。

しかし、このように積極的な意義を有しているにも関わらず、我が国において保育所における「保育参画」の導入は進んでいるとは言い難い。

そこで、親の力を保育の質の改善に役立てるパラダイムシフトの可能性を見出すことが必要なのではないかと考える。

通常、ほとんどの保育所では育児サービスを保護者へ提供するという形で実施している。他方、近年のプレイセンターや幼稚園を対象とした研究から、保育参画をすることによって、保育者との関わり方を理解したこと、子どもへの働きかけの意図・意味を理解したこと、親同士の交流が得られたこと、子育ての悩みや不安を解消するきっかけとなったことが明らかにされた。

本研究では、都市化による地域コミュニティでの人々の交流の減少により、子育てをする親が孤立化・孤独感を抱き、気軽に子育てに関する事柄を相談する身近な存在が少ないという現状の中で、まず、保育所での保育参画の事例を通して、保育参画がどのように形成・維持されているのか検討する。その上で、保育参画することで、保育士、同じ子育て仲間として他の父母と出会い、協力して活動するコミュニティがソーシャル・キャピタルとしてどのように機能するのかについて検討する。そして、子育て支援をサービスとして受けるだけでなく、主体的に保育参画をすることによって、親が抱く孤独感、負担感、不安などの心理的ストレスは、どのように変化するのか検討する。

今後、乳幼児を持つ世帯は共働きが増加すると考えられ、母親の子育てに関する相談相手は父親に加えて、子育てに関する豊富な知識・技術を持つ保育者や、同じ立場である子育て仲間と考えられ、地域社会の中でも最も身近な児童福祉施設である保育所に着目する。

前述した友定（2004）の先行研究では、幼稚園や保育所が、親の代わりに保育を引き受ける今の子育て支援の方法は不十分とし、親が成長し変化する必要があることを提言している。これらのことから、保育施設は、父母の就労により、保育に欠ける子どもを預かる施設としての機能に加えて、保育者の働きかけによって、親が子育てを学ぶ場となり、養育者である父母と、子どもが共に成長する場になると考える。

そこで、親が孤立することなく子育ての悩みや負担を乗り越え、安心し自信を持って育児に取り組めるよう、保育参画による親への影響という目的を検討し、事例を取り上げ検討することに意義があると考えられる。

本研究では、親の保育参画に半世紀近い長い歴史と実績を持ち、保育者・養育者である父母・園児の間に独自の関係を構築し、保育を展開している保育所のA園を先行事例として取り上げる。

保育所を事例とした理由は、以下の通りである。

- 1) 昨今、共働き世帯が増加している。
- 2) 地域の身近な存在であり、親子にとって初めての集団の場となる。
- 3) 父親が仕事と子育ての両立を担うきっかけの場となる。

4) 子育てという同じ立場の仲間と出会える場で共感し合える。

集団の場である保育所 A 園での保育参画の運営者、保育士の役割、保育参画をする父母によるコミュニティ形成と子育ての心理に対する影響について検証する。その目的は、親の保育参画の仕組みと形成・維持および、コミュニティ形成の過程を明らかにすることである。また、保育参画とその促進による、親の心理に対する影響を明らかにすることである。

そこで、具体的には以下の項目について検討する。

- 1) 保育参画の運営や実施を行う園の管理者や保育士がどのようにして保育参画の仕組みを形成し維持しているか。
- 2) 親が保育に関わり、子育てをする同じ立場の親と出会うことで、共感しあう相互扶助的なコミュニティを形成しているか。こうしたコミュニティにはソーシャル・キャピタルとしての機能が見られるか。
- 3) 親が保育に参画し、保育士と協働活動することや、親同士のコミュニティが形成されることで、孤独感や負担感、不安といった子育てに関する親の心理的ストレスが軽減されるか。また、子育てに関する価値観や子どもの関わり方が肯定的に変化する、自己肯定感が向上するなど親の成長が促されるか。

注釈

用語の表記について、以下に挙げる。

- 1) 「保育所」は、施設を開設する上で、名称について法律の規定はない。本研究の対象施設である保育所の名称はA保育園であるため、A保育園を「A園」、または「園」と表記する。
- 2) 「親」に関する表記について、「保護者」、「父母」など文献によって様々であるが、引用する場合は、そのままの表記とする。子どもの「養育者」としての親について論じる際には、「養育者である親」「子育てする親」といった表記とする。「親」には「父親」、および「母親」が含まれる。
- 3) 「子育て」に関する表記について、文献を引用する場合、例えば、「育児」は、そのままの表記とする。筆者が論じる際には、「子育て」と表記する。
- 4) 「サポート」に関する表記について、文献を引用する場合、例えば、「育児支援」は、そのままの表記とする。考察やまとめる際には、「サポート」と表記する。
- 5) 本研究では、育児の中で生じる孤独感、負担感、不安感など、親の心身のストレス状態を、子育てに関する「心理的ストレス」と定義する。
- 6) 「ソーシャル・キャピタル」は「『社会関係資本』と訳され、個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、そこから生じる互酬性と信頼性の規範である」(Putman, 2000/柴田, 2008)と定義する。
- 7) 「保育参画」は、親が主体的に保育の企画・運営に携わることと定義する。
- 8) 「幼児教育・保育」については、行政、文献などの表記と同様とするが、幼保一体化の流れから、教育は保育に含まれるため、考察やまとめでは「保育」と表記する。
- 9) 幼児教育の「教諭」と「保育士」については、「教師」など文献によって様々であり、引用する場合は、そのままの表記とする。考察やまとめでは「保育者」と表記する。

第1部 乳幼児における親の関わり —親を取り巻く社会的環境、心理的問題と保育参画の効果と課題—

第1章 乳幼児期における教育の成り立ち

第1節 世界における乳幼児期の教育である保育の成り立ち

乳幼児期における教育、つまり「保育」の成り立ちは、18世紀から19世紀に見られ、その「独自の意義や役割への注目は、西欧の教育思想の中に見ることができる」（小田, 2016）という。かつて教育とは、大人の価値や知識を子どもに伝達するものとされてきた。しかし、ルソーによる子どもの発見から、「子どもが生きる中でさまざまな経験を通して自ら必要な知識を獲得していくのが教育だ」（小田, 2016）とする考え方が、確立されていった。

18世紀は産業革命が始まり、工業中心の都市化によって子育てを取り巻く環境に変化が生じた。これまで共同体で横のつながりを持ち「子育ての規範や仕組みが幾重にもめぐらされていた」（梶ら, 2016）暮らしから、家族単位での暮らしとなった。身分制度は廃止されたが、就労の機会は男女平等には与えられず、家事、養育は母親が担っていたことが窺える。

母親の子育てに対する責任が重くなったのと同時に、困窮家庭が増大したことにより、家庭における養育が社会や国家が公的に支える必要のある「保育」となった。

近代にはさまざまな保育施設誕生している。ひとつは、子育てに専念する母親や養育係が家庭にいることを前提とした補完的な施設、もうひとつは、家庭での養育が困難な親の幼児を対象とした保護的な施設である（梶ら, 2016）。

本章では、家庭での養育の状況によって、子どもの保育施設と、子どもが自ら学ぶ教育である「保育」がどのような経過をたどったのかを概観する。

第1項 世界における保育所の成り立ち

世界における最初の保育所は、産業革命期の1816年、スコットランドのニュー・ラナークにある紡績工場の敷地内に、工場で働く労働者とその子どものため、ロバート・オーエン（以下、オウエンと示す）が設立した学校・「性格形成新学院」（The New Institution for the Formation of Character）の1歳から6歳までの幼児を対象とする「幼児学校」（Infant School）（水田, 2010）とされている。以下に、その昨評をまとめる。

オウエンは、環境が性格を形づくると考え、従来の教科書学習制度とは異なる、心身の健康の保持のため大自然の中で遊ぶ楽しさを味わうことと実物教育による教授法を用い

た。オウエンは、より善い効果があると考え、両親の目の届くところで広い遊び場と運動場を設置した。目が届くことによって、両親は子どもを預けるだけでなく、保育に関心を持ち、子どもの成長していく様子を知ることができるという効果が得られると考えられる。

彼は教育こそが極貧状態を解消するための手段であり、相互扶助の協同社会を実現するために必要なものであると考えていた。「合理的に思考しかつ行動するように訓練し、一生涯を通じて役に立つような実際的な知識を授けること」を教育目標に掲げ、工場の労働条件の改善と労働者ならびにその子弟の教育に取り組み、成果を収めたとされている。

これらのことから、世界における保育の成り立ちは、産業革命期の労働者階級の両親の子どもに対する、自然の中で楽しさを感じることによる心身の健康の保持と、相互扶助の協同社会の実現を目指した実物教育が始まりであった。

このようなオウエンの取り組みは、両親と子どもに良い環境を整えることで、家族にとって良い影響を与えていたと捉えられる。良い環境で育った子どもは、ひいては社会に利益を与え、逆に社会から家族の成員にあらゆる恩恵をうけることができるという、人と社会との良い相互作用が働くとオウエンは考えていたことが窺えた。

第2項 世界における幼稚園の成り立ち

世界における最初の幼稚園は、以下の経過をたどって開設された。ドイツ人、フリードリヒ・フレーベル（以下、フレーベルと示す）は、幼稚園開設の前年、1839年に、幼児の遊びを健やかに育むため開発された恩物を用い、自然界の法則性、美的感性を身につけること、日常生活の理解を促すことを目的に、幼児教育指導者講習科と付属実習園を開設した。

翌年、1840年、フレーベルはこの実習園を、幼稚園（kinder garden）と名付けた（小田ら、2016）。これが世界における最初の幼稚園である。以下に、その概要をまとめる。

幼稚園開設の目的は、恩物を用い子どもの遊びを育むこと、幼児教育に携わる教師を養成することであった。その他、母親たちに良いモデルを与えて家庭を変革しようという意図もあった。幼稚園は、我が子への集団保育の場を求めていた知識人層や、教育に関わるという役割を認識した婦人に応じ、世界各地に広まっていった。

世界における幼稚園の成り立ちは、子どもの遊びを発展させることから始まっていることと捉えられる。

小括 第1項と第2項のまとめ

近代の産業革命期には、労働者階級の両親による養育が困難な幼児を対象とした保護的な施設である「幼児学校」と呼ばれた保育所、子育てに専念する母親や養育係が家庭にいることを前提とした補完的な施設である幼稚園が、開設された。

産業革命当時は、労働者階級の子どもは、年齢に関わらず労働者とみなされ、生活維持のため働き手となっていた。彼らが健やかに成長し、一生涯を通じて役に立つような実際的な知識を得るため、必要不可欠な権利を守る教育として、幼児学校と称する保育所が開設されたと考えられる。

一方、幼稚園は、母親または養育係が子どもの養育に専念できるため、主に子どもの遊びを育むために開設されていた。

このように親が養育に専念できるかどうか幼稚園・保育所の相違点である。二つの施設の共通点は、子どもにとって、集団生活というよりよい環境のもとで、遊びの広がりや発展を得ることだと考えられる。両親にとっては、子供の様子を知ることができ、保育に携わる教師等の子どもへの関わりを見ることで、家庭教育のモデリングになる得ることが考えられる。

保育所は親の就労を前提とし、親に代わって子どもの生活と教育の場を提供する施設であることから、両親がいつでも子どもの様子を見ることができるよう場所であることが望ましいのではないかと考えられた。どちらの施設も、両親の養育状況に関わらず、子どもよりよい遊びと家庭教育の質の向上を目指していることから、その特徴は今日に至っていると考えられる。

第2節 日本における乳幼児期の教育である保育の成り立ち

第2節では、日本における乳幼児期の教育である保育がどのように始まったのか、その成り立ちを概観する。ここでいう幼児教育とは学校教育法のもとでの幼稚園教育、保育とは、児童福祉法のもとでの保育所での保育を指す。保育の中に教育が包括されるため、本文で双方を保育と示す場合がある。

第1項 日本における幼稚園の成り立ち

我が国における最初の幼稚園は、明治8年（1875年）、京都に開設された施設は1年半で廃止となったため、翌年、明治9年に創設された東京女子師範学校の附属幼稚園（古木、1996）とされている。以下に、その昨評をまとめる。

明治5年（1872年）に頒布された学制は、欧米を参照した学校制度の樹立を目指し、幼児教育においても着目された。当時、国民一般の教育、特に女子教育に対する関心や理解は浅く、機運を高めるため、女性教員を養成する必要があり、女子師範学校が設けられ、学校内には幼稚園が創設された。

有識者や上流階級の子弟が通う幼稚園では、保育料を徴収し、保育時間は4時間とし、恩物を主たる内容とした智育が重んぜられていた。高額な設備費、恩物に対し保育者の熟練を要すことから、地方の幼稚園普及の動きは、徐々として進まなかった。これらのことから、幼稚園と現在の保育所に該当する託児所とは、相違があるとの社会通念に至ったとされている。

当時の文部当局は幼稚園教育を重視し、どの子弟にも適切な施設と教育を受けさせられるよう対策を講じた。明治12年（1879年）に教育令が制定、翌13年に改正教育令が制定され、明治20年頃には、67施設にのぼった。明治14年には、我が国に応じた保育科目の改正が行われ、子どもの心身の発達を促すことの他に、新たに、家庭教育を補うことが加わった。幼稚園教育は、学校教育の基礎として位置づけられ、社会的意義があったとされている。

大正15年（1926年）、幼稚園のための独立法令である幼稚園令が発布された。これまで小学校令施行規則中に規定されていた幼稚園だが、父母共に労働に従事し家庭教育を行うことが困難な地域などで、施設の改善が必要という社会情勢が背景にあった。

その後、私立幼稚園の比率は、大正6年には63.2%となったが、昭和8年では、子どもへの普及状態は、5%だったことから、昭和13年、保母の待遇改善、家庭教育の改善、社会教育的機能の強化が、要綱として提言された。

昭和 16 年（1941 年）、太平洋戦争が始まるが、幼稚園は、国民鍛成の基礎期間として位置付けされた。さらに、戦時体制下では、勤労婦人の子どもの保護育成を目的に、昭和 18 年頃から、幼稚園を戦時保育所として用いることになった。

終戦後の昭和 20 年（1945 年）、再び幼稚園と改められたが、本来の幼稚園教育に戻るには長い年月を要することとなった。その後、私立幼稚園の比率は、昭和 40 年には 70.1% になり、幼稚園教育が広く行き渡ったとの認識が広がった。

第 2 項 日本における保育所の成り立ち

第 1 託児所

我が国における最初の保育所は、明治 23 年（1890 年）、元小学校教師の家塾の付帯事業として託児所として開設（古木, 1996）された。以下に、その昨評をまとめる。

当時は、幼稚園が既に 130 施設余りだった。一方、託児所は工場や炭坑の付帯事業として、働く婦人労働者のために、朝から夕方まで開かれていた。

明治 33 年（1900 年）、純粹に託児を目的とし、東京の二葉幼稚園（現・保育園）が開設された。日露戦争を契機に、大小の都市に 15 箇所となった。保育料を徴収したが一部家庭は免除されている。幼稚園の教育は、唱歌、遊戯、手工、お話などで、保育所における保育は、家庭改善の職務が重大で、保母が絶えず家庭訪問をし、効果を発揮していた。

大正 14 年には 265 施設となり、昭和 13 年では、1,495 施設、収容幼児数は 713,946 人と、増加の一途をたどっている。

しかし、託児所に関し適用を受けているのは社会事業法で、単独法令はなかった。

昭和 15 年、全国社会事業大会では、就学前期の教育が大切であると、文部と厚生に対し、幼児教育と保育の一元化を図る声が挙げられた。

その後、戦局の進展につれ、幼稚園と託児所は、共に戦時保育所とみなされ、その上、簡易的な保育所を作ったことから、幼保一元化の動きがあったとみなされた。しかし、戦後、幼稚園、保育所は、それぞれ戦前の形に戻った。

戦局時の就学前期の教育の一元化への動きは、どの子どもも同等の教育を受けるといふより、人口政策、勤労婦人の子どもの保護と育成といった社会状況の必然に応じた対応と捉えられる。そのため、戦後、幼稚園と保育所は、それぞれ本来の姿に戻ったと考えられる。

第 2 季節保育所

季節保育所は、父母が遠方に出て農作する際、乳幼児の世話をすることができなかった

ことから、明治23年(1890年)、鳥取の美穂村で農繁期に尼さんに世話を依頼したことが始まりとされている。その後の季節保育所の発達は極めて緩やかだった。戦時体制が強化されると、急激に増加したが、終戦後は、存続する施設はほとんど見当たらなくなった。季節保育所は、施設を持つまでに至らなくとも、農村生活改善の母体となったものがあつたとされている(古木,1996)。

農業が盛んだった明治時代、戦時中の食料確保により、両親が農作をしている間、子どもへの保育を担う場所として、季節保育所は必要とされていた。

小括 第1項、第2項のまとめ

第1項、第2項では、幼稚園と保育所の成り立ちを概観した。幼稚園は、明治時代に欧米の先進諸国を模範とし、子どもの遊びを発展させる教育であるのに対し、託児所である保育所は、母親の勤労の間、付帯事業施設として、親に代わって子どもを養育する色合いが強かったことが窺えた。また両者は、戦争時、戦時保育所として幼保一元化が見られた。それは、子ども中心の教育を目的とするというよりも、人口政策など、社会情勢が教育のあり方に反映されたためであることが窺えた。

第3項では、幼稚園と保育所の幼保二元化が、さらに進み、固定化されることとなった社会情勢の流れを概観する。

第3項 社会変化における幼稚園と保育所への分岐と幼保二元体制の固定化

汐見ら(2020)は、日本の保育の歴史の特異性は「幼保二元体制」であるとし、「幼稚園」と「保育所」という2つのタイプの保育施設が別々の制度のもとで普及・発展したことを挙げている。以下に、幼保二元体制へと分岐し、固定化に至るまでをまとめる。

我が国における保育制度は、明治維新による近代社会において「官」主導で始まり普及した。政府は、親を生業に就かせるために幼児保育が必要と考えていた。一方で、婦人労働、貧困家庭の乳幼児の養育を目的とする施設が、公的な財政支援ではなく、民間の厚意などにより設置されていた。

明治32年(1899年)の「幼稚園保育及設備規程」制度は、簡易な幼稚園(貧民幼稚園)を排除して、幼稚園が教育施設であることを制度化したものである。中上流層に適合する幼児教育機関であることを示すと共に、その後の幼稚園と託児所(保育所)が二元化する岐路となった。

昭和5年(1930年)、東京府社会事業協会は3歳以下を対象とした託児所令などを制定することを提案したが、相当額の国庫補助を要することもあり、政府の姿勢は積極的なも

のではなかった。昭和 13 年(1938 年)、設置されたばかりの厚生省が保育所令を国会に提出する準備を進めたとされるが、内閣の教育審議会が「幼稚園二関スル要綱」を答申したことにより、国会に提出されることなく終戦を迎えた。

昭和 22 年 (1947 年)3 月に、教育勅語に代わる教育基本法と、その理念に基づいた学校教育法が成立した。これによって、幼稚園令に基づいた幼稚園が学校として制度化された。幼稚園の規定では、入園年齢は 3 歳以上に限定され、保育者は「教諭」となった。

同年 12 月には、戦後期における児童の生活環境の劣悪さへの対応と、一方で、新しい日本への改革の機運から、すべての子どもを対象とした児童福祉法が成立した。第 7 条で、保育所が児童福祉施設として制度化されたことが明記された。戦時の婦人労働力動員を目的とする戦時託児所を除けば、それまでは、基本的に保育施設は貧困対策事業であったとされている。

昭和 22 年、幼稚園は学校教育法によって、学校として制度化され、保育所は、児童福祉法によって、児童福祉施設として制度化された。この分岐によって、二元化体制は固定化されることとなった。また、ここに一般勤労者層に開かれた新しいタイプの保育施設が国の制度として誕生した。

以下は、児童福祉法 (1947) における保育所の位置づけを示している。

児童福祉法第 24 条では、当時の社会状況下、両親の労働により昼間家庭で養育ができない場合は、市町村が保育所での保育を保証しなくてはならないと提示されている。これは第 2 条の、国及び地方公共団体は、児童の保護者と共に、児童を心身共に健やかに育成する責任を負うという、児童の福祉についての公的責任の具体化を示している。第 39 条ではすべての乳幼児を対象とし、「保育に欠ける」乳幼児の入所について公的責任を明記している。ただし、保育所の設置は遅れ、希望者全ての受け入れは難しく、「保育に欠ける」乳幼児の入所が優先されることとなった。

昭和 26 年(1951 年)の法改正では、保育所は「保育に欠ける」乳幼児を保育する施設とされた。入所の基準が明文化されたことによって、幼稚園と保育所は、完全に二元化され固定化された。

昭和 38 年(1963 年)、文部省と厚生省の各都道府県知事あての連名通達では、幼稚園と保育所の関係について、両者の明確な機能の違いを打ち出している。幼稚園は、幼児に対し、学校教育を施すことを目的とし、保育所は、「保育に欠ける児童」の保育(保育に教育に関する事項を含む)を行なうことを目的とすると明示している。またそれぞれがその機能を果たしうよう充実した整備にする必要があると示している。

保育所入所の決定は、さらに厳正に行い、保育に欠ける幼児以外は、普及に応じて幼稚

園に入園するよう措置することを求めている。この通達によって、幼保二元化はさらに固定化された。

明治時代からの社会変化、両親の就労により、昼間に子どもの養育ができるかどうかによって、入所する施設に違いが生じた。幼稚園は文部省によって学校として制度化され、保育所は厚生省によって児童福祉施設として制度化された。それぞれの法律の成立によって両施設はさらに分岐し、文部省と厚生省の両省による幼保二元体制が固定化された。保育所は「保育に欠ける」乳幼児が対象とされ、入所基準が明文化されたことで更なる固定化が進んだ。

第4項 社会変化による幼保一元化に向けた動きと現状

前項では、社会情勢により、勤労世帯の両親が日中、子どもへの養育が可能かどうか、すなわち、「保育に欠ける」かどうかという、明確な入所基準が明文化され、文部と厚生両省による幼保二元化への分岐と固定化へと向かっていた。

本項では、その後の我が国の人口動態、社会情勢をふまえ、幼保一元化に向けた動きについて、概観する。

人口の推計をみると、第1次ベビーブーム期（1947年～1949年）の後、出生児数は減少し続けている。その結果、子どもの割合（総人口に占めるこどもの割合）は、昭和25年（1950年）の3分の1から、1965年には約4分の1まで低下していた。昭和25年（1950年）以降、第2時ベビーブームでわずかに子ども数は増加したものの、その後は減少（総務省, 2021）し続け、今日に至っている。

人口動態から、幼保二元体制が確立された後、子どもの出生数は減少に転じていた。

その結果、幼稚園と保育所への定員数に変化が起きた。

幼稚園では全国的に定員割れが起こった。一方、保育所では、定員を超える応募があり入所できない状況が起きた。そのため、保育所の「新施設の増設が懸案となる地域も存在した」（矢治, 2020）という。

そこから、昭和42年（1967年）、関西を中心とし幼稚園と保育所を併設した保育施設が発足したが、文部・厚生両省による幼保縦割り行政のもとでは、追従する自治体はごく僅かであったとされる。本格的な幼保一元的な保育施設の普及は、平成18年（2006年）の認定こども園制度の発足を待たなければならなかった（矢治, 2020）とされている。

そこで、幼稚園と保育所が一体化されるまでの経過を概観する。

用語の定義について、「幼保一元化」は、これまで述べてきたように、行政において一つの省庁が取り扱うことを表す。「幼保一体化」とは、幼稚園と保育所を一体的に運営することを表す。

内閣府（2011）の幼保一体化ワーキングチームでは、これまでの幼保一体化の取り組みについて、「幼保一体化について（案）の概要」で、以下の三つの視点を挙げている。

一つめは、仕事と子育ての両立のための支援が進み、就学前の子ども(5歳児)の約6割が幼稚園から小学校に入学する一方、保育所からも約4割の子どもが小学校に入学する中で、幼稚園・保育所を問わず、希望する全ての子どもに対し、生涯にわたる人格形成の基礎である質の高い幼児教育・保育を保障するという主として幼児教育の振興の視点である。

二つめは、仕事と子育てを両面で支援するなど、社会全体で次代を担う子どもの育ちを支えるという主として次世代育成支援の視点である。

三つめは、家庭や地域の教育力・子育て力の低下、保護者の多様なニーズ等を踏まえ、家庭や地域の実情、保護者の多様なニーズ等に応じ、希望する全ての子ども及び子育て家庭を支援するという幼児教育の振興・次世代育成支援共通の視点である。

これらの三つの視点では、両親の共働きを支えることによって、親の就労形態に関わらず、すべての子どもに同一の就学前教育を保証し、子どもの育ちと次世代を育成することと、捉えられる。

内閣府(2012)の24年版子ども・子育て白書によると、幼保一元化についての新システムでは、すべての子どもの健やかな育ちと、結婚・出産・子育ての希望がかなう社会を実現するため、以下の三つを挙げている。

一つめは、質の高い幼児期の学校教育・保育の一体的提供である。二つめは、保育の量的拡大である。三つめは、家庭における養育支援の充実の三点を目的とする幼保一体化を推進することである。

これら新システムは具体的には、給付システムと施設の一体化を行うこととされた。

学校教育・保育及び家庭における養育支援を一体的に提供する「総合こども園」を創設する。施設の一体化、学校としての基準（学級担任制、面積基準等）と児童福祉施設としての基準（人員配置基準、給食の実施等）を併せ持つ基準を適用することで、質の高い学校教育・保育を保障することが盛り込まれた。

幼稚園と保育所を一体的に運営する幼保一体化の「認定こども園」制度は、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針 2003」の閣議決定で打ち出された。内閣府（2003）は、近年の社会構造・就業構造の著しい変化等をふまえ、地域のニーズに応じ、就学前の教育・保育を一体として捉えた総合施設の設置を検討した。

具体的には、父母の就労に関わらず、同じ施設を利用したいというニーズに応じ、施設幼稚園と保育所における設備の共用、職員資格の併有を検討し、二元化制度の一元化、施設や職員配置の基準の緩和、株式会社の参入などを盛り込んだ。

そして、第164回国会において、「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」が成立し、平成18年（2006年）10月から法律が施行された。

認定保育園には、地域の実情に応じて選択が可能となるよう「幼保連携型」「幼稚園型」「保育所型」「地方裁量型」と法的性格が異なる4つの型がある。

ここに、子育て支援の総合的な提供を推進するため、都道府県から認定を受ける認定こども園制度が始まったのである。

「子どもが育つ環境を悪化させる」と保育団体・幼稚園団体の反発もあり、開始当時、調理室は原則設置、株式会社の参入は認めないとされた。平成20年（2008年）では、229園の設置にとどまり、想定を下回るペースとなった。認定こども園は内閣府の所管であることから三元化したという批判もあった（森川, 2017）。

開始当時は、親のニーズに応じ、就学前の子どもに同じ教育・保育を提供したが、規制緩和による他業種の参入、文部科学省と厚生労働省のいずれかではなく、新たに内閣府の所管となるなど、反発や批判を受けることもあり、順風満帆ではなかったことが窺えた。

平成26年（2014年）には、内閣府、文部科学省、厚生労働省による幼保連携型認定こども園教育・保育要領が策定された。翌年の平成27年（2015年）、内閣府は、「子ども・子育て支援新制度」として、「『量』と『質』の両面から子育てを社会全体で支える」政策を打ち出した。認定こども園の普及に加えて、地域型保育で、保育の受け皿の拡充を図っている（内閣府, 2019）。

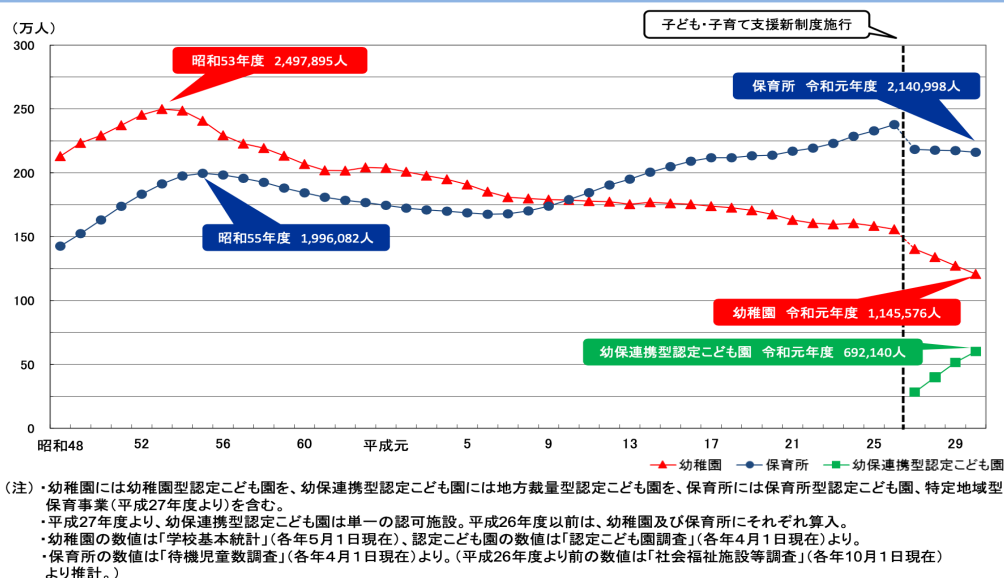
また、認定こども園の設置促進を図るため、幼保連携型の補助制度、認定こども園の認定を受けた保育所に関する利用手続の特例といった措置を講じている。その後、2017年では、認定こども園は、5081園まで増加している。

幼保一元化に向けた動きから、幼保一体化の取り組みが進み、認定こども園が増加した。その前後における幼児教育について概観する。

文部科学省（2020）の幼児教育の現状によると、平成10年（1998年）以降、保育所の在園者数が幼稚園の在園者数を上回っている。令和元年度の幼稚園の園児数は、1,145,576人で、同年の保育園の園児数は、2,140,998人、幼保連携型認定こども園の園児数は、692,140人と示されている。

子ども・子育て支援新制度が施行された平成27年（2015年）以降は、幼保連携型認定こども園の園児数が増加すると共に、保育所と幼稚園の園児数が減少傾向となっている。

幼稚園・幼保連携型認定こども園・保育所の在園者数 [推移]



文部科学省(2020) 幼児教育の現状より引用

図 1-3 幼稚園・幼保連携型認定こども園・保育所の在園者数の推移

同じく幼児教育の現状における平成30年度(2018年)幼稚園・保育所等の年齢別利用者数及び割合をみると、該当年齢人口のうち、保育所の利用者は0歳児が12.9万人(13.4%)、1歳児が35.4万人(35.3%)、2歳児が41.5万人(43.3%)となっている。保育所は、2歳児までの低年齢層の割合が高く、1・2歳児の利用がそのほとんどを占めることから、低年齢の乳幼児を持つ父母の保育ニーズの高さを表していると捉えられる。

該当年齢のうち、推計未就園児は0歳児が84.4%、1歳児は58.2%、2歳児は48.5%、3歳児は5.2%、4歳児と5歳児は2%に満たないことが確認されている。

現状では、乳児や1歳児の過半数は未就園児だが、今後は、共働き世帯の一層の増加により、0歳児から2歳児までの低年齢での保育所や幼保連携型認定こども園への就園の増加が予想される。

第5項 認定こども園の現状と課題

本項では、幼保一元化政策の取り組みの実態と課題について、検討する。

日本保育学会(2018)は、幼保一体化の実践における課題を明らかにし、幼児教育・保育のこれからの展望について議論を深めることを目的に、幼保一体化を実践している施設を

対象として、アンケート調査を実施している。以下に、その内容をまとめた。

既存の幼稚園や保育所が、こども園に移行した評価は、よかったと、ややよかったを合わせると 73.9%と、ほぼ肯定的に捉えられていた。

肯定な評価の内容として、地域全体の子どもの就園が可能となり、保護者の状況に関わらず、子どもの受け入れができたこと、園児数が増加し運営が改善され、施設・設備が充実したこと、職員の処遇が改善されたことが示されていた。

教育・保育のあり方について、職員同士の相互理解への評価は分かれたものの、よりよい教育・保育を行おうとする園内の機運が高まったことから、教育・保育の内容について職員間で話し合う機会が増え、教育・保育の内容が充実したことから 0 歳から就学まで連続性のある教育・保育が展開できたと捉えられた。

子どもの様子について、職員との人間関係が多様化し、どの子どもも同じように経験することができ、子ども同士の仲間関係が広がり、トラブルが増えなかったことなどが挙げられていた。

親である保護者の様子について、半数が経済的な負担が軽減し、働き始める保護者が半数を超えていた。長時間保育の家庭とこども園との連携に課題があるとしているのは半数以下で、保護者の園に対する評価は概ね良い影響があった。

組織運営については、事務処理に荷重な負担感が表れていた。また、所管の違いから制度などが異なり、戸惑いが増えたこと、打ち合わせや会議の時間の確保が困難になったこと、外部の研修へ行きにくくなったことが示された。小学校との連携活動については、肯定的評価が半数を超えなかった。

今後の課題について、低年齢児には余裕のある職員体制と、小学校教員の保育への理解、子育て支援への増員、自治体への事務の簡素化などが挙げられた。

幼保一元化政策の取り組みの実態は、施設の一体化が促進され肯定的な評価が得られていた。課題については、一体化に伴う事務の簡素化、低年齢層に対する人員確保と、学童期への円滑な連携が挙げられていた。

小括

我が国の社会情勢は、人口動態からみると出生数が減少し続け、父母の共働きが増加している。乳幼児を持つ父母のニーズに応じ、就学前の子どもに教育・保育を提供する機能、子どもが健やかに育つため、地域における子育て支援を行う機能として、幼保一元化に向けた動きが促進され、認定こども園の増加につながった。

父母の就労に関わらず、学童期のすべての子どもが、小学校で同じ教育が受けられるのと

同様に、「保育に欠ける」から「保育を必要」とする幼少期のすべての子どもが、一貫した保育を受けることができるよう、社会情勢と父母のニーズに対応し、子どもの育ちを保証する政策を推進していく必要性がある。

幼保一体化を実践している施設の現状から、子どもが健やかに育つため、就学前教育・保育を提供する機能が働き、施設側、親である保護者側が肯定的な評価をしていた。今後の課題について、所管の一体化に伴う事務の簡素化、ますます需要が高まるとされる低年齢児への職員配置、保幼小接続、地域における親に対する子育て支援の充実が挙げられる。

親である保護者の立場からは、保育の場の確保は、子供の育ちの保証に加え、就労と子育ての両立における負担の軽減のためであると捉えられる。そのうえで森川（2020）は、「保育の現場は、子どもだけでなく大人も含め、人間が育つ場である」と指摘している。養育者である親が育つ場として、地域における子育て支援を行う機能を、一層促進させていく必要があると考えられる。

幼保一元化政策の取り組みの実態と課題では、幼保一体化を実践している施設への実態調査で、保育職と親である保護者から肯定的な評価が得られたことが明らかとなった。

本研究では、幼保一元化の動きから幼保一体化の施設である認定こども園が設立される以前から、親の就労形態に関わらず、園児を受け入れている保育所の A 園に着目している。そこにおいて、親である父母が主体的に保育の企画・運営に携わる「保育参画」を実践している。

保育所である A 園において、「保育参画」が、子育て支援として、親が養育者として成長することに、どのように機能しているのかを検討する。幼保一元化が肯定的評価を得られているように、保育参画の推進と課題を考察する一助として A 園の取り組みを検討することは、今後さらなる増加が予想される共働き世帯における子育て支援を展望していく上で意義があると考えられた。

第 2 章では、現代の社会情勢のもとで乳幼児を持つ親である父母の子育てに関する心理的な状況と、親の保育施設に対するサポートへのニーズについて概観する。

第2章 子育ての心理的ストレスと保育施設におけるソーシャル・キャピタル

第1節 親の子育てに関する心理的ストレス

問題提起で概観したように、乳幼児を持つ子育て世代を取り巻く環境は変化した。都市化で地域コミュニティにおける人と人との関わりが減少し、共同体での子育てから家族単位への子育てへと変化が生じ、子どもを通じた知り合いや友人が得られにくく孤立している。核家族化で、祖父母からのサポートが得られにくくなり、役割負荷が大きくなったと捉えられる。

また、少子化により、子どもと接する機会がないまま親になったり、子育てに関する価値観が多様化することによって、子育てへの不安が生まれやすくなっている。さらに、我が国では長時間労働によって、父親の子育て時間が少なく、母親の子育ての比重が重く、共働きの増加による子育て時間の減少と相まって、特に母親の子育てにおける孤独感や負担感、不安といった心理的ストレスが増している。

我が国における子育てに関する親の心理的ストレスに関する研究は、1980年代から始まっており、研究者により様々な心理的ストレスが取り上げられている(吉田, 2012)。

秋葉ら(2013)は、地域社会から孤立化し相談する相手がいない、第一子を育てる母親が「孤独感」を持つ傾向にあるとし、その母親が地域における人とのつながりを築き、安定していく過程を示している。

子育てに関する親の代表的な心理的ストレスとして、「子育ての負担感」も挙げられる。荒牧・田村(2003)は、母親が子どもにつきっきりになることで自分の時間が持てないことによる負担感や束縛感といったストレス状態を指摘している。一方、岩淵・奥澤ら(2009)は、育児に伴う母親自身の社会的活動制限やそれに伴って生じる子どもに対する否定的感情を、「子育ての負担感」として捉えている。

また「育児不安」も、育児ストレスに関する多くの研究で取り上げられている。渡辺・石井(2009)は、「育児不安」として、育児に対する心配や迷い、自信のなさ、育児優先の束縛感による葛藤などを挙げている。また牧野(1982)は、育児不安を「子どもや子育てに対する蓄積された漠然とした恐れを含む情緒の状態」と定義している。一方、荒牧・田村(2003)は、母親の育児遂行能力に対する不安感と育児に携わることによる負担感や拘束感を含めて「育児不安」としている。手島・原口(2003)の研究でも、「育児不安」は、育児ストレス、育児ソーシャル・サポート、育児観とともに、育児ストレスの下位因子として見いだされている。

以上のことから、本研究では、子育てにおいて養育者に生じている孤独感、負担感、不

安といった否定的な感情の状態を、子育ての心理的ストレスとする。

序章で概観した児童相談所での養護相談の内訳では、相談の半数は、乳幼児に対するものである。実母と実父からの心理的虐待が多いことから、早期発見や適切な保護やサポートを図るため、関連機関との連携の下で対応していくことが導き出されている。親の子育てに関する心理的ストレスによる乳幼児への不適切な養育の背景には、援助希求をする術の少なさ、子育ての知識や技術を学ぶ機会の少なさ、子どもと接する経験の少なさからくる悩みや困りごとを相談する相手が限られていることなどが考えられる。

子育てに関する諸問題は、児童相談所だけでは対応しきれず、2004年の児童福祉法改正により、市区町村による相談や、「要保護児童対策地域協議会（子どもを守る地域ネットワーク）」が法定化され、幼稚園と保育所もネットワークの中に組み込まれた（森川、2020）。

このため、保育の量の確保は、子育て政策の推進により改善傾向を示しているが、それに加えて乳幼児を持つ親に対して、子育てのストレスを低減させ、適切な子育てができるような相談や指南などの心理的社会的サポートが必要と考えられる。例えば、友定

（2004）は、子どもの発達にそぐわないことを要求する保護者によって、子どもが混乱し不安になるが、そのことに保護者が気づかないという。また、思い悩んだり、「困った子」と思い込んでいる親に対し、保育者が専門性を活かし、保護者の成長変化によって親子関係の質の改善を目指す保護者成長支援が必要という。

そこで、第2章では、孤立化、役割負荷により、親がどのような心理的ストレスを抱いているのか、それに対しどのような心理・社会的ニーズがあるのかを検討する。

現代の社会情勢において、育児に関するストレスを抱えやすい母親の特性について、子どもに関連した友人や仲間がいない母親の多くは、孤独感を感じやすい状況にある（馬場ら、2013）という。母親は周囲の大人と接する機会や交流が減り精神的不安や負担感といった育児ストレスや葛藤を抱えながら日々を送っていると考えられる。友定（2004）は、昨今の子どもをめぐる状況の中で、現代の親の「子育て不安」や「子育て困難」な状況は、少数の特別な親の問題ではないことが一般に認められるようになってきたと指摘している。

それは、地域コミュニティにおける人と人との接点が減少したことにより、子どもを通じた知り合いや友人が得にくくなったことが一因と考えられる。

子育てに関する孤立感を抱いているのは、主に母親で、専業主婦が70%を超えている。パート勤務や共働きでは60%を超えている。母親は、就労の有無に関わらず、社会との接点があったとしても半数以上が子育てに関し孤立感を抱いていた。一方、父親の孤独感は40%に満たない。（厚生労働省、2006）。

これらのことから、父親は母親に比べて、育児に関する孤立感を抱いていないと考えられる。そこで、母親の孤立感を解消するための主なニーズを以下にまとめた。1)「育児から開放されて気分転換する時間」、2)「話したいときに話せる相手」、3)「子育てについて相談できる相手」、4)「パートナーの子育ての時間の拡大」、「パートナーの母親の子育てに対する理解と共感」、5)「仕事や自分のしたいことができるようになること」

子育てをする母親は、孤立感を解消するために1)から5)までのニーズに対するサポートの実現性を求めていると言える。

育児から開放されたいと願う母親は、かつての地域の共同体で複数の目で子どもを見る状況とは違い、四六時中、単独で子育てをすることによる孤立化で孤独感をもち、精神的、肉体的疲労と日中時間の拘束による役割負荷による負担感と、大人同士の会話のなさからくる疎外感による不安を抱えていると考えられる。子どもを持ち、家事と子育てに追われると、他者との接触や時間が限られてくる。必然的に大人と話す時間と機会は限られ、その上、相談となると時間の確保は困難になると考えられる。そこで、最も相談相手として多かった父親に期待が寄せられていると考えられる。母親は父親に対し、できるだけ家事育児に参加してもらいたいと考えていることが窺える。しかし、我が国の父親は通勤時間を含め雇用労働における時間が長く、家事育児に関わりたいと意識していても実際に関われる時間は他の国と比較して非常に限られている。そのため、母親は子育てを担う自分の置かれた状況を一番の相談相手である父親に理解と共感を求めることとなると考えられる。

こうした状況で子育てをする母親は、心理的ストレスを軽減する方略の一つとして、仕事や自分の好きなことをする時間を希求していると考えられる。

みずほ総合研究所(2008)の子育ての負担感についての調査では、子どもに対する価値観の変化が窺えるという。以下に、概要をまとめる。(表1)

表 2-1 子どもに対する価値観の変化

① 子育てによる負担感の区分
非経済的な側面:時間、精神、身体 経済的な側面:費用、所得
② 子どもの年齢、母親の就労状態、家族形態という世帯特性に着目した場合
就学前の子どもを持つ母親:就労していない母親のほうが就労している母親よりも負担感が高い。 家族や親族が遠方で核家族の母親:子育ての負担感が高い。

③ 子どもを持つことによる心理的な側面と価値観
子どもを持つことで精神的に生活が豊かになると感じている人は増加傾向 必ずしも子どもを持つ必要はないと考えている人も増加傾向
④ 子どもといると楽しいという回答 1981年の98.6%から2000年では86.7%と減少 イライラする事が多いと回答した人の割合が1981年の10.8%から2000年では30.1%と増加している。
⑤ イライラする事が多いという回答 1981年の10.8%から2000年では30.1%と増加

子どもを持つことによる心理的な側面として、ポジティブな感情が減少し、ネガティブな感情が増加傾向となっている。子どもは普遍的な価値を持つものという価値観から、他の生活要素との関連で個人が選択するものへと変化しつつある。

これまでの保育政策における制度は、子育て世帯の一部が対象となっていたことから、上記に挙げられたような子育てによる心理的ストレスの軽減に向けた効果が十分に得られなかった。

そこで、「認定こども園」の制度化に伴い、全国各地に広まりつつある幼保一元化の流れを一層推進することによって、母親の就労の有無に関わらず、全ての子育て家庭を対象とした保育政策の実現が可能となった。その成果として、未就園児を抱える家庭をふくめ働いていない親も、一時預かりなど子育て支援制度を利用できる対象となった。

今後、子育ての負担の軽減を促進するためにも、より一層サポート体制の充実を図ることが必要であると考えられる。

これらのことから、親の子育てに関する心理的な不安や負担感といったストレスは、これまで述べてきた外的要因、社会的側面に加えて、母親が自分一人で子育てを負っていると考えするなど、親本人の物事や出来事の捉え方であったり、周囲との相互関係の少なさから援助希求のしにくさを招くといった他者との関係性や距離感、親密性であったり、子どもに対する価値観の変化など、認知的側面から生じるのではないかと考えられる。

第2節 親の子育てに関する心理的ストレスと幼児教育・保育へのニーズ

幼児教育や保育へのニーズとして、共働きの増加による乳児保育の充実が挙げられる。我が国では、昭和61年（1986年）に施行された男女雇用機会均等法や、平成4年（1992年）に施行された育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法

律、平成6年（1994年）に策定された「エンゼルプラン」など、少子化対策として女性が働きやすくなるよう様々な政策が打ち出されてきた。出産後、育児休暇明けから働く母親からは、乳児保育のニーズが高まった。

前述したように少子化対策、保育所不足、待機児童の解消に様々な政策が打ち出されてきたが、問題になっているのは、乳幼児である0～2歳児は幼稚園には入園できず、保育所あるいは幼保連携型認定こども園のいずれかの選択肢となっていることである。

厚生労働省の待機児童等の状況（年齢別）によると、保育利用率（利用児童数／就学前児童数）は年々上昇しており、1・2歳児の利用率は1年間で2.3ポイント上昇し、令和2年4月1日の保育利用率は50.4%となっている。待機児童は1・2歳児に多く、全体の77.2%を占めており、今後も1・2歳児の受け皿拡大を中心に取組みを進めると提言している。待機児童の問題を解消するためにも、保育の受け皿の量の確保と整備が進められている。乳児保育のニーズが高まっているとはいえ、それぞれの年齢の推計未就園児の数と割合が低年齢ほど高かった（文部科学省,2020）。乳児保育の需要と供給のバランスが取れていないとも読みとれる。

共働きの増加により、乳児保育のニーズが増加しているが、親は子育てに関し、どのような心理的ストレスを感じ、幼児教育・保育へどのようなニーズがあるのかについて概観する。

東社協保育部会調査研究委員会（2007）による保育所を利用している親への調査について、まとめたものを以下に示す。

親の子育てへの満足度と負担感については、自分の子育てに満足している母親は50%超で、程度の差はあるものの70%ほどが負担を感じていたことから、半数の親は子育てに満足しつつも、多くの親にとっては負担感もあり、満足と負担は表裏一体であることが窺えた。

行政への要望について、育児に関する手当などの要望が70%以上あり、保育の質と経済的な側面といった複合的なサポートを求めている。

家庭内においては、父親の育児参加に関する要望が60%となっていたことから、70%の母親が子育てに負担感を持ち、そのほとんどの母親が父親に子育てのサポートを求めていると考えられる。

保育所への要望としては、「子育て支援、社会的環境の整備」が25%と多かった。その他には、「親の気持ちの受容」、「しつけ・教育・体験の質向上」、「家庭と園とのコミュニケーション」だった。「保育所は親にとっての相談の場や親同士の輪作りの場」でもあり、「いつでもなんでも相談できる場所であってほしい」との意見もあった。

これらのことから、保護者の特に母親は、経済的な側面からのサポート、父親からの育児参加によるサポート、保育士からの子育てに関するサポートを求めていることが窺える。

幼稚園や保育所における親へのサポート状況について、高橋・木野(2020)によると、「養育指導や情報提供が主たる保護者支援策」であるという。一方で、質問調査によって、親である保護者は子どもや自身について「『分かってもらいたい』、『話を聞いてもらいたい』という心理的支援を求めている」ことが示唆された。中には、コミュニケーションの不足により相互理解が不十分と考えられるものもあった。

これらのことから、親である保護者は、保育者に対し、保育に関する情報提供だけでなく、親の相談相手として、また、親子のよき理解者としてコミュニケーションを図りたいというニーズを持っていると捉えられる。

親は子育てによってストレスを抱き、保育者に相談することを希求している。そのストレスを抱える本人の要因とその対策について、以下に挙げる。

子育ては、ストレス解消法を持たないと育児が負担となり、他者を頼る選択肢が低いと、育児情報に振り回され、自らの育児方法に混乱を来し育児不安を増強させる(津間, 2017) ことから、不適切な養育へ向かわないように、親に対しストレスマネジメント、不安や負担を一人で抱え込まず自信を持って子育てができる指南を得られるようにし、周囲と共有する働きかけが必要であると考えられる。

親の子育てに関する心理的ストレスと幼児教育・保育へのニーズについて、母親は家庭では父親の育児参加によるサポートを求めていた。幼児教育・保育に対しては、子どもへの質の高い保育の提供による安心感と、母親への子育てに関する相談などのコミュニケーションの機会と、受容と傾聴といった心理的なサポートを求めていた。

第3節 親の心理的ストレスへのサポートに関する先行研究と保育者への示唆

母親は、子育てに関する心理的ストレスを抱え、幼児教育・保育からのサポートを求めている。そこで、親に対する保育者からのサポートについて示唆を得るため、先行研究を概観する。

母親の個を受けとめるサポートとして、大内ら(2019)は、母親の育児ストレスを軽減させる保育所や保育士の取り組みについて、保育士が母親の就業形態や子どもの年齢に応じた関わり方をし、かつ、1人の人間として受けとめることによって、母親がサポートを受けていると感じ、理解を示してもらっていると感じるほど育児ストレスが低いことを明らかにしている。

母親の孤独感を軽減させるサポートとして、馬場ら（2013）は、社会とのつながりの欠如から孤独感を持ちやすい状況にある育児中の母親への効果的な支援を行うため、ソーシャル・ネットワークとソーシャルサポートの状況を把握し、それらと孤独感の関連を明らかにするため乳児を持つ母親を対象に質問紙調査を行っている。母親は、支援者からママ友達や友人と直接「会う」ことを提言されることによって、サポートを受けている認識を持ち、社会とのつながりを実感し、孤独感を軽減できる可能性が示唆された。電話やインターネットなどでの非接触での関わりを提言するよりも、「会う」ために、自宅以外の場所に行き、実際に他者とコミュニケーションを図り、触れ合うことが、育児中の母親にとって効果的な方法だと考えられる。

母親の援助要請スキルを向上するサポートとして、永井(2016)は、養育者が必要に応じて他者に援助を求める力として、様々な困難を乗り越えるための効果的な対処方略の一つである援助要請に関する研究を行っている。育児ストレスと援助要請を測定する尺度は統一されておらず開発が望まれている。援助要請のプロセスは明らかになっておらず、養育者に合わせた支援に対する有効なアプローチまでは明確になっていない。保育者からのサポートや関わり方が養育者の育児ストレスを軽減させる可能性があることから、養育者が必要に応じて援助要請を選択できるような心地よい支援のあり方を検討することが求められていると提案している。

以下に援助要請を促進する要因を掲げる。

まず、子どもと援助要請の相手との関係が良好であると養育者である親が認知することである。次に、子どもに関する悩みが多く深刻な場合は、保育者に対する援助要請が促進されることである。育てにくさや発達などに関する問題がある場合は、専門家や公的機関でサポートを受けたいと思っている可能性があることを示している。養育者が援助を求められるようにするには、援助要請スキルを高める介入により、促進することが示唆されると示している。

一方、援助要請の抑制要因として以下に掲げる。夫婦関係では、夫の育児・家事能力の低さや夫に援助要請を拒否された経験があることを示している。専門機関に対しては、相談経験のなさからくる心理的抵抗があることを示している。母親個人の要因としては、自尊感情の低さが悩みの深刻さに影響し心理的抵抗を高めていることを示している。周囲の他者との人間関係に対する配慮や遠慮に加え、自身の子育てに対する非難や不誠実な対応といった傷つきへの恐れは、援助要請を抑制する要因の一つと捉えられている。

これらのことから、親、特に母親の子育てに関する心理的ストレスに対し、身近な存在で話しやすく信頼関係のある保育者や母親仲間が直接対面し、母親として対処するだけで

なく、自分自身のこともよくわかってくれていると親自身が認識できるようなサポートが効果的であると考えられる。

石・桂田(2010)の母親の認知的な変容を促すサポートで「相互協調性・相互独立性」を認知スタイルを表す変数とし、ラザルスの心理学的ストレスモデルに基づき、育児期母親のディストレスとの関係についてソーシャルサポートを含めた研究を行った。ディストレスとは、ストレス反応である不安、抑うつなど個人が経験するさまざまな主観的で不快な心身の状態のことを指すとしている。その結果、ソーシャルサポートより相互協調性・相互独立性が直接母親のディストレスに寄与することを見出している。育児サポートは増えているものの母親のディストレスは増大している社会現象を解消するためにも母親支援において他者からの援助を増やすよりは、個人の認知的部分すなわち「心構え」を変えていくことがより有効であると示唆している。現代において「まわりと若干違って平気」というおおらかさが育児上の自信を生み、母親の精神安定には必要と言及している。

住田ら(2010)は、幼児を持つ親たちの育児をめぐる役割意識について調査し分析している。父親は仕事と育児を両立したり、育児を優先すべきだとする父親が7割を超えていたとしている。母親と同じように育児に向き合い、子どもを育てる楽しさや喜びを感じる一方で、子育ての不安や子どもの将来に対する不安を抱えていると示している。30～40歳代の男性は依然長時間労働を強いられていることから、父親間で仕事と育児に関するバランス意識に違いがあっても、子どもとの接触時間については有意な違いは見られなかったとしている。母親の育児不安が子どもに関わる中で生じるのに対し、父親の不安感は子どもと関わるできないことに起因することになると導いている。

これらのことから、母親への心理的ストレスの軽減をサポートするには、サービスの供給を増やすだけでなく、母親側の認知的な側面の変容を促すことも同様に必要と考えられる。母親自身が適切な援助要請を選択できるスキルを身に付け、他者からサポートを受けられて自分のことを理解されているという認識のもと、「心構え」という認知的部分の変容に至るような個人の発達に関連付けた方策が望ましいと考えられる。また、父親が子どもと関わりたくても関わるできない状況があることに對し、子育てに参加できるような体制作りが必要とされていると考えられる。親の成長と変化を促す観点から親の代わりとして保育を引き受けるだけではないこと、保育施設が親に向けて積極的に理解・協力を求めることにより支援体制づくりが促進されると考えられる。

佐々木(2009)は、子育てに対する不安や負担に対する親自身の認知の仕方を変えることで、孤独を感じないようになるという示唆を与えている。ここでは、自分と周囲の人との相互の関係性における認知について取り上げている。夜泣きを例に挙げ、いらいらしてし

まうのは、「自分ひとりでこの子に立ち向かっている」と思っているときだとし、そうではなく、知人、友人、家族、近所の人を大切にし、そして、自分も大切にされていると認識することが、孤立・孤独感を避けることになるという。

安らいで生きたいという感情は人間の本能で、孤独はそれ自体、存在の根源をゆるがされることであり、健康でいられない。そこで、お互いに守り守られて生きているという相互の関係性を認識することで、存在への不安を小さくし、育児不安も小さくなることを導き出している。

保育者は、養育者である親の認識の仕方やありのままの姿を受容し、子育てに関する負担感を丁寧に紐解いていくことで、お互いの信頼関係が構築され、「一人ではない」と親が認識できるようなサポートを提供することが必要と考えられる。

一方、保育者の立場から、東社協保育部会調査研究委員会（2007）は、保育職のサポートについて、以下の点を挙げている。1)養育者である親へのサポートを重要な役割と考えること。2)保育職の新たな課題として、相談支援やカウンセリングなどといった親へのサポート力という資質が求められていること。3)親の悩みや不安に対しては、保育者だけではなく、親同士で共有できる場を用意することが望ましい。

同委員会は、親は保育者に共感的な理解を求め、心理的なサポートを希求しており保育者の立場として、保育は親の子育てをサポートする重要な役割があり、親に子どもの養育者としての再認識を促すために受容と傾聴の姿勢を持つ。それをふまえた上で、親に養育者としての成長を促すために、親同士での関わりを持つこと、積極的な保育への関わりを提案している。

親自身がストレスを抱える現状を乗り越えていくためには、保育者が親の持てる力を伸ばす視点を持ち、問題に何らかの変化を起こすきっかけにつなげるサポートが必要であると考えられる。

保育施設は親子で初めての集団の場となることから、家族以外のサポートを受けることができ、親同士が知り合え、悩みや不安を共有できる環境であると考えられる。

第4節 保育における心理的社会的サポートへのニーズとソーシャル・キャピタル

子育てをする親に対する周囲の人々のサポートについて、地域コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルという視点からの研究が行われ始めている。

ソーシャル・キャピタルという社会的な組織の特徴を表す新しい概念は、アメリカの政治学者ロバート・パットナム（以下、パットナムと示す）が著書「Bowling Alone(一人で言うボーリング)」で取り上げた。アメリカでコミュニティの崩壊と再生について警鐘を

ならし、ソーシャル・キャピタルが減退していることを指摘した。

ソーシャル・キャピタルとは、「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼・規範・ネットワークといった社会組織の特徴」(Putman, 1993/河田, 2001) であると定義されている。ソーシャル・キャピタルは自然に強化され累積されていく傾向を持っているとし、人々が新たな取り組みをする際の「協働を促す社会資産」になるという。パットナムはこの定義を示した後に、相互利益を考えた「互酬性」と、調整と協同を併せ持った「協働」を伴う定義に変化させている。

この定義は、「互酬性」の説明が加えられたものである。彼はソーシャル・キャピタルを、個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、そこから生じる互酬性と信頼性の規範である」(Putman, 2000/柴田, 2008) とし、個人的側面と集合的側面の両側面を捉えている。ソーシャル・キャピタルは、「外部性」を有するためコミュニティに広く影響し、行動ルールによって社会的なつながりを支えているという観点を持っている。

「互酬性」は、「特定の」な「あなたがそれをやってくれたら、私もこれをしてあげる」というものと、より価値のある「一般的」な「あなたからの見返りを期待せずにこれをしてあげる、きっと誰かが私に何かしてくれるという確信がある」という2種類がある。パットナムの最大の功績は、地域レベルでソーシャル・キャピタルを分析したこと(川島, 2018)とされ、それは、ソーシャル・キャピタルが豊かな地域の人々は、信頼しあい自発的に協力するため、民主主義が円滑に機能する(Putman, 1993/河田, 2001)からである。

パットナムがきっかけとなり、近年、ボランティア活動を始めとする市民活動の社会的意義について、ソーシャル・キャピタルの培養に目が向けられ始めている(内閣府, 2014)。

日本におけるソーシャル・キャピタルに関する調査研究では、概念や計測方法は確立しておらず、始まったばかりである。調査結果としては、例えば、国民生活面で失業率の抑制や出生率の維持などソーシャル・キャピタルが寄与している可能性が示唆されている。市民活動とソーシャル・キャピタルの培養との間の相互作用で好循環を引き出せると、暮らしやすい豊かな社会の実現にとって望ましい(内閣府, 2016)。

一方で、ソーシャル・キャピタルには、負の側面もある。パットナム(1993)は、強力な結合型では「排他性」の危険性があり、例えば、人種差別等の活動を行っているグループが現れると社会参画・社会移動の遮断、コミュニティの対立を招く要因となりうると指摘している。他には「個人の自由を制限する」、「個人の特異性を損なう」などが生じ得るといふ。そのため、内閣府(2014)では、特定グループの利益のためではなく、社会の全て

の人がアクセスできるオープンなものであることが重要としている。

齋藤(2008)は、この社会的な組織の特徴を表す概念の「子育て支援」への活用について考察している。シュネイダーの型を取り上げ、closed型(閉鎖型)について、グループに居る場合に個人が受ける安心感、共感性、連帯感は個人にとって大変必要であるとし、「居場所型」「自助団体型」と意識している。その後bridging型(橋渡し型)を形成するには、グループ以外のマイノリティーの視点を取り入れるべきだとしている。

これらの正と負の側面から、集団の仲間(ピア)との当事者性を大切にしたグループは、閉鎖型として子育て仲間での実践活動に当てはまり、活動を広げていくには、当事者だけではなく、関連施設や地域の人々といったその他の視点も取り入れることが橋渡し型となっていくために、必要だと考えられる。

古城(2017)はソーシャル・キャピタルの研究で、近隣からのサポートは、保育園児の母親の抑うつに対する間接的な軽減要因となり、保育園からのサポートと関連し、母親の精神的健康への有効性が認められた。このことから、ソーシャル・キャピタルは、子育ての安心感や信頼の指標となりうることが示唆されている。保育園や他の子どもの親、母親をソーシャル・キャピタルの一形態と捉えているが、一方で、父親には軽減要因として認められなかったことから、男性は対人関係からのサポートが精神的健康に影響を与えないとされる先行研究の結果を支持している。

また、保育園は地域の子育て世帯が安心して子育てができるよう身近な支援者として、子育てや親子関係に関する相談・援助・情報提供等、専門性を活かした支援の必要性(古城, 2017)も示唆された。

子育てをする親のソーシャル・キャピタルの培養について、佐藤(2010)は、日本およびニュージーランドにおけるプレイセンターの参加者を比較検討している。その結果、日本の参加者は活動を重ねるごとに養育態度や自身に対する評価が肯定的に変化し、参加者同士の互酬性高まることを見出している。このことから、親が保育サービスの受益者だけでなく、主体者として実践することの意義と可能性が示唆されたとし、今後、わが国の子育て支援策に応用できるとしている。

ソーシャル・キャピタルを培養する保育者について、三國(2017)は、人と人を結びつけるソーシャル・キャピタルの視点を取り入れた保育士養成のカリキュラムの必要性を提言している。地域で子どもを支え、保育者と保護者の互酬性を高める実践力を養うカリキュラムを構築することが親の力を高める子育て支援に結びつくことになると考えられる。

小括

このように、保育におけるソーシャル・キャピタルの子育て支援への応用は、以下の効果がある。一つめは、個人がグループに居る場合、安心感、共感性、連帯感を得られることである。二つめは、子育てに関する精神的健康、安心感、信頼感などの指標となりうることである。三つめは、親が保育サービスの受益者だけでなく、主体者として実践する可能性があることである。

このソーシャル・キャピタルの培養を促進し、子育て支援に活かし、保育者の関わりによって、親が保育サービスの受益者だけでなく主体者として地域で子どもを支え、保護者との互酬性を高めることができるようになることが必要と考えられる。

それらの取り組みで、親を保育の場へ呼びかけることが、親の孤立化へ肯定的な影響を与える可能性があると考えられる。

保育者がどのように親に呼びかけ、親同士のつながりのきっかけ作りをし、その結果、保育に関わったのか、保育に関わった親の心理的ストレスにどのような効果が見られるのか、親としてどのような影響があるのかについて、本研究で検討する意義があると考えられる。

第3章 親への保育参加・参画の促しと実態

第1節 幼児教育・保育における親への関わり

第1項 国際的な視点から見た親への関わりと親の役割

第3章では、保育者が親に対し、どのように保育に関わるように促しているのか、親の役割について着目した。第1項では、国際的な視点から見た親への関わりとその効果について、概観する。

親の子どもへの関わりの傾向について、これまでの「子どもたちは乳幼児期の生活のほとんどを、家庭環境で親きょうだいや他の親族、近所の人々と直接関わり過ごす」から、ここ十数年来、父母である親は子どもの世話を乳幼児期の教育とケア（以下、ECEC）と呼ばれる代行サービスに依頼する傾向がある。「家族構成の変化、母親の就労、移民の増加」といった背景により、「子供と過ごす時間量や関わりの質が変化」している（OECD, 2019）。

乳幼児の発達を果たす親に対する保育への促しについて、「出生から5年間の保護者のふるまいが、子どもの知的・社会的スキルや能力の形成に決定的に大切なことは、今なお広く認められている」（OECD, 2019）ことから、上記の背景によって、子どもと過ごす時間量が減少し、関わりの質が変化しても、「親の重要な役割は乳幼児の発達を果たすこと」に変わりはない。それゆえ、子どもの発達を果たすためには、子育ての代行サービスに依頼しつつ、「可能な限り保育に参加」することが必要とされる。

親の関わりによる効果と課題について、親と保育者で、日々子どもの様子について情報交換ができること、情報共有のもと、子どもの社会性の育ち・発達・学びなど、一貫したアプローチをとれること、子どもの成長、適応力の発達が促されること、園の保育の質および家庭での育児や学びの環境の質が向上することが挙げられる（OECD, 2019）。

親が学校に関与し、最も満足したことは、プリスクールでの職員とのミーティングで子どもの発達について話し合ったこと。スペインの評価機構での調査で明らかになった。プリスクールや学校のうち、87%が保護者会などを持っているものの、参加する親はそのうちの8.5%のみ（OECD, 2012）ということが判明している。これらのことから、親は関与すると、職員から情報交換するなかで、子どもの成長・発達について知ることができる。子どもの発達についての話し合いを持つためにも、今後はいかに学校が親に参画を推奨していくかが課題と考えられる。

保育者と子ども、親、子ども同士の関わり、保育のプロセスの質について、調査対象国は日本をはじめ数カ国で、保育者は、保護者である親と連絡を取りやすくしたり、保護者である親向けの公開イベントを開催することはよく行われていた。一方、親に対し子どもへの教育的活動を提案したり、子育てについて学ぶ機会を設けたりする活動はそれほど行

われていなかった。施設の運営に関する意思決定の会合への参加は、国によって違いがあった（国際幼児教育・保育従事者調査, 2018）。これらのことから、保育者は、子どもへの教育・保育の提案、学びの場の設定といった、親が子育てについて学べるような関わりをすることが必要と考えられる。

海外での親への関わりの成功事例について、例を挙げる。シカゴ親センターは、就学前の子どもを持つ親へプログラム（The Chicago Parents Program）を提供し、親が参加することによる影響について明らかにした。Susan, et, al (2012)らは、プログラムの一年間の効果を検証した。結果をみると、どの人種の親に対しても、子どもへの体罰の減少、子どもへのしつけの一貫性、子育てに対する自信の向上という効果があった。子どもに対しては、教室での行動の改善度が上がっていた。このプログラムは低コストで効果が得られることから親の満足度は高かった。

これらのことから、保育者の適切な促しと介入によって、親が教育・保育に参加することは、親は子育ての指南を得ることができ、自分の子育てに自信を持ち自己肯定感が高まり、子どもへの不適切な養育が減少していた。その良い影響が、子どもの行動の改善、子どもの発達を果たすことに結びついていると考えられる。

このような親への子育てへの指南は、親子共に良い影響を与えていることから意義があると考えられる。

ほとんどの国の保育者は保護者と連絡を取り、定期的な情報の提供をしているが、家庭での遊びや学びの活動を子どもと共にやるよう勧めているといった家庭における子供との過ごし方について子育て支援を行っている割合は、ノルウェー、アイスランド、日本では約5割とあまり高くなかった（OECD, 2018）。

イギリスのプレスクールにおける「就学前教育の効果的提供（Effective Provision of Pre-School Education, EPPE）」によって、家庭においても親子で日々学んだり、友人と遊ぶといった環境が、子どもが成長した後、社会における望ましい行動、知的な活動に影響を及ぼしていることを導き出している（Kathy, S. Edward, M. et. al）。そのため、保育者による保護者への関わりの影響は大きいと捉えることができる。

保護者は、子どもの発達を果たす重要な役割を持つことから、保育者によって保護者に対し、教育・保育へ参加の促しをすることで、子どもの健やかな発達に影響を及ぼしていた。子どもの立場から、保護者の関与は良い効果を及ぼし、また、保護者の立場からは、子どもの発達について保育者と話せ、成長の過程を知る機会になるという効果があると考えられた。

国立教育政策研究所（2020）は、日本への示唆として、親である保護者に、より積極的

な役割を担えるような機会を授け、子どもたちの主体的・対話的で深い学びが実現するように援助する必要があると提示している。

保育者から親である保護者への子育て支援は日本でも広く実践されているが、海外での成功例を通して、就学前の家庭での遊びや学びの活動を子どもと共にやるよう勧めていくこと、親へのプログラムを提供することなどは、それらが子育ての指南となり、保育施設での学びが家庭での子育てを容易にしたり、親の子育てに関する不安や負担といった心理的ストレスの軽減につながるのではないかと考えられる。

日本での保育の量的拡大と質の維持・向上をどう両立させるかが大きな課題となっている。親への介入という子育てサポートが親の役割である子どもの発達を果たす力を伸ばし、親の保育への参加によって、保育の質の維持・向上が図られるのではないかと考えられる。

そこで、第2項では、我が国の幼稚園と保育所における父母との関わりについて概観する。

第2項 我が国の幼稚園教育要領と保育所保育指針における親への関わり

第1 幼稚園教育要領における親への関わり

幼稚園教育要領（2018）における保護者である父母への関わりを以下にまとめる。

1) 家庭との連携について、保護者が幼児期の教育に関する理解が深まるように、教師は日頃から保護者と関係が深まるよう降園時や連絡帳、園だよりの活用で情報交換の機会を授け伝え合う。幼稚園と家庭が一体となって幼児と関わる取組を進め、地域における幼児期の教育センターとしての役割を果たすよう努める。

2) 保育参加などを通じた保護者と幼児との活動の機会を授けることについて、幼児と保護者との登園を受け入れたり、体験や感動を共有し、幼児の気持ちや言動の意味に気付いたり、発達の姿を見通すなど幼児への関わり方への理解を一層深める。幼稚園の保育に参加し、教師と情報交換する。

3) 子育てへの不安や孤立感への対応について、保護者同士の体験の機会を預けることによって、体験を共有し、仲間意識を感じることができる。仲間ができることで保護者の負担の軽減につながる。幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供する。

これらの関わりを通して、保護者である親の教育への理解が深まり、見通しが立てられるようになり、自分自身の子育ての負担が軽減されることにつながっていくと考えられる。

第2 保育所保育指針における親への関わり

子どもの健やかな成長を支援していくため、全ての子どもに質の高い教育・保育を提供することを目標に掲げた子ども・子育て支援新制度が平成 27 年 4 月から施行された。保育をめぐる状況は大きく変化し、1、2 歳児の利用児童数が大幅に増加している。乳幼児期における社会情動的側面における育ちを保証するために、保育所の社会的役割が一層重視されている。保育所保育指針（2018）は平成 29 年に新たに改定された。そのうち、特に親・家庭及び地域との連携した子育て支援の必要性に着目し、以下にまとめる。

1) 保育所を利用している保護者に対する子育て支援について

保護者の子育てを自ら実践する力の向上に寄与する取り組みとして、保育活動に対する保護者の積極的な参加を促す。外国籍家庭など特別なニーズを有する家庭への個別的な支援を行う。

2) 地域の保護者等に対する子育て支援について

関係機関等との連携や協働、要保護児童への対応を行う。保育所保育の専門性を生かすこと、一時預かり事業などにおける日常の保育との関連へ配慮する。保育所がその環境や特性を生かして地域に開かれた子育て支援を行う。

3) 我が国では、親である父母が保育施設における運営や意思決定にあまり関与していない。しかし、子育て支援の一貫として、保育者が親である父母に関わりを促すことは、保護者と共に保育を支えていくことになり、意思決定をする機会が増えることが予想される。

幼稚園教育要領では幼稚園と家庭が一体となること、保育所保育指針では親が保育士と協働し保育に関わる機会を持つことと示されているように、子育て支援として、保育に関わり、保育者と他の親と関わる場の提供と、親である保護者を巻き込んだ活動を、互いの意思を尊重しながら一層高めることが必要と考えられる。

昨今の特徴としては、保育をめぐる状況は大きく変化し、1、2 歳児の利用幼児数が大幅に増加し、保育所は子どもの育ちの保証に対し、重要な社会的役割を担っていると考えられる。乳幼児期における社会情動的側面における育ちは、大人になってからの生活に影響を及ぼすことから、親は保育に関わることで子育ての指南を保育士から得ることができ、自らの子育ての力を向上することができると考えられる。

子どもの成長に気づいたり、子育ての喜びを感じたり、家庭での養育のしやすさにつながるような保育への関わりが必要と考えられる。

第2節 親の保育への関わり方・形態

第1項 世界における親の保育への関わり方・形態としての保育参画の概要

親が保育に関わることで自らの子育ての力を向上するという認識を持つことが必要との観点から、親の保育への関わり方と形態について概観する。以下に、親である保護者の関与を促すのが一般的な韓国、政府が保育参画を推進しているニュージーランド、保育を学ぶ場として親に保育参画を促しているアメリカについて例示する。最後に、親が保育に関与しやすい工夫について検討する。

第1 韓国

韓国の社会情勢と保育制度について、裴(2014)をもとに概観する。1987年男女雇用平等法の制定(1988年施行)と共に職場託児所制度を導入し、1991年「乳幼児保育法」が制定された。保育政策は従来の託児から保育へと発展していった。2001年には、合計特殊出生率が1.3を下回り、2009年は、子どもの保育所受託率は96.2%へと急速に増加していた。急速な産業化と共に核家族化が進み、既婚女性の経済活動参加が増えたことから、子どもの保護と教育を制度的に保障する必要性が高まったと捉えられる。

現在の韓国の保育政策では、子どもは幼稚園と保育施設に関わらず、同じ内容を学ぶことができる。親の所得水準と関係なく保育費は支援され、母親の就業可否と関係なく保育所であるオリニジップ(以下、オリニジップと示す)を週68時間無償で利用できる。この結果、0~2歳児の子どもの保育施設利用率の48.7%のうち、母親の就業率は33.2%裴(2014)となった。これは、低年齢児を持つ親である保護者が保育施設を選択する比率が高い、すなわち、保育施設へのニーズが高いことを表している。

韓国では、就学前教育施設における親に対する保育への関与の促しは8割以上を占め、日本の5割と比べて高い関わりを示している。また、「親モニタリンググループ」が地方自治体によって運営されており、保育施設の運営における公共サービス機能の改善が目的OECD(2018)となっている。オリニジップでの親への促しを例に上げると、父母の会活動として、父母教育やワークショップを実施し、子どもの生活指導について講演などを行っている(黄, 2003)。これらのことから、日本との違いは、親に対する保育への関与の促しが高いこと、保育施設の運営に、親がモニタリングすることによって関与していること、地方自治体の運営で、親の関与を保証していることが導かれた。

韓国では、様々な教育体制の問題に親が関与出来ない背景があったとされ、保護者が組合を結成し「親協同保育施設」が設置され制法化された。親は運営、プログラム企画立案、実践を担っている。例えば、掃除、行事準備、キャンプ、子どもの遊具作成などの活

動が挙げられる(池本, 2014)。

これらのことから、韓国の保育政策は、少子化の対策として保育の量の拡大を図り、無償化と、幼稚園と保育園の保育内容を同一化し、親の就労に関わらず、保育施設が利用できるようになったことで、日本と同様の対策が取られていることが窺えた。

韓国の特徴は、親への関与の促しが高く、施設の運営を親のグループが関与していること、親が運営する親協同保育施設が制度化された事が挙げられる。

親の保育への関わりについて、韓(2014)をもとに概観する。

メリットとして、父親の子育て参加、安心して子どもを預けることができる、子どもの健康と幸福を支援する保育プログラムを作成し、常に教師と相談できる、保育参画の影響として、親が保育についてよく理解できるようになった、運営に関わることで保育の透明性や保育の質を担保できる、親の成長、やりがいを感じるなどが挙げられた。デメリットとしては、親たちの負担になる事が挙げられた。

親が主体性に保育に関わる事によって得られる影響は、少子化、幼保一元化の進む社会情勢である日本に、子育ての指南として示唆を得られると考えられた。韓国の取り組みは、保育に参画することで、親に変化が生じていることから、本研究において、参考となることから取り上げた。

第2 ニュージーランド

多民族国家であるニュージーランドでは、1986年にすべての保育機関が教育省の管轄下に置かれ、世界的に見ても早い時期に幼保一元化が実施された。保育は、幼稚園・保育所の両方に共通し、国家主導による独自の手厚いナショナルカリキュラム、マオリ語で「織り上げた敷物」の意味を持つ「テ・ファリキ(Te Whāriki)」のもとで行われている。保護者は、家族のライフスタイルに合ったサービスを自由に選択し、2015年では、96.2%の子どもたちが小学校入学前になんらかの乳幼児教育・保育サービスを受けている(高橋・加藤, 2017)。これらのことから、政府は、多民族のどの子どもに対し、保育の質の保証とその維持のため、統一したカリキュラムを提供していると考えている。

ニュージーランド政府(New Zealand Government)は、保護者を保育のパートナーと位置づけ、子どもたちが学び続けることができるよう、保育者と保護者との間に真のパートナーシップを構築するとしている。ニュージーランド政府(New Zealand Government)(2018)のエデュケーションレビューオフィスでは、効果的だった親とのパートナーシップのアプローチと戦略について、説明している。例えば、子どもが通学し始めた最初の2年は、親とパートナーシップを築く重要な期間とし、保育者が保護者と一緒になって、子どもの可能性

や進歩について、評価したり、あるいは戸惑いについて共有している。このように、保育者から親へ関わり、子どもに関する様々な事柄を共に行ったり、不安に関する情緒面を共有することで、パートナーシップの深化に努めていることが窺える。

親が保育について学ぶ幼児教育施設として、親が所有するプレイセンターがある。そこでは、家族と一緒に成長する Families growing together という考えに基づき、親の学習コースが設置されている（佐藤, 2014）。親が保育を学び、保育に関わることで、保育の質が維持されると考えられる。

ニュージーランドの子育て支援は、親をパートナーとして捉えていることから、政府や団体が支援体制を構築し、親が教育・保育に関われるよう働きかけている。その結果、親が教育に関わるという IP (Parental Involvement) が浸透している。親のメリットとしては、子どもに対する精神衛生上の効果や学習意欲の向上、親に対する自信付与や教育への関心拡大、親同士のつながりの熟成、幼児教育に対する貢献、親の意見を保育・教育に直接反映できる点が挙げられている。またマンパワーの結集、当該地域の教育力を高める、互恵的なコミュニティが形成できるとされている。

我が国では、親を幼児教育のサービスの利用者として捉えることが多いが、ニュージーランドのプレイセンターの事例は、親が子育てを学ぶことによって得られる親自身の成長と子どもの育ちを保証する保育の質を向上させる力を持つことを表していると考えられる。

ニュージーランドのテ・ファリキに基づいた子どもの主体的な遊びを大事にする保育は、我が国の幼稚園要領および保育所保育指針における子ども中心の保育と共通している（大橋ら, 2018）。

そこで、我が国における親に対する保育への促しによって、親が保育を学び、関わることによって、「子どもが主体的に遊ぶ子ども中心の保育」の向上に活かせるのではないかと考える。

ニュージーランドでの幼保一元化と、親が子どもの教育・保育に関わる政策によって得られた影響は、本研究に参考になると考えられ、取り上げた。

第3 アメリカ

アメリカには、子ども、親、保育者である教師が共に学ぶ場所として、親協同の保育施設 Parent Cooperative Preschools がある。保育者は親を保育へ巻き込み・促し、親である保護者の参加を推奨し、幼児教育プログラムにおける保護者教育を行い、保護者をサポートしている（PCPI, 2017）。

例えば、カリフォルニア州では、1.2%と少数ながら、親協同の保育施設が存在する。親が定期的に保育に参加することで、保育者の保育方法を自然に習得することができる。

メリットとしては、子育てについて学べる、不安やストレスが減る、親同士のコミュニケーションの機会が多いため他の親から学ぶことができる、保育料を安く抑えられる(池本, 2014)などが挙げられる。

カリフォルニア州にある保護者が参加する保育園評議会 The California Council of Parent Participation Nursery Schools (以下、CCPPNS と示す)によると、1915年、シカゴ大学の教職員は、自分達の子どもに社会体験を提供するため及び親自身が学ぶため、最初の親参加型の保育園を開始したという。今日では州全体における保護者のコミュニティであり、保護者が保育に関与し、教育者との相互支援を行っている。これらの親が参加する保育園や幼稚園は、親、教育者、子供たちと積極的なパートナーシップをもち、最高の教育がもたらされるという原則に基づいていると説明している。この組織は、加盟校が支払う会費で賄われており、保護者と教育者によって運営されている。CCPPNS は、親協同の保育施設 Parent Cooperative Preschools International (PCPI) と提携している。

PCPI は、5万人以上の家庭と教師である保育者を代表し、子どもの教師としての親の価値と、子どもの発達に合わせた親の教育の必要性を認識する家庭、教育者である保育者、社会機関に継続的な支援を提供している団体でネットワークが構築されている。

そのうちの一つである Campbell Parents Participation Preschool では、親のクラスでの動き方について紹介している。クラスは週2回、週3回、週4回通園するなど、様々な形態があり、どのように動くのか具体的に提示している。例えば、週に2回のクラスでは9時から11時15分までの保育時間の中で、親は子どもと一緒にクラスに参加するとし、主な仕事は、子どもをシャドウイングして安全を確保し、仲間との健全な社会化を促進することであると示している。各家族は、約8週間に1回、交代で軽食を提供する必要があると示している。シャドウイングは、親があれこれと指導したり子どもがやることを代わりに行ったりするのではなく、子どもたちの側で彼らの主体的な活動を見守ることを意味していると考えられる。なぜなら、Campbell Parents Participation Preschool の理念に謳われているように、子どもにはそれぞれ個性があり、彼らのペースで発育していくものであると考えるからである。

これらのことから、親は子どもが存分に環境と関わりながらそれぞれの興味関心のあるものにのめり込んで遊べるような働きかけを保育に関わることによって学び、子どもの主体性を尊重し、そばで見守るという子育てに活かしていくものと考えられる。

それらの理由から、本研究で、親が保育に関わることで子どもの主体性を伸ばす関わり

方の学びを参照するため、アメリカを取り上げた。

以上、韓国、ニュージーランド、アメリカの、保育者から親への促しと親の保育への関わりの国際比較から、日本への示唆が得られた。

各国に共通していたのは、親である保護者を保育サービスの受益者としてだけでなく、パートナーとして捉えていたことである。親に子育てについて学ぶ機会と場を授け、保育へ巻き込むことによって、親との協同保育を行うことが可能となっていた。親への影響としては、子育てを学び、心理的なストレスが減るなどが挙げられていたことから、保育に関わることはメリットが多いと考えられる。

第2項 親が保育に関与しやすい工夫

最後に、親が関与しやすい工夫について取り上げる。

Durišić&Bunijevac(2017)によると、パートナーシップを組めるプログラムにすることで、親の関与により、学校と家庭との間にパートナーシップが得られ、良い教育の良い実践につながることを明らかにしている。そのためには、相互の信頼と尊敬の念を持つことが必要であると言及している。学校はすべての親が活動に関与するよう巻き込むことに集中し、管理者と教育者は、学校の威圧感を和らげるために、居心地の良い雰囲気作りを工夫する必要があると提言している。そうすることで、学校に対しネガティブな経験をしている親にとって、より快適に感じられるようになるだろうと提示している。

Hornby(2011)は、早い時期での家庭訪問を薦めている。親への個別訪問による対応は、ほとんどの親とのパートナーシップを築くのに役立ち、子どもに最適な教育を提供するのに大きな利点となったことを明示している。

これらのことから、信頼関係を築くためには、早い段階から親と一対一で話す機会を持つということが重要だと考えられる。親を指導するという視点を持つのではなく、共に子どもへの質の高い教育を行うというパートナーとしての視点を持ち、話しやすい雰囲気作りをした上で、コミュニケーションをすることが大切だと考えられる。

海外での保育参画の現状と、親への関わりやすさの工夫から、保育参画には親に対する施設への信頼感や教育への関心拡大、親同士という仲間とのつながり、子育てを学ぶことによる幼児教育に対する貢献などが挙げられる。つまり、親と子の主体性が強化され、子育てのサポートが親と子ども双方に良い影響を与えていることが導き出された。

第3項 日本における親の保育への関わり方・形態について

第1 保育参観・保育参加・保育参画の定義

幼稚園における教育は、家族のつながりや子育てが変容している現実を踏まえて、家庭と共に連携して教育を行い、家庭とのきめ細かな連携を考える必要がある（青井・小川, 2009）。

家庭との連携による教育は、幼稚園に限ったことではなく、保育所や認定こども園でも同様と考えられる。そこで、我が国では子供の養育者である親がどのように保育に関わるのか、保育参観、保育参加、保育参画という形態を概観する。

「保育参観」は、子ども達のふだんの生活リズムを守りながら保育を外側から見て、理解するものであると友定(2004)は、示している。参観は保護者側から一方的に子どもを観ているため、子どもが圧迫感を感じることもあるという。保護者の中には、おしゃべりや写真撮影をする者が少なくないなど、望ましい形態ではないとの見解を示している（友定, 2004）。

「保育参加」は、子どもの園生活に保護者も参加し、一緒に遊んだり活動するなど体を動かしながら園での生活を子ども達と共に体験してもらうことで、子ども達の中に生じている感情を保護者も自らの内側に感じ、体験的に理解するものであると示されている。親と子ども双方が楽しく生き生きとした体験ができるとされ、近年多く見られるようになって示されている(青井・小川, 2009)。

保育参観、保育参加後の保護者の気付きとして、隣谷ら(2016)は、いずれにおいても友人関係間での育ち合いの姿を感じ取ることができると記述している。

長谷川(2015)は、保育参加には「子どものために」という理念を中心に捉え、保護者と保育者が同じ方向を向いて子どもを育てていくきっかけとなるだろうと述べている。

大森ら(2004)は、保育参加の意義は、園が保護者を教育するのではなく、保護者が様々な活動に参加して、子ども理解を深め、同時に保育者や他の保護者と関わり、その教育観に触れ、自ら成長していくことであると述べている。子育て困難の問題解決には、育児負担感を量的に減らしていく方法と、保護者が保護者として成長することによって負担の質的変換を図る方法の双方が必要という。

下村(2015)による、ある県内での幼稚園と保育所の保育参加の実施状況では、実施率は20%に満たず、種別や規模による両者の違いは見られなかったとしている。参加の効果としては、園への理解、保護者と保育者のコミュニケーションが80%を超えていた。課題は、父親の参加率、および全体の参加率の低さだった。参加への促しとして、年一回の参加の義務づけ、期間指定による参加を呼びかけていた。

これらのことから、幼稚園児、保育園児の母親に差は認められないことが窺えた。参加に積極的もしくは負担があるといった親の保育への関わりの意識は、就労の有無に左右されないことが窺えた。

「保育参画」は、青井・小川（2009）によると、保育参観や保育参加に比べ、より積極的、主体的に保育に関与することを保護者に求めているとしている。その特徴は、保護者が自身の特技を生かすなどした独自の企画を考え、保育時間中に、子どもたちに働きかけるといふ点であると示している。保育参加が、子ども達の経験の体験的理解であるのに対して、保育参画は保育の一部を担うという保育者体験の側面を持つ点において、保育参観、保育参加とは異なる特性を持つものであるという。

島津(2014)は、保護者が保育に参加する上での戸惑いや負担感に触れ、「保育参画」の実践により、これまでの「支援者」「被支援者」の枠組みを脱構築していることを記している。保護者と保育者の学びや葛藤、認識の変容は、協同的な学びの契機であるとし、その実践共同体は子どもを共に育てるといふ共感や認識の醸成や保育の質向上の可能性を有することを明らかにしている。我が国における保育参加の取り組みについては、年に数回の特別な日として設定されているのが多いため、日常的に保育に携わる土壌を培うためにも保育参画の意義の周知を継続して行い、保育の質を高める一つのアプローチとして保育参画を捉えていくことが重要であろうと記述している。

そこで、本研究では、保育への関わり方・形態として「保育参画」は、親が主体的に保育の企画・運営に携わることと定義する。

第2 母親の保育参画

前述した「保育参画」は、親が主体的に保育の企画・運営に携わることで、保育前後、もしくは保育時間中に子どもたちに働きかけるといふ点がある。

そこで、幼稚園における保育参画後に実施したアンケート結果をみると、母親は保育参画の企画の準備期間が保護者同士の親睦を深め、育児について会話を促進する場になり、楽しかったと肯定的に捉えていたことが示された。普段の子どもの様子や子育てについて相談できたなどの記述も見られ、保護者同士が自然に支え合ったり、助け合ったりできるような場となり、保護者同士のネットワークづくりのきっかけとして有効に働くことが示唆された（青井・小川, 2009）。

池本（2014）が指摘するように、「家族や地域の自主的な参画は、コミュニティへの所属感を通し、親同士の子育てネットワークが自然発生的に形成される」ため、そのシステムが保持されると思われる。

我が国における保育所での保育参画に関する研究は、見受けられなかったものの、幼児教育における母親の保育参画を通して、肯定的な意見やネットワーク作りが見受けられた。これらで得られた知見は、保育所における保育参画に関し、参照となると考えられる。

第3 父親の保育参画

我が国の共働き世帯では、子育ての多くを母親が担っているのが現状である。そこで父親の保育への参画について概観する。

内閣府（2017）の6歳未満の子どもを持つ夫婦の育児・家事関連時間について、以下にまとめる。世帯の種類別に見ると、妻である母親が無業の世帯において、夫である父親は75分（1時間15分）、共働きの世帯では84分（1時間24分）となっており、母親の就労形態に関わらず、家事・育児に費やす時間は少ない。同じく6歳未満の子どもを持つ父親の家事関連時間について、共働きの世帯で、約8割が家事を全く行っておらず、約7割が育児を全く行っていなかった。父親の育児・家事平均時間では、家事は90分、育児は146分であり、母親が無業の世帯と比較して長かった。父親の育児・関連時間は、2011年から16分増加し83分となっており、2006年の結果と比較すると10年間で23分増加していることから、低調ながらも共働き世帯では、徐々に育児・家事関連時間が増加していることがわかる。

有業者（15歳以上）の1日あたりの仕事時間を見てみると、男性が6時間49分、女性が4時間47分と男性が女性に比べ約2時間長くなっている。昭和61年から平成28年までの有業者（15歳以上）の男女別仕事時間の推移によると、男女共に仕事時間は減少している（総務省、2017）。

小原（2019）は、子どものいる世帯の夫婦の家計内時間配分について日本の現状を整理している。

2000年以前、父親の経済状況が低下すると、母親は市場労働を増やし、通勤時間が増加しても家事時間を減らさず自らの余暇時間を減らすことで対応していた。また、父親は通勤時間が増加し市場労働が増えると家事時間を減らすが、母親は市場労働を減らし家事時間を増加させていた。父親の家事時間は、どのような状況下で変化せず、母親が調整していたことが明らかになった。

2000年以降、共働き世帯において、父親は仕事時間を減らし家事時間を増やすという変化が見られた。夫婦（父親と母親）に時間制約の変化が生じると、配偶者間で時間を代替させるように変化してきた。時間配分の変化の要因として、育児休暇といった父親の働く環境が影響していることを明らかにしている。

以上のことから、子どものいる世帯では、男女共に仕事時間が減少し、家事の時間は母親が減少し、父親のうち家事を行う場合はその時間が増加している。男女とも一日のうち子育てに、より多くの時間を配分する傾向が見られる。2000年以降、子どもを持つ父親の労働環境の変化により、子どもに関わる時間配分を多くとれるよう、ワークライフバランスを考慮している現状が窺える。

第4 保護者会、父母会での親への関わり

日本で「父母と先生の会」と呼ばれることもある PTA (Parent-Teacher-Association) は、米国教育使節団報告書から始まった。アメリカは、日本社会の徹底した民主化を図るため、戦後、昭和 21 年 (1946 年)、いち早く教育専門家を派遣し、社会基盤を支えてきた教育について抜本的な改革を進めようとしたという。

以下に、公益社団法人日本 PTA 全国協議会をもとに、PTA の概要をまとめる。

GHQ は、文部省社会教育局に PTA の結成を指導し、「父母と先生の会委員会」が設置された。PTA 設立の勸奨活動により、各地域で気運が高まり、一気に組織化が図られるようになっていった。昭和 23 年 (1948) 4 月には、全国の PTA 設置状況は小・中学校とも早くも 7 割近くに達しており、制度発足が遅れた高校でも 4 割を超える状況となっている。

この当時の PTA の活動は、戦後の学校関連諸制度の整備充実への要求が大きな活動の柱だった。学校給食の制度化、2 部授業の撤廃、校舎の増築、青年学級の創立、教科書無償配布、学校保健の実施など、文部行政に対して保護者の立場からの要望をまとめて要請すると共に、それを受けた文部行政の施策の実施に向けて、財政当局への要請活動を精力的に行うというものであった。このように PTA は、戦後の教育制度、教育の条件の整備充実に多く貢献を果たしたものと見える。(公益社団法人日本 PTA 全国協議会『日本 PTA 歩み』)

一方で、1954 年に文部省が出した参考規約第 5 条 4 で、PTA は「学校の人事その他管理には干渉しない」と示され、親の意向を学校運営に反映するための組織ではないと明文化されていた。これらのことから、戦後の制度や整備の充実を図るための活動が主な役割で、親の意向を検討し、組織の運営に反映させるものではなかったことが窺えた。

幼稚園の PTA 設置率を見ると、私立 94% (2013 年度)、国公立 58% (2013 年度) となっているものの、団体に加入せずに活動している PTA もあるといわれ、正確な活動の実態は把握されていない(池本, 2014)。

このように、小学校や幼稚園の PTA は、父母と教職員で自主的に構成された整備の充実

をも目的とされた自主的な運営であり、両者が対等の立場で活動する社会教育関係団体の一つとされている。同じく、保育所においても、運営委員会の設置義務はないとされているものの、親の会・父母会・保護者会の設置率は88.4%（全国保育協議会, 2008）となっている。しかし、幼稚園同様、保育所の保護者会においても運営に親の意向を反映されるものではなかった。

以上をふまえて、日本では親が学校や幼稚園・保育施設の運営に関わることはほとんどないことが窺えた。

今後は、親が子どもの教育に触れる機会を持つことが教育・保育の質の向上につながることから、幼保一元化、保幼小接続の充実を図るために、より一層、教員と協力して学校運営に関わる必要があるのではないかと考えられる。

小学校では、児童が親の就労の有無に限らず同じ教育を受け、親が「父母と先生の会」であるPTAで、教職員と対等の立場で子どもの健やかな成長のために活動している。父母の就労との兼ね合いにより、活動の程度に違いがあるものの、学び合い助け合う姿は、発達段階に応じた子育てにおける親の子育てへの姿勢や関わり方を反映していると考えられる。しかしながら、活動は任意であるため、義務的になっていないかどうか、父母と教職員で、できる時にできる人ができる事をやれるような体制となるよう共に考えていく姿勢が必要と考えられる。

第5 親が運営に関わる幼児教育・保育施設

前項では、PTAや保護者会では運営に関し親の意向が反映されるものではないことが示された。ここでは、親が施設の運営に関わる幼児教育・保育施設の概要について示す。

1950年代、60年代に、子ども数の増加し、保育所や幼稚園が不足するといった社会情勢がみられた。その背景によって、親たちが自ら出資し団体で運営する形式をとったが、国レベルでの統計では把握されていない。公的な補助を受けるためにそれらの施設が法人化し、設置されると、親の運営ではなくなってしまうという経過をたどっていた(池本, 2014)。

現在では、待機児童対策として株式会社の参入が促進され、親自らが保育所不足のために共同で運営する形式はほとんど取られていない。

一方で、自主保育という形で親が運営に関わる事例も見られる。「自主保育とは、親たちが交代で乳幼児を預かり合う保育活動」(菅野・米山, 2016)を表す。

東京近郊で活動している新しい保育を考える連絡会・しんぼれんによると、加盟のグループ数では2021年度で10グループになるなど減少傾向にあるという。その理由として、

親の労働時間が以前と比べて長くなっていること、専業主婦の割合が低下していること、子どもの数が減少していること、幼稚園での管理教育が少なくなっていること、一時預かりを行う保育者が増えていることが挙げられる。

親が運営する自主保育は、かつては幼稚園や保育所不足から始まった活動である。しかし、今日では、地域の中で外遊びを通して仲間と共に自然と触れあえる子どもの育ちの場を創る活動、主に母親たちの情報交換の場としての活動が主になっている。

菅野・米山（2016）は、OBたちが作り上げたものを自分たちができる形で継承していきながら日常の保育は展開されるとし、自主保育は、その理念と実践のあり方を共有するひとつの子育て共同体であると言えるのではないだろうかと言っている。

これらのことから、どのような形であれ、親が運営に関わるというのは、子どもを預かってもらうというよりも、自ら保育に関わり子どもの育ちを共に支えていく場に親が存在し、共同体として保育者と保護者である親が協働する機能を有していると考えられる。

そこで、減少の一途をたどるこの活動を、幼保一元化された保育施設で、活かせるのではないかと考えられる。諸外国に見受けられるプレイセンターなどのように、保育者と共に保育に関わるという保育参画のひとつの形態として、この活動を保育に活用し、これまで培われてきた共同で子育てする意欲、子育ての指南といった様々な経験を、維持継承できるのではないかと考えられる。

第1章から第3章までをふまえ、保育に関わる現状は、以下のように考えられる。

第1章では、日本の幼児教育と保育が就労の有無により保育に欠けるかどうかという背景から2元化されたのち、就学前の全ての子ども達が小学校のように一貫した教育を受けることができるよう、親の就労の有無に関わらず、幼保一元化など時代とニーズに対応した政策をこれからも整えていくことが必要と思われる。第2章では、保育所の立場から、保育の限界として子育てを保育所だけが担うのではなく、子育ての手伝いはできるが、親や地域ぐるみで子育ての当事者として子育てを学んでいく必要があると思われる。親の悩みや不安に対しては保育者だけではなく親同士の話し合いの場を用意することで、ピアサポート機能として活用することで、親同士が子育てを通して成長していくことが期待されると考える。母親の立場からは、保育所には子どもへの質の高い保育の提供による安心感と、子育てに関する相談などのコミュニケーション、心理的なサポートを求めていることや、家庭では母親をサポートする父親の育児参加を求めていることから、援助希求と自己開示のコミュニケーションが必要になると思われる。父親の立場からは母親と同様に子育てに関わりたいが就労時間上制約があることから、育児休暇などの取得の推進が必要ではないかと考えられる。第3章では、国際的な視点から、日本の政策の現状は、家族

や地域の自主的な保育への参画については、ほとんど問題提起されていないことが窺えた。自主保育の立場から、母親達がこうありたいと願う保育の形を主体的に実践している。しかし自主運営であり、共働きの増加などにより、年々減少傾向であるため、就労の有無を問わない認定こども園などを利用することで、保育への積極的な参加を継続することも一考であると思われる。

そこで今後は、保育の質向上に加え 家庭教育の質向上につながるとの観点から、就労の有無に関わらず、幼保一元化による認定こども園などの保育施設で親を保育サービスの受け手として見るだけでなく、保育に関わり、子育ての当事者として仲間と学べるような場づくりを行っていくことが必要と考えられる。共働きの母親と父親の就労時間と家事時間が以前と比べて減少していることから、その分を育児に関する時間に充て、保育に積極的に関わる保育参画の促進を働きかけていくことが、海外での知見から得られている親自身の成長と子どもの保育の質向上に重要と考えられる。そして、共に保育をより良くしていくパートナーとして認識していくことが必要と考えられる。園が保護者に向けて積極的に保育への理解・協力を求めることにより支援体制づくりが促進されることから、親が積極的に保育に関わる保育参画促進について研究を行う意義があると考えられた。

第4章 親の保育参画促進に向けて

第1節 第三者評価による保育の質確保からみた保育参画

保育の質はどのように確保されているのか、内閣府（2019）の新制度における指導監査等をもとにまとめた。

我が国での新制度における指導監査等について、保育所は、児童福祉法第46条に基づき、都道府県等が、保育の質の担保を目的に年1回以上の実地検査が義務づけられている。幼稚園は、学校教育法に基づいて、必要に応じて都道府県が実施する。幼保連携型認定こども園は認定こども園法第19条に基づいて検査が義務づけられている。幼保連携型以外の認定こども園は、保育所型、幼稚園型は、上記の扱いと同様である。

海外の例を挙げると、ニュージーランドでは、幼児教育・保育施設がカリキュラムに沿って運営されているかについて、国の機関が評価する制度がある（Education Review Office）。ニュージーランドでは、親を保育者のパートナーみなし、保育参画を推奨していることについては前述したとおりである。

課題への取り組みや評価として、職員が自らの実践を振り返り改善していく意欲や能力があるか、職員と親のパートナーシップが良好かどうかなどである。親と職員は共に評価を行い、強みや次に取り組むべき課題について認識を共有化することに重点が置かれている（池本, 2016）。

我が国の指導監査等では、第三者評価として公開されている。しかし、（池本, 2016）は、園と親が園の課題を共有し、共に改善策を考えるような場がないこと、多くの自治体は改善すべき点に焦点が当てられ、好事例の抽出が行われていないことを指摘している。

前述した我が国の保育側の立場は、親の養育をサポートするものであった。保育所の在園児数は幼稚園のそれを上回り、今後は幼保一体化の施設の在園児数の増加が予想される。ニュージーランドのように、家庭の状況に合わせたサービスを選ぶことも考えられる。あるいは、韓国のように、低年齢児を持つ母親は未就労の比率が高まる可能性もある。就労の有無を問わない認定こども園では、様々な就労形態の母親が存在することから、保育に参画しやすい親と保育者がパートナーとなりうることも考えられる。

そこで、本論文では、保育所において、保育に参画しやすい親と保育者がパートナーとなりうるか、好事例となりうるかどうかを検討することに意義があると考えられる。

第2節では、我が国における親の保育参画促進に関する先行研究で明らかになったこと、今後の課題について、概観する。

第2節 保育参画に関する先行研究と今後の課題

第3章では、親の保育への関わり方に関する場、形態、程度について概観してきた。第4章第1項では、第三者評価による保育の質の確保と保育参画について概観した。

第2項では、子どもを預けるだけでなく、子どもの育ちを共に支え合う観点から、親が主体的に企画・運営に携わる保育参画に関する先行研究と本論文の位置づけについて検討する。

先行研究では、保護者に関わる教員やスタッフ等の「保育参画」への取り組み、および保護者がどのように積極的、主体的に保育に関与しているのか」を概観する。それらの先行研究から明らかになったこと、今後の課題について把握し、本論文の位置づけを考察する。

CiNii（国立情報学研究所学術情報データベース）の論文検索(2021・4・2閲覧)で「保育参画」のキーワードを用いた検索結果は2件である。このうちの1件は、学生が保育参画して保育者のイメージを明確にし就職活動を行うという内容のため、研究対象とならず除外した。もう1件は、幼稚園における保育参画の意義と課題についての内容であるため対象とした。

論文検索では、対象研究が1件だったため、次に、「保育参画」のキーワードを用い、全文検索した。その検索結果は5件である。その内訳は、プレイセンター1件、幼稚園2件、学童保育1件、大学内の通学型幼児教育施設1件だった。保育所は0件であった。この内訳を見ると、日本における保育所での保育参画の研究は、論文検索、全文検索において、現時点では見当たらないということになる。

そこで、学童保育は、乳幼児の年齢に該当しないため、研究対象とはせず、本研究の先行研究として、論文検索での幼稚園1件、全文検索でのプレイセンター1件、幼稚園2件、大学内の通学型幼児教育施設1件の計5件を対象とした。

以下に、先行研究で明らかになったこと、今後の課題について、その内容をまとめたものを表に示す。

表4-1 保育参画に関する先行研究の概要

先行研究	明らかになったこと	今後の課題
1. 幼稚園における保育参画の意義と課題	母親：保護者間の親睦の深化、普段の子どもの様子、相談など情報の促進する	父親：企画の準備段階や当日のいずれにおいても「こども理解」に困難を感じた父親がい

	<p>場。楽しかったと肯定的評価。保護者間の自然なサポート、ネットワークづくりのきっかけ。教師の子どもへの関わり方の意図や意味の理解。</p>	<p>たため、企画以外の時間での子どもとの関わりを充実させる。 父母：入園直後の時期は、「園の様子を知りたい」ため、旧来型の保育参観も必要。 父母：企画すること自体が目的になっているため、幼稚園側が、どのような保育場面や子どもの姿を見てほしいか、どのような関わり方をしてほしいか、積極的に提案や助言をする必要がある。</p>
<p>2. プレイセンターにおける乳幼児期の親子参画の在り方に関する研究： SPACE プログラムを実施することの意義と今後の方向性</p>	<p>「初めての育児を地域で安心して行えている」「ファシリテーターがいることと固定メンバーであることの安心感」「本音で育児を語り合えること」「月齢が近い子どもの状況を知ることによって子ども理解が深まったこと」 「居住地域に友達ができること」「子育てに自信が持てること」「子どもとの</p>	<p>「職場復帰や仕事へのプレッシャー」「時間設定が乳幼児に合っていない」「ファシリテーターの成り手不足」「ファシリテーターのブラッシュアップ研修がないことから通常セッションの親たちが乳幼児セッションのファシリテーターとして遊びや活動を先導すること」 「0歳児～3歳児の参加者が多いため、認定こども園における子育て</p>

	関わりが上手くなること」	て支援の枠組みのなかで活用する」
3. 親が保育に参画することで生じる保育環境についての考察：京都造形芸術大学子ども芸術大学の実践から	親が時間をかけて子どもを「待つこと」で今の「子供の気持ちを受け止める」経験をし、その親子のやり取りを他の親が見守る経験する。	保育参画に巻き込むには、他者との関係性の中で、「その子」の「今」の気持ちと向き合う大人が多く存在する環境であることが必要。
4. 保護者との協働的な関係を築くために	自分が保護者としてどう接していくべきか考えるようになった。 悩みや不安が解消されるきっかけとなった。	子どもの育ちを実感できるような活動や機会、時期を設定し園生活に取り入れる必要性。 親同士の親密性による心の内面の語りを他の保護者の不安の軽減や共感につなげること。
5. 今後の課題（今、求められる幼稚園像：協同的な学びに向けて）	教師の幼児への関わり方を通して幼児期への理解と親としての関わり方を学ぶ。	保護者同士で親育ちを支えるための、ネットワーク作りの必要性。

「幼稚園における保育参画の意義と課題」の研究では、保育参画を父母に周知するために、保育参観との違いを説明したガイドを配布している。子どもと一緒に活動することで、子どもの遊びや育ちを理解し、それを支える大人の在り方について一考することを導いている。青井・小川（2009）は保育参画の意義について、「保護者独自の企画」により参画することで「保護者同士のネットワークの重要性」と「教師の関わり方や働きかけの意図や意味がより理解される」ことであるとしている。課題としては、父親の参画への関わりが少ないことから、「参画への促し」による子どもとの関わりの充実が挙げられてい

る。

「プレイセンターにおける乳幼児期の親子参画の在り方に関する研究：SPACE プログラムを実施することの意義と今後の方向性」の研究では、ニュージーランドのプレイセンターでの、初めて子どもを持つ親と乳児のためのプログラムの継続的な活動から、「ファミリーテーター」によるサポートで「親子に安心感」を与え、「他の親と知り合い、交流できる場」で「子育ての悩みを解消」していた。他に、「子育てに柔軟性」が出て、「対応の上達」が挙げられた。活動により、相談する仲間ができ、子育ての指南を得ることができ悩みや不安が軽減されたと考えられる。課題としては、活動が午後で午睡と重なること、スタッフへの研修による保育の質の向上が挙げられた。佐藤（2016）は、日本における示唆として、幼保一元化に伴い認定こども園における低年齢児への子育て支援に活かすことを提言している。

「親が保育に参画することで生じる保育環境についての考察」では、子育ての相談や交流の場として、「保育園・幼稚園の役割が大きい」とし、保育参画をする上で、山本（2011）は、「子どもの気持ちを受け止めること」「待つこと」といった子どもに対する「大人の関わりの質」の重要性について触れ、親子の関わりの場面を他の親が見ることで「経験の場を形成」するとしている。この関わり方の問い直しは、今後の保育参画と子育て支援のあり方に影響を及ぼすことが窺えた。

「保護者との協働的な関係を築くために」の研究では、保護者が幼稚園の設定した日常の保育や行事への積極的な参加によって、「自分が保護者としてどう接していくべきか考えるようになった。」「悩みや不安が解消されるきっかけとなった。」などの変容に関する声を挙げている。小林ら（2006）は、幼稚園は、「保護者を育てる場」としている。保護者の力を引き出し、一緒に考え、「心情を吐露できる時間と場所と空間をコーディネート」することが大切だと導き出している。今後は、保護者が自己開示することで、他の保護者の悩みや不安への対応のきっかけになることを推測している。

「今後の課題（今、求められる幼稚園像：協同的な学びに向けて）」の研究では、保育参画を通して、親は「幼児期への理解」と、「幼児への関わり方」を学んでいる。この学びを個人のものとして捉えるのみならず、他の親や次の新入園の親へと援用し、親同士のネットワークとなるような「保育を創造」する必要があると提案している。

これらの先行研究で明らかになったこと、今後の課題を導き出した。（表 4-2 参照）

表 4-2 今後の課題

「保育士による父母に対する保育参画促進」

目的	今後の課題
「参画への理解・指南」 保育への理解 関わりの深化	参画の視点、関わり方への積極的な提案と助言。 父親の充実した保育への関わり。 園の様子を知るための、参観の継続。
「保育の質確保」 保育職の質確保	保育職の確保。 0歳児～3歳児の父母への子育て支援の枠組み。
「子ども理解」 子どもの気持ちの受容	保育参画への巻き込み。他者との関係性の構築。待つ保育、見守る保育。多くの大人の存在。経験する環境。
「子育て」 子どもの育ちの実感	様々な活動や機会、時期の設定。
「親育ち」 不安の軽減 親仲間の獲得 親の相互支援	初めて・慣れない育児を支えるためのワークライフバランス。 子育て経験者の親による他の親への支援。 不安の軽減のための親同士の相談窓口の拡大。 保護者同士で支えるネットワーク作り。

第3節 保育参加から保育参画への過程と本研究の目的

前章では、我が国は、保護者は子育て支援のサービスの受益者として捉えられているが、保育施設において子育てを学ぶ場が求められていることを述べた。保育者が親に保育に関わるよう促し、親が保育に関わることによって、保育と子どもへの理解が深まり、関わり方を学ぶことによって親としての成長が促されたり、相談する仲間と出会うことで親にとって負担感・不安などの心理的ストレスが軽減するなど良い影響があることが示されている。

今後の課題としては、親と協同する保育者・人材を確保すること、保育者から親への積極的な保育への参画への提案と助言をすること、父親の参加を促すこと、低年齢児を持つ父母へのサポート、子どもを見守る保育をすること、大勢の大人がいる環境を整えること、不安の軽減のため、親同士で相互扶助できるような窓口の拡大、親同士で支えるネットワーク作りなどが挙げられた。

先行研究で明らかになった保育参画の効果と今後の課題、本研究の目的を図に表した。
 (図 4-1 参照)

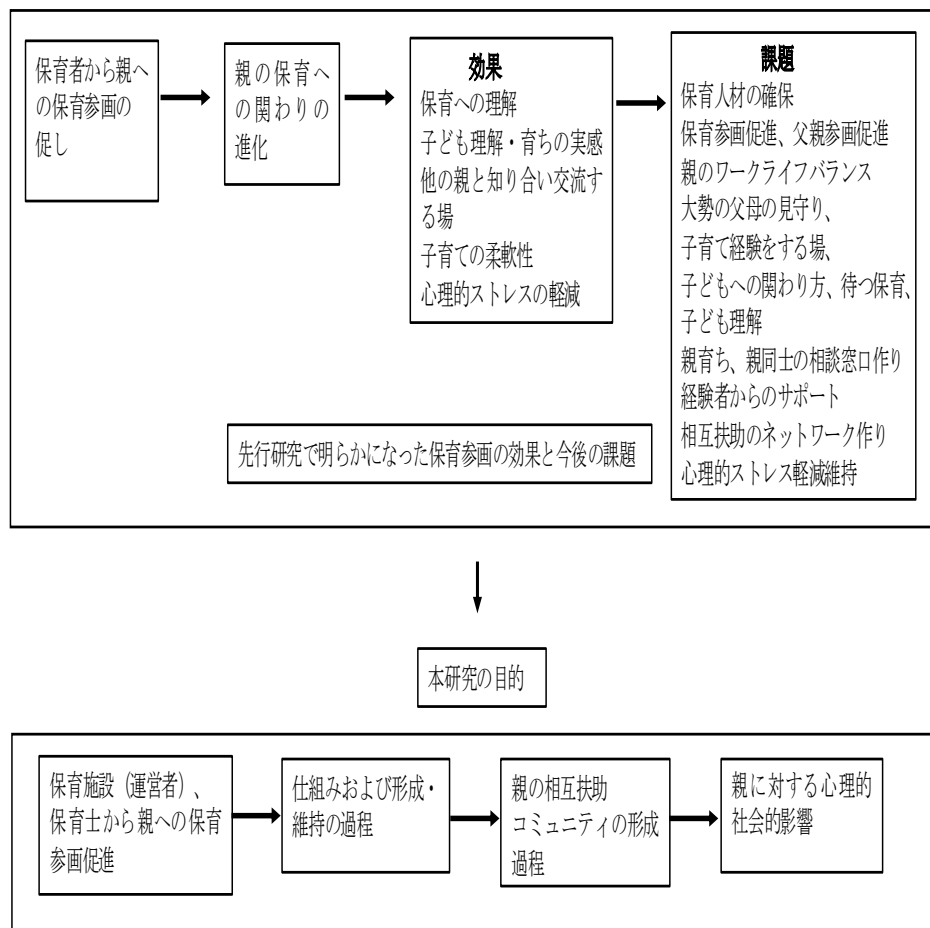


図 4-1 本研究の目的

これまで、プレイセンター、幼稚園などでの保育参画の研究はあるものの、保育所を対象とした保育参画に関する研究に該当するものがない。したがって、本研究はその先行事例となる。

そこで、本研究で、保育士による父母への保育参画促進によって、親が主体的に保育の企画・運営に携わる保育参画を実践している A 園の事例を取り上げ、親の保育参画の仕組みの維持・形成および、コミュニティの形成過程を明らかにする。そして、保育参画とその促進による親の心理的社会的影響を明らかにする。

父母の就労等により保育に欠ける乳幼児を対象とした保育所での保育参画促進の研究を行うことは、今後、低年齢児を含め乳児保育がなされる幼保一体化施設の増加が見込まれる中、どのように保護者に保育への関わりを促せばよいのか、どう巻き込めばよいのかを検討する上でも意義があると考えられる。

第2部 親の保育参画促進におけるコミュニティ形成過程と、子育ての心理に対する研究

第1部では、乳幼児期における親の子育てについて社会的問題と心理的問題、保育参画をめぐる状況と親の保育参画促進を概観し、その必要性について論じた。

第2部では、親が主体的に保育の企画・運営に携わる保育参画を行っている保育所のA園を対象とし、保育士の関わりによる親の保育参画の過程と親への心理的社会的影響を検討するための一事例として取り上げる。

一事例では、他園との比較検討ができず、一般化することには限界があると考えられる。しかし、先行研究でほぼ見当たらない父母の就労を前提とした保育所での保育参画の事例として取り上げることは、保育参画のあり方を検討する上で意義があると考えられる。

そこで本研究では、保育施設の中から、特に親が主体的に保育の企画・運営に携わる「保育参画」を効果的に実現し、環境設定などの活動に積極的に関わっている一事例として、首都圏近郊に位置するA園を選定した。保育園関係者へのインタビュー調査を通して、保育所であるA園において親が保育に参画することによる、保育士との協同保育の可能性、保育者と親、親同士という仲間と協働活動による相互扶助コミュニティの形成過程、さらに保育参画による親のストレス軽減や心理的成長などの影響について検証する。そして親を保育に巻き込み、親が主体的に保育参画を実践しているA園の仕組みを明らかにすることで、親の保育参画を効果的に促進する具体的な仕組みについて考察する。

子育てサポートの今後の課題は、心理的な負担の軽減を図ることのみならず、保育士や親同士が協働や相互扶助を行い、ソーシャル・キャピタルとして機能するような体制作りを拡大することと考えられる。子育ての大変さを乗り越え、喜びを分かち合えるといったポジティブな側面が得られるようなサポートを構築していくことが必要であると考えられる。そこで、親への保育参画促進が子育てサポートシステムへの付加的な要素となりうるか検討し、その可能性について提言する。

第1章 研究目的と方法

第1節 研究目的

本研究では、親の保育参画に長い歴史と実績を持ち、職員・保護者・園児の間に独自の関係を構築し、保育を展開しているA園の園長、保育士、保護者である父母を対象とし質的研究のKJ法による分析を通し、以下の2つの目的を明らかにする。

1. 親の保育参画の仕組みと形成・維持および、コミュニティ形成の過程を明らかにする。
2. 保育参画とその促進による、親の心理に対する影響を明らかにする。

第2節 調査対象施設の概要

調査対象施設は、親の保育参画に約半世紀の長い歴史と実績を持ち、職員・保護者・園児の間に独自の関係を構築し、保育を展開している保育所のA園である。A園は1928年、農繁期の子どもへの保育の必要性から近隣の神社の敷地内にて、キリスト教に根ざし自然の中で遊ぶ青空保育が始まり1942年に創立された。現在は、首都圏近郊の住宅街の中に位置する。2階建ての園舎が園庭を囲み、1階は縁側から、2階は直接ベランダから園庭に出られる。園庭には築山があり、木々が豊富に植えられている。夏にはカヌーや水遊びができる池が造設され、子ども達が遊び込める環境を季節に応じ整えている。園内にはウサギ、アヒル、亀、熱帯魚などたくさんの動物が飼育されている。

定員は181名(0～5歳児)、クラス編成は5歳児48名、4歳児48名、3歳児40名、2歳児24名、2歳児未満21名である。教職員は、園長1名、副園長1名、保育士28名(常勤・非常勤)、事務員・その他16名である。

「人間らしく成長していく子ども」という理念のもと、「自分で考え 自分で遊べ 子どもたち」を掲げている。柔らかい感受性を持った子どもたちが、体験を通して自分自身で心を動かし学んだこと、それが人間形成の基礎となり一生を貫いていくものと考えている。周囲の大人である保育士が子どもの自己を育てるため、子どもの主体性を尊重した保育を行っている。そして同時に周囲の大人自身も人間らしさへと模索を続けることが要求されていることから、保育は子どもを育てるだけでなく、周囲の大人も共に育っていく営みであり、生涯にわたる人間らしさへの過程であると考えられる。

子ども自らが感じ取る世界を豊かなものとしていくため、保育士が親と協働で園舎や園庭を整えていること、すなわち、親が保育に関わり、親の力を保育に活かしていることから、A園に着目し対象施設とした。半世紀に渡り保育士と保護者が共に環境設定に携わっている実績を持つことから、保育に関わる親の対象施設として妥当と考えた。

本事例を選定したのは以下の4点の理由からである。1)親である保護者を保育に巻き込み保育参画を実践している保育所であること。2)我が国において、子育て支援サービスの受給者としてだけでなく、子育てのパートナーとして親を捉える示唆について、本事例を通して検討できる対象となりうること。3)保育参画を実践している保育所でどのように父母共に保育に巻き込んでいるのか検討する必要があること。4)保育所における幼稚園教育のニーズに対する保育を提供していることである。今後の更なる幼保一元化の推進による幼保一体化施設の増加に向け、保護者に対する保育への参加の仕方の提案につながるかどうか検討する必要があると考えられる。

本研究では、保育参画として、以下のような活動を表す。例えば、夏季に園庭をならして子どもが水遊びをする人工池を創ったり、園庭キャンプで父子と過ごすための計画と活動を行ったり、父親主導による花火大会を開催したりすることを指す。また、日々、委員会活動での企画運営で講演者を呼び講演会を開催するなどの活動を指す。年間を通して園や学年の行事で、保育園が呼びかける場合と、父母の会が中心となって母親、父親に呼びかける場合がある。活動は年間を通して平日、土日など多岐にわたり、主に有志ができることのできることを行う。インタビュー調査の際は、以上のような活動のことを保育参画と捉えることとする。下記に保育参画の活動と園庭の様子を図で示す。(なお、写真掲載の許可は得ている。)



図1 父親の池作りを見守る母子

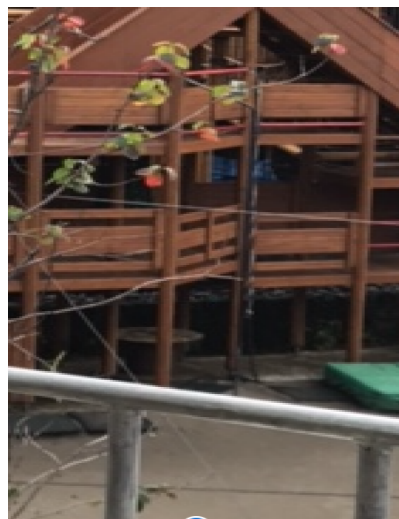


図2 卒園制作の遊具



図3 園庭に作られた水遊び用池



図4 直射日光を避けた保育場面

第3節 研究方法

本研究では、**KJ**法を用いる。**KJ**法は、質的データをまとめて、新しい知見を創造していく手法として、文化人類学者の川喜田二郎によって開設された（川喜田，1967）。この方法は日本の質的研究の主要な分析手法になっており、量的研究・質的研究に限らず、先行研究から新しい知見を生み出すことができるとされている。また、**KJ**法は企業の組織的解決、国や自治体の調査の分析などにおいても用いられている（古田，2016）。

方法としては、インタビューの逐語記録といったテキストデータを何度も読む。その内容を意味的なまとまりとして一行程度の見出しとして、第1位段階としラベル作りを行う。第2段階では、ラベルを広げ、似たラベル同士をカテゴリー化(グルーピング)し、そのカテゴリー(グループ)全体を表す一文を書いたラベルを作る。川喜田（1967）は、これを「ラベルの集合が求めている中核的な何者かを適切につかみとると表現し、古田（2016）は、統計学の因子分析における因子抽出と因子名をつけるプロセスを直感的に行う作業に例えている。統計ソフトに頼らず、あくまでオリジナルデータに基づき、ボトムアップしていくところに**KJ**法の醍醐味があるとしている。カテゴリー化が終了し、ラベル作りがひと段落したら、似たラベル同士を集めてさらに大きなカテゴリー化もできる。大カテゴリー(グループ)は10以内がまとめやすいとされる。中カテゴリー、小カテゴリー、ラベルの関係性を示すためにそれらに関係線を引くなど、図解化すると視覚的かつ直感的に全体構造がわかるようになり、データから仮説生成のみ通しが持てるとしている。各要素の関係性には、文章化が必要で論理性やカテゴリー間の関係性に何ら問題のないよう分析していくことが必要とされている。

質的データをまとめるための方法論として、**KJ**法はデータを先入観や期待、既存の仮説や理論にあてはめるのではなく、ボトムアップにデータそのものを語らせて、秩序を見出す

のが最大の特色で、発想・創造の技法である（伊藤・能智・田中, 2005）。

そこで、これまでの研究でほぼ見当たらない保育園での保育参画を行っている A 園でのデータそのものに語らせ、保育参加の事例研究から新しい知見を生み出すために、KJ 法は本研究の妥当な方法と考えた。本研究では、園長はじめ保育者側から収集したデータおよび、母親・父親のデータを収集し分析することで、双方の結果を統合し考察する。どのように保育参画の仕組みが形成・維持、促進され、親に対してどのような心理的社会的影響があったのか、主観的な理解に留まらないよう保育士および親の双方向からボトムアップしていくことで、妥当性の確保に努めることとする。

第 2 章は、園長・主任に対する研究、第 3 章は保育士に関する研究で、どのように親を保育に巻き込んだのか、保育参画促進の維持・形成によって、親に対し心理的社会的にどのような影響があったのかについて、園の運営者、保育者の立場から検討する。

第 4 章は、母親に関する研究、第 5 章は父親に関する研究で、保育園によるどのような働きかけにより保育参画に至り、保育者とどのように関わりながら協働活動を行ったのか、また、他の親と知り合い、親同士でのコミュニティ形成がどのように形成され、親に対し、心理的社会的にどのような影響があったのか、親の立場から検討する。

終章では、第 2 章から第 5 章までの研究で明らかになった知見を総合的に捉え、互いにどのような関連性があるのか検討する。

今回、保育参画促進のあり方と親への影響を模索する目的で、調査を行う立場として研究が行われた。筆者は、10 年 + X 年前の元保護者で園の現状からは遠ざかっていたとはいえ園長・副園長・主任とは旧知である。また、現在の保護者とは面識はなく、機縁の関係性はない。副園長（現園長）は日々の保育業務に支障のない日程の調整、インタビュー調査における園長（元園長）を始め保育士の率直な語り、父母からは保育参画における葛藤など、得られるデータは、質問紙調査での構造化された択一式の質問では得難く、質的研究において心理的な過程を知る上で意味が大きいと考えられる。

しかしながら、それら語りは、筆者との間に、元保護者という同体験から得られる共感に基づいた背景があり、事実や語りに対し、暗黙知、既知が前提になる可能性もあり、研究から得られる新たな知見の見にくさを持つ側面もある。

筆者は常にこれらの両側面を認知し考慮し、研究に臨む必要があると考えられる。そのためには、得られたデータから結果や考察を導く際に、常に自分自身を客観視し、メタ認知に努めることとする。筆者は、客観的に事例研究を行う者としての立場に努め、事実や語りの見えにくさへの対処として、臨床心理学を研究する質的研究者を含めたスーパーバイズのもとに客観性の保持に努める。

対象施設と対象者には研究への参加は自由意思で決定できること、参加の諾否による不利益は生じないこと、研究結果は学会で発表すること、匿名性の遵守とデータの厳重で適切な管理について、文書を用いながら説明した。施設の理事会で倫理に関する承認を得て研究に同意を得た。研究に係る手続きについては、東海大学「人を対象とする研究」における倫理審査委員会で承認を得た(承認番号 19091)。調査期間は 2019 年 4 月 20 日から 2021 年 3 月 31 日である。

以下に、本研究で取り上げる研究 I ～IVまでの流れについて、図で示す。(図 1-1 参照)

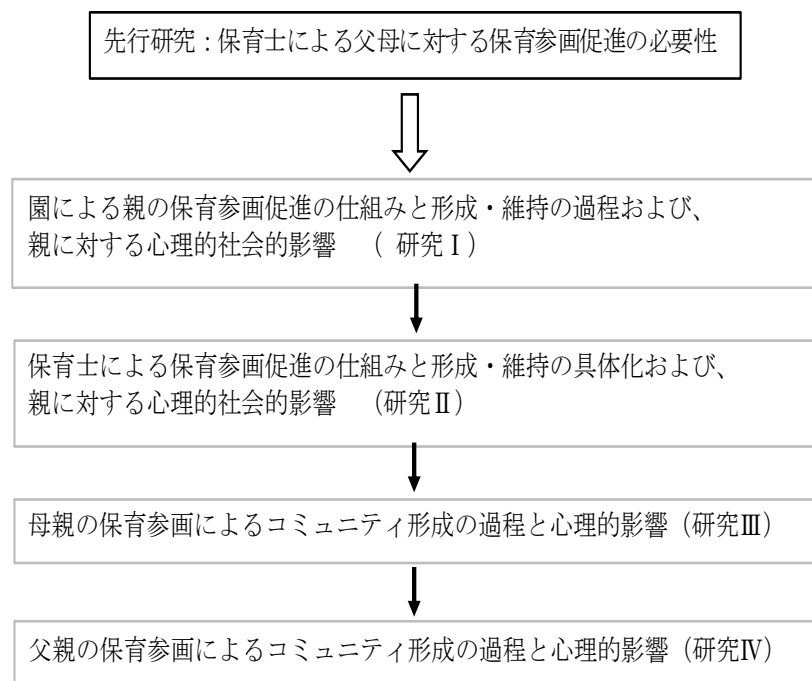


図5 研究 I から研究IVまでの流れ

第2章 園による親の保育参画促進の仕組みと形成・維持の過程および、親に対する心理的社会的影響（研究Ⅰ）

第1節 研究目的

保育の管理運営者である園長と、保育の総括を担当する主任の視点からの、父母の保育参画促進の仕組みとその形成・維持について明らかにする。また、園長や主任が促した保育参画による父母への心理的社会的影響を明らかにする。

第2節 研究方法

第1項 時期、手法、手続き

時期は、1学期から3学期始め頃までの8ヶ月間のうち、一日間とした。園長、副園長、主任に、それぞれ研究の概要を説明し、協力を依頼した。その後、職員打ち合わせ会に出席し、保育士に研究についての概要を説明した。園の年間計画表に基づいて行事・園外保育等の前後は避け、業務が落ち着いた時間帯、もしくは対応可能な状況を確認し、研究への協力を依頼した。保育園への訪問許可日を副園長に確認し、調査への対応が可能な日程と時間を確保した。

手法と手続きについて、研究対象者数は、園長1名、主任1名とした。副園長は、筆者の訪問許可日の調整、調査当日の対象者の保育業務の確認、および保育に支障のない面接場所の窓口役となった。

園長には8月、主任には7月、それぞれ一回、職員控室において個別にインタビューを行った。園長は園の運営や保育方針の決定権を持つ立場から、主任は保育方針のもとにおける保育士のリーダーで、親との調整役の立場から、保育参画促進の仕組みと形成・維持と親に対する心理的社会的影響についてインタビューをし、回答を得た。

園長は70歳代で経験年数は53年、主任は60歳代で経験年数は42年である。(表2-1参照)

表2-1 研究対象者 園長と主任

インタビュー対象者	年代	経験年数	性別
A 園長	70歳代	53年	男性
B 主任	60歳代	42年	女性

個別に半構造化面接を1回30分から1時間程度実施した。インタビューの内容は録音

し、その場で回収した。またフィールドノートにインタビュー内容を記述し紙媒体として保管した。

第2項 インタビュー内容

園長・主任へのインタビューの質問項目は、表 2-2 に示す。

表 2-2 園長・主任 インタビュー内容と質問項目

半構造化面接における質問事項

A. 保育参画の背景

- 1) 主体的に企画や運営に携わる保育参画について、知るところを教えてください
- 2) どういった経緯で保育参画をする保育園を目指したのですか
- 3) 保育参画に対する期待や施設管理者としての目的はどのようなものでしたか

B. 保育参画のプロセスについて

- 1) 子どもの入園当初、親の保育参画にどのような印象をもちましたか
- 2) 保育園の経過における保育参画の「はじめ」から「現在」までを通して、あなた自身について思い出されることはどんなことですか

C. 保育者について

- 1) 保育者について思い出されることはどんなことですか
- 2) 保育者はあなたにとってどんな存在でしたか
- 3) 保育参画全体の「はじめ」と「現在」までで、保育者の印象は変わりましたか

D. 親について

- 1) 親について思い出されることはどんなことですか
- 2) 親はあなたにとってどんな存在でしたか
- 3) 保育参画全体の「はじめ」と「現在」までで、親の印象は変わりましたか

E. 保育参画を構築した生活体験について

- 1) 保育参画構築は、あなた自身の理解に役立ちましたか
- 2) 保育参画構築は、あなたの人生観に何か影響がありましたか
- 3) 保育参画構築は、あなたの身近な人との関係に何か影響がありましたか
- 4) 保育参画構築は、あなたの仕事（家庭生活）に何か影響がありましたか
- 5) 保育参画構築は、あなたの仕事上（家庭生活上）の人間関係に何か影響がありましたか
- 6) 保育参画を構築することと保育の質にどのような関係がありましたか

F. 保育参画と保育の質の振り返りについて

第1 園長への質問項目とその解説

A. 保育参画の背景について

「保育参画をずっとされてきましたが、今後に向けて教えてください。」

解説：A園の管理運営者である園長が、半世紀近く培ってきた親である父母が保育に参画する背景には、どのようなものがあるのかを、自由に語れるようオープンクェッションとして設定した。それと同時に、昨今の社会情勢による保育所のあり方・父母の価値観やニーズの多様化に対し、どのように捉えているのか知ることによって、今後の幼保一体化施設の参考になりうるのかどうか検討する手立てとした。

B. 保育参画のプロセスについて

「もともと、この園はそうやってこられてましたね。」

解説：これまで保育参画の仕組みが維持・促進されてきたが、新制度によって、これまでの運営と保育方針が維持されるのかどうかについて知る手立てとした。

C. 保育者について

「保育参画をずっとされてきましたが、今後に向けて教えてください。」

解説：A.で、質問した際に、保育者の育成について、合わせて語られた。ここでは、話の流れから、C.の保育士について、A.に包括した。

D. 親について

「それがあったから、保育に親が参画する仕組みを園長先生が作ってくれた。」

解説：保育所において幼稚園の教育を求める“幼稚園ニーズ”の父母が、一定数確保されていたことによって、幼稚園の父母のように、保育に関わっていたことを確認している。

親が保育に関わるのは“幼稚園ニーズ”の親だけではない。孤独・孤立化の中で子育てをしている特に母親に対し、保育に関わる機会を設定する仕組みを作ることは、親に対しどのような影響があるのかを得ることを目的とした。

「どんな内容を話すのでしょうか。」

解説：母親の中には、主体的に企画・運営をし保育に関わる「保育参画」を行うモデリングとなるケースが見られることから、その企画・運営の目的や、他の親への影響などについて、引き出せるような設定とした。

第2 主任への質問項目とその解説

A. 保育参画の背景について

「保育参画について、これまでの40数年間で違いはありますか。」

「乳児期に預けているのは、経済的な理由だけではないですか。」

「ここの保育園に入りたい人は、例えば、非常勤ですか。」

解説：園長の親に対する孤立・孤独化を防ぐ方針のもと、保育に関わり参画することが、維持・継続されている。そこで、どのような親が参画できるのか、その背景を探り、今後の継続についての項目である。

B. 保育参画のプロセスについて

「仕事を続けながら、ここの保育園で保育参画するのを承知で入れていますか。」

「就労形態が変わったり、自己実現をしたい世帯が増えている中で、保育参画して価値観などは変化していますか。」

「変わらない人はどういう感じですか。」

解説：親の保育参画に対する姿勢、賛同をえているのか、参画し、その経過において、どのような変化があるのかについての項目である。

C. 保育者について

「時代の流れと共に工夫されているのですね。新しく入ってこられた保育士の連帯感はいかがですか。」

「伝えたい思いと、押しつけにならないこととの葛藤は、保育士さんと話し合われていますか。」

解説：運営の立場から、園長は、保育参画の促しと親へのサポートのできる保育士を確保し、子ども中心の保育を継続し、保育の質を維持することが必要と考えられる。そのため、主任には日々の業務で保育士に対しどのような工夫をしているのかについて問う項目である。

D. 親について

「保護者は時間的にも物理的にも大変だと思いますが、それを上まわるもの、得ているものはなんでしょう。」

「保護者が保育参画することによって得るもの、大事なこと、子育ての悩みなどで大変さをうわまわるものはありますか。」

「ストレスもですか。」

「本人もそれを承知しているのですか。オープンにすることで本人も楽ですよ。」

解説：親への影響について、父母はどのように保育参画に取り組んでいるのか、保育参画によって得られるものはなにか。苦勞していることなどはないか確認することによって、保育参画の促進要因と今後の課題を明らかにし、幼保一元化への汎用が可能かどうか検討する。

インタビューにおける課題を取り上げる。事前に研究についての説明の際に、インタビュー内容について説明したが、調査では、園長は自由に語っていたことから、半構造化面接というより、非構造化面接保育参画に該当すると考えられた。語りについて、保育参画の内容と思われるものはそのまま続行し、該当しない場合は、質問に戻ることにした。ここでは、運営者の立場である園長が仕掛けた保育参画の仕組みを捉えることができる質問をし、親の心理的社会的影響については概要を抑えることにした。研究の課題としては、筆者と研究協力者との関係性から、非構造化面接による対話と観察により情報を引き出す手法を検討することが必要と考えられる。

第3項 分析の方法、手続き

KJ法に基づき、インタビューから得られたデータについて、保育参画促進の仕組みと形成・維持、親に対する影響と考えられるものを抽出し切片化しラベル化した。それらについて意味の似通ったもの同士をグループ化してまとめ、カテゴリー名をつけた。それらの関連性について図解化し、叙述化した。保育参画の秩序を見出すためそれぞれのカテゴリーの説明および、カテゴリー間の関係や創造的統合を図り、データを質的に分析した。

客観性確保のため、質的研究の経験を持つ臨床心理学分野及び社会心理学分野の研究者3名で、切片化とラベル、カテゴリー名、図解化の妥当性について検討を行い、助言を受けた。また、臨床心理学分野の研究者2名を含めた計5名により、筆者の客観的な立場の保持に留意しながら、解釈の偏りを防げるよう検討し、データの妥当性の確保に努めた。

以下の手続きをとって、分析を進めた。

1) 園長と主任の保育参画促進に関する発言は、まとまりのある意味ごとに切片化し、合わせて59の切片として抽出した。それらの単位化された切片にラベリングした。例えば、「親育ち子育ちっていうのを親は園に入るまではたった1人、おじいちゃんおばあちゃんとかほんのわずかな友達などだけで情報を得て孤立していたわけじゃない。保育園に入ることによって園はそういう仕組みを作ったから。」の切片には、「孤立しない親育ち子育ちの仕組みを園で作った」といったラベルをつけた。ラベルの最後尾には、切片化した順に番号をつけた。

2) 内容の似通ったラベルを集め、31の小グループを作った。例えば、「子どもの育ちをすることは、親育ちもすること」といったラベルを集めて【子どもの育ちと孤立しない親育ちの仕組み作り】といった小カテゴリー名をつけた。カテゴリー化を繰り返し、22の中グループにまとめ、最終的に合わせて6つの大グループにまとめ、それぞれにカテゴリー名をつけた。カテゴリーは【 】で示した。切片化された発言は「 」で示した。大カテゴリーは、【新体制での保育経営と保育の質維持への懸念】、【次世代確保へのコミュニケーションの工夫】、【孤立防止の親育ち子育ちの仕組みと親の理解による保育への関わり】、【多様な価値観を持つ親との子ども中心への歩み寄りのコミュニケーション】、【園での保育参画の少しの負担が将来の親子の喜びになる】、【親の変容と子育てのしやすさ】である。これらをまとめて表2-3を作成した。

3) 大・中・小カテゴリー間の関係を図式化した。図式化は計4回の変更が行われた。

1回目の変更では、保育参画の形成過程におけるカテゴリー間の関連性を時系列にまとめた。2回目の変更では、ラベルの簡略化から適切で簡潔なカテゴリー名への変更と再検討を行った。3回目の変更では、保育参画の仕組みと形成を担い、維持する役割の園長と主任のカテゴリーを合わせ、まとめた。4回目では、園長と主任の合わせたカテゴリー間の関連性を再検討した。

図2-1では、保育所であるA園がこれまで培ってきた保育参画の新体制での状況を【新体制での保育経営と保育の質維持への懸念】と示した。体制維持のため、保育士の確保の必要性から、【次世代確保へのコミュニケーションの工夫】と関連付けた。また、園の運営者であり、保育方針を打ち出すため、親を孤立させないよう保育に関わる仕組みとして【孤立防止の親育ち子育ちの仕組みと親の理解による保育への関わり】と関連付けた。園長と主任による保育士へのアプローチと親へのアプローチであるこれらの2つのカテゴリーから、【多様な価値観を持つ親との子ども中心への歩み寄りのコミュニケーション】を導いた。次世代との押しつけにならない子ども中心のコミュニケーションは、相手を尊重することから【多様な価値観を持つ親との歩み寄りのコミュニケーション】に役立つ。保

育参画の促進を維持する要因を示し、葛藤を持つ親への対応として、歩み寄りのコミュニケーションは欠かせないため、その工夫が必要とされる。

その結果、保育参画の親への影響としては、【園での保育参画の少しの負担が将来の親子の喜びになる】というカテゴリーを挙げ、関連付けた。このカテゴリーから、保育参画をすることによって得られた子育てに対する影響として【親の変容と子育てのしやすさ】というカテゴリーへと導き出した。いずれも親子にとって望ましい状態のカテゴリーに分けられた。園長と主任の回答の分析から、6つのカテゴリーの関係性を図示した。

表 2-3 回答内容「園長・主任」

園による親の保育参画促進の仕組みと形成・維持の過程および親に対する心理的社会的影響

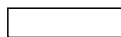
KJ法を援用した回答内容の分類結果
園長・主任

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	ラベル	切片	数
①新体制での保育経営と保育の質維持への懸念	保育の質維持のための新体制と親の経済的負担への懸念	保育の質維持のため親が経済的負担を負うかという懸念	園長(保育の質維持のため親が経済的負担を負うかという懸念)1	僕が不安に思っているのは(借用地先)〇〇家とのつながり、これだけの時代、重荷を負っていくのに、親たちがついてきてくれるのか、ここが一番心配なの。	8
		新しい園長が経営マネジメントを行う	園長(新しい園長が目標に向って親の経済的負担を含め経営を引き継ぐ)4	今度、新しい園長が寄付金のことやります。今まで僕が全部把握していたわけだけ。一つの目標に向かって、そこに集う集団が背負うよと言ってくれる親が今までのようにいっぱいいてくれるとね。寄付は強制じゃないからね。	
		保育の無償化によって"幼稚園ニーズ"の入園が減少する懸念	園長(保育の無償化によって"幼稚園ニーズ"の入園が減少する懸念)3	もう一つは、役所が強くなる。保育料を全部国と市が出すわけだから、親の負担を0にする減らすことが、どれだけマイナスなことなのか考えているのか、どちらかというと私立のような存在とした、補助金で最低限の費用で育てていく子どもと、民間の学校に行つて補助のないところと。幼児教育の大部分がどうなんでしょうね。知り合いが園舎を持たない、民家を借りたり30~40人の子どもたちがいつも外に出ていく。独特の保育をしている。そういうところに補助金降りないらしいですよ。無認可の園でもおけるのに、すべての子どもが通う園は全部出してくれるのかな。4・5歳で欠員でると、そしてそれを充足させるのに来る自由契約児の親たちの保育料はくれるかどうか。3・4・5歳は上限がないでしょ。上限があるのが1・2歳でしょ。空き分、収入を増やすためには働いている親が入ってきてくれれば有り難いんだけど。そうじゃないときには幼稚園ニーズの人が希望して自己負担して今までは入ってきていた。認可されている保育園の私的契約児にはどういう扱いをするのか。調べてみればわかるんではないかと。ないとなると契約児は全く受け入れられなくなるんですよ。保育園というのは働いている親がいて保育に欠けるから入ると行政は言うが、入ってから最低限働いて申請してもらえばいいんじゃないかとね。	
		幼児一元化に伴う経営資金を確認	園長(幼児一元化に伴う経営資金を確認する)5	あと、幼稚園の入園金、どうなってるんですよ。幼稚園経営している先生に今度聞いてみようかな。	
		保育園での"幼稚園ニーズ"という稀有な保育経営	園長(幼児一元化前からの保育園での珍しいやり方)7	これからそれどうなるんだと思ってね。あと、今までのように新入園児に説明会をして、幼稚園みたいにして。たぶん、幼稚園も入園に関して同じようにやると思うの。うちと同じようなやり方を、認定こども園になったら、役所の決定までしないとね。このやり方ってのは本当に全国でも珍しいやり方を生み出してきたんだよね。	
		認定こども園制度への移行を検討	園長("幼稚園ニーズ"から認定こども園制度への移行を検討)6	認定こども園という制度、幼稚園部門と保育園部門合体したら、私的契約児は幼稚園対応だからないわけじゃない。うちの園も認定こども園みたい。他の県はね。全部の保育園が認定こども園になって。保育園は、認定こども園じゃないって、幼稚園ニーズの子を入れてんの。	
		次世代人材確保と好評価の発信への懸念	園長(新たに迎える若い世代の先生が少ない)2 園長(保育園の良い評価の発信が最近少ない)18	あと先生達と。若い世代がほんのわずかしかない。新たに迎えてくれる魅力的な先生が少ない。ここが一つの問題。 そんなところで兄弟児3人いると、育てる、良いプラスに保育園を評価して他の親に発信していく、それが最近少なくなっている気がする。ある家族で転勤しようかしらないかという時、この園のこと考え、見つかるまではこつこつにこつこつという決断をした人もいた。	
②次世代確保へのコミュニケーションの工夫	誠意はあるが、新人との連携は苦労する	主任(この園を選び誠意ある新人との連携は苦労する)21	苦労している。この保育園を選んできている。誠意を持って一生懸命やっている。	4	
	ワークライフのアンバランスによる離職	主任(保育は好きだが自分の時間のなさで退職していく)23	保育は気に入っているが、長続きしなくなっている。大変で自分の時間をもてないで早期に退職していく。短大卒ですぐ来ない。こちら時間も工夫して暮らさないといけない。遅くまでやっていることがいいことではないと気づかせてもらった。体力的に私も無理なので先に帰るが、後はやっておきましょうとは言えない。自分の年月かけて作り上げた価値観・思いを押し付けにならないようにしないといけない。		
	誠意ある新人と押しつけにならない子ども中心のコミュニケーション	主任(思いやどうだったかを話し合う)24 主任(押しつけは言わないが、子どもの大事なことは言う)25	ええ。話し合ってます。小言になっちゃった、ごめんねとか。でも、改めてこうい思いだったかと。今日のやり方どうだった?など。 これは押しつけになるから言うのやめとことか。けど、ここは絶対、子どもに関することは優先。大事なことがずれてないかどうか。		
③孤立防止の親育ち子育ての仕組みと親の理解による保育への関わり	子どもの育ちと孤立しない親育ちの仕組み作り	園長(孤立しない親育ち子育ての仕組みを園で作った)8	親育ち、子育てっていうのを親は園に入るまではたった1人、おじいちゃんおばあちゃんとかほんのわずかな友達などで情報を得て孤立していきたくない。保育園に入ることによって園はそういう仕組みを作ったから。	11	
		園長(子どもの育ちをすることは、親育ちもすること)7	当然だと思う。子どもの育ちを園ですることとは、子どもだけじゃないんだよ。親も援助していかなくちゃいけない、育ていかなくちゃいけない。		
	孤立させない仕組み作りと園に理解と信頼をもてるか	主任(昔、まず園長がストレートに話して、クラスの話がある)2	昔のほうで園長はストレートに話していた。園長の話があつてクラスという。		
		主任(時代の流れで社会と親が変わってきている)4	時代の流れで社会が変わってきている。働く親とか。		
	親の理解と信頼と肯定感	主任(園長の話に響く人、またか聞き流す人)3	強烈だから、響く人には響く。ここ何年かは聞き流す、「またか。」という感じの人もある。打てば響くという感じは薄れてきていますね。		
		園長(親それぞれの考え方が違って、園と保育士を信頼し理解しているか)16	こればかりはみんな一人ひとり違うからね。園わり方、考え方、園に望むこととか。先生たちをどう見ているか。担任を信頼しているかしてないか。園長のことを受け入れられる存在かどうか。園長がいるんな事を考えてやってきたんだということを理解できている親と出来ない親のじやないですか。		
		園長(理解と肯定感を持つ親、無理解と右往左往する親)20	出来ている親は保育園全体に対して肯定感もっている。そうじゃない人たちは筋が通っていない、右往左往しているのが何年か続くとね。		
園長、主任が保育への関わりと支援制度利用の依頼	主任(主任が懇談会で保護者の前で話す)1 主任(くたくたになるから制度の利用と努力をしてほしい)13 主任(親の価値観は変わってきたが、私達の乳幼児期が大切なのは変わらない)5	当初、主任の先生が月に一回の懇談会で保護者の前で様々なことを話すことはあった。 入園前に言いますよ。くたくたになりますよ。だから会社にある最大限の制度を利用してください。前提条件で受け入れる事、努力してほしいと伝えています。 私たちにしたら、大事にしているところは変わっていないけど親の価値観が変わってきている。働く親が増えている中で、いかに乳児期の大切さを語っても、親が働いている生活スタイルが主流になっている時代じゃないですか。			
親の価値観によらず乳幼児期の家庭での育ちは大切	主任(今は乳児を受け入れる時代だが家庭での育ちは大事だ)6	昔は乳児を受け入れていなかった。昔は3歳からという流れがあったから、それまでは手元で、子育ての中で乳児期は大事だと語っていたけど、今、乳児を受け持っている流れで、いつも園長は、子どもへのまなざしをもとに、家庭での育ちは大事だと語っているけれども。			

④多様な価値観を持つ親と子ども中心への歩み寄りのコミュニケーション	子ども中心で時間で就労し園に入れる親	主任(親のこだわりで世間流されない)17	この園の親はひとつこだわりを持って生きている人多いと思う。外に出ると、世間の親とはまた違う。世間に出れば、流されない人多いのでは。
		主任(ここの保育園に入れたいから働きだした人がいる)10	この保育園に入れたいから、働きだした人もいる。
		主任(時間で仕事する人は2、3歳から入れる)11	そう。時間で仕事してる。そういう人たちって2、3歳から。
	仕事が生きていて園に入れ、子どもとの時間で葛藤する親	主任(生活と生きがいのため乳児期から入れる)9	生活のためだけでなく親の価値観。生きがい、元々やっていた仕事を続けたい人は乳児期から入れている。
		主任(もとの仕事を続けたい人は0-1歳から入れる)12	0-1歳の人はずっと仕事して続けていた理由ですよね、多分。乳児期から入るなら信頼できるところに入りたい。
		主任(親は仕事が生きていだが子どもとの時間で葛藤を抱えている)7	親は仕事が生きていい。仕事メインの流れ。子供との時間大事だけど、親も葛藤しているのではよね。仕事があるからしょうがないと言いたくない。今の若い親たちは、親が働く世帯で育ってきた。
	保育の本質の察しにくさ、伝わりにくさ	主任(人間関係の希薄さとコミュニケーションの少なさから、察しにくい)19	言葉の裏にある思い、メールなどで文字でやり取りすることが多くなり、コミュニケーションが少なく、人間関係が希薄になっている。もっと具体的に言ってくれないとわかりませんと言われる。お互いに察し合うということが少なくなっている。
		主任(ニュアンスが苦手なストレートに言わないと伝わりにくい)18	保育園の言いにくい本質を10言うと1か2わかる。時間がかかる。感覚、ニュアンス、イメージする、思いを馳せるといことが苦手。頭いいけれども、ストレートに言わないと伝わりにくい。
	現代の親の言い分と子どもへの影響を考慮した歩み寄りのコミュニケーション	主任(今の時代と親に合わせたコミュニケーションと伝え方をやっていきたい)8	昔とギャップがある。こちらを変えられないけど、最大限できることをお互いコミュニケーションとってやっていきたい。今の時代と親に合わせて伝えていかないといいない。そこが一番変わった。
		主任(親の反発の子どもへの影響と言い分を聞く難しさ)16	不満などは書かれていなかった。親が反発すると子どもにも影響ないから、そこは歩み寄り。子どものためには親の言い分も聞かなくてはいいけないので、そこが今一番難しい。
表出しやすい受容と傾聴のオープンな窓口の拡大	主任(困った時にいつでも聞く窓口を作り広げる)37	困っていることあったら言ってね。いつでも聞くという窓口を作る。集まって語り合う場所を作る。そこを広げていく。窓口をやっている人もさらけだせるようにする。でないと伝わらない。	
能動的な発信による支援の受けやすさの周知	主任(我儘せず発信するとサポートしやすいと言葉をかける)34	発信してくれた人はサポートしやすくなる。苦しくなったら我慢しないでください。こちらの思いばかり言えない。懇談会、個人、連絡帳、言葉かけたりしている。	
	主任(わからない人が発信しやすくして直接問う)29	どうしていいかわからない人が発信しやすくなっている。何でもいいから言ってください。直接問うている。	
我慢しない自己表出による負担の軽減	主任(個々が早めに出て助け合いになる)33	個人個人が思っていることを言う。早めに出て。助けて。本人は辛さを話すと楽になる。家族も大丈夫も話す。	
保育士・親との相互扶助による負担の軽減	主任(苦しくなったら我慢せず助けると言い協力する)35	大事にしたいところ。苦しくなったら我慢しないで助けてくださいと言え。他の人と協力するところ。	
	主任(父母からフォローを聞いてくれ周囲とバックアップする)32	父母の会で、バザーの前にフォローしたほうがいいと思いますかと聞かれる。情報を流して周囲がバックアップする。	
	主任(それでも大変な親のフォローとやり取りがある)20	それでも、バザーなどでは、大変な親をフォローし合ったりやり取りがされている。	
⑤園での保育参画の少しの負担が将来の親子の喜びになる	バザーは負担だが、親が園の付き合いになれる	園長(園での親同士の付き合いに慣れてくる)12	それに乗っかってきているうちにだんだん当たり前になってくる。それが嫌だって人は次の子どもの時は来なくなるからね。中にまじりましたよ。そういう人達は負担だと言っただけ。土日は家庭で自分たちの世界だけでいいのに、保育園の親たちと付き合えないうちは嫌だと書いてきた。それで懇談会で取り上げて、それは違うんじゃないですか。それでだんだん慣れてきて、それで子どももすべてこの園に入れて卒業していきましょかね。
		園長(バザーはどの親も負担に思う)13	バザーで大部分の人たちは負担に思うでしょうね。負担に思わない親なんて1人もいないと思う。一人ひとり違う家庭を持っているわけだから。
	保育士と親の書く喜びと楽しみと少しの負担が将来の大きな喜びになる。	園長(親と保育士の書く喜びと楽しみと少しの負担)15	他の保育園やついでない。親も保育士も負担なんだけど、クラスだよりと絵本ノート、喜びと楽しみと少しの負担も感じるわけですよ。だって保育園終わってから書いてるわけだから、読んで、それは親たちにならんと説明して書きたいことを自由に書いていいんですよ。
		園長(書いたものは将来自分と子どもが後で見たら大きな喜びになる)16	子育てのその時期に毎週毎週ノードに書いていくことは、先生たちに見せるためではなく、自分と将来それを見て取る子どもが後で見たら大きな喜びになる。
		園長(小学生の親は連絡ノートを書いているのか)14	小学校時代でどうだろう。親は連絡ノートとか書いてるのかな。
園長(学童で読むこと書くことは大事)15	うちの園ではどのくらい学童に行っているのかな。お母さんがやっているところもある。クラスだより読むこと大事だと思う。絵本ノートにコメント書くことが大事。		
⑥親の姿容と子育てのしやすさ	弱さの容認と子育てのコツを得ることによる過ごしやすさ	主任(親が弱さを認めると子どもも認めあえる)36	自分の弱さをさらけ出せるか。弱さをサポートしあえる流れ。親同士の支え合い。親が弱さを認め、子ども一人ひとりを認めあえる。
		主任(豊かな環境と時間により子どもが変わる)26	子どもが変わっている。子どもを見ていれば豊かな環境と時間を過ごしているかわかる。
	時間の経過とともに子ども中心の保育を理解し、親として成長	主任(親が子育てのコツを得て家庭でやりやすくなる)28	親が子育てのコツを感じ取って得てきている。子どもの見方など、昔以上に丁寧に、家庭に帰ってもやりやすいように情報提供している。子どもと関わるようになる。
		主任(反発後、母親にさせてもらったと今はわかる)14	変わってきている。反発した人、何年後かにあの時言われたことで母親にさせてもらったと言っ人は何人もいた。今はわかる。
	乳幼児期の家庭で、よい育ちのため有意義に過ごせた	主任(体調不良のお迎えを乳幼児の立場で促す保育士はありがたい)15	一年後のアンケートでは、乳児は、体調不良のときはお迎えに来てほしいと言われたこと、いつも子どもの立場で考えてくれたことはありがたいと書かれていた。
		主任(一人ひとりを大事にする保育を卒園時に感じる)27	いつもそこに先生たちがいて一人ひとりを大事にしている保育があるとわかってきている。卒園していくときに感じてきている。
親が楽しんで委員会の準備をする	主任(休日の過ごし方が大変からいい時間で過ごせるようになる)30	子育てが大変だという人に休日の過ごし方を話す。保育園で大事にしている価値観、絵本を読んだりしている時間が過ごせたらいいかな。スプーンとかこういうのありますよ、売ってますよとか、いい食事の時間が過ごせる。親の価値観が変わる。休日が大変だが、楽になると思う。	
	園長(親が遠慮の深い翻訳者に共感し、講演会を企画し依頼する)19	今度、講演会で〇〇翻訳した人に来てもらいたい。今はタイアップしているけど、その方が出した本を委員会の親が読んで、その内容に共感してね。話す中身がね、レベルが高いの。連絡が張ってね。	
去年の卒園児が訪問	園長(携帯やパソコン使わない講演者になぜのかわかっていた)22	最近では携帯でばつと頭べられるけど。その人は携帯とか使わないで連絡している。パソコンも使わない。そういうところ、聞いてみたい。	
	園長(委員会が読書会や準備をするのが楽しいのではないかと)20	ついていける人でないと不安だけど。委員会は準備するのが楽しくてしょうがないんじゃないかな。現在は、読書会しているのでも、打ち合わせの時にでも良いとその方から連絡が来た。	
園長(若い親たちが理解できるような委員会の親が講演者に伝えていく)21	委員会がこれから打ち合わせで決めていく。若い親たちに理解できるか。そこんところ、どんな話をしてもらいたいかうまく委員会できちんと伝えていかないと。本読んどこ。		
園長(園外から戻った去年の卒園児が訪問していた)11	今日海から帰ってきた。去年の卒園した4人が訪問してくれた。久しぶりに会ったけど変わっちゃったね。面影は残っている。		



大カテゴリ

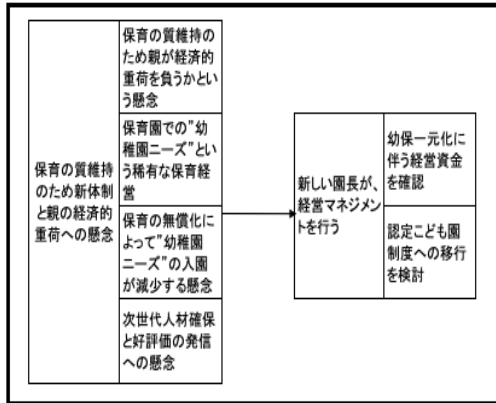


中・小カテゴリ

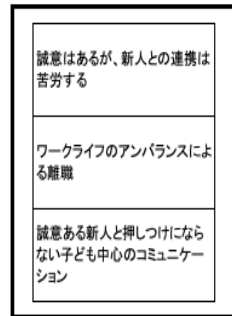
空間配置と図解化

園長・主任

①新体制での保育経営と保育の質維持への懸念

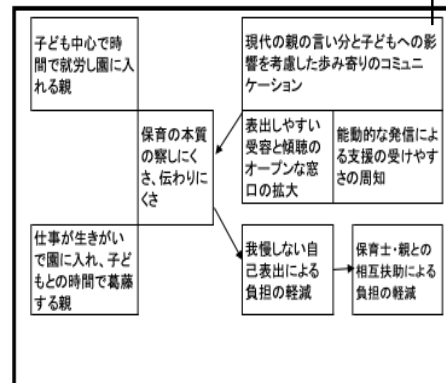


②次世代確保へのコミュニケーションの工夫



参画葛藤の軽減

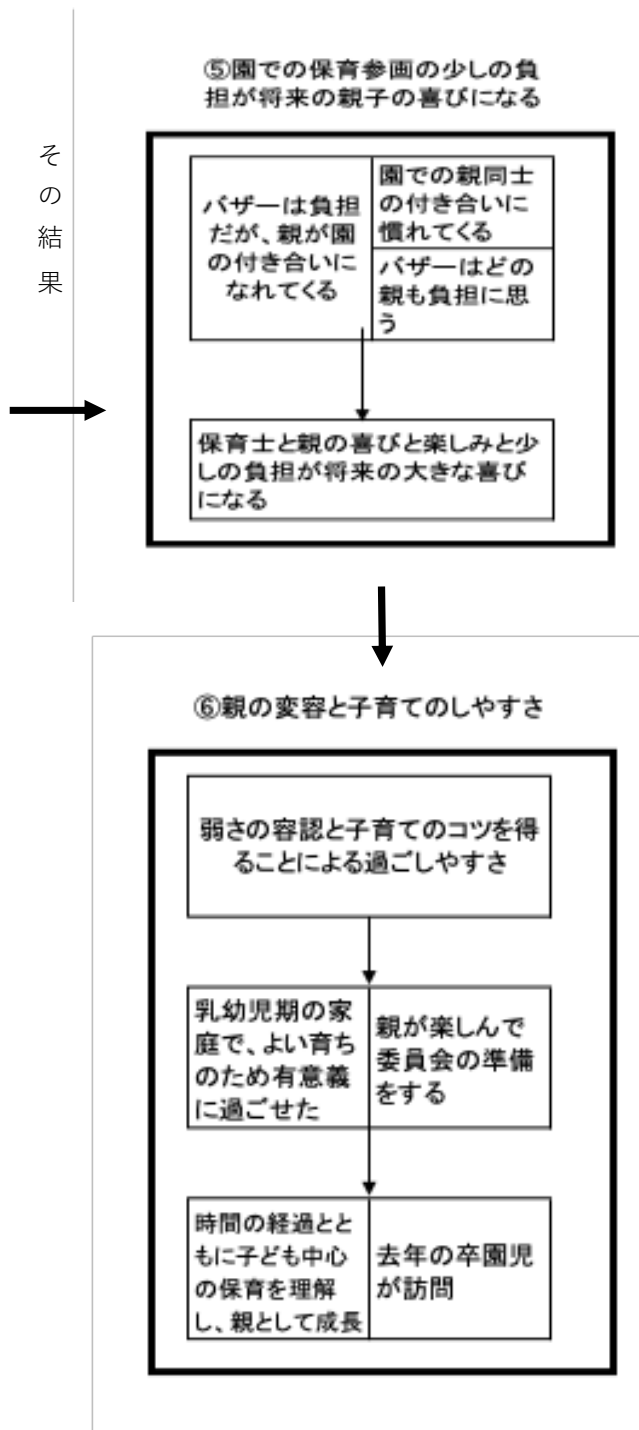
④多様な価値観を持つ親と子ども中心への歩み寄りのコミュニケーション



そこで

保育参画の仕組み作り

保育参画促進維持



保育参画の影響

図 2-1 空間配置と図解化「園長・主任」

第3節 結果と考察

分析の結果、6つの大カテゴリー【新体制での保育経営と保育の質維持への懸念】、【次世代確保へのコミュニケーションの工夫】、【孤立防止の親育ち子育ての仕組みと親の理解による保育への関わり】、【多様な価値観を持つ親との子ども中心への歩み寄りのコミュニケーション】、【園での保育参画の少しの負担が将来の親子の喜びになる】、【親の変容と子育てのしやすさ】に大別された。以下に、大・中・小カテゴリーを【 】, 切片化された発言を「 」で示す。

第1 新体制での保育経営と保育の質維持への懸念

園長は認定こども園の制度ができる以前から“幼稚園ニーズ”と呼んでいる親・特に母親の就労形態に関わらない自由契約を行っている。これまで、保育の質維持のために、日中、主に母親が積極的に保育に関わってきた体制によるものである。「このやり方ってのは本当に全国でも珍しいやり方を生み出してきたんだよね。」と表現していることから、【保育園での“幼稚園ニーズ”という稀有な保育経営】であることが窺える。今後について「これからそれどうなるんだと思ってね。」との発言から、保育の無償化によって“幼稚園ニーズ”での入園が減少する懸念を抱いている。「一つの目標に向かって、そこに集う集団が背負うよと言ってくれる親が今までのようにいっぱいいてくれるとね。」の発言から、【保育の質維持のため親が経済的重荷を負うかという懸念】への対応として、【幼保一元化に伴う認定こども園という制度の検討と経営資金の確認】をし、【新しい園長が経営マネジメントを行う】ことが順調に進むよう望んでいると考えられる。

また、「あと先生達と。若い世代がほんのわずかしかない。」などの発言に見受けられるように【次世代の人材を確保】するため保育職の定着率を高めることと、「良いプラスに保育園を評価して他の親に発信していく。それが最近少なくなっている気がする。」との表現から、園に対する【好評価の発信への懸念】を抱いていることが窺える。それは、昨今の共働き世帯の増加と乳児保育へのニーズの増加から、低年齢の子どものいる世帯では保育参画に伴う時間の捻出について考慮していることが考えられる。

そこで、幼保一元化以前から親が保育に関わることによって維持してきた充実した保育環境について、引き続き、親同士で支え合うコミュニティといったプラス面を発信し、未就園児を持つ親に認識してもらうことで、入園数を確保し、これまで培ってきた体制作りの維持に努めていくと考えられる。

第2 次世代確保へのコミュニケーションの工夫

園長が必要としている【次世代の人材を確保】するために主任は、新人の保育士に対し、「保育は気に入っているが、長続きしなくなっている。大変で自分の時間がもてないと早期に退職していく。」という発言と、「誠意を持って一生懸命やっている。」との発言から、【誠意ある新人との連携に苦労している】様子が窺える。「自分自身がこれまでの経験から培ってきた保育観の押しつけは言わないが、子どもの大事なことは言う」ことから、お互いの価値観を尊重しつつも、【誠意ある新人と押し付けにならない子ども中心のコミュニケーション】を心がけている。新人は、この園の保育は好きだが、【ワークライフのアンバランス】が生じていることから、プライベートの時間も大事にしたいと葛藤を抱えつつ離職するのではないかと考えられる。経営者である園長の懸念事項でもある次世代確保については、中間管理職である主任は、「こちらも時間を工夫して変わらないといけない。」と就労時間を検討する発言が聞かれた。ワークライフバランスを考慮した時間マネジメントの工夫と価値観を押しつけない【次世代確保へのコミュニケーションの工夫】といった歩み寄りに努めていると考えられる。

第3 孤立防止の親育ち子育ての仕組みと親の理解による保育への関わり

園長は「親育ち子育てっていうのを親は園に入るまではたった1人、おじいちゃんおばあちゃんとかほんのわずかな友達などで情報を得て孤立していたわけじゃない。保育園に入ることによって園はそういう仕組みを作ったから。」との発言から、【子どもの育ちと孤立しない親育ちの仕組み作り】を行っている。保育園に入るまでは、ごく限られた周囲の人たちから情報を得て子育てしている母親の孤独で孤立化傾向にある現状を憂慮している。園長は、子どもの入園による親の保育への関わりという仕組みを作ったことによって、主に子育てを担う母親の孤立の防止を図っていると考えられる。子ども中心の保育だけでなく保育士や他の親と関わる機会を作り、親への援助・親育ても行う保育方針を打ち立てている。子どもの育ちを保証するには、その養育者である親達も援助し、親自身が自信を持って子育てができるよう、周囲の人々との関わりを通して、自己肯定感を育てていくことが必要と考えられる。園で周囲の人々と関わるためには、保育園に対する【親の理解と信頼と肯定感】が必要である。親が園と保育士を信頼し、保育内容を理解し、保育園と保育士に肯定感を持ち、保育に関わる姿勢が重要と思われる。園長の保育に関する話に対し「理解と肯定感を持つ親」もいれば、「またか」と子ども中心の保育に対する「無理解と右往左往する親」もいることから、【園長の話に賛同する親、時代の変化による価値観の相違で聞き流す親】がいると、園長と主任は認識している。そこで、子ども中心の保育への理解と親が子育てを

学ぶ保育への関わりに対する理解を促すため、【園長、主任が保育への関わりと支援制度利用の依頼】を父母に呼びかけている。子育てに関する行政や職場内での【支援制度利用の依頼】を就労の有無や【親の価値観によらず乳幼児期の家庭での育ちは大切】と、機会があるごとに乳幼児期における親の関わりについて語っている。このように、親が孤立せず、子どもが育っていくための仕組みは、園が父母に対し保育に参画する機会を設定し、労働時間の調整を依頼するなどして参加を呼びかけていることである。父母が保育士や他の父母仲間と関わる場を持つことで、保育に関わるきっかけを持ち、さらに主体的に参画していくことにつながっていると考えられる。

第4 多様な価値観を持つ親との子ども中心への歩み寄りのコミュニケーション

父母は保育園の子ども中心の保育観に共感し、親育ち子育ての保育に関わるという説明と同意のもとに子どもを入園させている。主任の「ここの保育園に入りたいから、働きだした人もいる。」発言から、【子ども中心で時間による就労で園に入れる親】もいれば、主任の「生活のためだけでなく親の価値観。生きがい、元々やっていた仕事を続けたい人は乳児期から入れている。」との発言から、【仕事が生きがいで園に入れ、子どもとの時間で葛藤する親】もいる。これらのことから、共働きの背景、特に母親の就労形態は、多様であった。また、母親の保育観に対する共感によって、就労し保育園を選択することが窺えた。

主任は父母に子ども中心の保育への理解を求めているが、【保育の本質の察しにくさ、伝わりにくさ】を感じている。その背景として、主任の「言葉の裏にある思い。メールなど文字でやり取りすることが多くなり、コミュニケーションが少なく、人間関係が希薄になっている。『もっと具体的に言ってくれないとわかりません』と言われる。お互いに察し合うということが少なくなっている。」といった発言から、保育者と親である保護者の間に、コミュニケーションギャップがあるのではないかと考えられる。「保育園の言いたい本質を10言うと1か2わかる。時間がかかる。感覚、ニュアンス、イメージする、思いを馳せるということが苦手。頭いいけれども、ストレートに言わないと伝わりにくい。」と父母のコミュニケーションの特性を捉えている。「昔とギャップがある。こちらが変わらなきゃいけないけど。最大限できることをお互いコミュニケーションとってやっていきたい。今の時代と親に合わせて伝えていかないといけない。そこが一番変わった。」と、世代におけるギャップを認めつつも、お互いが歩み寄り折り合いをつけようと工面していた。これらのことから、親である保護者のコミュニケーションは、対面でのやり取りが減少している昨今の状況から、ノンバーバルコミュニケーション、言葉の背景から文脈を掴むことが難しくなっていると考えられる。そこで、伝えたいことがらは、一部ではなく、全て網羅し、わかりやすく具

体的に直接的な表現を使う工夫をしていく必要があることを、主任は認識していた。

父母に対する卒園時のアンケートでは、主任の発言から、親からの「不満などは書かれていなかった。(略)」と、園に対する評価について認識していた。主任の「親が反発すると子どもにいい影響ないから、そこは歩み寄り。子どものためには親の言い分も聞かなくてはいけないので、そこが今一番難しい。」発言から、【現代の親の言い分と子どもへの影響を考慮した歩み寄りのコミュニケーション】に努めていることが窺える。

葛藤や困りごとを抱えている母親に対しては、主任の「困っていることあったら言ってね。いつでも聞くよという窓口を作る。」から、まず保育士が聴く窓口を授けていた。そのような【表出しやすい受容と傾聴のオープンな窓口】は、次の段階へと進んでいる。保育士の窓口の他に、母親同士が互いに相談できるように、「集まって語り合う場所を作る。そこを広げていく。」との主任の発言から、保育士という保育の専門家から母親仲間というピアサポートへと拡大していた。ピアとは、仲間のことで、ピア・サポート学会では「ピアサポートとは専門家とは違い、仲間や同輩が相互に支え合い課題解決する活動」と定義している。

主任は、声掛けをし、相談しやすい環境を作ることによって、親が困っていることを自ら能動的に周囲に発信しやすいように、援助希求が容易となるように工夫していると考えられる。周囲に発信すると支援が受けやすくなるということを父母に知らせていることから、【能動的な発信による支援の受けやすさの周知】が必要であると考えられる。相談の受け手側には、主任の「窓口をやってる人もさらけさせるようにする。でないと伝わらない。」との発言から、相談する側とされる側いずれもが【我慢しない自己表出による負担の軽減】ができるよう、お互いが本音で語り合い、自己開示できる関係性の構築に努めていることが窺える。誰もが自己表出し、抱え込まず早期に話すことができる環境を整えておくことで、親である本人も家族も、遠慮せず援助希求でき、心理的な負担が軽減されるようになると考えられる。困っていることがあれば、周囲がフォローし他の人と協力し合あえることを常に伝え、周知することが必要と考えられる。

保育士の窓口は、周囲の親の窓口へと広がりを見せた。主任の「父母の会で、バザーの前にフォローしたほうがいい人いますかと聞いてくれる。情報を流して周囲がバックアップする。」の発言から、親の方から保育士側へ、気にかかる親、支援を要する親に対する対応について、意見を求めるようになったことが示された。それは、親同士の自発的な関わりと、保育側にフィードバックする体制に至ったことを示していると考えられる。支援は「保育士から親」、「親から親」へと拡大し、困りごとを抱えている親は、孤独や孤立化することなく、自己表出できるようになり、子育てに関し、【保育士・親との相互扶助による負担の軽減】につながったと考えられる。

第5 園での保育参画の少しの負担が将来の親子の喜びになる

親は、保育に関わることで他の親とも関わることになる。園長の「それに乗っかってきてるうちにだんだん当たり前になってくる。」との発言から、自分の家族だけで過ごしたいと考える親もいるものの次第に【園での親同士の付き合いに慣れてくる】という経過をたどっていた。それと同時に、「一人ひとり違う家庭を持っているわけだから。」との園長の発言から【バザーはどの親も負担に思う】ことを認識している。また園長は、「他の保育園やっていない、親も保育士も負担なんだけど。クラスだよりと絵本ノート、喜びと楽しみと少しは負担も感じるわけでしょ。だって保育園終わってから書いてるわけだから、読んで。それは親たちにちゃんと説明をして書きたいことを自由に書いていいんですよ。」との発言から、他の保育園で、ここまでやることは見られないとしている「親も保育士も負担なクラスだよりと絵本ノート」について時間と労力を要することが窺える。それは、【保育士と親の書く喜びと楽しみと少しの負担が将来の大きな喜びになる】と考えによるものであり、時間と労力をかけることで、子育ての方法を学び、積極的に保育に関わることで、発達段階における子どもの成長を実感できることにつながっていくと考えられる。親にとって日々の出来事や考えていることを書くことは、子どもの成長を実感し、成長の過程を客観視し、喜びが得られると考えられる。成長していく過程の中で喜びを感じることはポジティブな側面であり、心理的な成長につながっていくと考えられる。園長は小学生、学童にとって「読むこと書くことは大切」との発言から、【園での保育参画の少しの負担】は、保育園の時期にとどまらず将来の子どもの育ちを見据えたものであると捉えられる。親育ち子育てのための保育参画は、乳幼児期に限ったものではなく、学童期においても維持していくものであり「後で見たら大きな喜びになる」というもっと先の将来を通じた成長という【親子の喜び】を味わうことを親が気付くための手立てと考えられる。

第6 親の変容と子育てのしやすさ

主任の発言「弱さをサポートしあえる流れ。親同士の支え合い。親が弱さを認め、子ども一人ひとりを認めあえる。」から、子育てで困っていることがあれば、自分の弱さを認めることで、周囲に助けを求める援助希求をするよう呼びかけている。主任の「子育てが大変だという人に休日の過ごし方を話す。」といった発言から、援助希求に対し周囲からの具体的な助言が得られる。例えば、日常使用するスプーンなどの情報を、わかりやすく具体的に直接対面で伝えるによって、親は子育ての指南を得て、主任の発言から「休日での過ごし方が大変だったから楽になっている」といった【我慢しない自己表出による負担の軽減】と子育てを楽しむ余裕ができたり、楽になったという満足感を抱くこと、【弱さの容認と子育ての

指南を得ることによる過ごしやすさ】につながる事が窺える。

このように、子育ての場としての環境を整え、親が援助希求することを継続していくことで、【時間の経過と共に子ども中心の保育を理解し、親として成長】するに至っていることが導き出された。親自身、慣れない子育てに戸惑いを感じていた状況から、保育に参画することで家庭生活においても子育てがしやすくなり、主任のいう「親子での良い時間」を過ごせるまでに至り、【乳幼児期の家庭で、よい育ちのため有意義に過ごせた】と考えられる。主任の「子どもが変わっていつている。子どもを見ていけば豊かな環境と時間を過ごしているかわかる。」との発言から、主任は親の変容は子どもに影響すると捉えていることが窺える。

父母が「園での親同士の付き合いに慣れてくる」との園長の発言から、次の段階として主体的に保育参画をする委員会に所属する親から、園に提案がなされるようになる。例えば、園長の「今度、講演会で〇〇戦記翻訳した人に来てもらいたい。(略) その方が出した本を委員会の親が読んで、その内容に共感してね。話す中身がね、レベルが高いの。造詣が深くてね。」との発言から、委員会の母親が提案した講演会について、園長が対応していた。園長の「ついていける人でないと不安だけど。委員会は準備するのが楽しくてしょうがないんじゃないかな。現在は、読書会しているので、打ち合わせの時に来ても良いとその方から連絡が来た。」との発言から、委員会では、講師の話の内容を理解できる講演会となるよう【親が楽しんで委員会の準備をする】といった積極的に関与する喜び、活動へのコミットメントにより、子育て仲間と集い、企画・運営をする楽しさを実感する状況になった。

園長の「委員会がこれから打ち合わせで決めてしていく。若い親たちに理解できるか。そこんところ、どんな話をしてもらいたいかうまく委員会できちっと伝えていかないと。(略)」発言から、委員会に所属する母親は、主体的に楽しみながら準備し、その上、他の親に自分たちが本を読んで共感したことをうまく伝えるような講演会にすることを目指していると考えられる。それは、自己理解他者理解に努める姿勢であり、園の活動を通して、共感し合える仲間を広げ、コミュニティを拡大する活動になっているのではないかと考えられる。

園長が仕組みをつくった親の保育への参画の仕組みによって、親が変容し、他の親と活動し、子育てが深化していくことは、子どもに良い影響を与えていると考えられる。それは、園長の「今日海から帰ってきたら、去年の卒園した4人が訪問してくれていた。久しぶりに会ったけど変わっちゃったね。面影は残っている。」との発言から、子どもが楽しかった思い出の場所に来ていることから窺える。【去年の卒園児が訪問】するのは、子どもが、かつて仲間と自分が楽しんで遊んだ園に行きたいと自ら考え、仲間を誘ったと考えられる。保育参画によって、保育士と親とが設定した自然豊かな環境は、子どもが遊びを通して充実の瞬

間を心身で体験し記憶することに関与していると考えられ、記憶の積み重ねが仲間を誘い合って訪問している場面に結びつくと思えられる。親同士が保育に参画する「親育ち子育て」の仕組み作りの成果として、良い影響が表れていると考えられる。

小括

研究 I について、得られた結果を大カテゴリーを用いて、それぞれの関係性を図に示した。

(図 2-1 参照)

保育参画に関する先行研究で得られた結果をまとめたものを、本研究への今後の目的への手立てとするため、研究 I で得られた結果を大・中・小のカテゴリーは【 】、発言やラベルは「 」で示し、それらの関連を表 1-4 にまとめた。

先行研究と研究 I の結果と考察は、以下にまとめた。

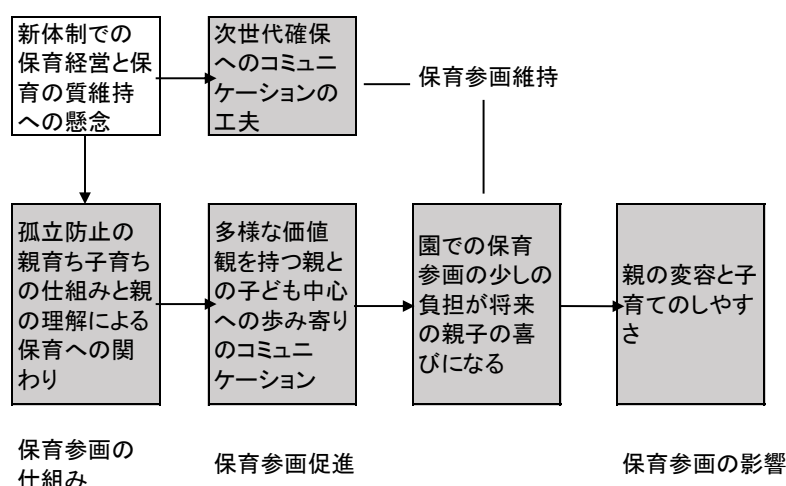


図 2-1 カテゴリー間の関係性

園による親の保育参画促進の仕組みと形成・維持の過程および、親に対する心理的社会的影響

表 2-4 先行研究における今後の目的と課題と研究 I の結果

【 】 カテゴリー、「 」 発言・ラベル

目的	今後に向けた課題	研究 I の結果
「参画への理解・要領」	参画の視点、関わり方への積極的な提案と助言。 父親の充実した保育への関わり。 園の様子を知るための、参観の継続。	【園長、主任が保育への関わりと支援制度利用の依頼】 【親の理解と信頼と肯定感】 「委員会は読書会や準備をするのが楽しいのではないか」
「保育の質確保」	保育職の確保。 0歳児～3歳児の父母への子育て支援の枠組み。 初めて・慣れない育児を支えるためのワークライフバランス。 子育て経験者の親による他の親への支援。	【次世代確保へのコミュニケーションの工夫】【保育士・親との相互扶助による負担の軽減】「今は乳児を受け入れる時代だが家庭での育ちは大事だ」 【園での親同士の付き合いに慣れてくる】
「子ども理解」 子どもの気持ちの受容	保育参画への巻き込み。他者との関係性の構築。待つ保育、見守る保育。多くの大人の存在。経験する環境。	【親の価値観によらず乳幼児期の家庭での育ちは大切】 【乳幼児期の家庭で、良い育ちのため有意義に過ごせた】 【時間の経過と共に子ども中心の保育を理解し、親として成長】
「子育て」 子どもの育ちの実感	様々な活動や機会、時期の設定。	【子どもの育ちと孤立しない親育ちの仕組み作り】【園での保育参画の少しの負担が将来の親子の喜びになる】【去年の卒園児が訪問】
「親育ち」	不安の軽減のための親同士の相談窓口の拡大。 保護者同士で支えるネットワーク作り	【能動的な発信による支援の受けやすさの周知】【表出しやすい受容と傾聴のオープンな窓口の拡大】【弱さの容認と子育ての要領を得ることによる過ごしやすさ】 【親が楽しんで委員会の準備をする】

研究 I では、園長が親の孤独や孤立防止の予防、親育ち子育て、子ども中心の保育に基づき、保育の質向上のため、親の保育参画への理解を促していたこと、説明と同意による親の保育への関わりから、父母の会、委員会、季節の行事への参画などを通し、他の親と仲間になることで、より主体的に保育の企画・運営に携わる保育参画の仕組みを形成したことが明らかになった。また、先行研究で得られた今後の課題について、研究 I で、園における日々の保育参画促進による実践と照合した結果、日々の保育参画の実践により課題解決のきっかけが図られている可能性が示唆された。(表 2-4 参照)

園の運営においては、【新体制での保育経営と保育の質維持への懸念】から、保育参画と保育の質を維持するために、【次世代確保へのコミュニケーションの工夫】へ関連付けられた。主任は保育士に対し、これまでの自身の価値観を押し付けず、保育士のワークライフバランスを考慮した対応の必要性を認識しつつ、子ども中心の保育を維持するため歩み寄りに努めていた。

園長は主任と共に、【孤立防止の親育ち子育ての仕組みと親の理解による保育への関わり】という親の保育参画を促進し、【園長の話に賛同する親、時代の変化による価値観の相違で聞き流す親】に対し、【親の価値観によらず乳幼児期の家庭での育ちは大切】と保育への理解と親が子育てを学ぶ保育への関わりに対する理解を繰り返し促していた。例えば、保育へ関わる工夫として、子育て世帯に対する短時間勤務といった支援制度利用の依頼を父母に呼びかけ、【多様な価値観を持つ親との子ども中心への歩み寄りのコミュニケーション】を工夫をしていたことから、【孤立防止の親育ち子育ての仕組み作りと親の理解による保育への関わり】と関連付けられ、保育参画促進の仕組みの過程が見受けられた。

また、主任は、葛藤や困りごとを抱えている母親に対し、保育士による「困っていることあったら言ってね。いつでも聞くよ。」という【表出しやすい受容と傾聴のオープンな窓口】を設定した。そこから、母親同士が互いに相談できるように、「集まって語り合う場所を作る。そこを広げていく。」と、保育参画によって親同士が園で直接会う仕組みを形成し、保育士という保育の専門家から母親仲間というピアサポートへと拡大させていった。「弱さをサポートしあえる流れ。親同士の支え合い。親が弱さを認め、子ども一人ひとりを認めあえる。」との発言から、相互扶助的なコミュニティ形成のきっかけとなったと言える。

主任の「休日での過ごし方が大変だったから楽になっている」の発言から、親が援助希求しやすいよう、保育士が相談窓口になり自己開示できる関係性の構築に努めることで、親は周囲から支援を受けやすくなり、子育ての指南を得て子育てがしやすくなる過程を経ていることが明らかとなった。このように、【親の変容と子育てのしやすさ】を生み出した。

主体的に保育参画する親は、有志による委員会活動で他の親と共感しあえる講演会を企画していた。園長の「委員会準備するのが楽しくてしょうがないんじゃないかな。」から、参画する親は活動を楽しみつつ周囲の親を巻き込む存在となり、コミュニティ形成と維持の拡大へとつながっていくのではないかと考えられる。

園長は「一人ひとり違う家庭を持っているわけだから。」と、「親も保育士も負担なクラスだよりと絵本ノート」や【バザーはどの親も負担に思う】という保育参画による父母の時間的な負担を認識していた。これらの【園での保育参画の少しの負担】による参画の促進・維持は、【去年の卒園児が訪問】するといった将来の親子の喜びにつながっていくとの見通しを持っていたことが導き出された。

これらのことから、親は保育参画によって、孤独な子育てによる不安や負担を相談できるようになり、心理的なストレスが軽減されたのではないかと考えられた。また、親同士でピアサポートをしあうきっかけとなって、社会的なつながりが生まれ、孤立化を防ぎ、孤独感を低下させていることが窺えた。親の変容は、卒園児が園を訪問するといった、保育園時代から少し先の出来事として、子どもにもその影響が表れていた。【時間の経過と共に子ども中心の保育を理解し、親として成長】し、豊かな環境の中で仲間と共に時間を過ごした親子の将来の喜びにつながったと捉えられる。

研究Ⅰでは、運営者である園長と保育士を総括する主任は、親の孤立化による孤独な子育ての予防のための親育ち子育てと、子ども中心の保育の維持のため、親への保育参画の説明と同意に基づいて、父母の会、懇談会などで親に保育活動へ積極的な促しをしていたことが明らかとなった。園長の「親育ち子育てというのを親は園に入るまではたった1人、おじいちゃんおばあちゃんとかほんのわずかな友達などだけで情報を得て孤立していたわけじゃない。保育園に入ることによって園はそういう仕組みを作ったから。」は、近隣とのつながりのない孤独な子育てをしている母親が、子どもと共に大勢の子育て仲間と保育園で集うことで、つながりから安心感が得られ、安定した心理的状态における安定した子育てが遂行できることを指す。秋葉ら（2013）は、孤独感を持つ母親に対する社会的サポートの不足は、母親の精神状態と子どもの発達に深刻な影響を及ぼすことを指摘し、社会的サポートによるつながりの強化の必要性を提示している。つながりを築いていく過程では、専門職による育児の価値の承認が大きな支え、価値観を共有し深くつながれる友人による大きな心の安定、会話が大きなストレス発散になるといった効果が導かれている。本研究における親育ち子育てとは、保育の専門家である保育職と、子育て仲間である親同士とのつながりの構築による価値観の共有と、受容と傾聴による自己肯定感の向上か

ら得られる親の安定した心理状態と、大勢の見守りと相互扶助による多重構造の子育てによる子どもの心身の健やかな成長発達のことであると考えられる。

園では、幼保一元化以前からの保育参画の維持のため、新体制での次世代の育成と未就園児の確保を検討していた。

主任は、保育士、親に対し、価値観を押し付けない歩み寄りのコミュニケーションをすることで、相互理解に努め、援助希求しやすい相談窓口を開設していた。保育士による窓口は親同士の相互扶助の体制へと変容していく過程が見受けられた。そして、保育参画に主体的に取り組む親は委員会で企画・運営による活動を楽しみ、他の親を巻き込むようになった。また、卒園児が園を訪問する姿が見られ、生涯発達観点から親子で成長を喜ぶことにつながったと捉えられる。

運営者から始まった保育参画促進の働きかけは、保育士と親同士が関与し合う過程を生み、多重で複合的な構造へと変容していったことがわかる。園の運営者である園長と保育士を総括する主任の視点では、保育参画に消極的な親に対する理解を求める工夫が見られたが、親の葛藤への具体的な対応は明らかにされなかった。

そこで、研究Ⅱでは、日々保育を実践し父母との関わりの多い保育士による保育参画促進の具体的な過程について取り上げる。

第3章 保育士による保育参画促進の仕組みと形成・維持の具体化および、親に対する心理的社会的影響（研究Ⅱ）

研究Ⅰでは、親の孤立、孤独を防止するための親育ち子育てと、子ども中心の保育の質を維持するため、園の運営者である園長による保育参画の仕組みが作られたことを明らかにした。その形成・維持には、親を支援できる保育士の育成と、親が保育に関わり保育を理解する必要があることが示された。

これらをふまえて、研究Ⅱでは、養育者である父母に直接関わり、日々子どもに対し保育を実践している保育士に焦点をあてる。保育士による父母に対する保育参画促進の維持要因を具体化し、父母が保育参画することによってどのように子育ての方法が変容していくのか、その過程と、父母の心理的社会的影響について検討する。

なお、親に対する表記について、研究Ⅰでは、母親・父親全般を示す意味合いから、主に「親」を用いた。研究Ⅱでは、大カテゴリーは「親」を用い、各章では保育参画の実践の具体化を扱うことから、「親」の他、より具体的な表現である「父母」、「母親」、「父親」と示すこととする。

第1節 研究目的

保育園における保育の実践者である保育士の視点から、父母に対する保育参画促進の仕組みとその形成・維持過程の具体化と子育ての方法の変容する過程、父母への心理的社会的影響について検討する。

第2節 研究方法

第1項 時期、手法、手続き

時期は、1学期から3学期始め頃までの8ヶ月間であった。職員打ち合わせ会に出席し、保育者に研究の概要を説明した。年間計画表に基づいて行事・園外保育等の前後は避け、保育業務が落ち着いた時間帯、もしくは対応可能な状況において研究への協力を依頼した。保育園への訪問許可日を副園長に確認し、その日程でインタビュー調査が可能である保育者を対象とした。調査の順番に関しては、業務に支障がないかどうか確認し、調査への対応が可能な日程と時間を確保した。

手法と手続きについて、研究対象者数は、研究参加の自由意志のある保育者の中から、経験年数の異なる男女保育者10名とした。質的データとして保育参画の仕組みと形成・維持およびコミュニティ形成の過程、保育と親の心理に対する影響を明らかにするのに、妥当な人数と考える。

保育士経験年数内訳は1～5年4名、6～10年3名、11～15年1名、16～20年2名である。平均勤務年数は8.1年である。保育士の男女の内訳では、男性は2名、女性は8名である。(表3-1参照)

表3-1 研究対象者 保育士

インタビュー対象者	年代	経験年数	性別	クラス
C 保育士	40歳代	11年	女性	4歳児
D 保育士	20歳代	2年	女性	4歳児
E 保育士	30歳代	6年	男性	4歳児
F 保育士	20歳代	3年	女性	5歳児
G 保育士	30歳代	17年	女性	4歳児
H 保育士	20歳代	3年	男性	5歳児
I 保育士	30歳代	10年	女性	0・1歳児
J 保育士	20歳代	2年	女性	5歳児
K 保育士	30歳代	10年	女性	2歳児
L 保育士	40歳代	17年	女性	0・1歳児

個別に半構造化面接を1回30分から1時間程度実施した。インタビューの内容は録音し、その場で回収した。またフィールドノートにインタビュー内容を記述し紙媒体として保管した。

第2項 インタビュー内容

インタビュー内容は、保育参画促進を維持する要因、子育ての深化に至った過程、父母に対する影響についてである。保育士へのインタビュー内容と質問項目は、表4-2に示す。

表 3-2 保育士 インタビュー内容と質問項目

A. 保育参画の背景

- 1) 主体的に保育の企画や運営に携わる「保育参画」について知っている事柄を教えてください。
- 2) 保育参画を実施する保育園に就職した経緯を教えてください。
- 3) 親が保育参画することに、どのような目的があるか教えてください。

B. 保育参画のプロセスについて

- 1) 子どもの入園当初、親の保育参画にどのような印象をもちましたか。
- 2) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、あなた自身について思い出されることはどんなことですか。実際と運営について、工夫と改善について

C. 他の保育者（上司・同僚）について

- 1) 保育参画を促進する上で、他の保育者について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 保育参画を実施する保育者はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、保育者の印象は変わりましたか。

D. 親（園児の父母）について

- 1) 保育参画を促進する上で、親について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 親はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、親にどのような変化がありましたか。

E. 保育参画の実施について

- 1) 保育参画の実施によって、あなたの保育観はどのように変化しましたか。
- 2) 保育参画の実施は、あなたと他の保育者と園長と親の間にどのような関係を生み出しましたか。
- 3) 保育参画の実施は、あなたの仕事（家庭生活）に何か影響がありましたか。

F. 保育参画の振り返りについて

- 1) 保育参画を振り返って、以下のことを教えてください。
親の心理的負担感が軽減されましたと感じますか。
親の自己肯定感にどのように変化が生じたと感じますか。
-

第1 保育士への質問項目とその解説

A. 保育参画の背景について

解説：保育参画を実施する保育園に就職したのは、親との協働活動について、どのように考えているのか。保育参画による保育環境や親への影響などについて確認するための項目である。

親の就労形態の変化によって、保育参画の背景がどのように変化し、親がどのように受け止めているのかを確認する。

B. 保育参画のプロセスについて

解説：保育参画に至るまでの父母の経緯について知る。

参画するにあたり、仕事と家庭と保育参画のバランスをどのようにとっているのかについて確認する。

C. 保育者について

解説：保育参画について親の立場と保育士の立場の双方にいる保育者がいる。仕事と家庭の両立やタイムマネジメントなど、どのように工夫しているのか確認することは、様々な視点から保育参画を捉えることにつながる。

D. 親について

解説：コミュニケーションを取りづらい、参画に対し消極的な父母に対し、どのような対応をしているのか。また、子育てに悩んでいる親に保育に参画するメリットは何なのか。参画の良い影響をどのように拡大すればよいか、課題について確認する。

第3項 分析の方法、手続き

KJ法に基づき、トランスクリプトに改めたデータから、保育参画促進の仕組みと形成・維持の過程、親に対する影響と考えられる発言をまとまりのある意味ごとに抽出し切片化した。切片にラベルをつけそれらについて意味の似通ったもの同士をグループ化してまとめ、カテゴリー名をつけた。それらの関連性について図解化し、叙述化した。保育参画の秩序を見出すためそれぞれのカテゴリーの説明および、カテゴリー間の関係や創造的統合を図った。

客観性確保のため、質的研究の経験を持つ臨床心理学分野及び社会心理学分野の研究者

3名で、切片化とラベル、カテゴリー名、図解化の妥当性について検討を行い、助言を得た。また、臨床心理学分野の研究者2名を含めた計5名により、筆者の客観的な立場の保持に留意しながら、解釈の偏りを防げるよう検討し、データの妥当性の確保に努めた。

以下の手続きをとって、分析を進めた。

- 1) 保育士10名を合わせて256の切片を抽出した。それらの単位化された切片にラベリングした。例えば、「園に来る機会があることで、園と家庭でお互い話をする時に共通で状況がイメージしやすい。」の切片には、「来園は家庭との共通理解の機会」といったラベルをつけた。
- 2) 内容の似通ったラベルを集め、107の小グループを作成した。例えば、「父親母親が保育環境の設定に協力的」といったラベルに対し、【協力的で子ども中心の親】といった小カテゴリー名をつけた。カテゴリー化を繰り返し、41の中グループにまとめ、最終的に合わせて11つの大グループにまとめ、それぞれにカテゴリー名をつけた。カテゴリーは【 】で示した。大カテゴリーは、【多様な動機と自然豊かな環境で子どもが生き生き遊ぶ保育園を見て就職する】、【園長の人材育成と周囲からのサポートによる保育の質向上】、【保育の質維持とワークライフバランスの難しさ】、【育ちあい見守る保育】、【保育への関わりに対する親の葛藤】、【親の葛藤への対応】、【子どもを支える親の役割と保育参画への呼びかけ】、【親へのサポート体制と保育の協働過程の深化と相互理解】、【父親の保育参画への仕掛けと子育ての深化による好影響】、【保育参画によるコミュニティ形成と親の成長】、【保育参画拡大の課題】の11つである。これらをまとめて表を作成した。(表3-3参照)
- 3) 大・中・小カテゴリー間の関係を図式化した。図式化は計4回の変更が行われた。1回目の変更では、保育参画促進の維持要因、阻害要因と子育ての深化、親への影響におけるカテゴリー間の関連性を時系列にまとめた。2回目の変更では、ラベルの簡略化から適切で簡潔なカテゴリー名への変更と再検討を行った。3回目の変更では、保育士間のカテゴリーの再編成と、関連性を検討した。4回目の変更では、結果と考察を再検討し、カテゴリー名とカテゴリー間の関係をより明確化したものをまとめた。図3-1では、保育士が保育内容に賛同して就職先を決定していることから【多様な動機と自然豊かな環境で子どもが生き生き遊ぶ保育園を見て就職する】と関連付けた。そこから、保育士として経験を積み、保育の技量が向上していく過程を【園長の人材育成と周囲からのサポートによる保育の質向上】と関連付けた。就職してから、保育の質の向上と維持には時間配分が必要で【保育の質維持とワークライフバランスの難

しき】と関連付けた。【育ちあい見守る保育】は、周囲のサポートにより保育の質が向上していくため、並列とした。父母への関わりとして、【子どもを支える親の役割と保育参画への呼びかけ】と、子どもを預ける保育所での【保育への関わりに対する親の葛藤】を関連付け、【育ちあい見守る保育】の下位に位置づけた。保育士がどのように葛藤を抱える父母に保育参画を呼びかけ、保育参画へといざなったのかを【親の葛藤への対応】とし、【保育への関わりに対する親の葛藤】と関連付け、並列に配置した。葛藤の対応から【親へのサポート体制と保育の協働過程の深化と相互理解】を関連付け、保育士がどのように親に関わり、参画に至り、子育てが深化していったのか、その過程を【子どもを支える親の役割と保育参画への呼びかけ】と関連付け並列に配置した。【親へのサポート体制と保育の協働過程の深化と相互理解】は、母親だけでなく、父親が保育に関わる仕組みとその影響の【父親の保育参画への仕掛けと子育ての深化による好影響】に、関連付け、並列に配置した。これらの時系列の過程から【保育参画によるコミュニティ形成と親の成長】を関連付けた。子どもを預ける保育施設での保育への参画に関する課題は、【保育参画拡大の課題】として、【親の葛藤への対応】、【保育参画によるコミュニティ形成と親の成長】と双方向の関連性を示した。保育士の分析から、11つのカテゴリーの関係性を図示した。(図 3-1 参照)

表 3-3 回答内容 「保育士」

保育士による保育参画促進の仕組みと形成・維持の具体化および、親に対する心理的社会的影響

KJ法を援用した回答内容の分類結果
保育士

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	ラベル	切片	数
①多様な動機と自然豊かな環境で子どもが生き生き遊ぶ保育園を見て就職する	自己開拓による園選び	パンフレットを見て感銘した後、一旦幼稚園に就職後、子どもの主体性を見学して転職	②年目1(パンフレットを見て感銘)1	パンフレット見ていたんです。すごいところだなと感銘を受けた。	22
			②年目1(幼稚園に就職、保育士へ転職)2	漠然と幼稚園がいいと思って最初は幼稚園。保育士として深みのあるところとして転職考えて見学した。	
			②年目1(子どもが主体的に遊ぶ姿に、こしかな)3	前の園舎見ることできた。門を潜った後鳥肌立った。幼稚園だと先生と子どもが遊ぶ園。こしは子ども達だけで遊ぶ。表情が違う。自分で遊べていう理念通りやっているんだな。こしかな。	
	ネット検索で自然の中の子どもの様子を知り、実習で、親の関わりと子どもの主体性の尊重を知る	ネット検索で自然の中の子どもの様子を知り、実習で、親の関わりと子どもの主体性の尊重を知る	17年目1(ネット画像で自然に囲まれ生き生きした子どもの園を知る)1	ネットの画像で保育園を見て視覚的にびっくりした。木や小川が流れて山羊がいて生き生きした子ども。	
			17年目1(実習で大人が子どもの芽を摘まないことを学ぶ)2	幼稚園実習では遊びがメインだった。保育園実習はここを選んだ。人見知りの赤ちゃんのこと、大人の都合、子どもの芽を摘んでいるんだよと先生の思いが伝わった。	
			17年目1(花火大会での親の関わり)3	実習最後の日には花火大会で、ここまで親が関わっているのはわからなかった。	
	動機先の紹介	共に生活するノーマライゼーションと見学の子どもらしさ	⑦年目1 動機していた施設の紹介「ノーマライゼーション」1	前職はOでした。その後動機していた施設の紹介です。「あそこは子どもにとってすごくいい園だよ。」「あそこは自由な時間が多くて、子供のいいところ伸ばしてくれるところよ。」「そこは自閉症の子が多かったんですけど、「あそこは普通の子もいるし障害児の子もとってられるし、普通に一緒に生活できるし。」	
			⑦年目1 共に生活する園を見学 2	一緒に生活できる社会がいい。小さい頃から経験できてるすごいなと思ひ、見に来て受けた。	
			⑦年目2 遊びに没頭する子どもらしさ3	すごく子どもが子どもらしい。今時の子じゃない。鼻水、あおっぱい垂らしてる。袖で拭きながら、自分のやりたいことは遊ぶことなんだ。	
	養成校の授業、実習	授業後、見学し自然の多さと子どもの生き生きさを知る	大学の授業で映像を見てこを知った。	大学の授業で映像を見てこを知った。	
			⑦年目3 少しづつ保育に関わっていく観5	授業でこの園のことを知った。実際を見てみたいと思った。やっぱり働きたいと思った。	
			2年目1大学の授業で知り、見学し自然が多く本物を使っていてここ就職1	大学の授業で、放送番組で特集されているのを見た。のこぎりやトンカチは本物を使って、水が自由に使えていた。4年生の時、園庭が広くて自然が多くてそんな園があったんだ。私は動物が好きで犬を飼って、触れ合ってた成長した。見学して「ここだ」と思った。	
			⑩年目1 実習園で自然豊かで子どもと先生が生き生き 1	実習で来た。自分が育った幼稚園も木や森の中で探検で羊もいていいところ。いろいろ調べたがここに行き着く。20代でないのに受け入れてくれる度量の深さ。園庭に来て衝撃的だった。先生も子どもたちも生き生きしてエネルギーのあるところだった。	
			⑩年目5 良いモデリング 10	昔は親のいない保育に関心があったんですけど、でもやっぱり自分もある程度恵まれたところで育てきた。いいモデルを知らないと言ひ方悪いけど難しかった。いいモデル見たくて実習させてもらった。	
			⑩年目 父母の関わりとつながり 2	親が参加してすぐつながりがある園なんだな。いい意味でフレンドリーだな。文集読んで親が関わっているのがわかった。実習の2週間でもお父さんやお母さんを見かけた。花火の話や園庭の池で、これはお父さんたちが作ったんだと教えてもらったりして、言葉の端々で知った。	
本人が卒園生、子どもが在園児という既知の関係	実習で園長から就職を打診される	3年目(実習し、こしかなと思ひ、園長に誘われて就職)2	実家は保育園をしている。3年生の時、2週間実習で花火大会に参加した。「こしかな」と思った。園長に誘われて入った。		
		11年目1(保育園の記憶が心に刻まれて)2	当時の保育園のことを鮮明に記憶に残って、それって普通のことなのかなって思ってた。他の園に行ったら人達に「よくそんなに思い出せるね」と言われて、やっぱり心に刻まれているんだなって実感した。		
		11年目1(私は卒園児で母たちが熱心に園に関わるのを見て)1	もともと私は卒園児だった。家が近所ということもあるんですけど、やっぱり母たちが熱心に園に関わっているのを見てきた。		
		11年目2(環境の素晴らしさ)5	あと環境の素晴らしさもありましたね。		
		11年目1(実習後、就職を切望)3	他の園に一年動めたんですけど、実習園が今の園なので、やっぱりこしかないなと。		
		10年目1(卒園児、居心地の良さで就職)1	私は卒園児。こしかな知らずに保育士を目指して資格とった。迷いなく入ってきた。とにかく好きで卒園した後も夢が通っていたので、小学校の時もずっと保育園は近くにある所に行きたい場所だった。嫌なことがあったり困った時があったら行きたくなる。ずっとならぬ。実習は違うところに行くと、ここの居心地の良さ、遊んでくれるわけでもない、どうしたって話すわけでもない、スッとよって行っちゃうところ。話しかけられなくない。話して発散するタイプでもなく、迎え入れてくれる。園庭の雰囲気、先生と子供、あの空気だけで良かったのかもしれない。		
②園長の人材育成と周囲からのサポートによる保育の質向上	技量の自信のなさとの関わり経験のなさ	我が子が在籍	6年目男性1(園長試験で保育士取得し、我が子の保育園に就職) 1	大学では、写真と美術を学んでいた。大卒で保育士になりたいと考え国家試験を受け資格をとった。人の子を預かることの重さが大きすぎて、一回離れて他のことを見たいと思った。現代アートスペースを運営していたことがあり、若い人たちは未だ完成度が発表の場であった。自分ができることを還元できるのが保育士と思ひ、父母として子どもを入学させたこの園で、大切にしていること、子どもに当たり前のことにつながっていき、就職した。	17
			⑩年目2 自分の自信のなさ 3	自分に自信がなかったから、この人たちと肩をならべられるのだから不安だった。	
			2年目5(自身の保育の技量や人間関係)12	自分の保育のうまいかなさ、人間関係とかは、どこの保育園でもできるかな。	
			2年目5(就職後、親の活動の多さを知った)9	入るまで知らなかったです。見学の時、園庭を見せてもらって子どもが遊んでいる場面でした。入って活動の多さにびっくりしました。こんなに関わっているんだと。	
			2年目2(親が関わる保育園はあまりないが、違和感はない)2	なんか保育園なのに、こんなに親が関わる保育園で、そう思ういなって思っていて。私自身保育園に入る前から、保育園と親との関わりは大事だなって思っていて、そんなに違和感はないです。	
			3年目6(最初は傍観、次年度は関わりの実験を理解)10	最初はお父さんお母さんを見ていただけ。次の年は、こんなにも下さっているんだということが見えてきた。	
	園長先生の魅力	見守る人柄	3年目3(園長の見守る人柄で辞めない魅力)6	保育者の関わり方というのは私はちょっと未熟なところがあるので、後は園長の人柄。園長は私が落ちているときに言葉をかけてくれて、ちゃんと見ている人がいるんだなと思った。やめない何かがある。	
			2年目1(園長が傾聴し、自分の気持ちを確信)4	園長先生が焚火に呼んでくれた。こうこういう事があって、気づいてよかったねと書いてくれた。自分の気持ち正しかったんだと嬉しかった。	
			2年目2(園長の言葉で転職の戸惑いが払拭)5	3年しか続かなくて社人として甘いのかなと考えたこともあったんですけど、置かれた場でどこまで頑張れるのかと、けど園長先生の言葉で、あよかったって。入れました。全然違う世界を見ています。	
			10年目6(匿名でない対人関係を継続する園長)12	匿名アンケートとか、隠す必要ないじゃない。世の中的にはそうじゃない、匿名で出せというめられるような感じ。隠されない人と人の付き合いができる環境、それを続けさせることのできる園と園長。	
			⑩年目2 園長の理解と周囲に育ててもらったこと 4	私も親も子どもも育ててもらった。何より園長先生はじめの理解があってですね。だから10年も働けている。	
			11年目9(子ども中心の伝承と年齢的な継続の難しさ)23	ここでは子どもを真ん中というのがぶれないので、そこを伝える術がない。柱になる伝えられる人がないと、園長が歳を重ねて父の会など体力的に出なくなってきた。園長が元気にしついでいろいろ話をしてくれたことが、素晴らしいこと、ありがたいなって思ってた。	
	先輩や同僚からのサポートによる視野の広がりと技量の向上	子ども中心の伝承と年齢的な継続の難しさ	3年目3(初任時の先輩、母世代の保育士など様々な支援)7	一年目についてくれる先生の人柄もある。パートの先生にかなり助けてもらった。自分のお母さん連代でいろいろお世話になった。我が子のように可愛がってもらった。人間関係が良くなかったらやっていけない。いいほうだと思う。	
			11年目5(打ち合わせでは他の先生から自分にはない視点を学ぶ)12	打ち合わせとかでは自分が子ども達のことをどう見ているのかという話ができるので、自分にはない視点を他の先生から引き出せると「あっそうか」といつも学ばせてもらっている。	
			17年目2(仕事での発見で充実)4	ほほ仕事。発見が楽しい。そういう見方があるなど、のめり込んだ。	
②年目3(影響力少ないが懇談会で発言)7			まだ保護者の皆さんに自分から発する言葉に影響力ないけど。思ったことかを懇談会の場で自分が思っていることを伝えたりしている。		
3年目4(全体の場で不明点を質問できた)8	全体の場でこれはどうなんですかと、わからないことはわからないと言えるようになった。				

③保育の質維持とワークライフバランスの難しさ	職住近接だが、プライベート時間が少なく慣れた	3年目2(職住近接だが、プライベート時間が少なく慣れた)3	保育園に自転車に通える範囲内で住んでいる。プライベートの時間は少ないけど他を知らないのやでいける。こんなもの慣れた。	8	
	職住近接で、保育の質維持のための定時後の十分な時間が必要	3年目6(保育の質維持のための定時後の十分な時間が必要)3	実習とか他の園は定時で帰れるんですけど、ここまでの保育はそれではできないはずがない。定時に帰れないでいいんで、保育内容の方が、勤務時間より重要な。ウエイトは9対1。		
	定時終了だが、持ち帰り仕事で力量を問う	11年目6(定時に終わる働き方で負担はない)13 11年目6(持ち帰り仕事、クラスだよりで自分の力量を思う。)14	あんまり苦しまなかった。時期による。年長の担任しているという人がある。他にやることある時はどこかで切り上げないと、キリをつけてやるけど、それ以外は納得するまでやっていた。そこまでやらないと気が済まない。生活には支障ない。朝はしんどいけど、7時、7時半、8時で朝は回っている。土曜日は基本的に来ている。室内の環境、畑に水をやりに来ていた。家近いで。 働き方としては今はきちっと定時にあがれるようにしているんで、そんなに負担はないんですけども。 ただ実際は持ち帰りの仕事、クラスだよりがあるので、自分の力量のことを思うことがあります。		
	家族の理解とバランス	11年目6(家族の理解に助けられている。)15 6年目6(母が主にに関わり、自分は保育士と父親とのバランスをとる)2	家族の理解に助けられている。 父としては、あまり父母の会に参加していない。両方出ちゃうと家が崩れてしまう。基本的には母が参加して、自分としてはバランスを取っている。		
	人員数への懸念	17年目2(保育人員数への懸念)6	今抜けると現場きつくなる。常勤が減る葛藤がある。		
人として共に育ち続ける保育親	園長、副園長、ベテランの先生と親と一緒に行動し、育ちあう園	⑩年目3 一緒に育ち合う園 5	育ち合う。この園は一緒に育ち合うところなんだよと。(ベテランの先生)にふとした会話で教えてもらった。父態でも話していたと思う。私も育ててもらっているし、子供も育てているし親も育っている。	29	
		②年目4(園長、副園長、ベテランの先生と親と一緒にやる力)11	そういう園ですっていう力がある。一緒にやってやってくれる。園長先生、副園長先生、ベテランの先生の姿があるからなんだろな。		
		3年目11(すべて父母からの提案で変化してきた歴史)22	園の歴史の中で、すべて父母からの声から変わってきた。		
		⑩年目4 歴代からの積み重ねで父母が変化 7	ベテランの先生たちが作ってきたこと。行事から始まって、月一回の保護者会、積み重ねなんじゃないかな。そこからやっぱり変わっていった。父母が変わっていった。		
	同じ矢印の方向性を築いた歴史 人として核となる保育親を学ぶところ	②年目5(矢印の方向性を築いた歴史)15	いろんなことあると思いますけど、向いている矢印は同じ。築き上げてきたベテランの先生達はすごいなと。		
		3年目1(人として核となる保育親を学ぶところ)2	一番最初の人としての核となること、保育親を学ぶところとして行きたいと思った。		
	子どもの力を信じ見守る保育親	就職前、子どもは何かをしてあげる存在	11年目4(就職前、子どもは何かをしてあげる存在)10		変わりましたね。就職する前は、子どもって何かをしてあげなきゃいけない存在とってました。
			⑦年目2 見守る保育 4		それを見守る、手を貸さない、必要な時にそばにいる保育。そう言う姿勢すごいなと思いました。
		子どもの自由さ伸びやかさを信じ見守る保育	⑩年目5 子どもが生きてき 9		話が前後しますが、この園がいいと思うのは、子どもが生きて生きている事。それって大事だと思って。
			11年目2(子どもの自由さを信じる先生の様子の深さ)4		子供の自由さが、他の園とは違って。子ども達を信じる先生たちの心の深さが違う。
子どもの成長と大変だが本物の保育が支え		3年目3(持ち上がりで成長を実感し、子どもにベストな本物の保育が支え)5	持ち上がりだと子どもの成長がわかる。厳しい中で続けてこれたのは、お母さんたちも言ってくれたけど「ここは本物の育児をしているところ」大変だけど本物のなかでいるのが支えかな、子どもにとってベスト。		
		11年目4(子ども達から様々な気づきを得て、共に生きる視点を教えてもらった)11	この園では、子ども達と一緒に過ごす中で、逆にいろんな事に気づかせてもらったり、教えてもらったり、共に生きるっていう視点を教えてもらった。		
④育ちあひ見守る保育	日常の丁寧な保育と年長の行事の多さ	3年目2(どのクラスも丁寧にしているが年長は行事が多い。)4	クラスによると思う。丁寧にしているのは同じだが、年長だと活動行事などで比にならないくらい多い。		
		②年目9(運動会はお遊戯でなくドラマ)27	運動会はただのお遊戯ではないいろんなドラマがある。		
	子ども中心の保育を発信し続けるクラス便り	②年目9(思いを伝えるクラス便りで園の生活を把握)25	クラス便りとか分厚いの出ているんですけど、こう思ってやっています。子ども達の姿を見たい。こちらの思いも出している。読んでて園での生活が、よりずっと入りやすいのかと思っています。		
		②年目9(報告だけでなく熱意ある継続)24	ただ園での生活であれをやり出すこれをあやりますという報告だけじゃなくて、この保育園は思いがあって熱意があってずっと続けてきたと思います。		
	時代に流されない保育の伝達と親の信頼感	家庭と保育園で子育てする意味を伝え、つながりを深くする	11年目9(勉強熱心で時代に逆行した一つの文化があり、他へ伝える難しさがある)25	伝えることの難しさがある。先生たちはとても勉強していて、時代に逆行しているのかもしれないがこういうふうな園がある、一つの文化が成り立っている。	
			3年目8(先輩からの文化の伝承と仲間に見える場)16	大変なだけでなく、これだけ密に子育てしている仲間に見える場所がある。先輩が伝えていく文化と感化されていく。上の人が伝えていく関係性が出来ている。	
		家庭と保育園で子育てする意味を伝え、つながりを深くする	10年目9(家庭と保育園がつながる保育)15	おうち、ぶつ。保育園、ぶつ。ベースは家だけど、お家に帰ったらおうちで過ごす、全く別物でも構わない。保育園でこんな様子でね、おうちでこうでねと。ここは必ずお家と保育園で子どもと一緒に過ごすというスタイル。それが当たり前だと思って園長がいて、ありがたい当たり前。	
			②年目3(家庭がベースで保育園とつながる保育)9	そういう姿見ていると保育園での生活、おうちの生活がはっきり分かれてるんじゃないかって。子どものことだけつながるんじゃないかって。こっちの生活、日中の生活と夜の生活がくっついてるような感覚。預けられているという感覚ではない。家族のベースがあつての保育園の生活があつてのイメージ。ここはみんなが混ざっている感じ。お父さんお母さんにありがたいなと感ずっている。	
			②年目3(言葉だけでつながっていない)10	前のところだと保育者、保護者でこう、ただ言葉だけでつながっている感じ。	
			②年目9(思いと意味を伝える働きかけは、つながりを深くする)26	思いがプラスされると、そこからつながりももっと深くなるのかなと、こちらからできる働きかけとして一つあるのかな。やっていることの意味をきちんと伝える事が大事だと思います。	
親と一緒に育つ	⑦年目5 伝えられる言葉の大切さ 13	みんながそう思っていれば、改めて言葉で伝えられると素晴らしいと思った。言葉って大事なな。			
	⑩年目3 完璧な親はいない 6	親になったら完璧ななんだろうと思っちゃうのが子どものいない私なんです。親もそうはいかないから苦しい。だから、一緒に育っていく。私も一年目力不足すぎて、最初に何に苦しいかわからなかった。その中で子どもに育ててもらっているし、お父さんお母さんに理解があつて育ててもらって温かい思いがあるから今私にここにいらんだって。			
安全面の入念な準備が親の安心感につながる	3年目12(安全面の入念な準備が親の安心感につながる)27	こういう準備の上で、園外は危ないところなどこれ良しではなく、そこまで考えているんだというの親が安心する。			
保育参画で着飾らない普段の様子を知る	3年目12(保育参画で着飾らない普段の様子を知る)26	親に平日に休みをとって保育の様子をみる参加ではなく、着飾ったものをみるのでもない。普段の本当に保育に必要なもの、保育園の様子を知ってもらってやってもらう。			
静かに活動する子どもを見守る園	11年目3(上の子は静かでアウトプットが得意でなく卒園)6	上の子は今中学生ですけど、その子はこの園向きではなく、わりと静かでアウトプットが得意じゃない。年長でコマは回さず、足後守も美術以外では使わず竹馬は出来ず卒園していった。			
目立たない子への丁寧な保育で信頼感を持ち第2子を入園	11年目3(目立たない子への丁寧な保育で信頼感を持つ)8	できる子向けの保育園でなく、目立たない子に丁寧にスポットを当てた保育をしてくれるので先生を信じられる。入れてよかったと思う。下の子は迷わず入れた。			

⑤子どもを支える親の役割と保育参画への呼びかけ	親の来園は、家庭との共通理解の機会	母親の送迎による来園が多い	2年目4(共働き世帯では母親の送迎が多い)10	保育園だと共働きというもあるから、多分他の園ではお迎えはお母さんが多いと思うけど。	
		送迎以外で関わるメリットは、保育園と家庭との共通理解	3年目11(送迎以外で関わるメリット)25	お手伝いのメリットは、行き帰りだけじゃわからない。	
			17年目5(来園は家庭との共通理解の機会)16	園に来る機会があることで、園と家庭でお互い話をする時に共通で状況がイメージしやすい。	
	子どもの豊かな自然体験を支える安全確保が親の役割	子どもの自然体験を支えるための親への参画の要請	3年目8(バザーは園に足を運ぶ機会、良質な保育教材を知る機会)14	バザーとか忙しいけど、園に足を運ぶ機会になっている。やっぱりどれだけ園がいいものを使っているか、知ってもらえる。	
			3年目(父母の保育サポート)12	保育のサポートとしてお父さんお母さんに何かお願いすることが多いのかな。	
			10年目6(親の協力あつての日々の保育)9	園外とか池作りとか協力して欲しいという、そういう目立って行事みたいなんじゃない毎日生活するだけでも他の保育園だったら親も楽なんじゃないかなと思うことたくさんある。お手紙とか。お父さんお母さんは子どものことを思いながらこの園を選んでくれてる。きつと説明とかで知ってきちゃってるんだけれど、毎日当たり前のよう子ども達が保育園に来るだけでもだいぶお父さんお母さんの協力があつてのなんだって。	
			3年目男性3(男手と女手で保育士に手を貸す)6	男手だったり女手だったり、色んなところで力を貸してもらっている。親たちの力がないと出来ないことたくさんある。行事で使う会場作りとか夕涼みとか、保育士だけの力ではあそこまではなかなか。	
			10年目4(自然体験への協力要請)5	ぐいぐい引つ張るポジションにいきやいけない年もあつたけど、なかなかそこまでできない年もあつたんですけど、園外や園庭キャンプをやっていくと、協力してもらって。子供たちに経験させたけれど、保育士だけではできない。	
	子どもの安全確保と適切な関わり方を親が認識すること	子どもの安全確保と適切な関わり方を親が認識すること	17年目4(海は男手の父親、バザーは母親)10	海は男手がいるのでお父さんたち。日常の保育で参加してもらうことはあまりないんですけど、お母さんはやはりバザー。	
			10年目4(子どもの自然体験を支える親の役割)6	親達に手伝ってもらって、手伝ってもらっても難しいなって思ったところも。私たちが日々の保育で仲間とする延長線と海や山に行く、そこに親がいると、子供達はワツと気持ちも体も持っていける。きてくれると嬉しいから手をつないで山を歩いたり、すごく言葉が多くなったり、せつかく大自然に一步足を踏み入れているのに、子ども達が感じることが周りの大人の存在で違うふう、本来感じること違うことにせつかく来てくれて子ども達の安全と命を守るためにきてくれているけど。	
10年目4(安全確保の役割に対する親への伝え方)7			そうじゃないところっていうのを、私たちは当たり前で思ってた。そこにきてくれるお父さんお母さんにどう伝えるか。言い方は毎年迷ったりしました。		
3年目(子どもとの距離と接し方の参考)10			保育園が考えている子どもとの接し方、親に見てほしいし、気がついて欲しいのかな。山登っていても子供との距離感近い。ちょっと転んだだけでもわーと行ったりとか。それはちょっと違いますよとか。保育園の保育としてこんなことしているんだというのを見れるのは大きいと思いますね。		
⑥保育への関わりに対する親の葛藤	保育参画への説明と同意後、ワークライフバランスとの葛藤	親への保育参画に対する説明と同意	3年目(説明と同意による保育への関わり)18	説明会の時に保育に関しちゃんと説明している。親にお願いすることある。それでも入りたい人達。わかっているというの大きい。	
		保育への賛同と不賛同	3年目男性8(保育への賛同と不賛同)17	根本は、保育に惚れ込んで入ってきている人達。信じられない人はすぐにやめていく人。	
		仕事・家事・自分の時間と保育への関わりで葛藤を抱える親	17年目4(仕事・家事・自分の時間に葛藤を抱える親)11 10年目5(関わりと葛藤)11	仕事があつて家事があつて、どこに自分の時間があるのかなというのがあります。どうしても毎年、そこに引っかかる人がいる。 親自体ある程度備わっていて、葛藤を抱えている。絵本ノートからも察せられて、親は24時間、土日も休まない、親達は先生達すごいですって言うけど。お母さん運もすごい。	
	ライフワークと保育参画による負担を見直す過渡期	ライフワークと保育参画による負担を見直す過渡期	他園における親へのリフレッシュの提案による負担の軽減	11年目9(今の流れは他園では親のリフレッシュ、負担を軽減するのがメイン)22	それがすごく難しいって感じる。今の流れは親の負担を軽減するということがかなりメインになっていると思う。他園では「お母さんリフレッシュしてきていいよ」という。
			働き方やバザーを見直す過渡期	11年目9(今は過渡期で働き方やバザーを見直す動き)24	今は過渡期に来ている。働き方とか、バザーとかもう一度見直すという。
			バザーは負担で、やりたいことで手伝う	11年目8(やはりバザーは正直ハード)20 17年目8(自分のやりたいことでの手伝い)22	やっぱりバザーとか、正直ハードはハードですよ そういう人達もお手伝いに来てくれたり、バザーだったり関わってくれたりして。自分がやりたいことはやる。
			距離の近さで負担を感じる親	17年目5(距離の近さへの負担)13	距離の近さで負担を感じ、なんで預け合いをしなきゃいけないという人もいて、一概には言えないけど。
	母親の価値観と親子で過ごす時間の減少	母親の価値観と親子で過ごす時間の減少	休暇中の保育依頼による親子が離れる時間の多さ	17年目6(親子が離れる時間の多さ)17	親と子どもが離れていることが多くなったかな。自分が仕事休みでも保育園に連れてきて、自分の時間を楽しむ。保育園なので預かってくれないのいうことが増えている。
			宿泊保育後の早めのお迎えのなさに対する保育士の違和感	17年目6(宿泊保育後の早めのお迎えのなさ)18 17年目6(仕事中心の価値観の相違)20	私達の説明不足なのもあると思うが、3日間の宿泊の後、数名いつも通りのお迎えの時間だった。6時とか。「仕事なんで、4時に、その時間に絶対来いって言わなかったですよ。」3日間離れて大きな経験をして帰ってきたときには我が子を迎えてあげたいというより、普通に仕事の感覚で迎えちゃう人が増えてるんじゃないかねって。 自分の感覚の中にはそこはないかな。言われなければ自分では思わない。働くお母さんが増え自分のことで色々あると思うんですよ。そこについて、それで当たり前になっている部分もあるかな。
			子どもへの罪悪感の保育士への怒りというすり替え	17年目6(罪悪感の怒りへのすり替え)19	みんながわつと帰って行ってその子に悲しい思いをさせてしまっ「ごめんね」って、お母さんも泣いていたんですけど。早くお迎えに行かなかった怒りがこちらにチャージした。
写真購入時の親の視点と子どもの視点の相違	親が見たい我が子だけの写真と仲間と写る写真が見たい子ども	6年目(親が見たい我が子だけの写真と仲間と写る写真が見たい子ども)8	写真を買わない人が増えている。なんで写真を販売しているのかという、自分の子どもと仲間達。自分の子どもが見たいのは仲間、残してきたいもの。親は自分の子どもが写っているのしか買わなくなってきた。その部分が一番伝わらなくて、親が見たい子どもの写真。自分のことだけに向いていっているような流れ。		

⑦親の葛藤への対応	関わりへの自己決定尊重のサポート		⑦年目8 どうするか自分で選ぶ難しさ19	選んでいって園長がよいくらうですけど、それが難しいんですけどね。経験しないとわからないので、園長であったり父母の会であったり、親にとっても大きいかな。
			⑦年目7 できることをやる、できない選択も自分で決める17	「今はできることをやればいいし、できなければ自分で選択していいし。」と言ってくれる仲間がいる。
	親育ち子育てへの動機づけ	消極的な親への動機づけ	17年目9(引いてる人への動機づけの難しさ)23	引いちゃっている人とかはこちらからは触れない、やりましようって言うても難しい。
		対面で保育への関わり意向を傾聴出来る場の設定	6年目(指図ではモチベーションが保ちにくい)17	保育ありで親が活動。親にあしろうしろではついてくるモチベーションが..
			17年目9(対面での傾聴)24	大きいクラスになればなるほど関わって行くこと増える。直接話すことが大切なのかな。連絡帳に書くだけでは相手のことはわからない。顔を合わせてどうですかと状況聞きながら。
			6年目(子どもの育ちに親自身が関与する場を作ることに理解に時間が必要)18	いい育ちをしていった子ども達と自分ができること、そこを作っていくこと。こうしようというだけではなかなか、理解してもらうに時間かかる。
		親が保育と子どもの力を信頼し関わることで、何を体験させるか	6年目(親が保育の質・子どもの育ちを信頼すること)16	親子が信頼してくれること、保育の質、子ども達が育っていく姿を信頼してくれること。
	6年目(親が子どもに何を体験させたいか)19		難しいね。親が子どもに対し何を体験させたいか、そこを持っているかいないか。	
	子ども中心で仲間の獲得に納得できるか	6年目(子どもへの力に気づき、その影響で何かやってみる)20	子どもも思っているより何十倍も色んな事考えたり出来たりすることにはまず気づくこと。その面白さを親が気づくこと。子どもから影響されるときはなにかやってみようかと思う。	
		17年目10(子どもの育ちへの努力と仲間の獲得に納得できるか)27	「休めと言われ負担」「こういう用意してと言われる」そういういいことが隠れていっちゃう。文句ばかり言うよりお母さんが精神的に健康で過ごせて子どものためになるならこの園でなくてもいいのかもしれないと思う家庭もある。人によって感じ方が違うんだと思います。子どものためなら努力を惜しまないなら、大変だけど仲間を得られるし。そう捉えられたら良いと思う。	
	保育に関わる時間マネジメント	作業の効率化	6年目(共働き増加による手作業の見直しと効率化)6	クラスの写真販売のやり方など、今は違うやり方がある。昔のやり方がある園で大切にしていること、いいという人がお母さん達の中にもいる。具体的な手作業を時間を共有するという人がある。大事なんだけど、全部それでやると共働きが増えているから、それだと成り立たない大変だと思う。
			6年目(本質の不変さと時間の工夫)7	そういった事が大事なもわかるけど、本質的なもの、本当に大事なものは何か、そういったことも話し合っていると思うんだけど、そういう工夫はしていないのかなと思う。
		母親の就労形態と子ども中心の保育参画の折り合いの難しさ	17年目7(仕事の調整への配慮と子ども中心の折り合いの難しさ)21	私たちが会社でお母さんたちがどんだけ都合つけるのに調整しているか見えてないから配慮しなくてはいけないけど、やっぱり今は子どものこと、少しでも早く帰れるようにできるような声掛けをこらもしながら。なかなか、新しい新入園の人たちには根気よく伝えたいかなと難しいのかなと思っています。
		育児参画との折り合いの模索	17年目9(制度利用と子ども中心との解決策の模索)25	友人がいろいろ常勤で、会社の中で子どもがいるから早く帰って下さい、制度使っていますからと当たり前のように帰られると周囲の人がその分働くことになるって言うてた。色んな事言われたりされたり働くスタイルを求められ、そういった背景を見ていかないといいけないが、子どもを一番に、ここはこういうふうには出来ません。こうやって見たらどうしようかと解決策を面談したりしながら一緒に考えながらやっています。
協力する姿勢を整える親	協力的で子ども中心の親	⑩年目5 関わる親の特性 8	もともとしっかりした人多い、ある程度大変なのはわかっているから入園している。ある程度前回はできていたと思う。ある程度書かれていると思う。聞いた話では、他の園では出汁を作れない人が結構多いって。その話を聞いてそこまでの人はいないなって、援助を必要とする人はいないと思う。そこまで切羽詰まった人たちは少ない。	
		10年目2(父親母親が保育環境の設定に協力的)2	すごく大きい存在だと思う。短大の友達に聞くのと保育園で働いているお父さんお母さんが預ける場所だから、普通他の園は協力してもらうことすら考えたくない。本当にお父さんお母さん協力的だよわって言われる。園外・園庭にしても道具にも保育士だけでこれだけのもの出来ない。	
		11年目8(頻繁なお弁当づくりでも子どもの喜ぶ顔でアドレナリンがでる)21	年長とか上がる頻繁に園外のお弁当作りとかあるんですけど、子どもが喜んでいい顔して帰ってくる、次もって思うし。一歩頑張った先に楽しさがある。	
		3年目(子ども中心への感謝としての関わり)9	子ども中心でいうか、子どもにここまでしてくれる保育園というところで、僕たち私たちが何かできないかという意識の中で、勝手なおかまじい予測なんですけどお手伝いして下さっているのかなと。	
		3年目(保育士の誠意への共感)19	保育者がどこまでやるかっていうのも大きいんじゃないかな。どこまでやっていると、誠意は伝わるのかなと思う。	
	ワークライフの調整能力を持ち保育へ感謝する親	⑩年目8 短時勤務は関わりが多く持てる19	議事録を眺むんですけど、想像でしかないけどフル回転で私たちのような時間帯で子ども育てるは無理じゃないですか。そういう人達は参加はできないけど、ある程度短時で5時で終わって迎えきて、その中でやっている人たちは結構多いと思いますけど。	
		10年目2(親のワークライフバランスの調整能力と保育への感謝)3	仕事があって家族や保育のことも仕事みたいにある。すごいな。できないな。先生達に「大丈夫？いつもありがとうございますって言うてくれるけど、朝から晩まで休みないでしようってずっと思われてたけど。いやいやいやって。私は保育園のことだけやってほしい。園からもお母さんの会からも色々要求されるのに、おに自分の仕事もあって家に帰ればお腹すいたと子どもが言うし汚れ物もいっぱい持って帰って、お父さんお母さん見てると、いやーって。	
	関わりへの慣れとワークライフとのバランス	関わりは初めは負担だが子どもの姿を見て少しずつ適応し満足感を持つ	⑦年目3 少しづつ保育に関わっていく親5	すごくいいなと思って入ってきても、はじめから積極的に関わる人はごく一部。子ども周りの子どもの姿を見て少しずつではあるけれど色んなこと、保育園に協力することで保育園が好きになって、我が子が可愛くなって、他の子も可愛い。だったらもっと保育園に関わる。
			2年目7(初めは負担だが、経験者は積極的に参加する)18	経験してきた人たちはそれがわかるから積極的に参加している。初めての人は負担に感じることが大きいかな。
			2年目6(最初は負担があり、大変さの中で満足感がある)15	大変さの中にこの園に入れてよかったと。最初は大掃除とかなんだと、負担感がある。
多忙な中でのワークライフバランスと参画のやりくりの大変さ		3年目(新入園の親の環境への適応努力)14	年長で新入園の方。今年いて大変そう。頑張ってるって行っている。たぶん自分の中でこういう思いで保育園がやっているってことはわからないまま、ちゃんと準備して下さっている。	
		17年目3(多忙な中での父母の参画)7	お母さんお父さんたちって忙しいって思っていたので。こんなに来てくれるんだとびっくりした。ここにはこういう思いがあるんだと。	
		3年目(親達の関わり方の深さ)5	実家の保育園のお手伝いとか少しはしてたので、どこまで親たちが関わるの見たことない。他の園でも多分ないんじゃないかな。	
母親の参画の多さによる子どもへの影響		2年目6(仕事、家庭、子ども、保育園でのやりくりの大変さ)14	仕事のこともやり、家庭での生活、子どものこと、保育園のことであまり器用じゃない人は時間をうまく使えずやりくりできない人は大変ではないか。	
		17年目11(第一子での家庭と保育への関わりの大変さ)28	初めての赤ちゃんと常勤で働いているお母さんですけど、「懇談会はある、自分も輪廻になってないのになんで保育園のことをしなきゃいけないの。」当時の連絡帳によく書かれていたと。	
		3年目7(パザーの売上を目指す母親の向上心と責任)13	お母さんは去年より良いものをと向上心がある。焦りから責任を負ってしまうところがある。金額ではないが去年よりは結果をめざし頑張ってしまう。	
		3年目7(デバイスに取られる時間と子どものお話し行動)12	やっぱり泣いて登園したりすると、お母さんがパザーのリーダーだとスマホやパソコンをずっとしてたりして、便利だからこそ、毎日気をとられる。子どもが私を見ては試し行動している。	
保育参画と生活バランスの見直し	6年目(大変さは子どもへ影響するため親をねぎらい、感謝する)4	保育士としては、お母さんはお家の中が大変だと、子どもにすぐ出てくるので、頑張りすぎている人には声をかけたりしている。お母さん達は思いを持ってやってくれているから無理しないで言いつつ、有り難いと思う。		
	3年目6(子どもの不安定時、親の関わり時間の確保)11	土日園にいた。限られた時間しか子どもと過ごせない中でどうなのかと思いますけど、子どもが不安定になったりするときには難しいと思います。		
		6年目(保育参画の荷重と生活の見直し)5	そうですねって生活を見直してくれる人もいます。それはいいけど責任のあるポジションにいる人はやりすぎちゃうのかなと。パザーの話で言えば見直しつつも、負担減らしたり効率考えているのだけ。ベースにあるずっと培われたものを無視し出来なくて変えづらいというものもあるのでは、ちょっと引いてみているのでそう思う。	

14

46

⑧親へのサポート体制と保育の協働過程の深化と相互理解	自己開示しやすいサポート体制作り 自己開示できるコミュニケーションへのサポート	自己開示できるコミュニケーションへのサポート	⑩年目10 援助希求し自己開示するコミュニケーション 27	こちらがどうぞどうぞと言うより、いろいろ考えている人が一歩踏み出す世界、もっと親がSOS出せたらいいですね。そうすると、人伝に広がっていくのかな。問題を開示していき、コミュニケーションが大切。
		サポートに必要な親の全体での情報共有	3年目男性6(コミュニケーションによる適応への支援)15	まめにコミュニケーションとって、表情とかよく見てどんな状態なのか気にしながら。あらかじめやることは早めに教えています。
			②年目8(いいことも悪いことも全て話す面談)22	何かあったら面談してくださいと声にしてくれる。いいことも悪い事も、心配な事も全部。
			⑩年目7 担任以外での対応可能体制 16	その人知らないからという無作法なその人を傷つけるような言葉でないように、逃げない対応、そういうことを含めて、私たちは意識していかないといけない。担任がいない時間帯のお迎えだったり、その時に知っているか知らないかでは違う。
			⑩年目7 全体での共通認識 17	あまり積極的に行かなくてもいいと思うが、お迎えの時間は親が見る時間。どうしてもフォローしないといけないことあるので、そういう時の意識は持っておいた方がいい。共通認識を確認する事が大事。この先生達は全員の子どもの名前知ってますよね。それと同じことなのかと思います。常勤はある程度の時間がきたら全体を見ますし、共有はしていると思います。
	保育士と親による保育参画への仕組み作り	⑩年目7 支援の必要な人を情報共有 15	乳児クラスなので親と子どもはつながっているのと同じぐらい見る。子どもの様子話してプラスのお母さんは今こういう感じだと確認している。全体の打ち合わせでも、フォローが必要な人、トータルして気をつけたほうがいい人こういう状況ですと、報告しあっています。	
		3年目9(保育士との情報の共有化)19	相談されたお母さんは、保育士に「どうしましょうか」と言ってくれる。保育士の知らない情報が入ってくる。	
		②年目7(必ず誰かが考え、孤独ではない)18	そういう感じではない。必ず誰かが考えてくれる。そうなるって保護者はこちら側は結構お迎えの時とかなんとなく感じたりすることはあるの。	
		②年目8(熱量があり率先する側と参加しづらい側の把握)16	たまに聞きますね。全体の打ち合わせで共有してくれる。今年の年長のお父さんお母さんは、協力しきれないところあるみたいで。ガッツリしているところはあるけど参加しづらいところあるみたいですね。つながりのある一塊りのお父さんお母さんと熱量違うというか、ガッツリしている人など率先してくれる人だとそうだねそうだねとやってくれる人たちと。	
		②年目6(どう巻き込むか保育士と相談)17	あの人は、あの人はじゃなくて、どう巻き込んでいけるかなとバザーのグループのお母さん達と話し合っているみたいで。どうコミュニケーションとろうかとか話したりベテランの先生に相談しているみたいで。変わっているかどうかはわからないけど。	
	サポートされる側からサポートする側への進化	⑦年目6 子どもの存在による周囲への巻き込み 15	子どもがいる事で自然と周りのお父さんお母さんを巻き込んでくれる。子どもがいるからこそ、経験させてもらえる事、あの時経験したから、物事が違って見える。	
		2年目6(時間が経過し、保育園の意図を理解し参加する)16	年数を重ねてこういことだったのかと保育園の意図をわかってくれ参加してくれる親が多い。	
		10年目8(困って助けられた自分が次は助ける側)14	多分助けて、今困ってると言える人がいるのかな。誰かに言える。困った時に困ったと言ってもいいのかなと思える感じのかな。園にきて間もない人に「どう？」って言える。今まで自分もしてきてもらったこと。	
		⑦年目5 我が子と同じように接したお返し 12	スケートで手伝いに行った母は、他の母が我が子を自分の子のように接してくれた。だから私も我が子のように接する。	
		経験者の提案型コミュニケーション	3年目9(上の人がうまく動かし、話す場がある)17	上の人がちゃんと伝えている。すぐ言える、ためている暇がない。毎日あっているのに話す場が多い。私も親だったら一人でほっといてよと思うことがあるかも知れないけど、お母さんたちは家庭でのナイーブな事も話している。言える関係性。
3年目13(母親・父親懇談会での適任者の確認)31	適材適所。キャラクターを見る場が必要。園で主催するものもあつた。母親懇談会、なかなか来れないお父さんたちの父親懇談会とか、こんな時間までやっているの。			
3年目9(大変な人に休息する提案)18	大変な状況にある人に対してはうまく上の人が動かし続けてくれる。大変だから休みにしてあげようか。在園1・2年の母は有り難い。			
3年目10(内向的な人を周囲でさり気なくカバー)20	内向的な人もいるかも知れないですけど、みんなカバーしあっている。知らない間で教わっている部分あるのでは。			
⑦年目7 さりげない大変さの共有 16	抱えているお母さんいると思うんですけど、大変さも共有する。自分から大丈夫と積極的に声をかけるわけではないが、経験者が子育ての大変さを気さくに「あの時は大変だったんだよね、小さい子がいれば聞かれなくてもかじさると思うけど、いつか聞かれる時が来るから。」			
保育士と親の保育上のコミュニケーションと相互理解	親の保育への感謝の気持ちの表出や提案と保育士の受け入れ	②年目8(子どもの感想や保育士への気遣いなど書く親)21	絵本ノートとかで直接いろんな感想書いてきてくれる。子供達の表情見て感じた事とか具体的な指摘とか書いてきてくれる。海から帰った時、子どもがこんなことを書いていたとか。先生達の労働時間考えてくれる人いますし。	
		3年目(親と保育士の子ども中心の議論)13	でも美術の時間に「こういうふうにはやたらもっと早くできるんじゃない。」嫌味じゃなくて言ってくる。僕は違うと思えば違うと言っちゃ。そういう親が全てではないですけどね。言いやすいものもあるかもしれない。生意気なのでテンション上がると言いたいこと言う。たまに衝突っぽくなる。結局子ども中心のこと考えとより良くしたいから悪く考えていない。	
		⑩年目5 提案と受け入れへの感謝 12	もともとの基準が高いのではと思う。その中でこうしたいこうしたいと言ったことを園が受け入れてくれたことに感謝して卒園の時に書いてくれた。そういうふうにしてもらって、お母さん成長されたらうな。こちらの配慮が足りなかったなと思うことも、そういう事がわかって、ありがとう感謝です言ってくれたお父さん。2年前はあのお父さん子どもと一緒に寝てたんだという人がそう言ってくる。同じ視点で子どもを理解しているんだなと、おがましけれど成長されている。	
	子育て上のコミュニケーションによる相互理解	3年目12(双方の話し合いで、思いや様子の相互理解)28	お互いに言い合って作っていくのは良いなと思った。日々の思いや様子がわかる。	
		②年目8(子育て上の相互の気づきと影響)23	こちらも気づかされる事たくさんあるので。影響しあっている。大きいと思う、子どもを見ていく上で。	
⑩年目6 親と保育士の振り返る力 14		もともと振り返る事ができるのではないかと、私達にも求められているもの。振り返る事大事だと。打ち合わせを大事にしているのが前提のこと。		
⑩年目5互いに成長し合う 13	そういう姿を見ると自分も成長しなきゃいけない。前進しなきゃいけない。心が洗われるというか。			

⑨父親の保育参画への仕掛けと子育ての深化による好影響	園、母親から参画への仕掛けと、仕事と調整し関わる父親	園、クラス、懇談会や書面で、保育への関わりを呼びかけ父親が子どもと関わる仕掛け作り	3年目(クラス、又は園から父親を集める)8 ⑦年目3 懇談会や書面での参加呼びかけ 7 ⑩年目8 母親のサポートにつながる父親の参加を意図した仕掛け 24	海だと、クラス単位で呼びかける。張り紙をする。保育園や園バスなど。連絡メモや口頭で「お手伝い行けます」。園庭の池作りだと園のお手紙として出して提出してもらおう。全クラスでどれくらいお父さん集まるのかというのをやっています。 キャンプは父親懇談会があってそこで投げかけて話を進める。園行事はアンケートとかお手紙で参加呼びかける。 お父さんはもつと業務だと思う、その中で花火や池作って力を出してくれる。こちらが意図しないとなかなか動いてくれないかな。どの家庭もそうですけどイクメンとか、あえて積極的に参加できるものがあるのかな。お母さんがバザーで忙しい時に、お父さんが他の子どもも見る。そういうこと減多にないですね、こういう状況にならない。実際、子どもを見るのはお母さん主流です。共働きでお父さんも見る事が当たり前になってきているけれど、軸はお母さん。		
		仕事を調整し保育に関わる父親	3年目(仕事を調整し関わる親)7	普通に働いてるのに何でここまで保育園に関われるのか、同じ働く身として。仕事に都合がつけやすい人が結構頻りに来てくださる。平日休みの人や有給使ってくれたりして、海に行くお手伝いしてくれる。		
		母親の誘導による父親の参加と、仲間と出会い深いつながりでの活動	10年目6(母の誘導で父が深いつながりの仲間を得て活動が広がる)10	お母さんが保育園を知って、ぐいぐい来る人が多いかな。お父さんは保育園あまりイメージつかないまま来るのかな。関わらず、関わることで気づくところに、例えば、お手紙きたから行かなきゃとか園に来てみたら園庭の池とか見てたかのお父さんがいて、経験しているお父さんのこと知る、顔を合わせて子どもたちのために活動して、その1日が次につながっていくのかなって、お父さん達が次は花火と、きてみて知る感じがある事がある。親たち同士強いな、つながりが深い。ここまで大人になって深い関わりをする存在に出会えるとは思わなかったとノードに書いてあった。上っ面な簡単な軽いものじゃなく深い存在。		
	経験者からの参画の仕掛け	経験者、リーダーの魅力と存在感で、参加が楽しい	2年目3(踏み込むと父同士で話す機会と仲間関係ができ、次につながる)5 3年目13(リーダーの魅力で新しい人が入る)30 3年目13(引張る人の存在の大きさと行動する楽しさ)29 6年目男性8(長い人が受け入れ、入れば楽しい。)14	2年目3(踏み込むと父同士で話す機会と仲間関係ができ、次につながる)5 3年目13(リーダーの魅力で新しい人が入る)30 3年目13(引張る人の存在の大きさと行動する楽しさ)29 6年目男性8(長い人が受け入れ、入れば楽しい。)14	もともと関わり少なかったお父さんとかは、その機会に足を踏み込んでみたら、お父さんたち同士でもよく話す機会ができて、そこでの仲間関係とかうんと強まったことあったと。そうするとまた園に来てみたりとか。 花火の親父とかに惹かれて新しい人が入ってくる。そういう人がリーダーになると思いますし、みんながわかっているんだな、盛り上げてくれる人。 引張ってくれる人の存在大きい。やってみると楽しいよと。 長い人がうまく、色んな人がいるからと受け入れようという気持ちでいてくれる。中に入るまで、入っちゃえば楽しいこともたくさんある。	
			仲間の存在	仕事以外の友達との交流	17年目5(父親の友人と距離感)15 ②年目7(父親の見捨てないという距離の保ち方)20	お父さんの中には「大人になってから友だちができた」という人もいる。くつきすぎちゃってその中でだけで盛り上がり、そのノリに引いちゃったりする人もいる。うちはいいですか。うまく引張ってくれると良いんですけど。 お父さん達のつながりは、男の人同士の距離の保ち方。見捨てはしないけどという感じ。
					子育ての深化	自然体験活動による大勢の子どもと関わる稀有な機会での子育ての深化
	参画維持の仕組み	保育士と経験者の父親から活動の楽しさを伝え、新規参入を図る	⑦年目3 父が園庭キャンプの経験談を話し参加を呼びかけ 8 ⑦年目4 経験者の楽しさで巻き込む 9 6年目(裏山のロープ作りを育休中の父親に呼びかける。)22 6年目男性12(他のお父さんへの呼びかけ)23	キャンプはお父さん達が主催してくださるもの。園庭キャンプに至った経緯を話す。経験者の父親に話してもらおう。年長に行ったら2泊3日のお泊り会があると話を。一度経験したお父さんは、やっぱりまた子どもに経験させたいのと、自分が楽しかったから、参加して楽しみたい、やろうよと。 保育者側だけの話だったら、そこまでやってくれるかな。経験したお父さんが話すことで、大変だけど楽ししい子どもを見る目が変わってくる。初めてのお父さんは興味を持って聞いてくれている。巻き込む。 裏山が手つかずだった時、年長のお父さんが育休中だったので「山のリーダーになって下さい」と声をかけた。ロープとか滑り台とかできるみたいなと。 そしたら平日の朝から昼まで、来れる人集まって下さいと他のお父さんに声をかけてくれた。		
			子ども中心の子育て	楽しさだけでなく子どもの生活重視による豊かな時間の提案		
	父親の存在の大きさ	父親の存在で子どもは意欲的になる 父親の保育参画は、園、母親、子どもにとって豊かな時間を過ごせ、良好な影響			2年目3(子どもは父親の存在を確認する)8 2年目3(父親の参加で子どもは意欲的になる)7 2年目4(父親の関わりによる母親・家族間の良好さへの影響)11 2年目2(父親の関わりは保育園・子ども・家族にとってプラス)4	子どもはどちらかというとお母さんとのつながりが強いけれど、お父さんの存在を確認するみたい。 子どもはお父さんが来るって、嬉しいことだと思う。子どもたちの中には、園庭キャンプにお父さんが来てくれたのはすごい印象が残っているみたい。「もう一回やりたい」と。 この園はお父さんをよく目にする。お父さんが園に関わっているとはお母さんは他のことができる。多分うまく出来ている家庭が多いのではないかな。 一年通してやってみて、お父さんが保育園で子どもたちと一緒に関わるのは大変だけど、保育園、子ども、家族にとってもプラスになると思う。

⑩保育参画による コミュニティ形成と 親の成長	悩みを Ausdruck 出来る親密なネットワークによる親の主体的なコミュニティ活動	親の主体的な変化	17年目11(時間とタイミングで人は変わる)32	人って変わるんだな。変わらないまま卒園していき人もいなくなるかもしれないけど時間をかけてタイミングを見て。引いている人も変わるタイミングある。不思議だな。	19
			17年目11(仲間がでかき視点が変わる)31	仲間ができて、参加して違った見え方がそうだったのかもかもしれないし。	
			3年目10(雑談の中で秩序への気づき)21	患病のはけ口や大変さだけでなく、ルールある中で「そういうことね」。雑談の中になにか新しい発見があるのではないかな。	
		話すことでのストレスコーピング	6年目(大変なことを一緒に経験し徐々に変わるお母さん)11	お母さんたちは大変なことを一緒に経験してゆつり変わってゆつり変わっているんだと思う。バザーで責任ある立場とか園のことをすごく大切に考えているからお母さんがお母さんになっていく。	
			3年目8(地区会での親密さと話でストレス発散)15	地区会で下の名前呼び合っているところが驚いた。親密感がある。忙しい中でたわいない話をするのがストレスのはけ口になっているかも。	
			10年目6(母同士、様々な感情を持ち築いてく関係)11	お母さんもバザーで嫌な気持ちになることもあるだろうけど、お母さん達同士の築いてく関係。	
		肩を組み良いこと悪いことのでつたり合える密な関係性	②年目5(密で肩を組める仲間)14	圧倒的に密だと思います。肩を組める仲間になっているように見える。	
			2年目8(一つの目的に向かって懸命にぶつかる人間関係は今の世の中ない)19	一番は人間関係なのかな。人と人が関わって一つの目的に向かって、一生懸命ぶつかりながらすることは、今の世の中ないと思うので。	
			17年目5(ぶつかり頼れる関係性が負担を軽減)14	やっぱり和ができたことでもよかったですと大変な時に頼り合えるところでは軽減していると思う。表面的な付き合いではなくぶつかりあがあるからこそ。挨拶だけの仲では出来ないこと。	
		子どもを預け合える関係性	10年目7(人間と人間は、良いこと悪いことがある)13	きっと全部が全部よかったですと終わってない。きっと人間と人間だから。私たちが知らない、悪くなっちゃったとか。あるんだろうな。園で過ごしている子どもたちが何かあるわけでもないし、園になくなっちゃったとかもないし。	
	⑩年目8 人と関わり時間を共有するとつながる 22		自分を振り返ってみても大変なことはみんなでもやらなきゃいけない。めんどくさいと思ったり、からかろうとそこで絆が生まれるのかなって。そこで人と関わって、関係性も広がるのかな。そういう時間共有することってすごく大事って思う。		
	⑦年目9 子ども優先に賛同するネットワーク 21		この園は昔から変わっていない、今に合わせない。保育園だから子ども優先。親優先の園が多い中で、そこがぶれぬいい。選んでくれてるからネットワークができていくのかな。		
	相互扶助による孤立や孤独のない子育て	6年目(知恵を出し合い達成を実感するコミュニティ)9	どうしても色んな人とコミュニケーションとらなれないといけない。自分もできないことがあって力を知恵を出し合えば一緒にやっていたら出来たということを実感できる場、親も子どももそこをスキップしないように、手作業や顔を合わせるのめんどくさいこともあるけどコミュニティを保っていかなくちゃいけないのかな。		
		17年目4(自己表出し、子どもを預け合う仲間が支え)12	そこに意味を見つながら、泣いたり怒ったりしながら仲間ができたから患病を言い合ったり預け合いができるようになったり、つらいけどそこで得た仲間が支えになったりするのかな。		
		11年目7(母親同士での話と預け合い、仲間意識を持つ)16	自分自身は、色々な人が子どもを見てくれて色々な話をしてくれる。色々なお母さんが見てくれていたのだと仲間意識を持った。		
	子どもの育ちへの認識	6年目(孤立せず、助け合いによる心理的負担の軽減)12	少なくとも孤立はしない。軽減されたかどうかはわからないけど、一人ぼっちにはならなくて助けられる人が出来たのであれば、結果的に心理的負担は軽減されているのかな。		
		3年目男性7(周囲の気配りによる孤独孤立のなさ)16	孤独感はない、孤立もないのかな。新入園の方のこと、他の人が結構気にして下さっている。		
		⑩年目8 同じ目的の仲間といると孤独を感じない 23	だから、子育てって孤独って言われがちじゃないですか。核家族化してるし、だから、この園にいて感じないって、いろんな人と話せるから気が紛れてすごくいいって人もいる。同じ目的に向かっていけば相互作用になる。人は一人で生まれて死ぬから孤独なんだろうけど、それとは違う。自分はこれっていいのかという客観性が得られる。その人で時間軸は違うけど、そういうところではお母さんの視点に立つのはいいのかな。		
	子どもを通した育ちの成長	子どもを通した肯定感や視野の広がりの気づき	11年目7(保育園での心理的負担の軽減)18	そういう意味では、保育園にいては、心理的にほかに助けられている。	
11年目10(ビデオで自分の子だけか、全体の子も達を見ることが出来る)27			ビデオで自分の子だけを見ているのかワイドで見ているのか違う。		
11年目10(子どもが可愛いと思うきっかけの仲間が心強くて大きい)26			仲間がいる心強さはありがたいこと。他の子どもが可愛いと思えるきっかけを作ってくれところは大きい。		
表出しあ育ちあう希少な土壌	表出しあ育ちあう希少な土壌	⑦年目5 他の子も我が子かわいい 11	園庭キャンプが終わった後の反省会で村長のお父さんが言ったことは、周りの子ども達が可愛い。他の父も我が子のように関わってくれている。お家に帰ったら、我が子が今まで以上に可愛く思った。		
		2年目7(大変さを乗り越え、自他の子どもの様子を知り、心に変化が生じる)17	自分や他の子どもの様子を知れたり、心に変化があったりとか、先生達から聞いてきたことだけで大変さを乗り越えたいと何も生まれないと思う。		
		3年目(他の子を見て我が子への視野が広がる)11	他の子を見れるのも大きいと思います。山とかスケートとかで自分の子以外の子見れる。自分の子でその子しか見てこなかったら、他の子見ることによって普段見えてきた自分の子に対して視野が広がる。		
役割へのやりがい	役割へのやりがい	2年目3(園で色々な子どもとの関わりによる我が子への再認識)9	お父さんたちは、家の中だと自分の子だけしかわからないけど、園に来ると色んな子どものことがわかる。そこから改めて自分の子がどうなんだと振り返ることができる。		
		⑦年目6 子どもからの気づき 14	大変と思う。自分が親になっていないんでわからないけど、子どもに教えてもらって、育ててもらって。大人同士だと気づかないんだけど。子どもがいてハッとする。普段目が見えないものに自分の目がいく、当たり前のことが当たり前でない事、人として成長できるのではないかな。		
		⑩年目9 子どもの育ちに気づきを得ているか 26	子どもどういふふうに見ているかがポイントと思う。範囲にきた親は、子どもがずっとテレビの前にいることを心配していた。感覚の問題なのかな。引っ掛かりを感じられるか。忙しすぎたら通り過ぎてしまう。大事に守っているものもある。		
子育てを通した成長	子どもを通した肯定感や視野の広がりの気づき	17年目10(発見を仲間と共有し子育てに良い作用)26	面白い発見とか子どものこととかここで経験できる。仲間と共有できることがプラスのことで子育てに良いように作用していくと思うが。		
		2年目8(他者理解と自分の価値観の広がり成長する)20	ぶつかり合って色んな人と話さず中、大人になって今さらかもしれないですけど、自分の価値観が広がったりとか、他の人のことが理解できるようになるとか。人間的な魅力があると思うかな。		
		10年目3(仲間と我が子との自然体験による肯定感)4	すごいと思う。こちらからしたらすごい助かる。園外で山に登るときにきていたけど、一人ひとりに気持ちを聞かずに、「来てみないとわからない、山の雰囲気とか、子どもたちと過ごせばんどに来て良かった」と言われる。準備とか大変だったと思うけど「仲間の中にいる我が子。同じ歳の子の中にいて1日が過ごせて良かった」と言ってもらえて。		
子育てを振り返る時期の到来で、感謝の気持ちを持つ	子育てを振り返る時期の到来で、感謝の気持ちを持つ	10年目9(表出しあ育ちあう希少な土壌)18	親、私たち、子どもたちは保育園に守られながらぐちゃぐちゃに育ち合ってる感、園長が作ってくれた土台があるからだけ。後から働きに来た私たちが子どもにもみくちゃにされて、親にもみくちゃにされて、笑みまくって泣きまくってぐちゃぐちゃになっているけど、それができなくて少いんだと思う。		
		⑩年目8 大変な中での役割とやりがい 20	仕事なしで考えてみると、保育に欠けるから保育園で仕事を持っている人が前提なんですけど、お母さん達の役割ややりがいがあるのかな。いろんな活動とか。あくまでも客観的にいう意見です。親の立場になって考えたら「先輩」みたいなことちゃうと思うんですけど、保育園の中でもよく出てくる大変な中で、楽しい事が見つかるみたい。それと一緒に頑張りたいんだけど、それって後から思う事だと思うんですけど、		
		⑩年目8 やりがいを持ち続ける 21	すごいマックス働いている人たちがいるのは、仕事にやりがい感じている人もいると思うんですけど、生活がっていう人たちもいるから、一概に言えないけれども。平たくいうと、歳をとってもやりがいのある仕事を持つって大事なかなって思うところにつながっていくと私は思う。		
子育てを振り返る時期の到来で、感謝の気持ちを持つ	子育てを振り返る時期の到来で、感謝の気持ちを持つ	⑩年目8 後から振り返る良かったこと 18	後から考えたりする事なのかな。いろんな声聞かえてきますよね。		
		17年目11(第2子で、振り返る余裕)29	「あの時そう思ったけど、2番目の子どもが生まれて育休中に子どもを連れてお姉ちゃんがいる部屋に行った時、その時のおもちゃを見てこういう遊びをしていたんだな」と。余裕ができた。		
			17年目11(卒園時、大掃除で心を込めきれいにする)30	「今になってわかったり見えたりすることがあった。大掃除の時心を込めてきれいにしようと思った。」と卒園の時に書いてくれたお母さんがいた。	

⑩保育参画による コミュニティ形成と 親の成長	保育園から学童 期へのスムーズ な接続による関 係性の継続	卒園後の親子でのつながり	11年目7(クラスが上がるに連れどの子 も可愛く卒園後も繋がりが嬉し。)17	クラスが上がるにつれどの子も可愛く思えてくる。卒園してからも繋がるので嬉しいと思う。
			6年目(親同士の小学校でのつながり)13	1年・2年保育だとそこまで関係作れないままの人もありますけど、親同士とか誰かしらとつながって小学校入ってからも繋がりを持っているんじゃないかな。
		卒園児の園への高評価と音 ちへの感謝	6年目男性2(卒園後振り返り子どもの育 ちを感謝)3	日々、自転車操業で、家にいると冷静に考えることが出来ない。子どもが1人卒園し振り返り をすることで、子どもの育ちを後から感謝できた。
	他者への紹介による好事例の広がり		11年目3(下の子の入園により、園のす ばらしさを語る)7	だけど今になって下の子が園に入ると疑似体験をし、いろんなことを語りだしている。自分の 通っていた園の素晴らしさに気づき、いい時間だったんだなと思っている。
			10年目9(顔と名前わかるオープンさ) 17	世の中的にはこんなオープンなのはって言われるかもしれないけど。
			2年目9(他者への紹介が入園につな がる)21	新しく他の園から入ってきた人が他の人に紹介し、入ってきたことがある。
		2年目9(人づてでの好事例の広がり)22	人づてで広がっているのでは。大変だけどいいところあるよと紹介しているのでは。	
⑪保育参画拡大 の課題	つながる関係性 と相互の親密性 の少なさ	小学校での新たなつながりの 少なさ	11年目7(小学校は遠くて親の自分が馴 染めず苦労した。)19	小学校は遠くて、親の自分がなじめなかったので苦労した。何かをやるわけではないだけ れど。
		他の園の親情報の少なさ	6年目(他の園の親のことはわからな い。)15	大事ですね。他の園の親たちのことはわからないんで。
		親子間交流時の相互の認 証の少なさ	10年目9(子どもの親の顔や名前が見え にくい時)16	友達の話とか聞くと、子どもが遊んでいるその子のお母さんの顔がわからないとか名前がわ からないとか保育園も見えにくくてお母さん同士も見えにくくてとか言って、びっくりした事 がある。
			10年目9(ロードに向かう時代)19	今は連絡網掲載されない時代。隠されていく時代なのかな。難しい事なのかもしれないけど。
		当事者性の程度と圖選 び	6年目(なんで私がと思う人に伝わる か。)21	どういう人に伝えていくかによるかな。なんで私がと思う人だと伝わるかな。
			⑩年目9 園とのマッチング 20	合う合わないもありますね。社会的に今難しくなっている。

6



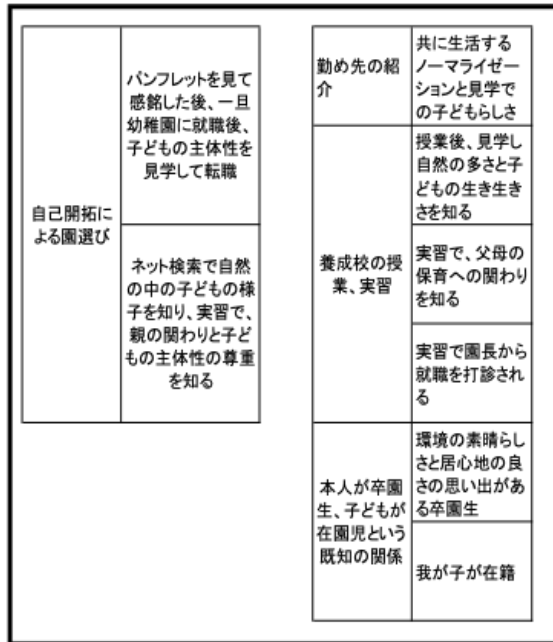
大カテゴリ



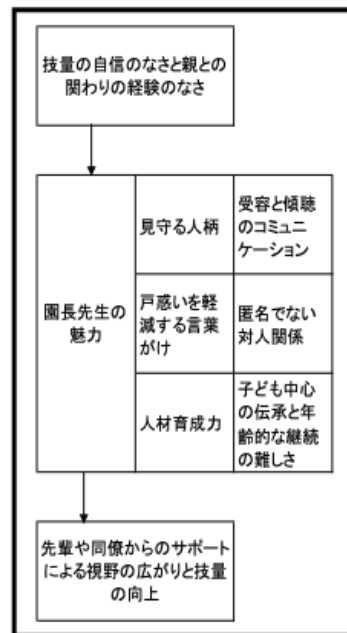
中・小カテゴリ

空間配置と図解化
保育士

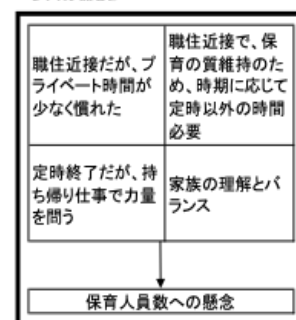
①多様な動機と自然豊かな環境で子どもが生き生き遊ぶ保育園を見て就職する



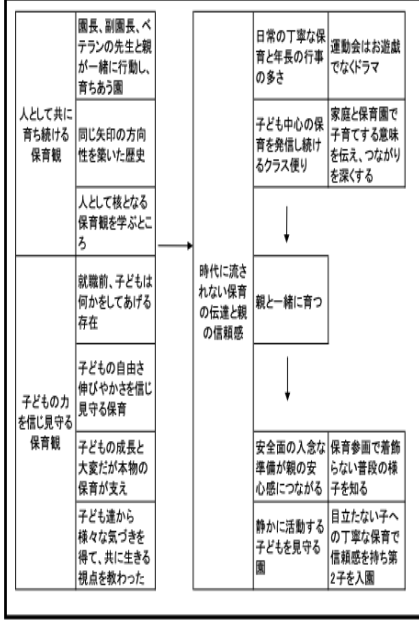
②園長の人材育成と周囲からのサポートによる保育の質向上



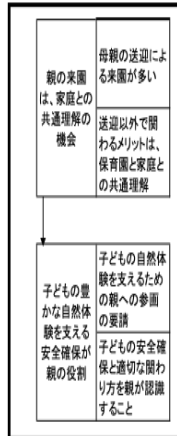
③保育の質維持とワークライフバランスの難しさ



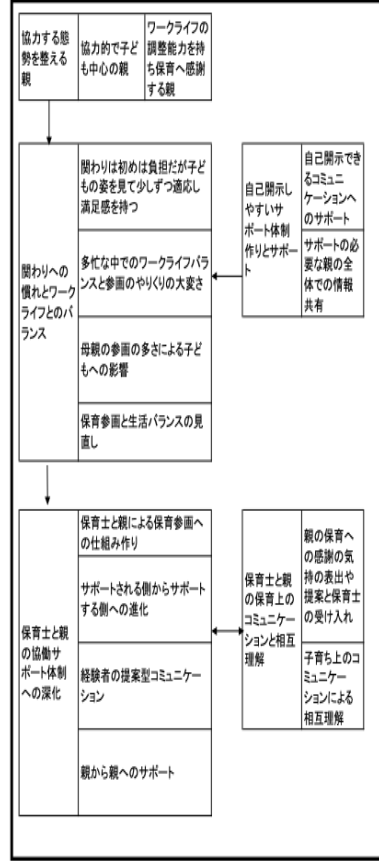
④育ちあひ見守る保育



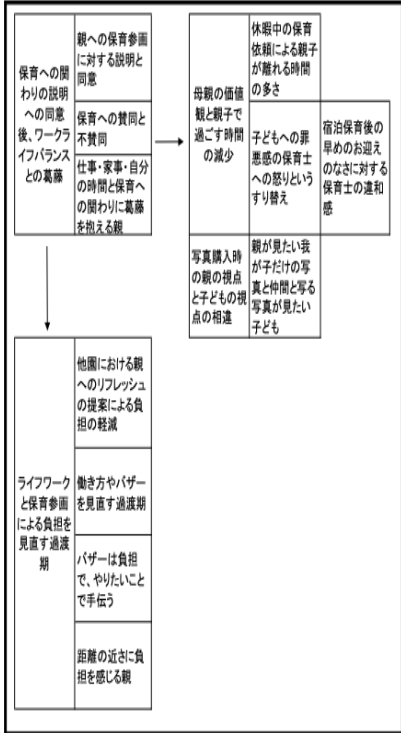
⑤子どもを支える親の役割と保育参画への呼びかけ



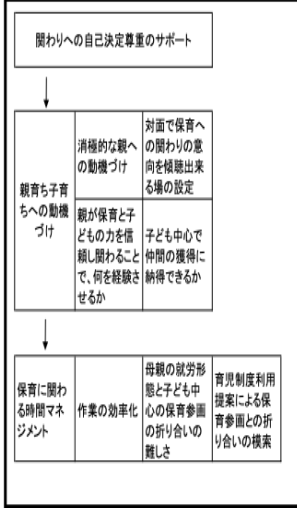
⑧親へのサポート体制と保育の協働過程の深化と相互理解



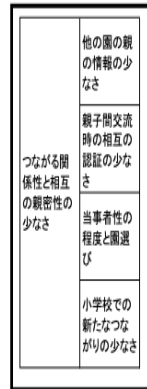
⑥保育への関わりに対する親の葛藤



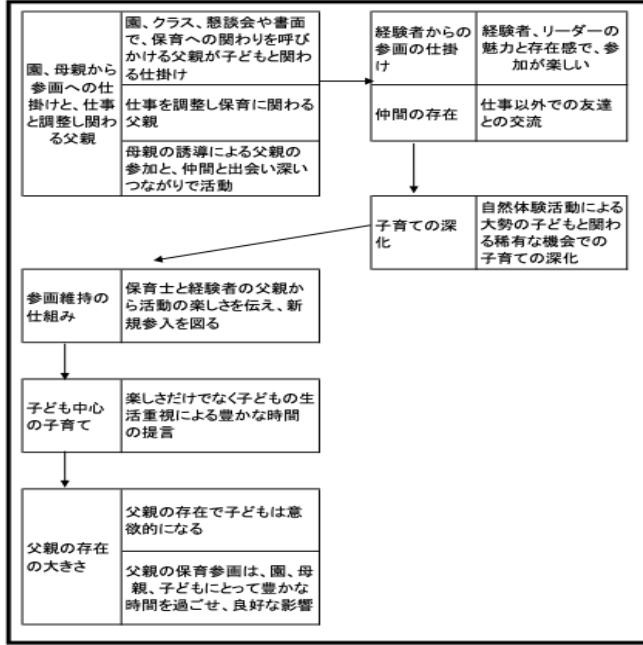
⑦親の葛藤への対応



⑨保育参画拡大の課題



⑨父親の保育参画への仕掛けと子育ての深化による好影響



⑩保育参画によるコミュニティ形成と親の成長

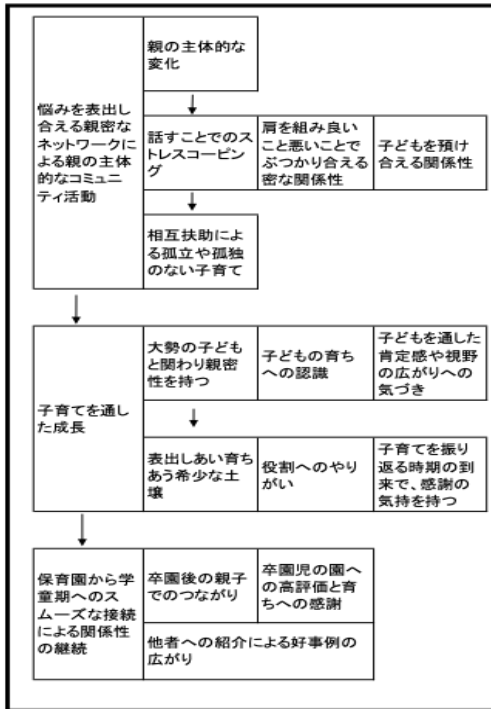


図 3-1 空間配置と図解化「保育士」

第3節 結果と考察

分析の結果、11の大カテゴリー【多様な動機と自然豊かな環境で子どもが生き生き遊ぶ保育園を見て就職する】、【園長の人材育成と周囲からのサポートによる保育の質向上】、【保育の質維持とワークライフバランスの難しさ】、【育ちあい見守る保育】、【子どもを支える親の役割と保育参画への呼びかけ】、【保育への関わりに対する親の葛藤】、【親の葛藤への対応】、【親へのサポート体制と保育の協働過程の深化と相互理解】、【父親の保育参画への仕掛けと子育ての深化による好影響】、【保育参画によるコミュニティ形成と親の成長】、【保育参画拡大の課題】に大別された。以下に大・中・小カテゴリーを【 】, 切片化された発言を「 」で示した。発言者に番号を付した。

第1 多様な動機と自然豊かな環境で子どもが生き生き遊ぶ保育園を見て就職する

保育士は様々な動機でこの園に就職している。【自己開拓による園選び】では、保育士Jの「パンフレット見ていたんです。すごいところあるなと感銘を受けた。」「漠然と幼稚園がいいと思って最初は幼稚園。保育士として深みのあるところとして転職考えて見学した。」など、情報収集したり、保育職のキャリアパスを考えて、「子どもが主体的に遊ぶ姿に、ここしかない」と選定していることが窺えた。【ネット検索で自然の中の子どもの様子を知り、実習で、親の関わりと子どもの主体性の尊重を知る】保育士Gもいて、園を選定する際は、自然豊かな環境で子どもが遊んでいることを重視していた。

【養成校の授業、実習】で就職を検討した保育士もいた。「親が参加してすごくつながりある園なんだなと。いい意味でフレンドリーだなと。文集読んで親が関わっているのがわかった。実習の2週間でもお父さんやお母さんを見かけた。花火の話や園庭の池で、これはお父さんたちが作ったんだよと教えてもらったりして、言葉の端々で知った。」という【実習で、父母の保育への関わりを知る】保育士Kもいた。保育士Gは、大人が子どもの芽を摘まないことを学んでいる。保育者や父母が協働活動をし、子どもが思い切り遊べる環境を作り、見守る保育、すなわち「子ども中心の保育」をしていることを実習を通し学んでいた。「普通の子もいるし障害児の子もとってくれるし(略)」と【勤め先の紹介】で、障害のある無しに関わらず遊びに没頭し、【共に生活するノーマライゼーションの考えと見学での子どもらしさ】に感銘し就職した保育士Lもいた。

【本人が卒園生、子どもが在園児という既知の関係】の保育士もいた。保育士Cは、「当時の保育園のことを鮮明に記憶に残ってて、それって普通のことなのかなって思ってた。他の園に行ってた人達に『よくそんなに思い出せるね』って言われて、やっぱり心に刻まれているんだなって実感した。」との発言から【環境の素晴らしさと居心地の良さの

思い出がある卒園生】が就職したり、【我が子が在籍】する親が、保育士資格を取得し、就職したケースも見受けられた。

いずれも、動機や背景は多様であるものの、保育士Gの「(略) 木や小川が流れて山羊がいて生き生きした子ども。」を見て、子ども中心の保育内容に賛同し就職していた。また、見学や実習を通して、父母の保育参画での積極的な関与や、親同士のやり取りによって、自然豊かな保育環境が形成され、それらの活動が父母間に浸透していく経過を学んでいた。自身について、保育士として子供の関わり方を学び、父母について、保育園が子育ての学びの場となり、保育士との協働活動をし、親同士のコミュニティになっていくことを認識していた。実習で様々な学びを得て就職に至っていた。

第2 園長の人材育成と周囲からのサポートによる保育の質向上

就職したばかりの頃、保育士Dは、「自分の保育のうまいかなさ、人間関係とかは、どこの保育園でもあるのかな。」「最初はお父さんお母さんを見ているだけ。次の年は、こんなにもして下さっているんだということが見えてきた。」から保育の方法や技術に対する不安といった【保育における技量の自信のなさ】と親との関わり方の経験のなさからくる自信のなさを感じていた。保育士Fの「園長は私が落ちているときに言葉をかけてくれて、ちゃんと見ている人がいるんだなと思った」との発言や、保育士Jの「園長先生が焚火に呼んでくれた。こうこうこういう事があって。『気づいてよかったね』と言ってくれた。自分の気持ち、正しかったんだと嬉しかった。」などの発言から、【園長先生の魅力】は、【見守る人柄】、【受容と傾聴のコミュニケーション】、【戸惑いを軽減する言葉がけ】と捉えられた。保育士Kの「私も親も子どもも育ててもらった。何より園長先生はじめ理解があってですよね。だから10年も働けている。」との発言から、園長の【人材育成力】により、保育士としての経験が積み、保育の質の向上が成り立っていることが導かれた。

園長の対人関係のとり方として、例えば、保育士Iの「記名式アンケートとか、隠す必要ないじゃないと。世の中的にはそうじゃない、匿名で出せという丸められるような感じ。隠されない人と人の付き合いができる環境。それを続けさせることのできる園と園長。」との発言から、【匿名でない対人環境を継続する園長】は、【匿名でない対人関係】を持つことで、本音と建前ではない、実直な考えや意見をお互いが話し傾聴しあう環境を重視していると考えられた。この一貫性をもった姿勢が、子どもの保育や父母への親育ち子育てにおいても、何らかの影響を及ぼしているのではないかと考えられた。

「(略) 園長が歳を重ねて父母の会など体力的に出にくくなってきている。園長が元気

にしつこいぐらい話をしてくれたことが、素晴らしいこと、ありがたいことだった。」との保育士Cの発言から、時代が変わっても一貫性を持って、【子ども中心】の保育を継承し続けていきたい、保育の質を維持し続けたいという保育士の保育に対する姿勢の表れと園長の【子ども中心の伝承と年齢的な継続の難しさ】の両側面が捉えられる。

周囲からのサポートについて、保育士Fの「一年目についてくれる先生の人柄もある。パートの先生にかなり助けてもらった。自分のお母さん達世代でいろいろお世話になった。我が子のように可愛がってもらった。人間関係が良くなかったらやっていけない。いいほうだと思う。」の発言から、初任の頃から、先輩や同僚からのサポートを受けていた。その結果、「まだ保護者の皆さんに自分から発する言葉に影響力ないけど。思ったこととかを懇談会の場で自分が思っていることを伝えたりしている。」と、自ら発信ができるようになったことから、【先輩や同僚からのサポートによる視野の広がりや技量の向上】が見受けられた。保育士Cは、「打ち合わせでは他の先生から自分にはない視点を学ぶ。」、保育士Gは、「ほぼ仕事。発見が楽しい。そういう見方があるなど、のめり込んだ。」といった他者から学び取る姿が窺えた。それらのことから、初任時は、メンターなど経験者からのサポート、園長からの声掛けやサポートといった受益が主であり、経験を積んだ中堅は、能動的に主体的に学び、視野を広げるといった自己開拓が見受けられた。このように、保育士は、園長を始め、先輩、同僚からのサポートを受け、保育の質向上を目指し、親である父母への対応をし、日々保育を行っていた。

第3 保育の質維持とワークライフバランスの難しさ

保育士Hの「実習とか他の園は定時に帰れるんですけど、ここまでの保育はそれでは足りないはずがない。定時に帰れなくていいんで、保育内容の方が、勤務時間より重要な。ウェイトは9対1。」という発言は、保育の質維持のため、時間をかけることが大切だと考えていることが窺える。その保育の質の維持のために、親に参画を呼びかけているわけだが、保育士Fの「保育園に自転車に通える範囲内で住んでいる。プライベートの時間は少ないけど他を知らないのだからやっていける。こんなものと慣れた。」との発言から、【職住近接】で通勤時間を少なくし、保育の準備に時間を配分するといった工夫をしていた。

時間契約の保育士Cは「働き方としては今はきちっと定時にあがれるようにしているので、そんなに負担はないんですけども。」というものの、「ただ実際は持ち帰りの仕事、クラスだよりのがあるので、自分の力量のことを思うことがあります。」と、保育士と保護者による協働活動を記録として書く作業が発生していた。園長の書くことの少しの負担が後で大きな喜びになることについては、前述したが、それを物語る場面であることが窺え、

【定時終了だが、持ち帰り仕事で力量を問う】と考えていた。【家族の理解に助けられている】ため、持ち帰り仕事と【家族の理解とバランス】をとることに留意していると考えられる。

単身の保育士、世帯を持つ保育士と立場は様々である。父母の集まりなどに「両方出ちゃうと家が崩れてしまう」との発言から、保育士Eは「母が主に関わり、自分は保育士と父親とのバランスをとる」ことを心がけ、保育参画と家庭生活とのバランスを取っていた。

【保育の質維持】には、入念な準備のための十分な時間の確保が必要と考えられた。それと同時に、【ワークライフバランス】との兼ね合いの難しさが課題となっていると考えられた。

第4 育ちあい見守る保育

この園は、【園長、副園長、ベテランの先生と親と一緒に行動】し育ち合う。保育士Kの「この園と一緒に育ち合うところなんだよと。(ベテランの先生)にふとした会話で教えてもらった。父懇でも話していたと思う。私も育ててもらっているし、子供も育てているし親も育てている。」との発言から、保育士の間で【育ちあう園】と認識していた。保育士Jの「いろんなことあると思いますけど。向いている矢印は同じ。築き上げてきたベテランの先生達はすごいなと。」という発言から、同じ目的に向かうという【矢印の方向性を築いた歴史】があり、保育士Fの「保育観を学ぶところとして行きたいと思った。」ことから、【人として核となる保育観を学ぶところ】であると考えていた。「就職前、子どもは何かをしてあげる存在と思っていた」保育士Cは、【子どもの自由さ伸びやかさを信じ見守る保育】を知ること、【子どもの成長と大変だが本物の保育が支え】になり、【子ども達から様々な気づきを得て、共に生きる視点を教わった】ことから、【子どもの力を信じ見守る保育観】が確立されていったと考えられる。

保育士Fの「クラスによると思う。丁寧に見ているのは同じだが、年長だと活動行事などで比にならないくらい多い。」との発言から、発達段階に応じた保育を行っていることが窺える。【運動会はお遊戯ではなく、ドラマ】であり、【子ども中心の保育を発信し続けるクラス便り】を通して、日常繰り広げられている保育の日常を、【家庭と保育園で子育てする意味を伝え、つながりを深くする】ことを狙い、発信していると考えられる。保育士は、日々のやり取りを通して、「親になったら完璧なんだろうと思っちゃうのが子どものいない私なんです。親もそうはいかないから苦しむし。だから、一緒に育っていく。(略)」という保育士Kの発言から、【親と一緒に育つ】と考えていることが窺える。

保育場面では、子どもが存分に自然に親しむために、保育士Fの「こういう準備の上で、園外は危ないところなどこれで良しではなく、そこまで考えているんだというのは親が安心する。」という発言から【安全面の入念な準備が親の安心感】につながっていることが窺える。自然の中での親の保育参画は、「(略) 着飾ったものをするのではない。普段の本当に保育で必要なもの、保育園の様子を知ってもらってやってもらう。」とのFの発言から日々の様子を知るのはいかにメリットがあると考えられる。静かでアウトプットが得意でなく卒園していった子どもの親は、「目立たない子に丁寧にスポットを当てた保育をしてくれるので先生を信じられる。入れてよかったと思う。下の子は迷わず入れた。」との発言から、【目立たない子への丁寧な保育で保育士に信頼感を持ち第2子を入園】させることにつながった。

これらのことから、【時代に流されない保育の伝達と親の信頼感】を得て、保育士、親、子どもが共に育ちあう保育が継承されていると考えられる。

第5 子どもを支える親の役割と保育参画への呼びかけ

保育士Iの、「毎日当たり前のように子ども達が保育園に来るだけでもだいぶお父さんお母さんの協力があってのなんだなって。」と、子どもを支える親の役割を重要視し、保育参画の呼びかけをしていることが窺えた。保育士Fは「園に来る機会があることで、園と家庭でお互い話をする時に共通で状況がイメージしやすい」と、親の来園は、子どもの様子を知るメリットがあることから、親に来園を促し、保育士Fは「お手伝いのメリットは、行き帰りだけじゃわからない。」と母親に【送迎以外で保育に関われる働きかけ】をしていると考えられる。親が保育に関わることで、保育士Fの「バザーとか忙しいけど、園に足を運ぶ機会になっている。やっぱりどれだけ園がいいものを使っているか、知ってもらえる。」と、【親の来園は保育園と家庭との共通理解の機会】と捉えている。

保育士Hの「男手だったり女手だったり。色んなところで力を貸してもらっている。親たちの力がないと出来ないことたくさんあるなど。行事で使う会場作りとか夕涼会とか。保育士だけの力ではあそこまではなかなか。」との発言から、保育士は親の協力があっての日々の保育であり、【保育参画への要請と親の役割】を、日々、認識していることが窺える。

保育者は、子どもの【子どもの自然体験を支えるための親への参画の要請】をする。【子どもの安全確保と適切な関わり方を親が認識すること】が保育に参画するために必要で、保育士Hは、「保育園が考えている子どもとの接し方、親に見てほしいし、気がついて欲しいのかな。山登っていても子供との距離感近い。ちょっと転んだだけでもわー

と行ったりとか。それはちょっと違いますよとか。保育園の保育としてこんなことしているんだというのを見れるのは大きいと思いますね。」と発言している。保育士は、子どもの力を信じ、見守る保育のモデリングとして、子どもとの距離と接し方の参考など、親への保育の伝え方の工夫をしていると考えられる。保育士は、親を保育の協働者として認識し、親が子どもと共に自然の中で過ごすことで、子育ての方法を学び、子どもの安全確保という親の役割に期待し、保育参画を促していると考えられる。

第6 保育への関わりに対する親の葛藤

保育士Hの発言から、親は「根本は、保育に惚れ込んで入ってきている人達。信じられない人はすぐにやめていく人。」という特性があると捉えられる。保育園は入園の際に親に「説明会の時に保育に関しちゃんと説明している。親にお願いすることある。それでも入りたい人達。わかっていれているというのは大きい。」との保育士Hの発言から、【説明と同意による保育への関わり】を行っていた。

しかし、保育士Gの「仕事があつて家事があつて、どこに自分の時間があるのかなというのがありました。どうしても毎年、そこに引っかかる人がいる。」という発言から、後に【保育への関わりの説明への同意後、ワークライフバランスとの葛藤】を抱える親がいることが窺えた。

【保育へ賛同と不賛同】という親に分かれ、【仕事・家事・自分の時間と保育への関わりに葛藤を抱える】こととなると考えられる。

その要因として、保育士Cの発言「それがすごく難しいって感じる。今の流れは親の負担を軽減するということがかなりメインになっていると思う。他園では『お母さんリフレッシュしてきていいよ』という。」から、【今の流れは、親のリフレッシュと負担の軽減】という傾向があることが示された。

そのため、【働き方やバザーを見直す過渡期】との意見もある。保育士Cの「やっぱりバザーとか、正直ハードはハードですよ」の発言から、【バザーは負担で、やりたいことで手伝う】親がいることから、まったく保育に参画しないわけではないことが窺える。

保育士Gの「距離の近さに負担を感じ、なんで預け合いをしなきゃいけないという人もいて、一概には言えないけど。」との発言から、保育参画に関わるものの【親同士の距離の近さに負担を感じる親】もいた。保育士Gの「親と子どもが離れていることが多くなったかな。自分が仕事休みでも保育園に連れてきて、自分の時間を楽しむ。保育園なのになんで預かってくれないのということが増えている。」から、【親子が離れる時間の多さ】が見受けられた。他の親や子どもから一定の距離を置き、自分の時間を作ることでリフレッ

シュする様子が窺える。子育ての負担という心理的ストレスを日中、自分の時間を確保することで軽減していると考えられる。

また、【宿泊保育後の早めのお迎えのなさへの違和感 親子が離れる時間の多さ】がわずかながら見受けられるようになってきているという。保育士Gは、宿泊保育という家庭と離れている期間のあった子どもに対し、常時と変わらない時間帯に迎えにくる親がいることに【違和感】を覚えていると考えられる。大方の親が園児の宿泊保育後、早々に迎えにくる中、通常の時間帯にお迎えに来た母親は、残された我が子への【罪悪感を、保育士に対し怒りへすり替える】場面が見受けられた。「大きな経験をして帰ってきたときには我が子を迎えてあげたいというより、普通に仕事の感覚で捉えちゃう人が増えてるんじゃないかね」との発言から、保育士と親との間に【仕事中心の価値観の相違】が見受けられる。保育士は、宿泊保育は子どもが親と離れて過ごすという「大きな体験」と捉えているが、常時と同じ時間に迎えに来た母親は、宿泊保育を通常の保育内容、つまり、“普通の仕事”として捉えて出迎えていたと思われる。保育士は、こうした態度に対して「普通に仕事の感覚で捉えちゃう」と発言したと考えられる。また母親は、宿泊保育の送り迎えを、通常の送り迎え＝「仕事」のような態度で行っていたが、保育士は、迎えたときに、子どもが大きな体験をしたことを理解して迎えてほしいと考えており、こうした認識のギャップがあったと考えられる。

通常の保育であれ、宿泊保育であれ、親と離れて過ごす期間、子どもがどのような気持ちでいるのかに対する母親の受け止め方は、子どもの体験による成長をどのように捉え、保育に積極的に関わる意義をどう理解しているかに関わると考えられる。保育参画の意義の認識がなければ、母親の就労との兼ね合いで、保育への参画に時間と労力を割くことを負担と感じてしまうため、【保育への関わりに対する親の葛藤】となっていると考えられる。

【親の視点と子どもの視点】について、保育士Eは【親が見たい我が子だけの写真と仲間との写真が見たい子ども】の視点の相違に触れている。「写真を買わない人が増えている。なんで写真を販売しているのか」というと、自分の子どもプラス仲間達。自分の子どもが見たいのは仲間で、残していききたいもの。親は自分の子どもが写っているものしか買わなくなってきた。その部分が一番伝わらなくて、親が見たい子どもの写真。自分のことだけに向いていっているような流れ。」と発言している。園では、「仲間」と過ごす日常生活を大切にしていることから、仲間と一緒にいる自分を見たいという子供の視点をもてるような働きかけをしていきたいと考えていることが窺える。

このように、保育士と一部の親の間に、仲間との関わりや【親子で過ごす時間への価値観の相違】が見られ、葛藤が生じていた。保育士は保育への関わりに葛藤を覚える親と、保育士自身が感じる相違、違和感、親への「伝わらなさ」に向き合っていると考えられ

る。

第7 親の葛藤への対応

親が葛藤を抱え保育にどのように関わるかについて、保育士Lの『今はできることをやればいいし、できなければ自分で選択していいし。』と言ってくれる仲間がいる。』の発言から、【関わりへの自己決定尊重のサポート】をしていた。【消極的な親への動機づけ】としては、保育士Eは、「いい育ちをしていった子ども達と自分ができること、そこを作っていくこと。こうしましょうというだけではなかなか。理解してもらうのに時間かかる。」とし、【親が保育と子どもの力を信頼し関わることで、何を経験させるか】について、「大きいクラスになればなるほど関わってくること増える。直接話すことが大切なのかな。連絡帳に書くだけでは相手のことはわからない。顔を合わせてどうですかと状況聞きながら。」、【対面で保育への関わり意向を傾聴できる場の設定】をしていた。

保育士Eは「親たちが信頼してくれること。保育の質、子ども達が育っていく姿を信頼してくれること。」で、【子ども中心で仲間の獲得に納得できるか】、保育士は親の葛藤に介入しつつ、その状況を親が受け入れるかどうかを見守っていると考えられる。その上で、【親育ち子育ちへの動機づけ】がなされていると考えられる。

共働き世帯には、【保育に関わる時間のマネジメント】が必要と考えられる。保育の質を維持するためにかかる様々な作業時間について、Eは「(略) そういう工夫はしているのかな」と、共働き増加による【作業の効率化】と見直しについて提案していた。「子ども中心」の「本質の不変さと時間の工夫」を踏まえた上で、【作業の効率化】を図っている様子が窺えた。

保育士は、【母親の就労形態と子ども中心の保育参画の折り合いの難しさ】という葛藤に対し、親の子育て時間の確保に向け、作業の効率化の他に、労働時間の短縮に関する【育児制度利用提案による保育参画との折り合いの模索】の姿勢を示し、親の葛藤への対応を行っていた。

第8 親へのサポート体制と保育の協働過程の深化と相互理解

園外保育や園庭の環境設定などに協力する態勢を整える親は、保育士Iの「仕事があった家族や保育のことも仕事みたいにある。すごいな。できないな。先生達に『大丈夫？いつもありがとうございますってしてくれるけど、朝から晩まで休みないでしょう』ってずっと言われてたけど。いやいやいやって。私は保育園のことだけやっていればいい。園からも父母の会からも色々要求されるのに、さらに自分の仕事もあって家に帰ればお腹す

いたと子どもが言うし汚れ物もいっぱい持って帰って、お父さんお母さん見てると、いやーって。」との発言から、「子ども中心」で【ワークライフの調整能力を持ち保育へ感謝する】特徴を持っていると保育士は捉えている。その上で、保育士Iの【協力する態勢を整える親】に対し、「すごく大きい存在だと思う。短大の友達に聞くと保育園って働いているお父さんお母さんが預ける場所だから、普通他の園は協力してもらうことすら考えていない。本当にお父さんお母さん協力的だよねって言われる。園外・園庭にしても遊具にしても保育士だけでこれだけのもの出来ない。」との発言から、【協力的で子ども中心の親】に対し、協働者として捉えていることが導き出された。

保育士Lの、親が「すごくいいなと思って入ってきても、はじめから積極的に関わる人はごく一部。子どもや周りの子どもの姿を見て少しずつではあるけれど色んなこと、保育園に協力することで保育園が好きになって、我が子が可愛くなって、他の子ども可愛い。だったらもっと保育に関わると。」との発言から、【関わりは初めは負担だが子どもの姿を見ることで、少しずつ適応し満足感を持つ】ようになると考えられる。

【多忙な中でのワークライフバランスと参画のやりくりは大変さ】もある。保育士Gの「初めての赤ちゃんで常勤で働いているお母さんですけど、『懇談会はある、自分ちも綺麗になってないのになんで保育園のことをしなきゃいけないの』当時の連絡帳によく書かれていた」との発言から窺える。保育士Fの「お母さんは去年より良いものをと向上心がある。焦りから責任を負ってしまうところがある。金額ではないが去年よりはと結果をめざし頑張ってしまう。」との発言から、熱心な母親は、参画に関わる時間が多いことが窺える。保育士Fの「土日も園にいた。限られた時間しか子ども達と過ごせない中でどうなのかと思いますけど、子どもが不安定になったりするときは難しいなと思います。」との発言から、【母親の参画の多さによる子どもへの影響】として、家庭で子どもと関わる時間が少なくなることが生じていた。

保育士Eの「保育士としては、お母さんはお家の中が大変だと、子どもにすぐ出てくるので、頑張りすぎている人には声をかけたりしている。お母さん達は思いを持ってやってくれているから無理しないでと言いつつ、有り難いと思う。」との発言から、「大変さは子どもへ影響するため親をねぎらい、感謝する」ことが窺える。保育士Eは、「そうですねと言って生活を見直してくれる人もいるし、そうはいつでも責任のあるポジションにいる人はやりすぎちゃうのかなと。バザーの話で言えば見直しつつも、負担減らしたり効率考えているのだけど、ベースにあるずっと培われたものを無碍に出来なくて変えづらいというものもあるのでは。ちょっと引いてみているのでそう思う。」と、保育参画に感謝しつつも、母親の【保育参画と生活バランスの見直し】について、考慮の余地があることを挙

げていた。

保育士は保育に関わる親が悩みを抱え込まないように、【自己開示しやすいサポート体制作り、自己開示できるコミュニケーションへのサポート】を行っている。親の表情などノンバーバルコミュニケーションに気を配りつつ、保育士Kの「こちらがどうぞどうぞと言うより、いろいろ考えている人が一歩踏み出す世界。もっと親がSOS出せたらいいですね。そうすると、人伝に広がっていくのかな。問題を開示していく事、コミュニケーションが大切。」との発言から、親が抱える問題を【自ら表出できるコミュニケーションへのサポート】が大切と考えている。親の中には、保育士Jの発言から「何かあったら面談してくださいと声にしてくれる。いいことも悪い事も、心配な事も全部。」と、自ら援助希求し、面談を要請する強みを持っていると考えられる。

【サポートの必要な親の全体での情報共有】については、クラス担任だけでなく他の保育者で全体を網羅している。それは、保育士Kの「あまり積極的に行かなくてもいいと思うが、お迎えの時間は親が見る時間。どうしてもフォローしないといけないことあるので、そういう時の意識は持っておいた方がいい、共通意識と確認する事が大事。ここの先生達は全員の子どもの名前知ってますよね。それと同じことなのかなと思います。常勤はある程度の時間がきたら全体を見ますし、共有はしていると思います。」との発言から共有の体制が取られていた。

親の中には、他の親から相談を持ち込まれることもある。保育士Fの「相談されたお母さんは、保育士に『どうしましょうか』と言ってくれる。保育士の知らない情報が入ってくる。」の発言から、相談された親はひとりで抱え込まず、保育士に対応について尋ねていた。親が悩みや困りごとを孤独に抱え込まないように、また相談された側も、抱え込まないように、保育士Jの「必ず誰かが考え、孤独ではない」から、保育士との情報の共有化による協働過程を経て、多重構造のサポート体制が構築されていることが導き出された。

親がひとりで抱え込まないような体制の要因は、多重構造のサポートによるところが大きいが、親同士のサポートについて、パットナムの概念ソーシャル・キャピタルにおける「一般的な互酬性」で説明される。保育士Iの「多分助けて、今困ってると言える人がいるのかな。誰かに言える。困った時に困ったと言ってもいいのかなと思える感じなのかな。園にきて間もない人に『どう？』って言える。今まで自分もしてきてもらったこと。」、保育士Lの「スケートで手伝いに行った母は、他の母が我が子を自分の子のように接してくれた。だから私も我が子のように接する。」の発言を取り上げる。他者を助ける母親は、その助けている相手から見返りを期待している様子、すなわち、特定の互酬性は見られない。保育士らの発言から、母親の助ける行為は、自分がかつて他の母親から助

けられたこと、すなわち、一般的な互酬性に起因していると捉えられる。パットナムは、信頼しあい自発的に協力するのは、ソーシャル・キャピタルが豊かであるとしている。これらのことから、母親同士のコミュニティでは、一般的な互酬性が機能していることが導き出された。

相互扶助の深化によって、保育士のみならず、そこに親が加わり、【保育士と親による保育参画への仕組み作り】が維持されていた。親は【サポートされる側からサポートする側へと進化】している。保育士Fの「上の人がちゃんと伝えている。すぐ言える、ためている暇がない。毎日あっているのに話す場が多い。私も親だったら1人でほっといてよと思うことがあるかも知れないけど、お母さんたちは家庭でのナイーブな事も話している。言える関係性。」「大変な状況にある人に対してはうまく上の人が動かしていってくれる。大変だから休みにしてあげようとか。在園1・2年の母は有り難い。」という発言から、保育参画の【経験者として提案型コミュニケーション】を図っていた。

そこで、保育士Fの「内向的な人もいるかも知れないですけど、みんなでカバーしあっている。知らない間で救われている部分あるのでは。」との発言から、徐々に様々な背景を持つ親が保育へと関わるようになって考えられる。保育士Dの「年数を重ねてこういうことだったのかと保育園の意図をわかってくれ参加してくれる親が多い。」という発言から、【親から親へのサポート】という子育ての仲間の当事者間でのサポートが、効果的に機能していると考えられる。

このような過程があって、保育士からの保育参画への呼びかけは、【保育士と親の協働サポート体制への深化】が見受けられた。

保育士との協働活動が進んでいく中で、保育士Jの「子どもの感想や保育士への気遣いなど書く親」が見受けられる。保育士Hの発言「でも美術の時間に『こういうふうにとやったらもっと早くできるんじゃない。』嫌味じゃなくて言ってくれる。僕は違うと思えば違うと言っちゃう。そういう親が全てではないですけどね。言いやすいのもあるかもしれない。生意気なのでテンション上がると言いたいこと言う。たまに衝突っぽくなる。結局子ども中心のこと考えるとより良くしたいから悪く考えていない。」から、時には「親と保育士の子ども中心の議論」を交わすこともあった。【子育ち上のコミュニケーションによる相互理解】として、【親の保育への感謝の気持の表出や提案と保育士の受け入れ】が表れている。保育士Jの「こちららも気づかされる事たくさんあるので。影響しあっている。大きいと思う、子どもを見ていく上で。」と、親から気付かされることもあり、相互理解による影響と成長が導き出された。

第9 父親の参画の仕掛けと子育ての深化による好影響

園では、母親だけでなく父親に対しても、保育への参画を呼びかける。保育士Hは、「海だと、クラス単位で呼びかける。張り紙をする。保育園や園バスなど。連絡メモや口頭で「お手伝い行けます」。園庭の池作りだと園のお手紙として出して提出してもらおう。全クラスでどれくらいお父さん集まるのかというのをやっています。」、保育士Lは、「懇談会や書面での参加呼びかけ」など、【園、クラス、懇談会や書面で、保育への関わりを呼びかけ父親が子どもと関わる仕掛け作り】が構築されていた。

このような子どもと関わる仕掛けによって、【仕事を調整し保育に関わる父親】が現れることが導き出された。他に関わりのきっかけとして、保育士Iの【母親の誘導による父親の参加と、仲間と出会い深いつながりで活動】することが導き出された。保育士Dは、「もともと関わりの少なかったお父さんとかは、その機会に足を踏み込んでみたら、お父さんたち同士でもよく話す機会ができて、そこでの仲間関係とかぐっと強まったこともあったなど。そうするとまた園に来てみたりとか。」との発言から、【園、母親から参画への仕掛けと、仕事と調整し関わる父親】は、足を踏み込むと仲間と出会い深いつながりで活動を行っていた。【保育参画の経験者、行事に関するリーダーの魅力と存在感で、参加が楽しい】と感じている。保育士Lの「お父さんの中には『大人になってから友だちができた』という人もいる。くつつきすぎちゃってその中でだけで盛り上がり、そのノリに引いちゃったりする人もいる。うちはいいですか。うまく引っ張ってくれると良いんですけど。」との発言から、【仲間の存在】による【仕事以外での友達との交流】が芽生えていた。保育士Lの「お父さん達がこれで変わるなって思ったのが園庭キャンプ。その頃、4歳児から入る人たちも多かったので、秋まではそこまでではなかったけれど、関わることによってそのあとの運動会から我が子だけじゃない応援の仕方。我が子以上にキャンプで関わった子ども達を応援していたり、子ども達がそのお父さんを応援していたりしている姿を見て、父親がグッと関わるようになった。お父さんの関わるのがすごく大きい保育園、稀なんじゃないかな。母親が関わる場所は他にも多いのかな。」との発言から、父親のコミュニティ形成によって、仲間と活動する楽しさが見受けられた。他の子どもに目が届くようになるなど、保育士Dの発言「子どもに興味を持つ」から、父親の【子育ての深化】のきっかけが見受けられた。自分の子ども以外の子どもと関わる機会を持つことは、多様な視点からの子育てを可能にする。【自然体験活動による大勢の子どもと関わる稀有な機会での子育ては深化】していくと考えられる。

【参画維持の仕掛け】は、母親に加えて【保育士と経験者の父親から活動の楽しさを伝え、新規参入を図っている】ことである。父親の参画の動機は活動に「楽しさ」を感じる

ものであると考えられる。

その上で、保育士Lのキャンプに関する「とはいえ、やりすぎないように。お母さんから離れて過ごす4歳児なので、保育士がセーブ。一番大事なのは生活。遅くても8時から9時には寝ましょう。子どもに負荷を与えないように。土曜日から日曜日にかけて。」との発言から、子どもの日頃の生活リズムを重視し、豊かな時間を過ごせるよう、【楽しさだけでなく子どもの生活重視による豊かな時間の提言】を保育士は図っていた。

保育士Dの、「子どもはお父さんが来るって、嬉しいことだと思う。子どもたちの中には、園庭キャンプにお父さんが来てくれたのはすごい印象が残っているみたい。『もう一回やりたい』」との発言から、園での【父親の存在で子どもは意欲的になる】ことが窺える。【父親の存在の大きさ】と保育参画に関わる影響の大きさを知ることができた。【父親の保育参画は、園、母親、子どもにとって豊かな時間を過ごせ、良好な影響】を与えていると保育士は捉えている。

父親が子どもに興味を持ち、仲間との活動の楽しさの中で、子育てを学び子どもの成長を知ることができる点から、【父親の保育参画への仕掛けと子育ての深化による好影響】は、注目に値すると考えられる。

第10 保育参画によるコミュニティ形成と親の成長

保育参画による影響について、以下のように考えられる。まず、親が保育参画を行うことで、保育士や他の親と知り合い、保育士Dの「一番は人間関係なのかな。人と人が関わって一つの目的に向かって、一生懸命ぶつかりながらすることは、今の世の中ないと思うので。」との発言から、次第に【悩みを表出し合える親密なネットワーク】が形成されていた。ネットワークにおいては、【話すことでのストレスコーピング】となり、保育士Cの発言「そういった意味では、保育園にいる間は、心理的にはかなり助けられている。」から、コミュニティ形成と相互の信頼感のもとでの自己開示による受容と傾聴は、心理的ストレスの軽減が図られていることが窺える。

初めは保育士からの関わりによる活動が、時の経過と共に親の【主体的なコミュニティ活動】となり、親同士のサポートになるなどの【親の主体性な変化】が生じる。それらは、親同士の相互扶助による社会的なサポートと捉えられる。【悩みを表出し合える親密なネットワークによる親の主体的なコミュニティ活動】は、日頃のストレスや何気ない日常で起こる出来事を周囲に相談する効能が得られると考えられる。

保育士から見ると、親同士で【肩を組み良いこと悪いことでぶつかり合える密な関係性】を構築していることが窺える。それは、「挨拶など表面的な付き合い」とは違う「自

分自身は、色々な人が子どもを見てくれて色々な話をしてくれる。色々な母さんが見てくれているのだなと仲間意識を思った。」との保育士Cの発言から、【子どもを預け合える関係性】である相互扶助の社会的サポートが見られる。子育ての当事者という専門家ではないピアサポーターにおける【相互扶助による孤立や孤独のない子育て】が可能となり、役割負荷が軽減されると考えられる。

次に、【子育てを通した成長】が挙げられる。保育参画をすることで、【大勢の子どもと関わりを持つ】機会を得て、保育士Cの「ビデオで自分の子だけか、全体の子ども達を見るかは違う。」、保育士Lの「他の子も我が子もかわいい」との発言から、保育士Cの「子どもが可愛いと思うきっかけの仲間は心強く大きい。」と、相互扶助によるコミュニティから博愛と親密性という心理的な効果が得られている。それらは、グループに所属する個人が受ける安心感、共感性、連帯感から得られるものではないかと捉えることができ、親同士のコミュニティがソーシャル・キャピタルとして機能していると言える。保育士Hの「他の子を見れるのも大きいと思います。山とかスケートとかで自分の子以外の子見られる。自分の子ってその子しか見てこなかったら、他の子見ることによって普段見てきた自分の子に対して視野が広がる。」との発言から、親は、様々な子どもと接することで、その子、その子にとっての子どもの育ちがあることを認識していた。そして、保育士Dの「ぶつかり合って色んな人と話す中で、大人になって今さらかもしれないですけど、自分の価値観が広がったりとか。他の人のことが理解できるようになるとか。人間的な魅力があがるというか。」の発言から、次第に、【子どもを通し親自身の肯定感や視野の広がり気づき】、周囲に自己開示し、【表出しあい育ちあう希少な土壌】であることに気づくことから心理的成長と捉えられる。

保育士Kは、「すごいマックス働いている人たちっていうのは、仕事にやりがい感じている人もいると思うんですね。生活がっていう人たちもいるから、一概に言えないけれども。平たくいうと、歳をとってもやりがいのある仕事を持つって大事なのかなっていうところにつながっていくと私は思う。」との発言から、仕事においても、それ以外の場所でも、自分自身にとって役割があり、その【役割へのやりがい】を感じる、人間として生涯発達することが大切であると導き出していた。

【後から振り返る良かったこと】として、慌ただしく過ぎていく子育てではあるが、【第2子で、振り返る余裕】ができるなど、時が経つと子育てを振り返る時期が到来し、これまでの経緯を振り返り、保育士Gの「『今になってわかったり見えたりすることがあった。大掃除の時に心を込めてきれいにしようと思った。』と卒園の時に書いてくれたお母さんがいた。」の発言から、親は、子育てに大変な最中はただ無我夢中に日々をこなす

が、「振り返りの時間を持つ」ことで、これまでのことがらに意味づけをし、子育ての学びと、子どもの成長を改めて実感し、【子育てを振り返る時期の到来で、感謝の気持を持つ】様子が窺えた。卒園時という一定期間を経た振り返りは、保育者と親とのリフレクションであると考えられる。「書くこと」によって、自己を客観視し、子育てを俯瞰すると考えられ、園長の発言に見られた「書くこと」の少しの負担が、少し先の喜びとして、具体化されていくと考えられる。

時が経ち卒園を迎えると、保育参画で得た仲間との顔の見えるオープンな交流は、卒園後、【保育園から学童期へのスムーズな接続による関係性の継続】が見られた。【卒園後、園の素晴らしさを語る卒園児に、良い育ちを感謝】する親がいることから、親育ちで自己肯定感をもち、子ども中心の保育を理解し、豊かな自然環境を設定する子育ての学びの場は、【好事例】として【他者への紹介による好事例の広がり】と言える。

第11 保育参画拡大の課題

園での保育参画による仲間との子育ての学びの場は、一定の限られた施設内だけでなく、子どもを持つ親へ拡大することで子育てに関する心理的ストレスの軽減につながると考えられる。保育参画の拡大の問題点として、保育士Iの発言で「友達の話とか聞くと、子どもが遊んでいるその子のお母さんの顔がわからないとか名前がわからないとか保育園も見えにくくってお母さん同士も見えにくくってとか言って、びっくりした事がある。」という顔と名前が一致しない【親子間交流時の相互の認証の少なさ】、【つながる関係性と相互の親密性の少なさ】があると捉えられる。【他の園の親の情報の少なさ】もあり、親がどれだけ周囲の人々と相互交流を持ち子育ての当事者として関わり合うのか、そのような活動をしている園に子どもを入園させるのか、【当事者性の程度と園選び】が挙げられた。

また、保育士Cの発言で「小学校は遠くて、親の自分がなじめなかったので苦労した。何かをやるわけではないのだけれど。」という学童期への継続的なつながりの場が少ないことが挙げられる。保育園で様々な過程を経て仲間と関係性を構築しても、学区の違いにより、【小学校での新たなつながりの少なさ】があり、学童期においても親に何らかの働きかけが必要であると考えられる。

今後の保育参画の課題として、子どもの成長を知る機会となる保育参画を拡大し、子育ての当事者性を高める支援の継続、保幼小のスムーズな接続が必要と考えられる。

小括

研究Ⅱから得られた結果と考察を以下にまとめた。また、大カテゴリーを用いて、それぞれの関係性を図 3-4 に示した。

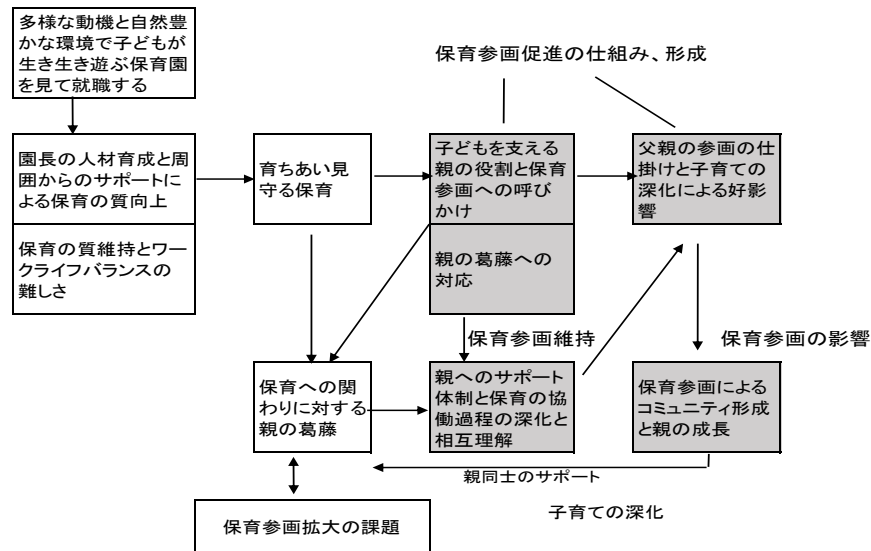


図 3-2 カテゴリー間関係性

保育士による保育参画促進の仕組みと形成・維持の具体化および、親に対する心理的社会的影響

保育士は、自己開拓や保育士養成機関での学び、知り合いなどを通して A 園を知り、就職先として検討していた。実習や見学を通して【多様な動機と自然豊かな環境で子どもが生き生き遊ぶ保育園を見て就職する】こととなった。「親が参加してすごくつながりある園なんだな」と保育参画をする親について、認識している。新人の保育士は【保育における技量の自信のなさや親との関わりの経験のなさ】を感じるが、【先輩や同僚からのサポートによる視野の広がりや技量の向上】が見受けられた。例えば、丁寧に子どもを見ること、クラスだよりで日々の保育内容を発信する、懇談会で発言するなど親への心理的社会的なサポートもこなせるようになっていく様子が窺えた。また、「私も親も子どもも育ててもらった。」と【園長の人材育成と周囲からのサポートによる保育の質向上】が見受けられた。保育士は、【家族の理解に助けられている】など、ワークライフバランスと

兼ね合いをつけながら保育の準備時間などを捻出していることから、【保育の質維持とワークライフバランスの難しさ】が関連付けられた。

この園は、【園長、副園長、ベテランの先生と親が一緒に行動】し、保育士の間で【育ちあう園】と認識され、【子ども達から様々な気づきを得て、共に生きる視点を教わった】ことから、【育ちあい見守る保育】が導き出された。そこから、【子どもを支える親の役割と保育参画への呼びかけ】がなされた。

入園時の保育に関わる説明へ同意したものの、共働き、常勤の増加に伴い、子どもの養育に関する多様な価値観の中、他の親との関わりの深さや【保育への関わりに対する親の葛藤】が見られる。保育士は、親に直接関わる機会を授けるなどして、「今はできることをやればいいし、できなければ自分で選択していいし」、「親たちが信頼してくれること。保育の質、子ども達が育っていく姿を信頼してくれること。」と、【親の葛藤へ対応】を重ね、乳幼児期における子どもの育ちの捉え方などについて、また、【作業の効率化】と見直しについて提案し、歩み寄りの工夫を重ねていた。

「園外・園庭にしても遊具にしても保育士だけでこれだけのもの出来ない。」と豊かな保育環境と子どもの安全確保などの側面から親の保育における役割はなくてはならないものであり、保育士は協働する仲間として保育参画への呼びかけをしていた。園に来る機会と活動を授けることで、親は【関わりは初めは負担だが子どもの姿を見ることで、少しずつ適応し満足感を持つ】ようになっていった。

保育参画の仕組みに保育士は、【自己開示しやすいサポート体制作り、自己開示できるコミュニケーションへのサポート】を行い、親仲間の経験者といった「必ず誰かが考え、孤独ではない」多重構造のサポート体制が構築されていった。心理的ストレスを抱える母親は、保育士やピアサポーターから子育ての指南を得て、子育てがしやすくなり、ストレスが軽減され、子どもを見守る保育を理解することで子育てが深化していった。経験者の母親は「今まで自分もしてきてもらったこと」と、【親から親へのサポート】を行っており、ソーシャル・キャピタルにおける「一般的な互酬性」が見られた。このように、保育士から親、親同士とサポート体制が拡大し、【親へのサポート体制と保育の協働過程の深化と相互理解】へとつながっていった。

【園、クラス、懇談会や書面で、保育への関わりを呼びかけ父親が子どもと関わる仕掛け作り】は園と母親の促しによってなされた。【仕事を調整し保育に関わる父親】は保育園の活動に一歩足を踏み込むことで、【仕事以外での友達との交流】が芽生え、仲間ができたことによる楽しさから、子育てに関心を持つようになり、我が子以上に園庭キャンプで関わった子ども達を応援していたり、大勢の子どもと接することで子育ての当事者とし

てその存在感が大きくなっていった。「お父さんが来てくれたのはすごい印象が残っているみたい」と父親の保育参画で子どもが意欲的になり、園や家庭内における父親の子育ての方法が向上したことから、母親は子育てがしやすくなり、園にとっては、自然豊かな保育環境を整えるために父親は必要な存在であることから、【父親の参画の仕掛けと子育ての深化による好影響】が見られた。

保育参画による子育てへの影響について、父母共に子育ての学びを通し、子育ての指南を得て、関わり方や子育ての方法が向上し、役割負荷が軽減したこと、仲間を得て、母親は心理的ストレスが軽減され、父親は楽しみを持つようになり、成長したことなど、保育士から見て心理的社会的な影響があったと言える。

一方、共働きの増加、多様な価値観により、保育士は親の葛藤と向き合っていたが、【保育参画拡大の課題】は、依然として見受けられる。今後も子育て世代のワークライフバランスを考慮した参画体制の検討が必要と考えられる。また、【小学校での新たなつながりの少なさ】があり、学童期へのスムーズな接続が課題である。

第4節 第2章と第3章のまとめ 保育者の視点から見た親の保育参画

研究Ⅰと研究Ⅱは、園長、主任、保育士という保育の専門家の視点から親への保育参画促進の仕組みおよび形成・維持の過程と、親に対する心理的社会的影響について検討した。

園長による孤立、孤独防止の親育ち子育ての仕組み作りは、主任と共に保育に関わる説明、呼びかけ、来園する機会の設定をすることにより、親の保育への理解と関わるきっかけとなり、主体的な保育参画へと活動の内容、程度が深化していった。

新体制のもとでの参画の維持のためには、次世代の保育士の確保によって保育の質を維持することが必要であり、保育内容に賛同し就職した保育士に対し、園長始め経験を積んだ保育士が共にサポートし、お互いの育ち合いを継続していた。

幼保一元化以前からの保育園における”幼稚園教育のニーズ”に対応し、親が主体的に保育に関わってきた保育参画は、近年、多様な価値観を持つ親がワークライフバランスとの間で葛藤を抱える状況となり、子ども中心の保育との折り合いをつける必要性がでていた。保育士は父母に対し子育てを協働する仲間として捉え、保育の質の向上のため、保育への関わりを呼びかけることで保育内容に賛同し理解した親の有志が保育参画に関わるようになっていった。意欲的な親が他の親を促すなど、保育の協働過程が深化していき、保育士と親同士の相互理解が深まり、保育参画の維持につながっていった。

子育てに対し不安を抱える親には、相談窓口をつくることで保育士が具体的にサポートし、その結果、親は家庭で子どもと良い時間が過ごせるようになり、子育てがしやすくな

り、子どもにとっても良い影響を及ぼすようになった。

また、保育士から親へのサポートは、親仲間同士でのピアサポートへと拡大し、サポートが必要な親に対し、保育士と親同士の多重構造のサポートによって、就労と保育参画による葛藤、子育てに関する不安や負担といった心理的ストレスの軽減が図られていた。

保育士による親に対する保育参画促進は、それに賛同する母親が保育士と協働するようになり、他の親を巻き込み、葛藤を抱える親に関わり、父親の保育参画を促し、子どもへの関わり方、見守る保育を実感することで子育てが深化していった。

保育士によって親へ保育参画を促進したことで、父母が相互扶助をするコミュニティの形成が見られた。保育士の視点から考察すると、父母は保育に関わる機会を得ることで、孤立や孤独を感じるものがなく、仲間との活動を通して親の役割を認識し、成長していく過程が見受けられた。今後は、学童期へのスムーズな接続のサポートも必要と考えられる。就労との兼ね合いによる保育参画拡大の課題は依然見受けられるため、父母の保育参画の関わりの程度や葛藤については、研究ⅢとⅣで取り上げる。

第4章 母親の保育参画によるコミュニティ形成の過程と心理的影響（研究Ⅲ）

前章の各研究では、保育者の立場から、親の孤立や孤独予防と親育ち子育ての保育の維持のため、保育参画の仕組みが形成され、保育士の呼びかけや来園の機会を通し、その活動や仲間との関わりが維持され、ピアサポートをするコミュニティ形成のきっかけとなったことが明らかにされた。

本章では、母親へのインタビュー調査を通し、子どもの養育者である母親の立場から、保育参画によって他の親との間にどのようにコミュニティが形成されたのか、その過程と、園による保育参画の促進により、母親がどのように保育に関与していったのか、母親にどのような心理的影響があったのかを検討する。

第1節 研究目的

園と保育士の保育参画の促進によって母親が保育参画に関与していく過程と、親同士のコミュニティ形成の過程、母親に対する心理的影響について明らかにする。

第2節 研究方法

第1項 時期、手法、手続き

時期は、1学期から3学期始め頃までの8ヶ月間である。筆者は、父母会、委員会総会、において、研究の概要について説明し、懇談会、クラス会に参加し研究協力の依頼をした。筆者の訪問許可日を副園長に確認し、母親の送迎時、または週末の委員会や父母会などの活動が落ち着いた時間帯、もしくは対応可能な日時について、確認後、調査への対応が可能な日程と時間を確保した。

手法と手続きについて、事前研究概要について説明し、研究参加の自由意志があり日程調整の可能な母親の中から、有意抽出法により、子どもの在園年数の異なる母親5名とした。

母親5名の年齢は、30歳代だった。子どもの卒園在園状況については、5名のうち4名の母親の第1子および第2子が卒園生で、1名は引っ越し前だったため、他園を卒園していた。世帯の子供の数の平均は、2.4名だった。子どもの述べ在園年数の平均は、4.2年だった。5名共に核家族で、そのうちの2名が母方祖父母が近隣在住だった。

勤務形態は、自営業が1名、時間勤務が2名、在宅勤務が1名、常勤が1名だった。

（表4-1参照）

表 4-1 研究対象者 母親

	年代	在園年数(子どもの述べ在園年数)	子ども在園・卒園内訳	子ども数	家族形態/祖父母	勤務形態
①	30歳代	5年	卒園児1名、年中1名、年少1名	3	核家族	自営
②	30歳代	4年	卒園児1名、年中1名、	2	核家族/母方近隣	時間勤務
③	30歳代	6年	卒園児2名、年中1名	3	核家族	時間勤務
④	30歳代	1年	他園卒1名、年中1名	2	核家族	在宅勤務
⑤	30歳代	5年	卒園児1名、乳児1名	2	核家族/母方近隣	常勤

保育参画に支障のない協力可能な時期と時間に、母親5名に個別インタビューを行った。1回30分から1時間程度の半構造化面接を実施し、インタビューは録音し、その場で回収した。フィールドノートに内容を記述し紙媒体として保管した。

第2項 インタビュー内容

インタビュー内容は、子どもの養育者である母親の保育参画に関与していく過程、心理的社会的な影響についてである。母親へのインタビュー内容と質問項目は、表4-2に示す。

表 4-2 母親へのインタビュー内容と質問項目

A. 保育参画の背景

- 1) 主体的に保育の企画や運営に携わる「保育参画」について知っている事柄を教えてください。
- 2) 保育参画を実施する保育園に子どもを入園させた経緯を教えてください。
- 3) 親が保育参画することに、どのような目的があるか教えてください。

B. 保育参画のプロセスについて

- 1) 子どもの入園当初、保育参画を実施して、どのような印象をもちましたか。
- 2) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、あなた自身について思い出されることはどんなことですか。 実際と運営について、工夫と改善について
- 3) 他の親にこの園をお勧めしますか。

C. 保育者について

- 1) 保育参画を促進する保育者について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 保育参画を実施する保育者はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、保育者の印象は変わりましたか。

D. 親（園児の父母）について

- 1) 保育参画を促進する他の親について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 他の親はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、他の親にどのような変化がありましたか。

E. 保育参画の実施について

- 1) 保育参画の実施によって、あなたの子育て観はどのように変化しましたか。
- 2) 保育参画の実施は、あなたと他の親と園長と保育者の間にどのような関係を生み出しましたか。
- 3) 保育参画の実施は、あなたの仕事（家庭生活）に何か影響がありましたか。

F. 保育参画の振り返りについて

- 1) 保育参画を振り返って、以下のことを教えてください。
心理的負担感が軽減されましたと感じますか。
自己肯定感にどのように変化が生じたと感じますか。

第1 母親への質問項目とその解説

A. 保育参画の背景について

「孤独に感じることはありましたか。」

「子どもの入園理由をお聞かせ下さい。」

解説：子育て世帯を取り巻く社会状況の把握と、周囲からの子育てに関するサポート有無について確認する。

父母が保育に関わる保育園への入園理由を聞くことで、どのように子どもを育てたいか、親としてどのように関わりたいかを確認する。

B. 保育参画のプロセスについて

「保育の活動に関わる大変さは入園前に説明があったと思うのですが、なぜ、大変さにもかかわらず、来られたのですか。」

「当初と比べて関わり方としてはどうですか。」

「仕事は〇〇でどのように工夫されて乗り切ったのですか。（〇人のお子さんがいて、ご両親と離れて暮らしている）」

解説：保育に関わる負担をどのようにこなしていくのか。関わる過程について、工夫したこと、周囲の子育てサポートは、あったのかどうかを確認する。

C. 保育者について

「入園してから、相談しましたか。」

「どんな言葉が響きましたか。」

解説：子育てや保育に関わることで、どのような相談をしたのか。それに対してどう感じたのかを確認する。

D. 他の親について

「他のお母さんと仲良くなったのは大きかったですか。」

解説：同じ子育て仲間として、周囲の父母とどう関わったのかを確認する。

E. 保育参画の実施について

「気にしていたことが軽減されましたか。」

「どのように変化しましたか。」

解説：保育参画による母親への影響は、どのようなことがあったのか。子育てに関するストレスなど心理面に変化が生じたのかどうか、確認する。

F. 保育参画の振り返りについて

「未就園児の親に薦めますか。」

「育児で孤独感や不安を感じている方にアドバイスはありますか。」

「保育参画をどのように広げていきますか。」

解説：保育参画で得られたものは、未就園児を持つ他の親の参考になるかどうか。一般化、拡大の可能性はあるかどうか確認する。

第3項 分析の方法、手続き

KJ法に基づき、逐語に改めたデータから、母親の保育参画に関与していく過程、母親に対する心理的社会的影響と考えられるものを抽出し、ラベル化した。それらについて意味の似通ったもの同士をグループ化してまとめ、カテゴリー名をつけた。それらの関連性について図解化し、叙述化した。保育参画の秩序を見出すためそれぞれのカテゴリーの説明および、カテゴリー間の関係や創造的統合を図り、データを質的に分析した。

客観性確保のため、質的研究の経験を持つ臨床心理学分野及び社会心理学分野の研究者3名で、切片化とラベル、カテゴリー名、図解化の妥当性について検討を行い、助言を受けた。また、臨床心理学分野の研究者2名を含めた計5名により、筆者の客観的な立場の保持に留意しながら、解釈の偏りを防げるよう検討し、データの妥当性の確保に努めた。

以下の手続きをとって、分析を進めた。

1) 母親5名を合わせて127の切片を抽出した。それらの単位化された切片にラベリングした。例えば、「一人目の時はありました。環境がガラッと変わるじゃないですか。一人だからって楽なわけではないですし、生活が変わるので戸惑ったのと。あと、寝ない子だったので。家から出られないし、その時は孤独だと思った。」の切片には、「第1子の育児での孤独感」といったラベルをつけた。

2) 内容の似通ったラベルを集め、小グループを作成した。例えば、「遠方の実家への子育ての頼れなさ」といった小カテゴリー名をつけた。カテゴリー化を繰り返し、43の中グループにまとめ、最終的に合わせて9つの大グループにまとめ、それぞれにカテゴリー名をつけた。カテゴリーは【 】で示した。大カテゴリーは、【孤独な子育てと周囲に頼る罪悪感】、【自然豊かな保育環境への賛同による入園】、【母親のリアリティショックと子どもの満足感】、【保育士から子育てに関する指南を得て、仲間として協働】、【参画する母親から他の母親への主体的な促し】、【仕事と保育のバランスによる保育参画への意欲】、【親主体の園内でのマネジメント】、【父親への参画の促しとその影響】、【ピアサポートコミュニティの形成と成長】、の9つである。これらをまとめて表4-3を作成した。

3) 大・中・小カテゴリー間の関係を図式化した。図式化は計4回の変更が行われた。1回目の変更では、保育参画の関与の過程、子育ての深化、親への影響におけるカテゴリー間の関連性を時系列にまとめた。2回目の変更では、ラベルの簡略化から適切で簡潔なカテゴリー名への変更と再検討を行った。3回目の変更では、母親間のカテゴリーの再編成と、関連性を検討した。4回目の変更では、結果と考察を再検討し、カテゴリー名とカテゴリー間の関係をより明確化したものをまとめた。図4-1では、母親の置かれている状況を【孤独な子育てと周囲に頼る罪悪感】としてまとめ、【自然豊かな保育環境への賛同による入園】を関連付けた。保育参画に同意後の状態を【母親のリアリティショックと子どもの満足感】とし、子育てを学ぶ場で【保育士から子育てに関する指南を得て、仲間として協働】する姿が見られたことから関連付けた。そこから、他の母親への関わりが見られる【参画する母親から他の母親への主体的な促し】を関連付けた。これまでの5つのカテゴリーは、入園から保育参画に慣れるまでを表すことから、ひとまとめにした。そこから、【仕事と保育のバランスによる保育参画への意欲】へとつなげ、【親主体の園内でのマネジメント】へと並列に配置した。そこから、【父親への参画の促しとその影響】へとつなげた。母親は父親へ促しをする側だったが、次第に協働体制をとり、影響を与えあっていることから、相互に矢印をつけた。【親主体の園内でのマネジメント】は次第に、【ピアサポートコミュニティの形成と成長】への過程を経たことから、関連付けた。家庭と仕事と保育参画のバランスを母親と父親はマネジメントしながらとっていたことから、これら3つのカテゴリーをひとまとめにした。これらのカテゴリーを時系列に配置することで、保育参画の過程を表し、その結果として心理的社会的影響としてストレスの軽減と成長のカテゴリーを位置づけた。

表 4-3 回答内容 「母親」

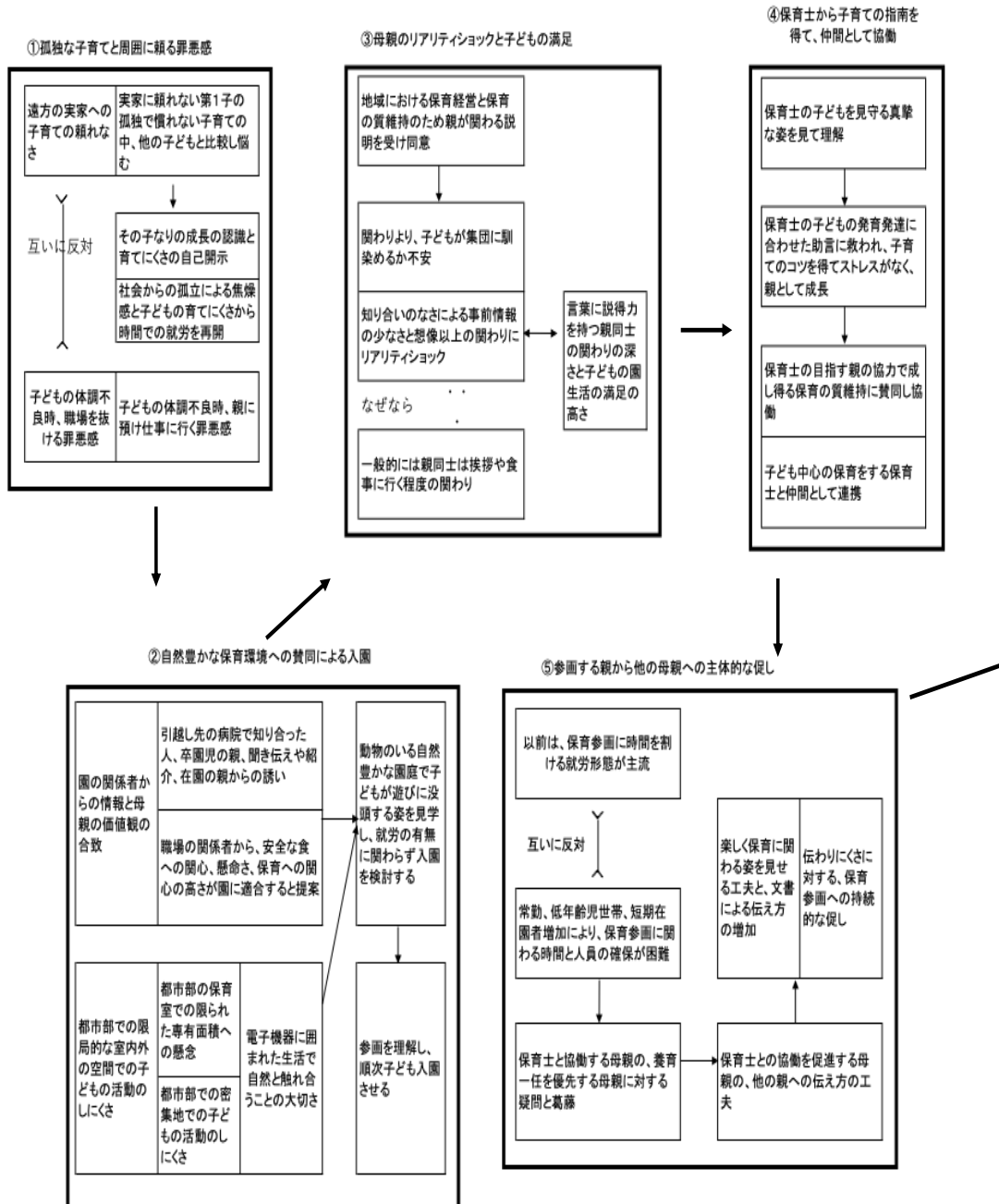
母親の保育参画によるコミュニティ形成の過程と心理的影響

③母親のリアリティショックと子どもの満足	地域における保育経営と保育の質維持のため親が関わる説明を受け同意	⑤2-1 経営と保育の質維持のための親の活動 3	色々観がやるよってことは、園長先生がいっぱい話されていてすごく勢いで、圧倒されながら聞いてたんですけど、特にそんなに疑問に思わずにやってきたような。なんで地代を生み出さないといけないとかは、在園して3年目ですとかね。バザーをなんのためにやるのか。やるって決まってるからやるって認識から、バザーのお金がちゃんと子どもたちが遊べるために使われるってことで、自分たちが頑張ってバザーをやるんだって気持ちでちゃんとわかった。機会に出て地代は他の保育園はないんじゃないかって、寄付でいんじゃないかって意見も出て、今まで聞いているように1年2年目は違っていた。自分の子どもも小さくてというのもあったんですけど、3年目に、ああ、そう思う親もいるんだってことがわかり、土地代も上がっていくし、地域への還元もあるし、OBOGが帰ってくる場所でもあるし、バザーって必要なのだから、継続していかなきゃいけないだろうなっていうのがわかってきた。	9
	関わりより、子どもが集団に馴染めるか不安	④2-1 説明に承知の上での関わり 7	それはもう全部聞いていたんで、どういうところと細かいところまで聞いていたんで、まあまあそんなもの。逆に、元の上司の廣めた奥さんが、「だったらやめたいじゃないの、大丈夫なのといわれつつ、引っ越して来ました。」	
	知り合いのなさによる事前情報の少なさと想像以上の関わりによるリアリティショック	①2-1 仕事との兼ね合いより子どもが馴染めるか不安 2 ①3-1 説明以上の関わりへの戸惑いと慣れ 3	自分のことより子どもが大丈夫かなと、集団に馴染めるかな、言葉がうまくないので、うまくいけるのかなと不安で、時間的には結構自由がきくんで、幼稚園でもいいかなと思ってたんですけど、あと、どこまで関わりが、大変ですって言われてましたけど、どこまでって漠然とすぎて、まあ大丈夫だろうって軽い気持ちだったんで。	
	一般的には親同士は挨拶や食事に行く程度の関わり	①3-2 引越後の知り合いのなさによる情報の少なさ 4 ①3-4他園での挨拶程度の関わり 6 ③9-1 挨拶程度のお付き合い 24	今思えば、入園前確かに親がすごく関わりますよっていうのはよく教えていただいたんですけど、それ以外のものがあるんじゃないですか、関わりますよっていうものがあったので、1年目はだいぶ戸惑いましてたけど、だいぶ慣れましたけど、聞いてたバザーだったり、ありますよと、単にバザー活動っていう簡単なものではなかったという(笑)。 最初はやっばり関わりに関する情報が少なかったんで、知り合いがいたわけではなかったんで、1年目は下の子が年少の時に別の保育園に通っていた。次の年に年長と年少でこの園に通った。 下の子の保育園のお母さんとは、ほとんど会話することなく一年が終わって、挨拶くらいしかなかったんで。	
	言葉に説得力を持つ親同士の関わりや深さと子どもの園生活の満足の高さ	①3-3 子どもの満足感と母親同士の関わり 5 ①7-3 仲間の言葉が説得力をもつ 16	上の子が楽しそうだったっていうのがやっばり、どっちの園に合わせてもよかったんですけど、次の年は同じ園に二人を連れていこうと思ってたんですけど、下の子もお兄ちゃんを送り送って、ここに来るんじゃないですか、やっばりここにきたっていう気持ちもあっていう、一年いって、お母さん達とギョッと仲良くなるんじゃないですか。 入る時に園長と面談して、こういう子なんですっていう事言って、でも大丈夫です、任せたいって言われて、入ってみると、同じような悩みを持っている人多いじゃないですか。全く100度違うみたいとか。3人とか育ててきた大先輩のお母さんの言うことは説得力がある。	
④保育士から子育ての指図を得て、仲間として協働	保育士の子どもの見守る真摯な姿を見て理解	②11-2 保育士の真摯な保育をみて理解 18	羨ましいかたしなので、それが最初先生についていると思ってたんですけど、どうしてか思っていたら、主人が子どもも見るのに、ヘラヘラできるわけじゃないって言ったので、なるほどと思って、それからは、真摯なんだなって思って、園庭では厳しく見ているので。	6
	保育士の子どもの発達に合わせた助言に救われ、子育ての指図を得てストレス軽減	⑤9-1 保育士の助言で親として成長し精神的なストレスはない 30 ⑤10-2 保育士による子どもの発達促進の観点からの助言に救われる 32	育児は1人目の子の時はわからなかった事が多くて、産後鬱みたいなのがひどかった。泣き止まない寝ないし、先生に色々聞いて、親として育ててもらった。2人目は気持ちに余裕が出てくると思う。ストレスは順番に解消されると休みが長くなっちゃうこと。一緒に出てくれないかって、精神的なストレスはあまりないと思うんですよ。 私はゼロから入って見てもらった。これが3歳からと思うと、大丈夫だったかと、こんな10のひのひの育てたかんと、先生がその時その時の成長を数えてくれる。でないと、親の理想を押しつけたり、なんで出来ないのって思っちゃうから。こういう懇談会の時に、先生が子どもが喧嘩しているのはこの時期は言葉が出ないだけだよとか、教えてもらうことが自分の中では救いになる。そういう話を聞く場所と聞く人がいることは大事。	
	保育士の目指す親の協力で成し得る保育の質維持に賛同し協働	②12-1 保育士への全面協力 19 ④8-1 親の協力で成し得る保育 18	ちゃんと子どもを見ているというのがわかったんで、邪魔しないようにしようとして、逆に話しかけて見ているのが、はぐれちゃうと思うって。 それが前提、言われなくても、一方的に言われたとしても、周りがやっている。だから、ついていかないと、先生も困りますよって。皆も普通にやっている。ああ、やらなきゃとなって、だんだんやっていくうちに当たり前になっていくというか、先生たちは普通で成し得ないことをやるためには親の力がなくて出来ないよと、そういう理解が(親に)出来ていくと、出来ないことは出来ないごめんないですけど、仕事が休めないとか、けど出来ることはやるよっていう、やっばり。	
	子ども中心の保育をする保育士と仲間として連携	①10-2 互いの立場の尊重と子ども中心の連携 26	この園をみて、同じようにしているんですけど、親も活動しているんですけど、親に気を使っている、考え方のかな。親を使うのではなく、お互いが子どものためっていうのが大切な。それを作る園長、それが難しいんですよ。	
	以前は、保育参画に時間を割ける就労形態が主流	②1-2 以前は保育に関わる働き方が主 2	昔と今は大変な都合いがないと思うんですけど、お母さんの頃はもっと昔になると思うんですけど、その頃は私的契約者がいっぱいいて、働けるお母さんがいっぱいいてって言った。うちのお母さんは家が専業主婦をやっているんで、参加出来るときは、一生懸命出来ることはやっばりけど普段は私的契約のお母さんたちがやってくれてたと言っていました。	
⑤参画する母親から他の母親への主体的な促し	常勤、低年齢児世帯、短期在園者増加により、保育参画に関わる時間と人員の確保が困難	③6-1 常勤の増加により関わる時間の確保が困難 12	3年位の子が多いです、小さい子がいる人も多いですし、フルタイムの人が増えて、昔は私的契約者がいっぱいいて、バザーのコーナーで、昼に集まれる人が多かったと聞いてますけど、もうほぼ皆無で。	7
	保育士と協働する母親の、養育一任を優先する母親に対する疑問と葛藤	④4-1 働き方に関わらず、子どもを預けるだけの養育態度に疑問 7	難しいですけど、私は働き方が親と親めなので、出来るは出来るんですけど、自分で選んで働いているんじゃないですか。子供と一緒にいたいと思うなら、働かなければいいと私は思っていて、働かなくてはいけない状況だから自分が働きたいという状況で、みんな働くってことを選んで、それを選んで、じゃあ子供はどうするってなった時に、この園を選んでるっていう時点で、預けたら預けっぱなしっていうのは、私はおかしいと思って、変な言い方ですけど、保育園の先生たちは専業主婦で、一歳の子は専業主婦で育てている。奥で、お母さん達を、遠く送って帰らせているのよと。	
	保育士との協働を促進する母親の、他の親への伝え方の工夫	④4-2 保育士と協力する子育ての伝え方 8	そうやって考えられない人もいて、どうして預けているのにみえないになっちゃうと自分が苦しくなって良いんですけど、そういうの、どうやって伝えていったらいいかなっていうのを、今結構思いますね。	
	楽しく保育に関わる姿を見せる工夫と、文書による伝え方の増加	②5-1 保育に関わる姿と文書での伝え方 9 ②6-1 見て伝わらないため、文書で伝える 10	それ結構、課題。よく働いている人たち、園のこと参加している人たちが話したりとかするんですけど、楽しくやるしかないんじゃないかって。今の時代に流行るかどうかかわかんないけど、見て学んでほしいっていうの。今なんでも全部説明文で書き起こすの。 伝わらない部分が多いから、お便りが増えている。	
	伝わりにくさに対する、保育参画への持続的な促し	③6-5 関わりへの自己調整の追求と伝わりにくさ 16	それはあり、まあ声をかけてコーナーの人にも自分で調整して、これぐらいでいいかってなくて、ここまでなら出来るっていうふうに考えてもらいたいかなって思うんですけど、なかなか伝わらない。伝わらないかな。会社でもないの強要するわけにもいかないんですけど、またかって言われるくらい、繰り返し言っていくしかないんですけど、難しいです。	

⑨ピアサポートコミュニティの形成と成長	気づきと自己開示により、相談と助言をする相互扶助のピアサポートコミュニティ	困った時の相互扶助のコミュニティ	③9-3 困った時に助け合えるコミュニティ 26	それとか、ほんどに困っている時に手を差し伸べてくれる関係。やっぱりなかなか言い出せなかったりして「大丈夫？」って声かけてくれる人がたくさんいるので、あと、お下がりにいっしょにいたりとか。服とか靴とか一番下の子は買ったことなくて、お兄ちゃんのはあげたりとか、笑い、ほんどに動かさる。そういうコミュニティって、作らうと思ってもなかなか作れない。
		お互いが気づき合い声を掛け合い、子どものことを理解し合える関係性	④10-1 お互い子どものことを理解し合える関係性 20	子どもに負けず高熱を出していることがあるので色々負担があるのかな。他のお母さんや保育士さんとは、色々子どものことフラットにわかっているし、自分の子どものことであんなに話さなくてもなんとかなってほしいし、付き合いも深い分。
			①7-5 周囲からの気づきによる子育て不安の軽減 18	そう、子どもに誤って不安だったことは。
			③10-1 ノンバーバルから察する関係性 27	「大丈夫？」「実は」とか。「この間すごい痛い腫らしたけど大丈夫？」みたいなこととか。そんなことまで見てくれる人がいて。
		仲間への自己開示による悩みの相談と共有し助言する相互のピアサポート	⑤3-3 仲間と話し悩みの共有と工夫を知る 6	けど先生と話したり乳児が入った親とか、新入園と一緒に入った人も多かったから、話す機会も多くなって、そこでは同じ悩みを持ってんだとか、あ、こういうふう工夫してやってみるとか、溜め込まないで出すことでストレスがためずにいけたのかなというふうには。
	③9-2 預け合いや相談と適切な助言 25		やっぱりここだとほんとに助けてもらって預かるよと言ってたり、学校でまたこんなことやってさあとか言うって、でもこれはこうだからとか、表面的なことばかりを言って、その場を取り繕う関係じゃなくて、こうしたいんじゃないかとかアドバイスれたりとか、本当に優しい、そこまで言えないとか、私妹がいるんですけど、妹とも言い合っているのがあって、そこがなかったら、超えられないっていうのがあります。	
	大変さの表出と周囲との協力で力を与えられる	②13-1 大変さの表出と周囲との協力 20	大変大変とってみんなに大変だと言われることをしているのがいいかな。大変だよねって文句言いながらでもやってみてほしいな。それが困感を生んでいる。文句言いながらやるのがいいかな。とにかくみんなでやってみるしかない。	
		④6-1 大変さの共有と力を与えられる 15	無理なもの無理なので、ちょっと様子見ながらですよ、この人とかも(下の子)どうなるかわからないし、他の人が「体調悪かったらいいよ」と言ってくれるし、まあ皆それぞれ大変なので、それを見て自分だけじゃないし、逆にエネルギーをもらうので、やるしかないというふうには。	
	相互扶助コミュニティの多重のサポートで、子育ての心理的ストレスが軽減	大勢のピアサポーターの見守りで我が子の良さを認識し視野が広がる	①7-4 大勢の見守りで我が子の良さという視野の広がり 17	私小さいことで悩んでたんだって、気にしてくるっていうか、子どもに対してだめな部分しか見てなかった。お母さんたちで他の子どものこと詳しく知ってるじゃないですか、自分の子以外の子どもも関わること多いんで、すごかったよと言ってくれたこと多かったんで、聞きやすいし、そういう一面があるんだ。集団の中で自分の子のこと、知らないことが多い。
			②11-1 周囲の子どもの関わりと話すことで孤独感やストレスを感じない 17	孤独は私はまったくない。育児ストレスもそんなに感じないです。同じような子どもがいっぱいいるのがわかるのと、楽しく話しているからじゃないですか。うちの子がこんな大変なことしているのを共有出来たりとか、先生も笑ったりとか、夏だよとか普通に言ってくれる先生たちだから。
子どもを見る時間が充実し、ストレスはない		④10-2 抱え込まなさや孤独感のなさ 21	育児の面で抱え込むということはないかな。孤独を感じたこともないかな。	
		①5-1 子どもの面倒を見る時間はストレスではない 9	睡眠時間は削りましたが、でも大変だっていうよりも充実していたなっていうほうが強かった。小学校ってガラとかわるじゃないですか。結局時間を子どもに割くんですよ。できるだけ見てあげたいって思う、手が空いて子どもたちは自分たちで何をやってくれるんですけど、家のことよりも自分のことよりも子どものことに時間を割くようになった。そういう面では子どものことをやっていると思うと、私はストレスにはならなかった。	
個人の成長 ポジティブシンキングでの認識の変化とリーダーシップを取れる時期での多様化を恐れない行動力	読書から得たポジティブシンキングと前向きに仕事ができるための会議前のアイスブレイクの活用	⑤6-1 ポジティブシンキング 18	元々はそうでもなかったんですけど、ある時から、ポジティブに、仕事もポジティブに捉えられるようになって働くようになって。	
		⑤6-2 読書から得た気持ちの持ち方と前向きなアイスブレイク 19	んー、結構悲観的でした。学生の頃は、自分だけできないとか、どこかで、実家も大変だった時期があったんですけどね。なので途中で考えなくなった。本とかよく読んでた時期があった。気持ちの持ち方とか、リーダーになった時とか、会議の前に昔で最近あった楽しい話をしようというのがあるって、で、それをすると会議が笑顔で始まるという。なんか重たい空気で今日何話そうとかじゃなく、一言ずつ始まる前にこんな楽しいことあってねと、それを実践してみたり、そういうことで前向きなじゃないけど、そういうのあるのになって、仕事のこと、ほとんどネガティブに捉えなくなった。	
	経験の積み重ねによる感情のコントロールとポジティブシンキングでの方法の多様化への抵抗のなさ	⑤6-3 年の功と方法の広がりが 20	それもありますし、年取るとそんなに怒らなくなった。子どもには怒るんですけど、仕事では若い時はモヤモヤしてましたけど、しょうがないよ、次行こつたいな、こういうやり方もあるよとか。	
	他者よりも自分が変化することを恐れず結果を目指し前向きに行動する	⑤6-4 変化を恐れず結果を目指し行動 21	ないですね。なるべくこう、結果を求めていけば変わる。経過は、毎年こうやっているからというのに、とらわれなかったり、上の人も一年ごとに変わる時があって、去年言われたことと今年言われたことと全然違ったり。でも、そう言ってるから、じゃあ、こっちで変わると、毎年変わってたんですよ、職場の長が。でも文句言っても始まらないし、だからその時間とられるなら、愚痴ってる時間よりは前向きに。	
乳児期での周囲からの配慮へのお返しとして、子どもの成長に伴い、リーダーシップを取る	③2-2 周囲の気遣いへのお返し 6	そんなにやっぱり入ってすぐ重たいもの持たせられないじゃないですか、なので辛さあんまりわかんないという感じ。で、やっぱり未就園児連れたから、バザーのコーナーで保育士でいるからという感じ、そういう後ろめたいというか申し訳ないという気持ちで、だからその分、返せる時種張らうってなって、最終的には自分で手を上げて、コーナーのリーダーにならせてもらった。		

⑨ピアサポートコミュニティの形成と成長	親としての成長 相互扶助で親の役割を認識し子育ての大変さと楽しさを共有する	自宅のできる保育活動の楽しさ	⑤5-4 活動を楽しみ、上達する 15	今自覚めた感じで、今すぐぬいぐるみを作って、年々成長させてもらっています。直線縫いもできないレベルだったんですけど、コーナーでは出来る人扱いされています。
		親を助ける子どもに、親として成長させてもらう	③8-3 親を助ける子どもと親の成長 23	そうすると子どもたちのほうが、しょうがないよお母さん頑張っているからとか言ってくれてくれる。助けてくれる。親が出来ないと子どもが育つっていうか、言っていることがわかるようになってきたので年齢的にも親にしてもらっている、子どもに、人として未熟だったなって、出来ているつもりでいけど、働いている時とか、全然いつもなんか気がかされるし、反省したりとか。
		就労と子育てを通し親としての自分の成長を望むか	④7-1 子ども優先か自分と仕事優先か 17	その人が何を求めるかですよね。その人次第かな。子どもにどうかってことを真剣に考えている人に対しては選択肢の一つ。自分の条件とか仕事を主に考えている人であれば、薦めないかな。安易に薦められるものではないか。
		保育に関わる意志をもつ親に園の薦め	②8-1 保育に関わる意志をもつ親へは紹介 13	どうしよう。薦めますけど、やらないといけないことは伝えます。そういうの求めているお母さんには言うかも知れないけど、そういうの求めているお母さんは自分で調べてくださるんですけど、だから、紹介はします。けど、無理に、絶対いふみたいなのはないかな。
		子育てで大変だからこそ保育に関わるというのも一考	⑤11-1 関わりへの承知があるか 34	大変だとわかた上で、一概には言えない。この環境とか、それよりもいいものあるよとか。大変そうな人を見ると声をかけたくなるけど。
		子ども中心の保育のため親が変われるか	①9-1 子どもの保育の質のために親が変われるか 24	見学は薦めます。入るのは強く薦めはしないと思います。未就園児の集まりで遊ばせてみたとは言いますが、こういう園もあるよって。やっぱり大変ですし、家庭のお父さんにもよる。ただ、子どもが良いって言ってくれたら、親も変わるのかな。色々な園を見ている中から選ぶのが大事なかな。
		いずれ巣立つ子どもに今は関わる	①8-5 いずれ巣立つ子どもに今は関わる 23	自分の趣味のことでできなかったとしても、それは全(ス)スにならない、子どもたちって、そのうち親を必要となくなる、その時じゃないですか。寂しいねと書いて、そのうち来ない。だからその時までは見てあげたい。見に来ないでって言われるだろうな。そんな前に関わる前に関わろうかと。
		日々への感謝と周囲への目配り	②3-2 日々への感謝と周囲への目配り 6	当たり前のことが当たり前じゃない。今遠くまで、大きいところと生きていくことが普通のことじゃないから。教えがキリスト教なのもあって、感謝とか自分よりも周りの人を見ましようじゃないけど、そういうのが多分根付いているのかなと入ってからは思うようになりました。
		関わる覚悟があると親として成長する	③5-1 関わる覚悟と親としての成長 11	内容とか、お薦めしたいですけど、やっぱり子どもがどういうより、親が覚悟を持って入らないとメンタル崩壊するから、簡単には薦められないけど、私はほんとに色々親として育ててもらえたし、在園が長期でないなら、二折とか厳しいかもですけど、3年くらいならちょうどいいですかね。バザーやる側したら、動けるようになったらなくなっちゃったねーみたいになるんですけど、今はそういうのが多くて、ちょっと難しい。
		親として一歩踏み出し行動すると変わる	④11-1 行動すると何とかなる 22 ⑤10-1 話せる場所へ一歩踏み出す勇氣 31	みんな大変でもやると何とかなる。そう思うと何とかなる。 1人だと答えでないじゃないですか。だから外に出たほうがいいし、話せる人がいるところに行きたいほうがいいし。子どもが喧嘩する時とか、怒ってはつくなる時あるけど、そんなとき自分だけじゃないか。こんなふうで怒っちゃったんだよねとか。今すぐに虐待とか言われて、逆にそういう事言いくらなっちゃったりするじゃないですか。それ虐待だよって言われたらもう話さなくなるだろうし、声を出しやすくなるどころで探したいらいいいある。そこに一歩踏み出すのすごく勇氣がいる。知らないところに行くの、それが出来る環境があればいいと思う。
社会性の成長 周囲と関わりコミュニケーションを図り、頼れる人を広げる	委員会に関わることで、経験者からデバイス使用による書記時間の効率化を伝授され、保育の理解と相まった効果を実感	⑤5-5 委員会のサポートとしての関わり 16	委員会は、選ぶ説明会を聞いて、新入園の時、入らなきゃいけないかなって思っていて、けど1年目は子どもが小さくわかんないから入らなくて、でもなにかしたいなって最初から思ってたんですけど、で、書記は最初、サポーターやって、委員会には出れないけど家で文字起こしの編集だったというところで、	
		⑤5-6 関わることで時間の効率化と保育への理解の深化 17	2年目は書記もサポーターも変わらないうちで、入って、みるみる委員会に入る。パソコン持ってきたりしていううちに毎回行きますって感じになった。最初、委員会長いなーと、1時までやって話してて思ったんですけど、子どもを見ながら議事録読むほうが大変だった。逆に書記やったら早くデータも入るし音声でも聞けるし、何だったら委員会は出ておけば、何かあった時に議事録を見れば大丈夫って、園のこともよく分かるし一石二鳥だと思います。	
		⑤5-1 デバイス使用による効率化の工夫の伝承 12	そうですね。保育園でも2年目くらいから書記をさせてもらっているのでも、今もですけど、逐語を起しています。でもだいぶ早くなりました。音声で起こせるやつとか、去年の卒業生の方が残してくれたので、マイクで自動音声で起こします。文字変換したものも皆さんに添付してお配りしているので、OOのアカウント作って。私詳しくないけど、ステレオからマイク通して、録音しながら文字を起しています。一昨年試して去年から本格的に入れました。発話がいい人はうまくいくんですけど、ボイが喋る人とかは音が取れてないんですけど、二本立てで、おまけみたいな感じでつけて。	
	委員会などで周囲に合わせたコミュニケーション	⑤7-1 周囲に合わせたコミュニケーション 22	まあ、愚痴も言ってるんですけど、そんなに言わなくなったと、私はいつもお年寄りと喋ってるんで、喋るのは好きなので。切り替えなんだろうね。喋らなくていい時は喋らないし、空気でみんなが喋ってない時はどうにかしなきゃいけない時は喋る。仕事でもなんでもそうしているんだろうな。	
	祖母以外の頼れる人を広げる	⑤10-3 祖母以外の話す相手 33	自分の親に言いにくい人もいると思う。親だとストレスだけとか話してアドバイスとか聞けない人もいたので、色々な人と話したい。	
SNSの使用を控え人と比べない	③11-1 比べるツールは使わない 28	一般社会では、やると思いますが、私はフェイスブックとかやらないと決めていて。見過ぎちゃうと疲れるし、やっぱり比べてしまうし。なので、そういう部分でも乗り越えようとか、インスタとか見ない。		
置かれた場所で周囲と関わり楽しく生きる	③11-3 置かれた場所で人と関わりどう生きるか 30	ないものねだりをしてもしようがないので、自分がいる場所どう楽し生かせるかというのいいかなというも思っています。自分がどうありたいか。子どもにも言ってるけど、挨拶と返事と笑顔があれば、誰かが助けてくれるから。それが出来ない人は、困っていても助けてくれないよって。		

空間配置と図解化
母親



⑥仕事と保育のバランス

保育参画の多さと仕事と家庭とのマネジメント	慣れと経験を積むことで関わりが増加し、タイムマネジメントが必要
	仕事と家庭と保育参画で、優先順位をつけバランスのとれたやりくりを目指す
就労時間の調整と保育参画の時間確保の模索	自宅での制作活動と休息のバランス
	保育参画への時間調整が可能で長年勤務できるモデリング構築への模索
子どもの体調や成長、家族成員の増加など、状況に対応できる働き方の模索	シフト制や時間就労での保育参画の時間確保と経済面でのやりくり
	子どもの体調不良時の休暇取得に対する罪悪感と、周囲の理解を得るためのコミュニケーションと経験知による行動の変化
	子どもの成長や家族の増員に合わせた在宅という働き方

⑦保護者主体の保育園内でのマネジメント

在園、経験者中心の人員確保と活動軽減と世帯への配慮	在園の親主体で調整
	直接交渉による人員調整と、経験者への呼びかけによる常勤と低年齢児のいる親への活動軽減の配慮
経験者からの伝授と、即戦力・効率重視の引受け役を周囲が支えて協力し活動を割り振りする	経験者から活動について伝授され、内容を知る機会を持つ
	即戦力と効率重視の引受け役と、周囲で引受け役を支え割り振りし協力する
デバイスによる効率化と、長時間の使用による子どもへ関わる時間の減少	
ストレスコーピング	早めの就業、外出、家事の工夫などで気分転換

相互に関係

⑧父親への参画の促しとその影響

父親の存在の認識と父親なりの家事への協力	父親を含めた周囲からの協力の大きさへの気づき	父親に保育への関わりを提案し、父親仲間と子どもたちとのつながりができ、母親にも良い影響	母親から子育ての不慣れな父親に保育への関わりを提案
	父親の特徴のある家事協力への付き合い方		保育への関わりによる父親同士の仲間作りの楽しさと子どもたちのつながり
	父親の家事への口出しのなさ、感謝の表出によるストレスのなさ		母親との兼ね合いで仕事を調整する、他の子どもに関わり愛着がわく、充実感を得るという変化がおきる
			父親の成長が母親に良い影響を与え相乗効果を生む

⑨ピアサポートコミュニティの形成と成長

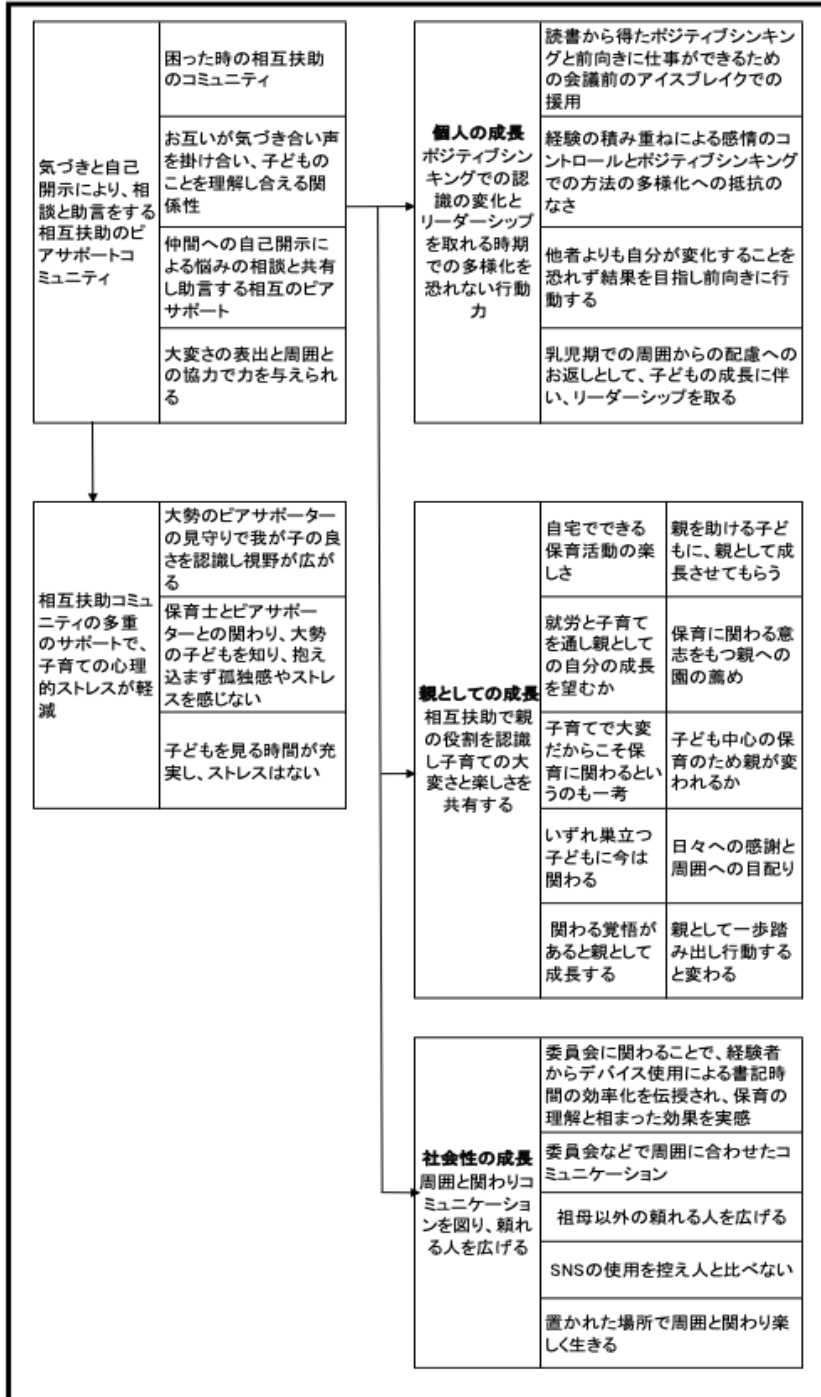


図 4-1 空間配置と図解化 母親

第3節 結果と考察

分析の結果、9つの大カテゴリー【孤独な子育てと周囲に頼る罪悪感】、【自然豊かな保育環境への賛同による入園】、【母親のリアリティショックと子どもの満足感】、【保育士から子育てに関する指南を得て、仲間として協働】、【参画する母親から他の母親への主体的な促し】、【仕事と保育のバランスによる保育参画への意欲】、【親主体の園内でのマネジメント】、【父親への参画の促しとその影響】、【ピアサポートコミュニティの形成と成長】に大別された。以下に、大・中・小カテゴリーを【 】, 切片化された発言を「 」で示した。発言者に番号を付した。

第1 孤独な子育てと周囲に頼る罪悪感

都市部に住む多くの母親は、遠方の実家に頼れない第1子の孤独で慣れない子育ての中、他の子どもと比較し悩む。母親①の「耐えるしかなかった。親がすぐ来れるわけでもなかったの。夫に相談しても、私はその時子育てに専念していたから、やらなきゃいけない、他の子と比べてしまう自分もいた。なんで、他の子は座って食べてるのに、うちの子は立ってるんだとか。やっぱり育て方なのかなとか、1人目はすごい悩みましたね。初めてすることが多いから。」との発言から、社会からの孤立による焦燥感と子どもの育てにくさから子育てに関するストレスを抱えていると考えられる。母親③は、「働くことで子どもに接する自分の焦りと折り合う」など、周囲との接点を持つようとしている姿が窺える。

就労している母親⑤は、「1人目の時は、お熱出て帰らなきゃいけない、仕事を途中で抜けることにすごい罪悪感がありました。その日のリーダーだったりすると、中途半端に仕事を抜けるのは子どもがいない時はそんなことしたことなかったし、職場に対して申し訳さが強くなって、仕事の比率のほうが高かったんだろうな。子ども中心じゃなく、仕事の責任とかも緩められない自分がいて。そこ大変だったかな。また熱出たとか、結構悩んでた。1人目でわかんないことも多かったし。」と、子どもの体調不良時、職場を抜ける罪悪感を持つ。

母親にとって、1人目の育児はわからないことが多く、いつでも気軽に相談できるサポート体制と、そこへの近づきやすさ、利用のしやすさが必要と考えられる。

また、実家が近い母親⑥に見られる「やっぱおばあちゃんに、自分の母にお願いすることも多くて。お願いしたまんま、また罪悪感を覚えたりして。子ども熱出してんの仕事行ったりするのも罪悪感だったけど。」と、家族からサポートを受ける際に【子どもの体調不良時、親に預け仕事に行く罪悪感】を持つことがある。

都市化による子育て世代を取り巻く環境の変化によって、実家に頼れない母親の孤独で慣れない子育てと、実家に頼れるものの、子どもの体調不良時に早退することによる職場へ

の気兼ねと申し訳無さからくる罪悪感と、子どもを預けて仕事に行くことに対する実家への罪悪感を持っていた。仕事が優先と「子ども中心」の間で葛藤を抱えていた。職場の早退といった制度の利用や、家族のサポートが受けられている状況において、母親は、子育てに関する心理的なストレスをもち、悩んでいたと捉えられる。

ただ、母親は、自分の置かれている状況を認識し、客観的に捉えメタ認知していると考えられるため、問題解決への行動に向けた手立てとなることが推測される。

第2 自然豊かな保育環境への賛同による入園

母親④の、「私の元々の職場の（略）が、お孫さん4人をここの保育園に入れて、あなたの考えに合うんじゃないっていうふうに教えてくれたんです、ここのことを。」といった【職場の関係者から、安全な食への関心、懸命さ、保育への関心の高さが園に適合すると提案】されたことや、【引越し先の病院で知り合った人、卒園児の親、聞き伝えや紹介、在園の親からの誘い】を受けて、【園の関係者からの情報と母親の価値観の合致】に見合った子どもの保育園選びを検討し始める。

また母親③の「この間、実家に帰って思ったんですけど、やっぱり都会はピリピリしてるなって。都会は一步外に出ると人に迷惑かけちゃいけないっていうのがある。うちの子なんでもやらかしちゃうから。家の立ってる間隔も密集してるじゃないですか。人んちに物ぶつけないでよとか。一人で出ていけないでとか。実家帰った時は好き放題に庭を荒らしたり何をしようが自分の土地だし。車も少ないし。のびのび生きられる。」と、【都市部での密集地での子どもの活動のしにくさ】を憂慮していた。他に、母親④の【都市部の保育室での限られた専有面積への懸念】など、【都市部での限局的な室内外の空間での子どもの活動のしにくさ】という子どもの健やかな育ちを懸念していた。

そこで、母親⑤の「見学にも来て、入れたいと思って、園庭がすごくて、隣なのにこんな世界があったのかって。夜中に子どもの鳴き声するのは、山羊だったのかって。すごい世界と思った。他の園も見に行って、園庭がなかったり、部屋が狭かったり、0・1歳児はこの部屋しかありませんよってところとか、オリで囲まれてるのは嫌だなって。自分が畑と森に囲まれたような所で育ったから、自然がいっぱいで、ままごとはその辺にある野菜でリアルにままごとしたので、そういうの体験させてあげたいと思ったので。主人の意見は殆ど聞いてないと言うか。あと、同級生が卒園児とか、よくよく聞いたらいたので、大変さも聞いて承知で入りました。」と、【動物のいる自然豊かな園庭で子どもが遊びに没頭する姿を見学し、就労の有無に関わらず入園を検討する】ことが窺えた。昨今では、電気機器を使用する生活をし、利便性を享受しているが、その中で、改めて【電子機器に囲まれた生活で自然と

触れ合うことの大切さ】を再認識し、子どもが【存分に遊べる広い環境】を求めていることが引き出された。

保育園の入園では、母親①の「1人目の時は2年間大変かなってという思いで、けど子どもが楽しんでいるし、真ん中の子の時は、自分で流れがわかるというか、(3人目)小さい子連れだと、すごく気を使ってくれて。子どものことを考えたらっていうので、結局戻ってきたって感じなんです。」と、【参画を理解し、順次子ども入園させる】ことがわかった。子どもの保育施設の検討にあたり、母親の子ども観、保育環境重視による情報収集と見学で、【自然豊かな保育環境への賛同による入園】を決定していることが窺えた。

第3 母親のリアリティショックと子どもの満足感

【地域における保育経営と保育の質維持のため親が関わる説明を受け同意】し、母親④の【説明に承知の上での関わり】に、納得していたことが窺えた。母親①の、「今思えば、入園前確かに親がすごく関わりますよってというのはよく教えていただいたんですけど。それ以上のものがあるじゃないですか。関わりますよっていう以上のものがあったので、1年目はだいぶ戸惑いましたけど、だいぶ慣れましたけど。聞いてたバザーだったり、ありますよと。単にバザー活動っていう簡単なものではなかったという(笑い)。」こと、【知り合いのなさによる事前情報の少なさと想像以上の関わりにリアリティショック】を受けること、保育への【関わりより、子どもが集団に馴染めるか不安】を抱えていた。

母親は、【一般的には親同士は挨拶や食事に行く程度の関わり】と認識していたことから、母親①の「入る時に園長と面談して、こういう子なんですっていう事言って、でも大丈夫です、任せてくださいって言われて。入ってみると、同じような悩みを持っている人って多いじゃないですか。全く180度違う悩みとか。3人とか育ててきた大先輩のお母さんの言うことは説得力がある。」と、自分と同じような悩みを持っている親を知ったり、自分とは全く違う悩みを持つ親を知り、話すことで共感したり、気付きを得ることにつながっている。

母親①の「上の子が楽しそうだったっていうのがやっぱり・・・(略)・・・」と、【子どもの満足感と母親同士の関わりの深さ】によって、リアリティショックは、緩和されていることが窺える。

リアリティショックは、保育への関わり具合、深度に対する本人の認識と現実とのギャップと捉えられる。子ども達が楽しく過ごす様子を知ること、子どもを複数育ててきた経験者の言葉から、視野が広がり自己を客観視することで、不安な状態から安心感と共感を得られることが導き出された。

第4 保育士から子育てに関する指南を得て、仲間として協働

母親⑤の「私はゼロから入って見てもらえた。これが3歳からと思うと。大丈夫だったかと、こんなにのびのび育っていたかなと。先生がその時その時の成長を教えてくれる。でないと、親の理想を押しついたり、なんで出来ないのって思っちゃうから。こういう懇談会の時に、先生が子どもが喧嘩しているのはこの時期は言葉が出ないだけだよとか。教えてもらうことが自分の中では救いになる。そういう話を聞く場所と聞く人がいることは大事。」と、**【保育士の子どもの発育発達に合わせた助言に救われ、子育ての指南を得てストレス軽減】**に向かったことが窺われた。

子どもが自然豊かな中で遊びに没頭しつつ、危険を自分で察知する機会を得られるよう、保育士は見守りの中で安全面の確保に集中する。母親②は、「愛想笑いとかしなので、それが最初先生っていつも笑っていると思ってたけど、どうしたって思っていたら、主人が『子ども見てるのに、ヘラヘラできるわけないだろ』と言ったので。なるほどと思って、それから、真剣なんだなって思って。園庭では厳しく見てくれているので。」と、周囲にいる親にあまり笑顔を見せないが、**【保育士の子どもを見守る真摯な保育をみて理解】**を深める様子が窺える。母親②は「ちゃんと子どもを見ているというのがわかったので、邪魔しないようにしようと。逆に話仕掛けて見ているのが、はぐれちゃうと困るなと思って。」と、「保育士への全面協力」へ進んでいる。そこから、母親④は、「それが前提。言われなくても。一方的に言われたとしても、周りがやっている。だから、ついていかないと。先生もお願いしますと言っている、皆も普通にやっている、ああ、やらなきゃとなって、だんだんやっていくうちに当たり前になっていくというか。先生たちは普通では成し得ないことをやるためには親の力がないと出来ないよねと、そういう理解が（親に）出来ていくと、出来ないことは出来ないごめんなさいだけど、仕事が休めないとか、けどできるところはやるよっていう、やっぱり。」と、自分にできることできないことを認識しながら、保育に関わっていく過程が見受けられる。

保育士の子どもの発育発達に合わせた助言に救われ、子育ての指南を得て、他の親との関わりを持つことと子どもの様子を知ることから、安心感と共感を得て、親として成長していく様子が窺える。

そこで、母親は**【保育士の目指す親の協力で成し得る保育の質維持に賛同し協働】**しようという意思に至ったはないかと考えられる。子どもの育ちを見守る環境の保持のため、**【子ども中心の保育をする保育士と仲間として連携】**し協働する心持ちが一層高まったのではないかと考えられる。

第5 参画する母親から他の母親への主体的な促し

母親②の「昔と今は大変の度合いがかなり違うと思うんですけど。(略)うちのお母さんは家が商売をやっているの、参加できるときは、一生懸命できることはやった」から、【以前は、保育参画に時間を割ける就労形態が主流】だった。しかし、母親③の「3年位の人が多いですし、小さい子がいる人も多いですし、フルタイムの人が増えて。」との発言から、【常勤、低年齢児世帯、短期在園者増加により、保育参画に関わる時間と人員の確保が困難】な状況となっていた。

ただ、「そうやって考えられない人もいて、どうして預けているのにみたいになっちゃうと自分が苦しくなって良くないけど、そういうの、どうやって伝えていったらいいかなっていうのを、今結構思いますね。」との母親②の発言から、【保育士と協働する母親の、養育一任を優先する母親に対する疑問と葛藤】を持つようになった。

一般的には、親の就労等で保育に欠ける乳幼児の保育を行うのが保育所であることから、保育に参画することに賛同する親と、そうでない親の意識は、隔たりがあると捉えられる。

前述した先行研究では、「保育の限界として、子育ての手伝いはできるが肩代わりはできない」と示していることから、親も子どもも一緒に育っていくものという心持ちへの理解に向けて、調整が必要と考えられる。

そこで、主体的に保育参画する母親によって保育士との協働を促進するために、他の親への伝え方を工夫している。母親②の「それ結構、課題。よく働いている人たち、園のこと参加している人たちで話したりとかするんですけど、楽しそうにやるしかないんじゃないって。今の時代に流行るかどうかわかんないけど、見て学んでくださいっていうの。今なんでも全部説明文で書き起こすので。」と、「伝わらない部分が多いから、お便りが増えている。」の発言から、【楽しく保育に関わる姿を見せる工夫と、文書による伝え方の増加】していた。【伝わりにくさに対する、保育参画への持続的な促し】から、保育への関わりの程度に対する考えの相違による葛藤は、時間をかけて折り合いをつけていく必要があると考えられる。

第6 仕事と保育のバランスによる保育参画への意欲

母親④は、「地区もあるし、クラス委員とか、バザーのコーナーでサブまで行かないんですけど、各まとまりの中でちょこちょここと。」と、【慣れと経験を積むことで関わりが増加し、タイムマネジメントが必要】となる。

そこで、【仕事と家庭と保育参画で、優先順位をつけバランスのとれたやりくりを目指す】。

母親④の「その時その時絶対やんなきゃいけないことを先にとか。終わりそうになかったら夜なべする。在宅の仕事が基本で、合間に保育園のことを夜やったりとか。家事と育児は

満足度は高くないけどなんとかなってる、生きてはいる。」と、【保育参画の多さと仕事と家庭とのマネジメント】をするようにしていることが窺える。

日中仕事のため、自宅で活動をするのも一つの選択である。母親⑤は、「自分が壊れないくらいのバランスはどこなのか。壊れるまでしてすることないと思っている。壊れそうだったら、パートで働けばいいという気持ちで。仕事と育児のバランス、絶対この仕事、絶対この保育園ではなくて、楽をするのではなくてやっていけばいい。」と、制作などは園に行かなくてもよいため時間の融通はきくものの、睡眠時間との兼ね合いから、【自宅での制作活動と休息のバランス】を取り、無理をしないように心がけながら工夫していた。

そこで、母親たちは【保育参画への時間調整が可能で長年勤続できるモデリング構築への模索】を目指す。母親③の「休みが取れなくてしんどいっていうのはないんですけど。でなければ、お金はもらえないので。ほんと、お金はかかるので。それはしんどいですね。」との発言から、【シフト制や時間就労での保育参画の時間確保と経済面でのやりくり】を行っていることが窺える。

母親本人の自助努力といった個人の側面に加えて、職場という社会面でも模索している。早退や休暇を取得するなど子どもの体調への対応と職場への罪悪感があつたが、変化が生じている。

母親⑤は「本当に人がいなかったんで、この業界では。それでも戻ってきてほしいと言われたので。その時はそれでよしだったんですけど、なんであの人だけ休みが取れるんだって言う、不安もありますけど。なので、いるときは仕事量を増やして頑張ってる。なるべく、休憩も少なく、休憩してないとか、周囲とコミュニケーションとったりかしてます。そうすることでお休みも取りやすいですし。」と、経験値による行動の変化が見られる。【子どもの体調不良時の休暇取得に対する罪悪感と、周囲の理解を得るためのコミュニケーションと経験知による行動の変化】は、【子どもの成長や家族の増員に合わせた在宅という働き方】を選択したり、「休暇取得の理解と周囲とのコミュニケーション」によって、交渉力を身につけ、落としどころによる合意形成を図っていた。仕事と保育のバランスの工夫によって保育参画への意欲は高まっていると考えられ、行動化へと導き出され、それらのバランスを取る自分の力を認識することで自己肯定感が高まると考えられる。

第7 親主体の園内でのマネジメント

保育参画に意欲的な母親は、仕事と家庭へのマネジメントをし、保育参画とのバランスを図っていた。他の母へは伝え方を工夫し、主体的に参画の促しを行っていた。

行事に向けた保育参画の人員確保は、母親③の「在園でバザーの準備をするのが本来の姿」

とし、主に【在園の親主体で調整】される。母親②は「大変な人はかぶっています。バザーで、去年とかフルタイムでも動いてくれるが、あまり入れ込まない。小さい子がいる母も抜かしています。」と、「常勤と低年齢の子どもの親に対する保育への関わりへの配慮」がなされていた。

そこで、在園での工夫に加えて、母親③の「それぞれ、同期会があるので。私も上のお兄ちゃんの代だったり、まあ園からもお手紙出して、つながりで、誰々さんどうか。バザーのコーナーとか。手紙だけだと弱いんで、直接アタックして。」から、【直接交渉による人員調整と、経験者への呼びかけによる常勤と低年齢児のいる親への活動軽減の配慮】をしていた。母親はそれぞれのネットワークを活かし、周囲を巻き込むことで、できるときにできる人ができることを行えるようマネジメントしていた。【在園、経験者中心の人員確保と活動軽減世帯への配慮】によって、バザーに取り組んでいた。

限られた人員での運用では、【経験者から活動について伝授され、内容を知る機会を持つ】ことでマネジメントが円滑に進む。母親⑤の「皆で助け合うのは、3年くらいすると年中クラスの人数も増えてくるので、上の子を卒園させた人が声をかけてくれるので、それを知る機会も増えてくるから、聞ける人がいるのは大きい。今年の年長は卒園児のお母さんが少ないので大変でしょうね。年中は、3人目4人目のお母さんが多いので聞きやすいのもある。乳児のクラス委員させてもらってるけど、クラスのことわかるし園のことよくわかるなと。下のクラスはそんなにしんどくない。多分やることも先生がいっぱいやって下さる。」との発言から、運用の状況が窺える。

母親⑤の「そうですね。もどかしいんでしょうね。待てないのもあるのかな。我慢はしてないと思う。決まらないでもやもやしてるんだったら、全部やりますって。けど、背負い込まないように周りがやってくれているので、保育園の生活に関しては。あ、また手をあげちゃった、はい、他の人と。あれもこれもやっているのにだめって、他の人って、皆が割り振りしてくれるので。クラスの話はリーダーの人とか。上のクラスに5年いてて初めてリーダーやる人がいて大変だろうなと。年長は大変。乳児クラスは幸せだったよと皆が。大変な部分がわからずに手を上げている部分もあるので。」との発言から、【経験者からの伝授と、即戦力・効率重視の引受け役を周囲が支えて協力し活動を割り振りする】というチーム体制における支え合いが機能していた。

昨今では、いつでもどこでも使用できる利便性から、【デバイスによる効率化と長時間の使用による子どもへ関わる時間の減少】が見られている。母親②の「ないときは、園にいっぱいこなきゃいけなかったりとかしたと思うんですけど。家にいてもいい分、でも気持ちは向けられないので。子どもにお母さん何やってんのとか言われるし、こっち見てとか言われ

るし。」との発言から、以前は、親同士は園内での対面での活動が多く、園内で区切りをつけていたが、デバイス機器の使用増加により、利便性は向上したが、保育参画と家庭生活との境界が不明瞭になることによる子どもとの関わりに影響を及ぼすことが窺えた。お互いの家庭生活に支障のないような規範のもとで、活動を考慮する必要があると考えられる。

マネジメントを駆使する母親は、母親①の発言「何もしない。早く寝かせてもらおう。だから、子どもと出かけるほうが気が紛れるかな。」など、【早めの就寝、外出、家事の工夫などで気分転換】している。【ストレスコーピング】を持つことは、仕事と保育参画のマネジメント、および子どもと過ごす生活とのバランスをとる上で、母親の気分転換として役立つと考えられる。

第8 父親への参画の促しとその影響

保育参画をこなしている中で、母親②の「父の協力がすごくあるかどうか、結構大きいと思います。」から、母親は父親の協力の影響について気づきを得ている。

母親③の「言えばやってくれるんですけど、ゆで卵作ってって。その設定した通りにしか出来ないから、毎日ゆで卵3こ、3こ、3こで、ゆで卵メーカーって言われているんですけど、私の友達から。で、パックの中が切れちゃえば、ストップするみたいなの。」と、父親は言われた通りにしか家事への協力はできないものの、母親は【父親の特徴のある家事協力への付き合い方】に慣れている様子が窺える。

母親①の「あと夫が食事のことにあまりうるさく言わなかったのが大きい。なければ食べに行こうとか。きっちりやれって言わなかったことがすごく助かった部分大きい。」という父親の口出しのなさ、と、「家事分担はないが感謝の言葉がけがある」こと、「悩んだことはない。疲れ果てることはあったけど、それでストレスや悩むことはない。多分、話すから。夫と話したり。」と、【父親の存在の認識と父親なりの家事への協力】を認識し、【父親の家事への口出しのなさ、感謝の表出によるストレスのなさ】を実感している。謝意、傾聴と受容、それらが仕事と保育参画、家庭生活のバランスに対するストレスの軽減や解消になっていることを母親は認識していると考えられる。

父親は、家事に関しては自分なりに協力しているが、子供との関わりに不慣れと考えられる。母親⑤の「最初は、何も関わろうとしなかったし、関わり方もわからなかったし、30分子ども預けてたら、泣いたまま床にいてもう無くなっていて。1人目のお父さんのよくある不器用すぎてどうしようもできないから置いときましたと。だから、なにかやったほうがいいと、お手紙もたいして読まないから、花火師やってみたらと。」の発言から、【母親から子育ての不慣れな父親に保育への関わりを提案】している。

足を踏み込んだ父親に変容の過程が見受けられる。母親①の「私よりも夫が変わったんですよね。最初は、園に興味がない。『あ、好きなどこ入れなよ。』『お父さん花火とかあるらしいよ。他の家のように協力しないとイケないよ。』『え？』と。じゃここにするね。他のところを見ずに決まったので。最初は若干否定的だったと思うんです。また土日行くの。って感じだったんですけど。結局は花火師に入り、私よりも週末出かける、園にいることが多くなったので。」の発言から、【仲間を得ることでの父親の保育への関わり】は、より深化し変化していった。

母親①の「お父さんたちと一緒にいること、私もそうなんですけど、地元がこっちじゃないから友だちが少ないっていうのもあって、一緒にいるのが楽しいっていう。お父さんの力が必要なんですっていうときは、ほぼ行くようになりました。」と、「なので、私が園のことで行くときは（夫が）子どもを見る。一年目の時はそれで仕事休まなかったですね。土日仕事行ってたんで。2年目で変わってきましたね。あーやれるんだ。仕事休めないって言ったのに。」から、「仕事を調整し子どもを見るという変化」が起きたことが窺える。

さらに、「子どもと関わるようになったのは、この園だから。今現在、上の子達スポーツやってるんですけど、土日つきあうっていうのも、この流れがなかったら、なかったんじゃないかって。他の子と関わるようになって、他の子が可愛いと思える。」と、【保育への関わりによる父親同士の仲間作りの楽しさと子どもたちのつながり】、【母親との兼ね合いで仕事を調整する、他の子どもに関わり愛着がわく、充実感を得るという変化がおきる】ことを実感することとなった。

母親が父親に保育参画を促したが、母親⑤の「良かった、父、成長したのかな、一つの達成感。何もなくてゴロゴロしてたら、イラッとしたらうけど。花火終わって、こちらは次バザーで、交代じゃないけど、次は母たちが頑張るって気持ちで。」の発言から、父親は、子育ての不慣れさから、仲間との関わりを通して喜びや楽しさといった満足感を得て、子育てが深化し、変容していった。家庭での養育力の向上、心理的ストレスの軽減という心理面、仲間と子どもを見るコミュニケーションの向上といった社会面における【父親の成長が母親に良い影響を与え相乗効果を生む】ことにつながる。変容した父親から刺激を得て、【父親に保育への関わりを提案し、父親仲間と子どもたちとのつながりができ、母親にも良い影響】があったというフィードバックが得られたことが導き出された。

第9 ピアサポートコミュニティの形成と成長

保育参画により、親が集い、経過と共に、困った時、お互いが気づき合い、声を掛け合う様子が窺える。母親③の『大丈夫？』『実は』とか。『この間すごい暗い顔してたけど大丈夫』

夫』みたいなこととか。そんなことまで見てくれる人がいて。」の発言から、ノンバーバルから察する関係性が窺え、【困った時の相互扶助のコミュニティ】が構築されている。同じく③の「やっぱりここだとほんとに助けてもらって預かるよと言ってくれたり、学校でまたこんなことやっちゃってさあとか言うと、でもこれはこうだからとか、表面的ないいことばかりを言って、その場を取り繕う関係じゃなくって、こうしたらいいんじゃないかとかアドバイスくれたりとか、本当に根深い、そこまで言えないとか。私妹がいるんですけど、妹とも言い合ってっていうのがあるので、そこがなかったら、超えられないっていうのがあります。」から、【お互いが気づき合い声を掛け合い、子どものことを理解し合える関係性】が築かれ【大変さの表出と周囲との協力で力を与えられる】ことが導き出された。これらのことから、【気づきと自己開示により、相談と助言をする相互扶助のピアサポートコミュニティ】が形成されたと考えられる。

母親①の「私小さいことで悩んでたんだって。気にしてくれるっていうか。子どもに対してだめな部分しか見えてなかった。お母さんたちって他の子どものこと詳しく知ってるじゃないですか、自分の子以外の子とも関わること多いんで、すごかったよとか言ってくれたこと多かったの、聞きやすいし。そういう一面があるんだ、集団の中での自分の子のこと、知らないことが多い。」と、【大勢のピアサポーターの見守りで我が子の良さを認識し視野が広がる】こと、すなわち、子どもの理解と肯定的な認知につながっていると考えられる。

母親②の「孤独は私はまったくくない。育児ストレスもそんなに感じないです。同じような子どもがいっぱいいるのがわかるのと、楽しく話しているからじゃないですか。うちの子がこんな変なことしたっていうのを共有出来たりとか、先生も笑ったりとか、変だよねとか普通に言ってくれる先生たちだから。」から、【保育士とピアサポーターとの相互扶助で、大勢の子どもを知り、抱え込まず孤独感やストレスを感じない】状況に至った。保育士の相談窓口、相談のしやすさというアクセシビリティの高さ、信頼関係のもと自己開示のしやすさといった多重のサポートシステムにおける子育てしやすい環境のもと、【相互扶助コミュニティの多重のサポートで、子育ての心理的ストレスが軽減】され、仲間と子育てを楽しむ過程が見受けられた。

保育参画によって、母親は心理的社会的ストレスが軽減されただけでなく、様々に成長していった。

【個人の成長】として、母親⑤の「元々はそうでもなかったんですけど、ある時から、ポジティブに。仕事もポジティブに捉えられるようになって働くようになって。」との発言から、【読書から得たポジティブシンキングと前向きに仕事ができるための会議前のアイスブレイクでの援用】につながっている。読書を通して前向きに物事を捉える思考法を獲得する

ことで、会議前にアイスブレイクとして援用し、周囲を和やかにし、会議が円滑に進むよう工夫している。「それもありますし。年取るとそんなに怒らなくなった。(略)しょうがないよ、次行こっみたいな。こういうやり方もあるよとか。」との発言から、【経験の積み重ねによる感情のコントロールとポジティブシンキングでの方法の多様化への抵抗のなさ】が見受けられた。【他者よりも自分が変化することを恐れず結果を目指し前向きに行動する】ことは、「返せる時頑張ろうってなって、最終的には自分で手を上げて、コーナーのリーダーにならせてもらった。」との発言から、園における【乳児期での周囲からの配慮へのお返しとして、子どもの成長に伴い、リーダーシップを取る】ことへとつながっていった。就労によって得たスキルは、保育参画におけるマネジメントにも援用され、周囲との関係性を良好にし、相互扶助のコミュニティに活かせることが窺えた。【個人の成長は、ポジティブシンキングでの認識の変化とリーダーシップを取れる時期での多様化を恐れない行動力】であることが導き出された。

【親の成長】として母親⑤の「今目覚めた感じで、今すごくぬいぐるみを作って、年々成長させてもらっています。直線縫いもできないレベルだったんですけど、コーナーではできる人扱いされています。」と、【自宅でできる保育活動の楽しさ】という子育ての満足感を得ていると考えられる。

母親③の「しょうがないよ、お母さん頑張っているからさとか言ってやってくれる。助けてくれる。親が出来ないと子どもが育つっていうか。」から、【親を助ける子どもに、親として成長させてもらおう】ことが導き出された。子どもの成長と共に、自身の子どもへの関わり方、子育ての方法が変化し、自己の成長を実感しており、子育ての価値観の肯定的変化と自己肯定感の向上が見受けられた。

保育参画による個人の成長について、母親④は子ども優先か自分と仕事優先かについて、「その人が何を求めるかですよ。」と、【就労と子育てを通し親としての自分の成長を望むか】という、母親本人の親役割の捉え方について認識を示している。母親①は、「子どもが良いって言ってくれたら、親も変わるのかな。色んな園を見てる中から選ぶのが大事なのかな。」と、母親自身がどのような保育内容に賛同するのか、様々な選択肢の中から選ぶことを薦め、その上で【子ども中心の保育のため親が変われるか】どうか、保育参画に対する親の姿勢であると考えている。同じく①は、「自分の趣味のこととかできなかったとしても、それは全くストレスにならない。子どもたちって、そのうち親を必要としなくなる、その時じゃないですか。寂しいねと言い。そのうち来ない。だからその時までには見てあげたいな。見に来ないでって言われるだろうな。そうなる前に関われる間に関わろうかと。」と、【いずれ巣立つ子どもに今は関わる】という選択をしている。子どもの成長を見据え、今子どもに

できることをできるときにするという子どもへの関わり方と子育ての価値観の変化が見受けられた。母親②は、「当たり前前が当たり前じゃない。今過ごせてる、大きくいうと生きていることが普通のことじゃないから。教えがキリスト教なのもあって、感謝とか自分よりも周りの人を見ましようじゃないけど。そういうのが多分根付いているのかなと入ってから思うようになりました。」と、保育参画を通して園の親育ち子育ての保育を理解し、【日々への感謝と周囲への目配り】ができるようになったと振り返っていた。これは、親として成長することによって、周囲の人々との関わり方に変化が見られたことから、子育てでの成長が、社会性の成長へと拡大したと捉えられた。

母親⑤は、「1人だと答えでないじゃないですか。だから外に出たほうがいいし、話せる人がいるところにいたほうがいいし。子どもが喧嘩してる時とか、怒っててはっとなる時あるけど、そんなとき自分だけじゃないとか。こんなふうに怒っちゃったんだよねとか。今すぐに虐待とか言われて、逆にそういう事言いにくくなっちゃったりするじゃないですか。それ虐待だよって言われたらもう話さなくなるだろうし、声を出しやすくなる場所って探したらいっぱいある、そこに一步踏み出すのすごく勇気がいる、知らないところに行くの。それができる環境があればいいと思う。」と、【親として一步踏み出し行動すると変わる】と提案していた。

親役割の負荷は、周囲のサポートと、親自身の子育てを通じた成長を望む認識の持ち方で軽減可能であると考えられる。【親としての成長は、相互扶助で親の役割を認識し子育ての大変さと楽しさを共有する】ことで、母親自身の子育ての価値観や子育ての方法を客観視することができるようになることから見受けられた。個人から周囲の人々へと視野が広がることで、子どもの成長過程を生涯発達の視点から捉えることができるようになったことが導き出された。

【社会性の成長】として、母親⑤の「そうですね。保育園でも2年目くらいから書記をさせてもらっているの。今もですけど。逐語を起こしています。でもだいぶ早くなりました。音声で起こせるやつとか、去年の卒業生の方が残してくれたので。(略)」の発言から、【委員会に関わることで、経験者からデバイス使用による書記時間の効率化を伝授され、保育の理解と相まった効果を実感】すること、【委員会などで周囲に合わせたコミュニケーション】をすることといった、周囲の親との良好な関係性の構築が挙げられる。

家族以外での人間関係の拡大として、母親⑤の「自分の親に言いにくい人もいると思う。親だとストレスだけバツと話してアドバイスとか聞けない人もいたので。色んな人と話したらいい。」と、【祖母以外の頼れる人を広げる】ことで、社会の中で仲間と関係性を構築し、相互扶助できる間柄へとなっていくことが窺える。

社会性の拡大での留意として、母親③は「比べるツールは使わない」とし、【SNSの使用を控え人と比べない】といった比較による子どもの捉え方を回避していることが窺えた。

子どもへの生き方の指南として、母親③は、「ないものねだりをしてもしようがないので、自分がいる場所でどう楽しく生きられるかっていうのがいいかなといつも思っています。自分がどうありたいか。子どもにも言ってるけど、挨拶と返事と笑顔があれば、誰かが助けてくれるから。それが出来ない人は、困っていても助けてくれないよって。」と、【置かれた場所で周囲と関わり楽しく生きる】こと、コミュニティにおける相互扶助から得られた経験を次世代である子どもに継承していた。【社会性の成長が、周囲と関わりコミュニケーションを図り、頼れる人を広げる】ことであると導かれた。

小括

研究Ⅲから得られた結果と考察を以下にまとめた。また、大カテゴリーを用いて、それぞれの関係性を図 4-2 に示した。

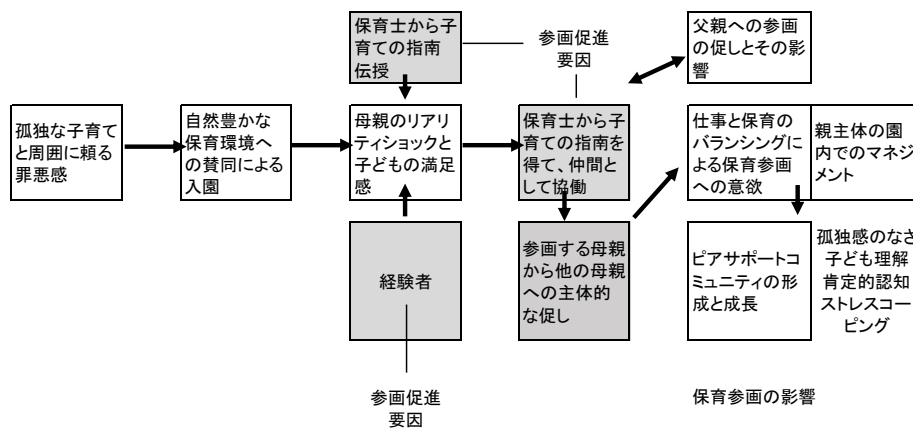


図 4-2 カテゴリー間関係性

母親の保育参画によるコミュニティ形成の過程と心理的影響

母親は、都市化により実家に頼れず、特に第一子では孤独な子育てをしていた。また、実家が近い母親は、【子どもの体調不良時、親に預け仕事に行く罪悪感】、早退することに対し職場へ罪悪感を抱いていた。これらのことから、子どもを持つ母親は実家に頼れる頼れないに関わらず、【孤独な子育てと周囲に頼る罪悪感】を抱えている。

母親は昨今の子どもの遊び場への懸念、知り合いからの情報などから、【自然豊かな保育環境への賛同による入園】を検討していた。母親は子どもが【存分に遊べる広い環境】を求め、園からの保育参画に対する【説明に承知の上での関わり】を理解していたつもりだったが、自分の認識と実際とのギャップによりリアリティショックを受けていた。しかし、保育参画を通じて他の母親と関わることで、「同じような悩みを持っている人って多いじゃないですか。」「上の子が楽しそうだった」と【子どもの満足感と母親同士の関わりの深さ】に、共感と安心感を得てギャップは緩和されていった。

孤独を感じていた子育て、実家や職場への罪悪感といった心理的ストレスは、【保育士から子育てに関する指南を得て、仲間として協働】することで、緩和されていた。「先生がその時その時の成長を教えてくれる」、「教えてもらうことが自分の中では救いになる。そういう話を聞く場所と聞く人がいることは大事。」と、保育士から子育ての指南を得たり、【保育士の子どもを見守る真摯な保育をみて理解】を深めていた。「周りがやっている。だから、ついていかないと。先生もお願いしますと言っている、皆も普通にやっている、ああ、やらなきゃとなって、だんだんやっていくうちに当たり前になっていくというか。」と、「仕事が休めないとか、けどできるところはやるよっていう、やっぱり。」と、徐々に保育士への協働が深まっていると捉えられる。

【以前は、保育参画に時間を割ける就労形態が主流】だったが、【常勤、低年齢児世帯、短期在園者増加により、保育参画に関わる時間と人員の確保が困難】になっていた。【保育士と協働する母親の、養育一任を優先する母親に対する疑問と葛藤】が見受けられた。一般的には、親の就労等で保育に欠ける乳幼児の保育を行うのが保育所であることから、保育に参画することに賛同する親と、そうでない親の意識は、隔たりがあると捉えられる。そこで、「それ結構、課題。よく働いている人たち、園のこと参加している人たちで話したりとかするんですけど、楽しそうにやるしかないんじゃないって。」と、【楽しく保育に関わる姿を見せる工夫と、文書による伝え方の増加】が見受けられた。【伝わりにくさに対する、保育参画への持続的な促し】から、保育への関わりの程度に対する考えの相違による葛藤は、時間をかけて折り合いをつけていく必要があると考えられる。

ある母親は「地区もあるし、クラス委員とか」と、【慣れと経験を積むことで関わりが増加し、タイムマネジメントが必要】となる。そこで、【仕事と家庭と保育参画で、優先順位

をつけバランスのとれたやりくりを目指す】ことが見受けられた。園に行かなくてもよいバザーの手作り品の作成は、睡眠時間との兼ね合いから、【自宅での制作活動と休息のバランス】を取り、無理をしないように心がけながら工夫していた。職場に対しては、「休暇取得の理解と周囲とのコミュニケーション」という交渉力を身につけ、【仕事と保育のバランスングによる保育参画への意欲】を維持していると考えられる。

そこから、【親主体の園内でのマネジメント】につながっていった。「在園でバザーの準備をするのが本来の姿」としつつ、【直接交渉による人員調整と、経験者への呼びかけによる常勤と低年齢児のいる親への活動軽減の配慮】が見受けられた。このように限られた人員での運用では、【経験者から活動について伝授され、内容を知る機会を持つ】ことや、引き受け手がなかなかいない場合、自分が能動的に動くことで、【即戦力と効率重視の引受け役と、周囲で引受け役を支え割り振りし協力する】態勢が生まれていた。就労との兼ね合いで葛藤を抱える親がいたとしても、このような協力体制によって、工夫しながら乗り切っていると考えられる。そのため、【早めの就寝、外出、家事の工夫などで気分転換】といった【ストレスコーピング】を持ち、仕事と保育参画のマネジメント、および子どもと過ごす生活とのバランスングをとっていると考えられる。

母親は、親主体で園内でのマネジメントを行うようになり、【父親への参画の促しとその影響】が見られた。「家事分担はないが感謝の言葉がけがある」といった【父親の存在の認識と父親なりの家事への協力】をしていた。「最初は、園に興味がない」父親へ「お父さん花火とかあるらしいよ。他の家のように協力しないといけないよ。」と参画を促し、【仲間を得ることでの父親の保育への関わり】が見られ「仕事を調整し子どもを見るという変化」が生じ、子育ての深化が見られた。それらは、子どもへの理解、子どもへの肯定的認知、子どもへの関わり方・子育ての方法の変化、認知的なストレス・コーピングの獲得といったもので、保育、母親共に好影響があると考えられる。

保育参画により、親が集い、経過と共に、困った時、お互いが気づき合い、声を掛け合う様子が見られた。「やっぱりここだとほんとに助けてもらって預かるよと言ってくれたり」と、親同士のピアサポートコミュニティの形成により、そこでの傾聴や受容、助け合いによる信頼関係の構築により、子育てのやりやすさ、子どもとの過ごしやすさへと変化していき、自己肯定感を持つことが窺えた。また、「うちの子がこんな変なことしたって、先生も笑ったりとか、変だよねとか普通に言ってくれる先生たちだから。」と、【保育士とピアサポーターとの相互扶助で、大勢の子どもを知り、抱え込まず孤独感やストレスを感じない】状況に至った。

保育士による母親への保育参画の仕組みと促進と維持は、これまでに挙げた保育士の相

談窓口による親への子育ての指南、親が集えるきっかけ作り、つながりを形成する数多くの場の設定による子育ての負担の軽減、親が保育士の保育に取り組む姿勢への賛同、保育の質維持のための保育士と親との協働を拡大する呼びかけ、保育に参画するための時間と人員のマネジメントと、運用面での経験者からの伝授と、即戦力・効率重視の引受け役を周囲が支えて協力し活動を割り振りし、負担を分散し、維持されていると考えられる。

相互扶助のピアサポートは、互換性がみられ、母親に対する心理的社会的な良い影響があったと捉えられる。

第5章 父親の保育参画によるコミュニティ形成の過程と心理的影響（研究Ⅳ）

第1節 研究目的

本章では、父親へのインタビュー調査を通し、子どもの養育者である父親の立場から、園と母親による保育参画の促進により、父親がどのように就労と折り合いをつけながら、保育に関与するようになったのか、その変化と、他の親との間にどのようにコミュニティが形成されたのか、その過程を明らかにし、父親にどのような心理的影響があったのかを検討する。

第2節 研究方法

第1項 データ収集の方法

時期は、1学期から3学期始め頃までの8ヶ月間である。筆者は父母会と委員会総会、懇談会に参加し、研究の概要について説明し、研究協力の依頼をした。筆者の訪問許可日を副園長に確認した。年間計画表に基づき、週末の委員会や父母会などの活動が落ち着いた時間帯、もしくは対応可能な日時について、父母の会の会長に確認後、父親の調査への対応が可能な日程と時間を確保した。

手法と手続きについて、研究対象者数は、事前に父母会で研究概要について説明し、研究参加の自由意志のある日程調整の可能な親の中から、有意抽出法により、子どもの在園年数の異なる父親2名、卒園児のいる父親7名で合わせて9名とした。前年度子どもが卒園した7名は、卒業制作のため、休日に来園し協働で作業していた。その作業当日にグループインタビューを行った。グループインタビューは、グループダイナミクスを使って個々のメンバーの持っているニーズや考えを最大限に引き出すことができる手法（安梅，2007）である。子どもの卒園後に来園している父親たちの保育参画の振り返りとして本研究で取り上げることとした。

父親9名のうち、5名が30歳代、4名が40歳代だった。世帯の子供の数の平均は、2.1名だった。子どもの述べ在園年数の平均は、5.2年だった。9名のうち、1名が母方祖父母と同居で、8名は核家族だった。勤務形態は、全員が常勤で、通勤時間は平均64分だった。

表 5-1 研究対象者 父親

	年代	在園年数(子どもの述べ在園年数)	子ども在園・卒園内訳	子ども数	家族形態/祖父母	勤務形態	通勤時間
①	30歳代	2年	年少1名・乳児1名	2	母方同居	常勤不規則勤務	15分
②	30歳代	3年	年長1名・乳児1名	2	核家族	常勤	120分
1	40歳代	8年	卒園児2名、年長1名	3	核家族	常勤	80分
2	40歳代	14年	卒園児3名	3	核家族	常勤	110分
3	40歳代	2年	卒園児1名	1	核家族	常勤	90分
4	40歳代	5年	卒園児2名	2	核家族	常勤	70分
5	30歳代	9年	卒園児3名	3	核家族	常勤	10分
6	30歳代	1年	卒園児1名	1	核家族	常勤	20分
7	30歳代	3年	卒園児2名	2	核家族	常勤	60分

①② 在園児の父 1～7 卒園児をもつ父

来園している親の中から、1回30分から1時間程度の半構造化面接を実施し、インタビューは録音し、その場で回収した。フィールドノートに内容を記述し紙媒体として保管した。

第2項 インタビュー内容

インタビュー内容は、保育参画によって、子どもの養育者である父親がどのように就労と折り合いをつけながら、保育に関与するようになったのか、その変化とコミュニティの形成過程、父親への影響についてである。

父親へのインタビュー内容と質問項目は、表 5-2 に示す。

在園児の父親に①②の記号を付し、発言の前に示した。卒園時を持つ父親に1～7まで記号を付した。グループインタビューで複数回答があったため、発言者の番号は示していない。

表 5-2 父親へのインタビュー内容と質問項目

A. 保育参画の背景

- 1) 主体的に保育の企画や運営に携わる「保育参画」について知っている事柄を教えてください。
- 2) 保育参画を実施する保育園に子どもを入園させた経緯を教えてください。
- 3) 親が保育参画することに、どのような目的があるか教えてください。

B. 保育参画のプロセスについて

- 1) 子どもの入園当初、保育参画を実施して、どのような印象をもちましたか。
- 2) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、あなた自身について思い出されることはどんなことですか。 実際と運営について、工夫と改善について
- 3) 他の親にこの園をお勧めしますか。

C. 保育者について

- 1) 保育参画を促進する保育者について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 保育参画を実施する保育者はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、保育者の印象は変わりましたか。

D. 親（園児の父母）について

- 1) 保育参画を促進する他の親について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 他の親はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、他の親にどのような変化がありましたか。

E. 保育参画の実施について

- 1) 保育参画の実施によって、あなたの子育て観はどのように変化しましたか。
- 2) 保育参画の実施は、あなたと他の親と園長と保育者の間にどのような関係を生み出しましたか。
- 3) 保育参画の実施は、あなたの仕事（家庭生活）に何か影響がありましたか。

F. 保育参画の振り返りについて

- 1) 保育参画を振り返って、以下のことを教えてください。
心理的負担感が軽減されましたと感じますか。
自己肯定感にどのように変化が生じたと感じますか。

第1 父親への質問項目とその解説

A. 保育参画の背景について

「子どもの入園理由をお聞かせ下さい。」

解説：子育て世帯を取り巻く社会状況の把握と、周囲からの子育てに関するサポート有無について確認する。

保育に関わる保育園への入園理由を聞くことで、父母がどのように協力して子どもを育てたいか、父親としてどのように関わりたいかを確認する。

B. 保育参画のプロセスについて

「保育の活動に関わる大変さは入園前に説明があったと思うのですが、なぜ、大変さにもかかわらず、来られたのですか。」

「当初と比べて関わり方としてはどうですか。」

「仕事は〇〇でどのように工夫されて乗り切ったのですか。(家族形態について)」

解説：仕事との兼ね合いで、保育に関わる負担をどのようにこなしていくのか。関わる過程について、工夫したこと、周囲の子育てサポートは、あったのかどうかを確認する。

C. 保育者について

「入園してから、相談しましたか。」

「どんな言葉が響きましたか。」

解説：保育士にどのようなことを相談したのか。それに対してどう感じたのかを確認する。

D. 他の親について

「他のお父さんと関わりについて」

解説：同じ子育て仲間として、周囲の父母とどう関わったのかを確認する。

E. 保育参画の実施について

「気にしていたことが軽減されましたか。」

「どのように変化しましたか。」

解説：保育参画による父親への影響は、どのようなことがあったのか。子育てに関し、心理面に変化が生じたのかどうか、確認する。

F. 保育参画の振り返りについて

「未就園児の親に薦めますか。」

「育児で孤独感や不安を感じている方にアドバイスはありますか。」

「保育参画をどのように広げていきますか。」

解説：保育参画で心理的なストレスは軽減されたのかどうか。

また、参画で得られたものは、未就園児を持つ他の親の参考になるかどうか。一般化、拡大の可能性はあるかどうか確認する。

なお、卒園時を持つ父親に対する質問項目は、卒園制作日におけるグループインタビューの中で、グループディスカッションでの保育参画に関する内容と思われる語りは、そのまま続行し、語りの内容が終わる頃、次の質問に移った。

第3項 分析の方法、手続き

KJ法に基づき、逐語に改めたデータから、父親の保育参画に関与していく過程、父親に対する心理的社会的影響と考えられるものを抽出しラベル化した。それらについて意味の似通ったもの同士をグループ化してまとめ、カテゴリー名をつけた。それらの関連性について図解化し、叙述化した。保育参画の秩序を見出すためそれぞれのカテゴリーの説明および、カテゴリー間の関係や創造的統合を図り、データを質的に分析した。

客観性確保のため、質的研究の経験を持つ臨床心理学分野及び社会心理学分野の研究者3名で、切片化とラベル、カテゴリー名、図解化の妥当性について検討を行い、助言を得た。また、臨床心理学分野の研究者2名を含めた計5名により、筆者の客観的な立場の保持に留意しながら、解釈の偏りを防げるよう検討し、データの妥当性の確保に努めた。

以下の手続きをとって、分析を進めた。

- 1) 父親9名を合わせて106の切片を抽出した。それらの単位化された切片にラベリングした。例えば、「妻が最初に知って一緒に見学に行って」の切片には、「母親が園の存在を知り見学」といったラベルをつけた。
- 2) 内容の似通ったラベルを集め、小グループを作成した。例えば、「母親から父親仲間

への参入の提案」といった小カテゴリー名をつけた。カテゴリー化を繰り返し、30の中グループにまとめ、最終的に合わせて6つの大グループにまとめ、それぞれにカテゴリー名をつけた。カテゴリーは【 】で示した。大カテゴリーは、【多様な価値観で子どもの入園】、【保育参画のわからなさから体験的理解への変化】、【父親の保育へのコミットメントとその濃淡】、【保育参画への関与の深化とその楽しさ】、【公私のバランスと保育参画の充実】、【仕事以外のコミュニティでの楽しみ、成長、主体的な継承】の6つである。これらをまとめて表6-2を作成した。なお、グループインタビューでの父親の語りは、複数名による語りが多いため、個別のインタビュー以外の発言者番号は省略していることがある。

3) 大・中・小カテゴリー間の関係を図式化した。図式化は計4回の変更が行われた。1回目の変更では、保育参画促進による父親の子育ての関わり、子育ての深化、親への影響におけるカテゴリー間の関連性を時系列にまとめた。2回目の変更では、ラベルの簡略化から適切で簡潔なカテゴリー名への変更と再検討を行った。3回目の変更では、父親間のカテゴリーの再編成と、関連性を検討した。4回目の変更では、結果と考察を再検討し、カテゴリー名とカテゴリー間の関係をより明確化したものをまとめた。図5-1では、母親主導によって保育園を検討していたことから、【多様な価値観で子どもの入園】としてカテゴリーにまとめた。そこから、子どもに自然豊かな園庭で遊ばせたいことから保育に関わるが、当初は戸惑いも見受けられたことから【保育参画のわからなさから体験的理解への変化】としてまとめ、一つめのカテゴリーと関連付けた。父親は就労との兼ね合いなど様々な状況から保育に参画する父親に差が見られ【父親の保育へのコミットメントとその濃淡】とした。そこから、【公私のバランスと保育参画の充実】へと、保育参画の活動が深まっていくことを示した。その結果、父親は【仕事以外のコミュニティでの楽しみ、成長、主体的な継承】に至ったことを時系列に過程を追って矢印で示した。一つめから三つめまでのカテゴリーは、入園から保育参画に慣れるまでを表すため、ひとまとめに配置した。四つめから六つめまでは、保育参画が充実し楽しさを覚えコミュニティが形成・維持され、父親の成長が見られたことから、ひとまとめに配置した。

第3節 結果と考察

分析の結果、6つの大カテゴリー【多様な価値観で子どもの入園】、【保育参画のわからなさから体験的理解への変化】、【父親の保育へのコミットメントとその濃淡】、【保育参画への関与の深化とその楽しさ】、【公私のバランスと保育参画の充実】、【仕事以外のコミュニティでの楽しみ、成長、主体的な継承】に大別された。以下に、大・中・小カテゴリーを【 】、切片化された発言を「 」で示した。個別インタビューの発言者に番号を付した。

表 5-3 回答内容「父親」

父親の保育参画促進によるコミュニティ形成過程と心理的影響

KJ法を援用した回答内容の分類結果
父親

大カテゴリー	中カテゴリー	小表札	ラベル	切片	出現数	頁	
①多様な価値観で子どもの入園	子育ての当事者性の実感のなさ	母親不在時の子育ての負担感	第2子の子育てのしんどさと母親への頼り	そんなに昔ほど。最近、母親に任せていることが多い。ストレスは感じなくなってきている。育てやすくなった。年齢重ねていっているからこう、なんでも出来るようになっていっているのもあって、そんなに感じない。下の子が2歳になったばかりだから、保育をする時があるんですけど、その時はしんどいなって思うことはあります。一日だけだと耐えるしかない。踏ん張る。母親がいる時は母親に甘えちゃっている。	1	13	
		遠方の祖父母への頼れなさ	祖父母への頼れなさ	いないね。誰もいない。	1		
	母・祖母主導での園検討	親が卒園児で義母が元保育士	卒園児、義母が保育士	卒園児です。カミさんのお母さんがここに働いてたんです。他の保育園選べなかったです。			7
		在園児の親の紹介と見学で、自然豊かな園庭環境に賛同	在園児の親の薦めで園庭を見学、自然が多く決めた	元々存在を知らなかった。近所なんですけど嫁もそういうところがあるって知らなくて。で、子供は保育園考えようかって、とりあえず何軒か見てみようってところから始まったんですけど。この保育園周りをしている時に今年長の在園児のお父さんと、全然関係ない所で嫁さんと会って、子供が産まれて保育園を探してるんですけど世間話をした時に、(そのお父さんが)うちの子がA保育園に通っているんですけど、良かったら園庭見れるので見に行ってみたらどうですかって。これがほんと一番最初のきっかけですね。でまあとりあえずそこ見に行ってみようって流れで行ったんですけど。僕自身が田舎で旧園庭の雰囲気のある保育園で育ったので、山はある自然はあるし危ない遊びはある。自分の子供をそういうところがいっぱいとは思ってんですけどあるわけないと思ってきました。そういうことで正直どこでもいいや、原っぱ、野山が少しでも近くにあればそこでもいいやぐらいの感覚で、諦めてたんですけど。で、いざ保育園の園庭見に行った時、わっと心が奪われましたね、もう一瞬ですね。			
		母方の評判と希望による見学で、自然豊かな園庭環境に賛同	母親の職場での評判と見学	妻が職場でこの噂を聞いて。			
			母方祖母の偶然的園庭見学	妻の祖母がたまたま通りかかって園庭をみて。			
			母親が園の存在を知り見学	6妻が最初に知って一緒に見学に行ってる。			
			母親の希望と見学	あのうちの場合は家内が入りたいと、私の視点で言うと最初の印象。			
		子どもと木に囲まれた園庭に母が希望して入園	入園は母が目惚れで。まあ旧園舎だったんですけど、子どもの顔とかあとは木に囲まれた独特な雰囲気とか、ここじゃないとっていうところで、基本は母主導で、入園に至りましたっていうのがきっかけです。				
	父母協働での園検討	近所での園探しと見学で、保育環境に賛同	近所での園探しと見学	隣の団地に引越してきて、で周りの保育園を探した時にこの保育園を知って、夫婦揃って見て、これ間違いない、もう子どもだったら俺はここに入りたいて自分思った。			
		見学し、子どもを遊ばせたい園庭	見学し子どもを遊ばせたい園庭	連れてきて、この園庭で遊ばせたいなって。			
			乳児を連れて見学	その時はまだ、12月生まれなんですけど、4月で入れなくて。でその次の今の時期に願書出して入ったんですけど。でその次、4月5月ぐらいですかね、一緒に行っただけまだ、[産まれて]半年ぐらいなので行きたいも何も、で、親がここでいいって決めて、1歳児のクラスに入った。共働きでした。	4		
		インターネットでの園探しと見学	インターネットでの園探しと見学	僕は、2ちゃんねるで、(えー、ほんと)街掲示板みたいな、良い保育園ないですかというので、その後、妻と見学に来て。			

②保育参画のわからなさから体験的理解への変化	保育への関わり の説明と家庭 教育重視による 同意	預けっぱなしは本意 ではなく、自主性を 尊重した保育への 関わり呼びかけに 協力したいという軽 い気持ちをもつ	自主性を尊重した参加協力への呼びかけ	いや、しないんじゃないかな。基本は協力的な人にお話しするっていう印象かな。影でやっているんだから、わからない。基本は協力的な人に働きかけているっていう印象。園庭キャブは、強制があって、そういう場合、来ませんかと働きかけはしますが、自由参加型で強制を、そこまではかかっていないとあんまりないですね。自主性を重んじて強制的な活動はないですね。やりませんが、やりませんかという二択です。	3	
		学校は勉強と遊びを するところで、しつ けは親がするもので 学校は補助する	学校は勉強と遊びを するところで、しつ けは親がするもので 学校は補助するもの	学校は勉強と遊びを するところで、しつ けは親がするもので 学校は補助するもの		まあそうですね。実際ほかの保育園を知らないですし、どれぐらいの範囲内でその自分たちが協力を するものなのかという想像もつかないのがあったんですけど、この1番最初に紹介してくれたお父さん が結構父母の協力がなきゃならないんですけど、もしもしたら大変かもしれないですよ。っていう話を色々 してくれて。僕もどっちかという、預けたら預けっぱなしという話聞かないですか。そういうのも正直嫌 いな方なので、なので逆にそうやって参加して、どんな形でも協力できるのであれば全然そちらの方 が良いじゃないかという話、それぐらいの軽い気持ちという感じです。
		保育への関わり の説明にイメージが つかない	保育への関わり の説明にイメージが つかない	うーん、聞いてはいましたけど、全然イメージが湧かない、今、まだたっただけですけど、正直言わ れて想像と全然違うのはありましたけど、まあいいんじゃないかっていう感じは。		
	想像以上の保 育への関わり に幾度の説明 と体験を重ね て理解して いった	想像以上は、親が 期待されている ということ	想像以上の関わり は、親が期待されて いるということ	想像以上の関わりは期待されていたこと	どうでしたかというあたりにも難しく。基本的にそういうものなんだろうと。想像以上にやることは、 期待されていることは大きかったかな。	8
		想像以上の活動の 多さで、慣れるの に時間を要した	活動の多さに驚き、慣れるのに時間を要した	想像以上だが、数年で馴染んできた	実際に入ってからこんなに活動が多いんだって、びっくりした。まあただだいたい慣れるのに時間かかり ました。	
		想像の範囲外で、 数年かかって馴染 んだ	想像の範囲外で、 数年かかって馴染 んだ	想像の範囲外で、数年かかって馴染んだ	話は聞いてたので覚悟してたんんですけど想像以上で、なんでこんなやらかさないかな、入っ て1年ぐらいは思っていた。でもやっぱり2年3年やっているうちに馴染んできた。	
		説明を受け体験を し理解	説明を受け体験を し理解	説明を受けて理解	そうだよな。理解するってところにたどり着くまでちょっとあれだから、説明をいっぱい受けて、そい うもんだって理解して。	
		説明と体験で納得	説明と体験で納得	説明と体験で納得	説明受けたところで、わからないところはわからないんですけどね。結局体験した上でこれが結局そう だって、そうね、体験があって、やっていくうちに、あーそうかって、そうだな。最近どうなのかわかん ないですけど、園長が結構納得いよう言ってくれて。	
		丁寧な説明で関 わってみたいらしい	丁寧な説明で関 わってみたいらしい	丁寧な説明でやってみたら楽しい	大変だと思うんですけど、やっぱりやる人が普通に当たり前にやって来てたりする、もう何十年と か重ねたことをやりますよと言われてるんで、やってみたら楽しかったりか、あとはなんで あるのかという説明があったりとかも、うん結構丁寧に、園長が説明したりとか、おぼりが出てたり するのすこい丁寧にやってみると、それをちゃんとどっぶりやってみるとわりと自然に入っているの かかって感じがする。	
	子育てのイベントは 楽しみ、体力面 では大変	体力的に大変	体力的に大変	精神的には別に、体力面。用事が、イベントが多すぎて、楽しい、遊びすぎちゃって、精神的に辛い のは母もなかった。	2	
		肉体面でのしんど さ	肉体面でのしんど さ	肉体面では辛かったですね。仕事がデスクワークなんで。体力ないんで。笑い。そんな中で、こん ごやあって、最初はほんとにしんどかったけど。逆に慣れてくると、息抜き的に体動かすみたいなの 。まあ、最後の年は肉体面です。		
	助け合う環境と保 育士から子育てを 学ぶ機会を得て 安心した	子育て仲間との 助け合う環境と 園からの情報 発信	子育て仲間との 助け合う環境と園 からの情報発信	この保育園スタイルがいいというか、助け合うという環境は、他どころには多分ないんじゃないか という感じがするんですね。こういう結構色々講演会とか教育だったりそういう情報を園から発信し てくれる場があるんですね。	2	
		保育士への発達 相談による安心	保育士への発達 相談による安心	そんなないかな。上の子に対しては、発達障害があるので、小学校に上がるのに相談しています。 ちょっと悩んでいるけど、そういうの理解するとまあよかったんだと楽に落ちることあるし、そんなこ ろ先行きの不安やどうしたらいいんだらうっていうのはなくなってきた。やりきっている感じはある		
	子どもの自主性を 尊重し先回りせず 危険を見守るこ とを学んだ	自主性を尊重し、 先回りせず危険 を見守る子育て	自主性を尊重し、先 回りせず危険を見 守る子育て	これもそうかもしれないけど、自主性をとにかく大事にするじゃないですか。今なんかちょっと出て たりなんかしても、こっちがちょっと危ないと思っただけで今ちょっとここのことになって、でも副園長から と、そういうの残してとけなさないで、そういう感覚なんですか。それがもしもしたららち と危ないことかもしれないけど、でもそんな些細なことでも子どもたちの遊びになるし、それで危 ないって気づきになるし、じゃあそれがありますよ。[子供が自分で危ない気づくこと]	1	
	子どもの体調を 優先することを 学んだ	子どもの体調を 優先する	子どもの体調を 優先する	完全にそうだと思います。そうそう。最近なかなか知らないことが多いじゃないですか、親同士の 関わり少ないから。なんか結構昔で保育園でも病気の時も預かってもらえるみたいなの、それを良とされ ているうちは、病気でても子ども預かりますみたいな、そういうプラス面を言われてますけど、 そういうのって違うんだって、病気の時は親が見てあげないとって、そういうの最初は知らなかつ たことだし、そういうのこたわって最初に教えてくれるし。世の中とちよと違うところっていうのは、あり ますよね。	1	
子どもの普段の 生活を優先する ことを理解した	子どもの普段の 生活を優先する 保育	子どもの普段の 生活を優先する 保育	たぶん3・4年経ってからのかな。それまで結構例えばクリスマスのために子どもたちは毎日来な いじゃないですか、年長のときに。なんだって、クリスマスアドベント、カレンダーを毎日誰か誰かに 指名するみたいなのがあって。けど、それはこっちが休みの日には子供も休ませて一緒にどっか行 きたいと思うんだけど。もうこっち主体だから、いやいやそんな休むなんてもってのほかです。ね 先生からも言われちゃうんですけど、笑い。そんなものは最初も思っただけですけど、な んかむしろこっちが子どもたちも普段の生活だからそちらを優先してあげるとかって感じになっ たね。最初だから、ほんと休ませて仲良くっていいよに映画館行くよなんて言って、企画し てたりしてたけど先生から止められて。なんでそんな先生から止められるんだって思っただけ、そ れ止めるわな。笑い。子どもたちの世界をやっぱ邪魔しないようにって、この園は相当そこがす ごい。そこが重視ですね。子どもたちのためにということだから、そのためだから親連に言っただけ、 の覚悟です。子どもたち同士で映画行きたいって約束したのに、休む理由ってなんですかって、 いやそれ違います。こっちの園のこのほうが大事ですって、3年間ぐらいしてから、わかった。	1		
増われた子ども の力と遊びを見 守ることを学 んだ	手をさげずに 子どもの遊びを 見守る	手をさげずに 子どもの遊びを 見守る	それぞれを個々と捉えてもう独立してその子のやりたいうことやってみよう、俺らがやらなきゃい けない親がやらなきゃいけないでなくて、その子がやってみようものを尊重してそのままこっちが手をさ げない、だからみんな並列している感じがあります。全員。年とか学年とか違うけど、ちょっとサポ ートするとか。だから親が抱えるっていう感じじゃないから、それをこの園で学んだ。客観的にダイレ クトに接するってあんまりさせてもらえなかったんですよ。実はこの辺で結構長い先生と子どもたちを 一緒に見ててもです。ほかの子も遊ばないでよか、外から子ども達同士がいかにもコミュニケーション と遊べるか、ちゃんと見てただけだったから。たまにハーツと行ってたらおられたんですよ。先 生。だからそれが染み付いている。だからその子が何を遊んでたら遊んでたら遊んで。こっちは優しい目 で見てるっていうことだけで、そこに対して自分がどうしてやろうかっていうのはあんまり思わ ないです。でも今からそうですね、ただやりたいう言ったら手助けするぐらい。	2		
	増われた子ども の力を見守る	増われた子ども の力を見守る	それは増われたものだから、与えられたものじゃなく、それぞれが選んでるんじゃないですか。子ども たちがです。だから、それができてから。親が押し付けることはない。多分、見て少し離れてあげ るのが、逆に辛い人も、自分が見てなきゃいけないとかじゃないかな。その子をゆっくり見てあげ ればいいんじゃないかな。			

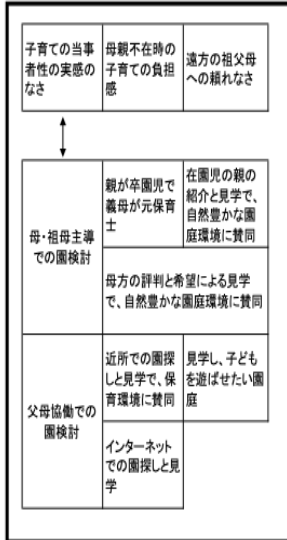
③父親の葛藤と保育へのコミットメントとその濃淡	保育に関わる父親、関われない父親	参加する人、しない人は決まっている	まあ今日も、園庭の池解体があって、来る人は来るし、ちょっと決まっちゃっているんですけどね、もう、来ない人は来ないし。で、来ない人はそういう園外もあんまりこないですし、もちろん花火師ではないですけど。来る人は来る。来ない人は来ない。	2	
		所属による父親同士の一体感と、保育への協力と協力の出来なさ	今は、花火師というところに所属することで達成感を、父親たちの団体に参画するしかないかだけになっちゃって、現父親たちで、花火師がなくなりましたよってなったら、どう働きかけるのかちょっとわからないですね。今は花火師に参加して一体感が高まっていくプロセスになっちゃって。どういふふうに行っているかっていうのは、どこかに所属することとか、保育園に対して協力的かそうじゃないかってなると、二分割されちゃっているのは、ありますね。		
	自分の守りたいものと関わり方に生じる葛藤	自分の守りたいものと子育ての間に生じる辛さ	自分は辛くないですよ。子どもが辛いのが辛いですよ。 みんな言っちゃってよ。自分が辛いことで嫌だ嫌だって。 そうですね。しんどいって思うことがないんですけど、現状は。大変だなって思う時はもちろんありますけど、しんどくなるっていうのはわからなくて、話には聞くんですけど。なので、そこがさっきもちらっと言ったんですけど、結局自分がどこを、守っておきたい部分があると譲れない部分があると多分しんどいんじゃないかな。自分がどうしたい、自分が何したい、自分は仕事でこうなんだ、家事でこうなんだとか守りに入っちゃって多分そういうのってストレスになるんじゃないか。だからあまり思わないのがいいけど。	4	
		自分自身のことに対する不満	そこだよ。だから、中心が違うんですよ。みんな結構、職場で愚痴言ってるの、自分のことしか言っていなかったり。そんなのたいたいことないって、すげー思うところ。		
	関わりから離れる親はごくわずか	関わりから離れる親はごくわずか	ちよつと今は合わないって言って、いなくなっちゃ、今ちよつと年中で1人、キャンプで一緒に過ごしたお父さん、そこを最後にしていきなり戻って。それはそれで。まあ、毎年いるよね。数は少ないけどいるんですけど、そうするとやっぱり子ども達の中に、その子がいるのが当たり前で見てきたので。いなくなっちゃうんだっていうので、考えさせられる。	1	
	保育に関わる親の特異性	母親から父親仲間への参入の提案	母親から花火のお手伝いを薦められ、好んで入る	嫌さんが自分を惹きつけるために言ったんだと思うんですけど、お父さんの協力の中で、花火師とかあるらしいよ、あなたそういうの好きでよって。よくわかってんじゃないかと思いつつ。好きで入りました。	2
		母親の出産へのこだわりと意欲を保育に関われると認識する父親	出産へのこだわりという母親の意欲を父親が後押し	勧めではない。でも勧めではないけど、話だけは聞いて。あのまだ入る前に奥さんが助産師さんで、話を聞いてそういう保育園があるよ説明会行かないかやみたい。この園に来てから助産師さんとの出会いもあるから。なんか、結構みんな決まった同じところまで産んで、パースO、パース△△とか。その辺絡みの人は、そうあるね。あの雰囲気がある。なんか病院じゃないところで、子ども産んだんで。病院で産もうとして人はあんまり動かない。なんかおかも帝王切開。助産院で産み込んで言ったら、ちよつとそこのあとどうって。スタートから確かにある。親の意欲。出だしは、助産院で産んだらちよつと勧めようかなと思います。	
	④保育参画への関与の深化とその楽しさ	足を踏み入れるか否か	足を踏み入れるか受動的か	僕は参加しているほうなので、なぜ参加しないのかはわからないんですけど、結局、足を踏み入れるか踏み入れないかってことだと思うんです。僕も一年目はそんなに、花火師もやっていなかった。だから、そういう客観的にみると、花火師やっていないのは、なかなかこう足を踏み入れにいていうか。結局やらされ感があった感じがありますけど。	1
		子ども中心の保育に関わることを受容	子ども優先の保育をよしとするか	いや、笑。普通の人は推奨されない。自分で来たって思わない。多分言わないほうがいい。良い保育園ありますかって言われたら、ありますよ。でもまだ足りない。もうちょっと、子どものためにっていう思いがない。感じられたら勧める。自分もちゃんとやろうしている。親が判断しないと無理。子どもは楽しんでますよ。絶対。だから親の判断だけなんです。僕、何回か職場の人、誘ったことあるんですけど。もう絶対入らなかった。	2
			関わる大変さの受容	大変さっていうのを四六時中伝えて、それを受け入れるかどうか。ずっと働いて、こちらの園活動とかも知って、それでも参加したいですか。安易に人に勧められるのも、勧めた責任をこちら。そうだよ。逆に後で全然現実とは違うんじゃないって言われたら困る。	
子どもの親密性と楽しみによる関わりへの意欲		子ども達は、どの父親達に対しても親密	この園の子だからなのか、誰々のお父さんって聞いて誰かいない。多分誰かが来たら、誰のお父さんって絶対聞いてるから、そういう雰囲気の中に父親達はすぐ入って行けていて。最初は強要はないから、行く人が行くなから、基本は自分で、お便りとか見てこの日は行ける。	2	
		子どもが楽しむ保育への関わり慣れる父親	子どもが楽しんで、じゃ俺もやろうって、たどり着くまでが、慣れない人はもうダメで、来ない人は来ない。3分の1から、3分の2くらいかな。そんなこと言っても参加するのは。メンは180世帯の60世帯ぐらい。大体、なんの活動でも顔を合わせるのはそのメンバー。今日ここに居る父はいつも参加している。		
保育参画の多さによる家庭生活とのバランスの取れなさ		童心で楽しむ保育活動へののめり込みによる周囲の見えなさ	私ですか。花火は結局、子どもたちのためって言うつ、父親が楽しくなっちゃって、父親も童心に燃てやっという感じはありますね。なんともなくゴールが決まっちゃってやるじゃないですか。花火を子どもたちに見せるっていう、そこにもうたす、臆目もふらずにいつかやっちゃうのは良くないかなと思、結局なんか周りが見えなくて、花火だ。花火だみたいになっちゃって。結局、母親の大変さはなんとなんは理解しているけど、まあ花火があるんだからと、枕詞のように。	2	
	休みを取得し好きで保育に関わるが子どもと遊べないジレンマもある	なんか協力するとか、ずっと好きで半分好きで手伝いに来ていることもあるので、妻が来たから行くっていう感覚があんまりないです。例えばこの日手伝いあるんで仕事休みにしていいかな、予定表みて、お便りが来て、お父さんの力募集しますよっていうのがあって、あ、行かないか、あ、予定ない、じゃ行くかな。極力行けるところは行って、あんまり行き過ぎると今度は子どもと遊べない。			
④保育参画への関与の深化とその楽しさ	行動への慣れと自発性の向上	行動すると自発的になり活動に慣れる	でも花火師なり、園庭キャンプとか手伝いに行ったりすると、なんかこう、自発的というかやってやるぞっていうのが出てくるので。結局慣れちゃうのがあるのかもかもしれない。	19	
		構築された関係性の中に入ることの躊躇	慣れるまで。1年しかいなかった。それで、なんか出来上がった中に途中から入って、それに慣れるというか。園庭キャンプもなかった、で、気づいたら1年経ってたみたい。なので、色々慣れたかな。わからない状態なんです。みなさんはあれだけ慣れた感じだったので、色々聞いて、はい、まじっというふう、まあ大変だった。		
	構築された父親仲間への参入と、参画の作業に時間をかけて馴染んだ	仲間意識の強い中、ゆっくり馴染んでいった	これが当たり前だから、でも僕あの15、6年前に行ったときはもってお父さん濃い人ばかりで、すごい仲間意識が強かった。そこに馴染みづらかった。お風呂みたくにゆっくり馴染んできた感じ。年を過ごすことにゆっくりと入って、(家が)〇〇で遠かった。この園はあの年中になるとお父さんの運動がぎゅつとなる。		
		年月をかけて慣れる	ようやく作業に慣れてくるからね。だから、23年の人とかが割と美味いところだけ知って卒園していい感じですよ。いいと思うんですけど。すいも甘いもついでに、まああとはつらいところをだいぶ分かった上でかかって感じですよ。		
	関わりで成長を実感できる	活動に参加し親が変わる	最初作業あるっていうのを事前に聞いてなかったんで、入ってみてそういうものかなって、まあやって楽しかった。結構この保育園に親も育ててもらったっていう面がすごくあるかなって思っ、やっぱ活動に参加して、保育園もそういう意図していると思う。親が変わらない子どもも変わる。そういうところは、参加しながらいろんなこと教えてもらって、すごく良かったなって思ってますけど。		
		関わり楽しさ	まあ、だからここは、みんな結構それが当たり前の上での、こういう活動とかだから、だからね共感もできるし、つらいついてやっぱ思わない、楽しい面白い。これやってるとは子ども達も見てたりすればそれは面白いって。		
	仲間と保育参画する楽しさ	楽しいから行きたいから保育に参加する	楽しいですけど、なんなんだろう。結局は自分が楽しいからってことになっちゃ。まあ、園外活動も結構父の協力で、たまに行くんですけど、やっぱり子どもたちが楽しんでいる姿、自分の子どもも見えるし他の子どもも見れる。直感とか、目で見て感じられるんで、いい経験なっていうのを。なんだからっていうのそんなにかえったことないです。行きたいから行って、自分が楽しからなんだろうなと思うんですけど。		
		父親仲間との保育への関わり楽しさ	やあそれはもう楽しいですよ。楽しい。なんかやっぱ男の子の延長で、なんかいい年こいも集まって、なかなか話しながら、子どもたちのためになんかする集団で、これが他のところにはない要素だと思っんですよ。		
	父親仲間との創作活動による達成感と満足感	子どもの記憶に残る創作活動への達成感	難しいですね。なんでそんなのにめり込むのかいまだによくわからない。結局達成感なんじゃないかなあと思ったんですけど、色々こうゼロから、実物の花火を作って子ども達に見せて、まあ何かしら失敗に終わるかもしれないんですけど、まあ何かしら子どもたちの記憶の中に残ったっていう。		
		創作のプロセスでの達成感と満足感を皆で感じる結束力	そういうのを自分ですらで造り上げて成功させるっていう、その一環、プロセスで達成感と満足度が多分すごく高いと感じるんですけど。多分そのルーティンワークになっているのが花火師。結局そういうの達成感を皆で感じるから、花火師って結構結束力と一体感高いんで、そういうところなのかなと個人的にはそう思います。		
親が保育に関わるイメージの変化と良い経験	親は保育に参加するというイメージが変わった	保育園のイメージが変わりましたね。親も保育に参加するんだって最初なんか教えてもらったんですよ。まあそういうもんならなって、その後の活動もそういうもんならなって。			
	大変だが参加してよかった	同じですね。あまり、もともとして保育園がほぼ参加せられたので、親が参加しない感じだったので、これから比べると180度違う。参加してきて大変だったんですけど、やって良かったんですよ。			

⑤公私のバランスと保育参画の充実	保育参画を理由とする休暇取得の容易さや困難さと職場への理解を得る大切さ	保育に関わるための休暇	上手くやった人、(笑) 母のほう大変だった。マネジメントより慣れる。仕事に穴をあける。よく言っていました。仕事体で来いって変更させて、有給全部使いましたね。僕なんかシフトで働いているので、自分の有給のきまつたやつなんか全部使って、マネジメントも何も、園が一番。そこからの派生で空いている時間をどこかに作れるかどうか。まあ、そんな感じだよ。まあ、保育園のために仕事休みますっていうと、それって働く人にあるんじゃないのって、(そうそう)。そこはすごい言われますけど。会社で話してるんですけど、おおつて驚かれますよ。なんかブラックな保育園だって。見せるのとひっくり返るからね。山登りの写真とか見せませんが、何これって。笑い。	16 22	
		休暇理由の理解のなさ	大変じゃないです。有給取るのは。普通に休むことには。理解は別に得てません。(得てないんだ)説明しても理解できない。普通に有給をもらう。なんでだよにはならない。大事なプロジェクトとかは、立場的に自由だったので、かもしれない。		
		休暇取得のための理解を得る大切さ	完全にもう常に職場の人に言って、理解をどんどんつけておいてって感じ。そもそも月に3日しか休みもらえないから。夏休みって毎週土日火曜日で使わなきゃいけなかったんですよ。7月8月はまず無理なんですって、そう言っただけで休みもらう、そうなんだと何年なのって毎年聞かれます。上司にはあと何年やるの、それは。やめたんで今年仕事場でも色々やらされる。これはあります。やっぱり言っただけで理解を得るのは、結構大変だったかな。		
		仕事と保育参画による多忙さでの家事時間の取れなさ	2年目から積極的に保育に関わる		まあ一年目はそんなに。仕事もちよっと忙しい時期だったんで、そこまで1年目はやってない感じですけど。まあやればやっただけ交流は深まったから、まあ2・3年今は結構積極的に参加してですね。母があんまりやめてくれと、笑い、[2人で関わると]忙しいからと。
			遠距離通勤で母親に負担がかかる		相当母に負担かけてるから。仕事もだし、新幹線で通勤しているのだから基本朝早いし、夜も帰ってくるの遅いから。しかも花火師だから、ピークの時は家にいないっていう。ここ2・3週間前は結構疲れがありましたね。
			父母ともに保育に関わり多忙		母は委員会に入ってるから結構忙しいね。[父は]園庭の手伝いと花火師です。園庭キャンプは、やりましたね。最近、園行事しかやってないなと。最近はやっている、笑い、母と2人で最近この園のことしかやってないねって、つがやきました。
	家事時間の取れなさ		確かにつらいつてなんだろうな、3人うちも在園していたことがあって、夫婦間は仲悪かった。笑い。やっぱりお互いが年数を重ねてくると、立ち位置が園の中でもいろいろ役割が出てどっちを優先するかとかそういうのが出て来ちゃったり、まあ家のことかも、おろそかになるんじゃないですか。そちらのせいだとか。だからつらいのは割と家庭の中でぐちゃぐちゃかな。園に関しては絶対2人とも出ればいいんですけど、というのはこの園の特徴かも。		
	保育参画の多さと時間調整のマネジメント	子ども優先時期は、自分の時間を引くバランスの取れた関係性を持つ	だって、子どもいるんだから子ども優先にするの当たり前じゃんって。でも仕事もしなきゃいけないから仕事を優先するときはあるし、もちろん嫁さん大変だから、嫁さん優先しなきゃいけない時もあるし、じゃあどうしよう。そうなんつう、自分の部分を削るしかない。24時間は決まってるし。だから、そこを、自分を引ければ、うん、よく言うじゃないですか。女性が強いのほうが上手いって、笑い。女性に強い強いつて思わせれば、言い方ですよ。実際強いんですけど、家の女性陣は、笑い、でもそういうふうな関係性が出て来てるほうが、溜め込まないじゃないですか。		
		子どもに合わせた生活サイクルと母親の負担の軽減	で今、週4保育なんですけど、下の子が、まだ。その時は土日と週の真ん中で休んで、そしたら次は自分が寝ているとしたら一緒に起きるとか。そういうふうにして行かないと、子どもと遊ぶ時間もそうです。そうしないと嫁の負担が、夜は任せちゃって。夜ご飯からお風呂まで、自由な時間も含めてこの辺は協力しないと。思います。		
		仕事をこなし睡眠時間を調整し、子供と遊ぶ	自分の睡眠時間削る。笑い。今日もちょうど仕事が終わって帰ってきたのが4時前ぐらい。で、今日これがあつたから、朝7時ぐらいに起きようかなと思つたら、本当に7時に起きた。仮眠ですかね。帰ってきてご飯食べて6時過ぎぐらい。そんな感じです。仕事を持っていることもある。でも平気な方なんです。それが1ヶ月ぐらいだったら、何とかなると思います。自分が寝ないで子どもと遊べるならそれでいいかなと。はそうでもしないとかなかなか時間も取れない。		
		子ども中心と他の時間とのバランス	あるってたぶん言い聞かせてきたと思うんですよ。笑い。でもあると思います。実際に。あの保育園という部分でもそうですし、自分の子育てという部分でもそうですし、自分のことは優先してちゃいけないところはあるので。それぞれの時間の後は、残った時間のバランスを、仕事なのか家なのか子どもなのか保育園なのかは、そのバランスは正解が見えないですね。		
	家族との限られた時間で子どもの気持ちに配慮する	保育活動時の父母の割り振りによる子どもを見る時間の限定さ	基本僕も、行かない時は行かないですからね。多分割り切りはしてます。削ってるのは多分子どもとの時間かな。結局、花火師やってると家じゃないから。それが終わると今度は母親がバザーでいいので、父親が保育するじゃないですか。そういうのでバランスは、とれるかな。子どもとっていいかどうかはわからないんですけど、花火の時は母親が見て、バザーの時は父親が見ると感じて、一対一のバランスは子供に対しては取れてるかもしれない。		
		子どもと家族との時間の取れなさ	乗り越えてんのかわかんないけど、時間がそのまま流れている。子どもが若干我慢しているのかな。		
		限られた時間で過ごす家族への気づかい	子どもでも家族と一緒にいたいっていうのはよく言うので、休みをなるべく取るうねっていう話とは母とよくして、やっぱり母から、父親がいなくて寂しいよって言ってるんですけど、そういうの聞くとまあ、家族の時間も大切にしないといけないと思って、なにかやっているというより、気を使っています。		
		母親が子どもに言ったことは父親は追い打ちをかけて言わない	あ、これがたぶんそうだなっていうのはあるんですけど。それ以上に今嫁の方が負担を感じてストレスを感じているので、で同じように感じちゃいけないと思います。そうなんつう2人から子どもに対して強くあたっちゃうとか、それは絶対やっちゃいけないと思うので。例えば同じことを思ってた嫁さんが強く言ったことに関しては、自分は一切言わないというように感じています。		
大変なときこそ、自己表出し家族で声を掛け合うことで乗り切れる	家族の増員による子どもの甘えなさ	最近はないんですけどね。年中の時は弟が生まれたのもあって、ちょっと精神的にバランス取れてない時もありましたけど、そういうあると子どもメインに。落ち着いていけば様子見ながら。			
	多忙による感情の表出	ね、悪い出せば、つらいとこだけ、通り抜けてこなきゃいけない。ね、笑えるでしょ、バザーの時期とかはほんと耐えなきゃいけない。すぐ怒るじゃないですか、イライラビリビリしてる。かな。だから、園の活動に関しては、つらいという話はない。			
	仕事の繁忙期と家庭と保育園のイベントが重なり、ストレスを表出し合える機会になった	仕事はずっと、ちょうど先月ぐらいまで、下の子が7月に生まれたり、8月の花火大会ですよ。まあ本当に嫁さんの方のお母さんにもものすごく負担をかけて、実際それでちょっとあのバブルが起きたんですけどね。もともとあのみんなちよつと不満は言わないんです。言わないで消化できない人たちが結構いるんですよ。うちは、それがちょうどその時期で爆発して、まそれでよかったんですけど。こういうときはこういう風に言おうよって改めて当たり前の話をします。そこで皆一気に色々なストレスを話した。			
子育て時期のストレスコーピング	乳幼児の子育てに対する大変さの認識と気にかけない気持ちの持ち方	もちろん皆それぞれ仕事もしてる育児もしてました。皆が大変だからちよつと皆で尊重し合おうじゃないですか、気づかいをしようよっていう話を、ありがたうごめんさいをきちんと言おうよっていう話を子どもたちの前でして。それでなんかわだかまりが溶けて、じゃあお願いします、わかりました、行ってらっしゃい、これが普通にできるようになった感じですよ。			
	仕事と重なるストレスは趣味で対処	趣味のジョギング。自分の趣味に走るとか。仕事とイベントが重なるストレスを感じる。納期絶対で。			
	子どもが就寝した後のリラックスタイムで好きなことをする	子どもが寝た後、好きなことをする。健康ランド好きなんです。お風呂でリラックス。それがその後の活力になる。			

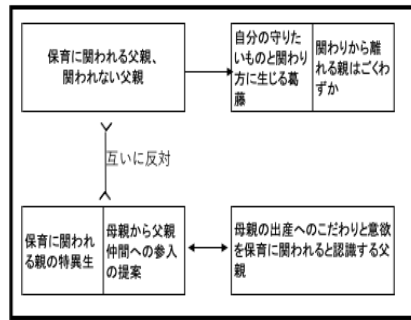
空間配置と図解化

父親

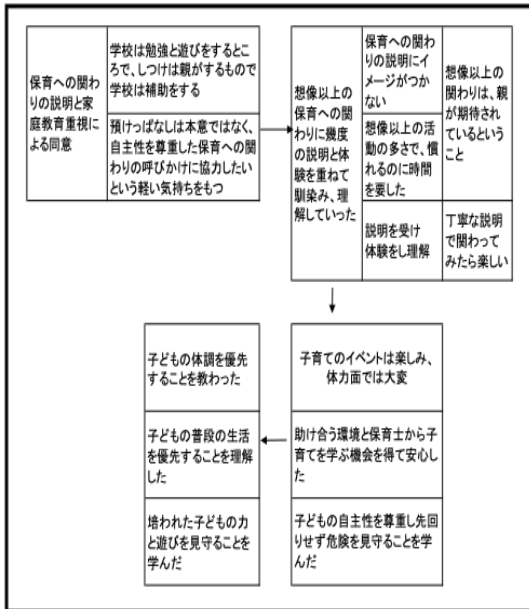
①多様な価値観での入園



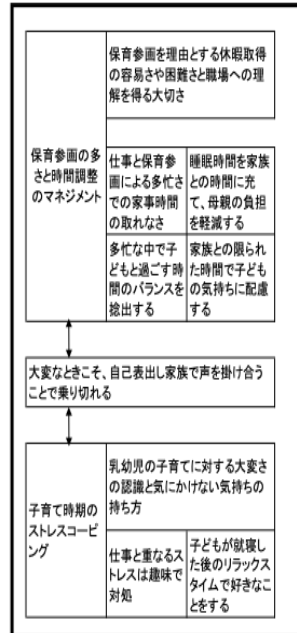
③父親の保育へのコミットメントとその濃淡



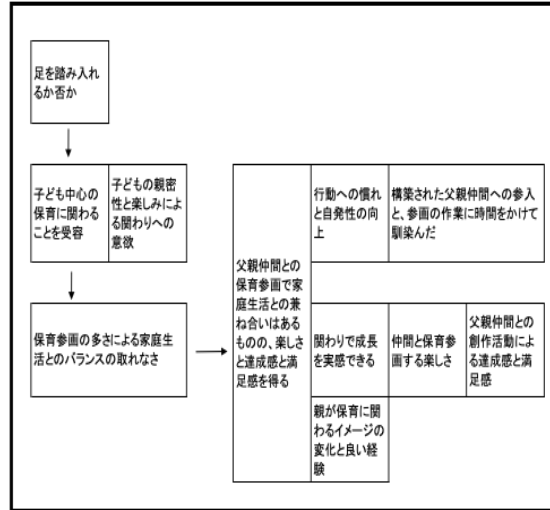
②保育参画のわからなさから体験的理解への変化



⑤公私のバランスと保育参画の充実



④保育参画への関与の深化とその楽しさ



⑥仕事以外のコミュニティでの楽しみ、成長、主体的な継承

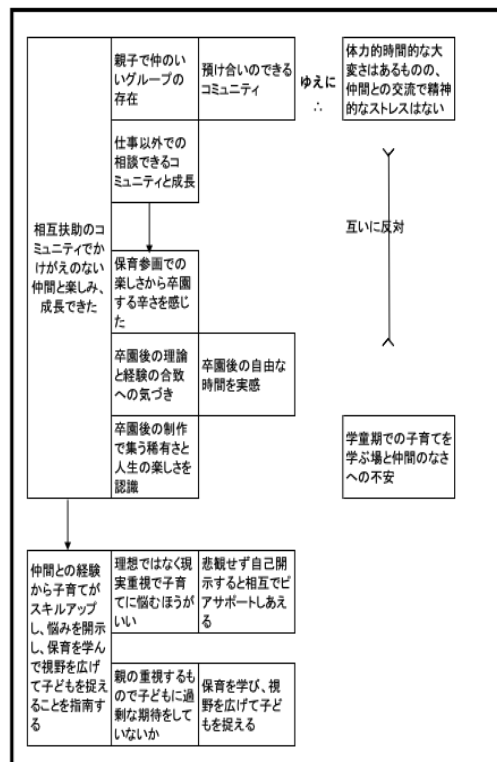


図 5-1 空間配置と図解化「父親」

父親の保育参画によるコミュニティ形成の過程と心理的影響

第1 多様な価値観での子どもの入園

父親は、都市化における核家族により、近隣に子育てのサポートを得られる祖父母が、父親1～7の発言「いないね。誰もいない。」から、【遠方の祖父母への頼れなさ】と、常時は母親主体である子育てにおいて、【母親の不在時の子育ての負担感】を持つことがある。父親②の「そんなに昔ほど。最近、母親に任せていることが多い。ストレスは感じなくなってきた。育てやすくなった。年齢重ねていっているからこう、なんでもできるようになっているのもあって、そんなに感じない。下の子が2歳になったばかりだから、保育をする時があるんですけど、その時はしんどいなって思うことはあります。一日だけだと耐えるしかない。踏ん張る。母親がいる時は母親に甘えちゃっている。」という発言から、子育ての主な役割は母親であるという【子育ての当事者性の実感のなさ】が窺えた。

共働きの増加により、未就園児の子どもを持つ世帯は、入園に向けて保育施設の検討を始める。選定の方法としては、【親が卒園児で義母が元保育士】、【母方の評判と希望による見学で、自然豊かな園庭環境に賛同】、【在園児の親の紹介と見学で、自然豊かな園庭環境に賛同】など、関係者や旧知の間柄、母方の評判と希望によるものが挙げられた。知り合い以外の方法としては、【近所での園探しと見学で、保育環境に賛同】、父親6の「僕は、2ちゃんねるで、(父親1・2・3・4・5・7 えー、ほんと) 街掲示板みたいな、良い保育園ないですかというので、その後、妻と見学に来て。」と、【インターネットでの園探しと見学】が挙げられた。どの父母も園庭に足を運び見学し、自然豊かな園庭環境に賛同している。父親①の「元々存在をしらなかった。近所なんですけど嫁もそういうところがあるって知らなくて。で、子供は保育園考えようかって、とりあえず何軒か見てみようっていうところから始まったんですけど。この保育園周りをしている時に今年長の在園児のお父さんと、全然関係ない所で嫁さんと会って、子どもが産まれて保育園を探してるんですよって世間話をした時に、(そのお父さんが) うちの子がA保育園に通っているんですよって、良かったら園庭見れるので見に行ってみたらどうですかっていう。これがほんと1番最初のきっかけですね。でまあとりあえずそこ見に行ってみようっていう流れで行ったんですけど。僕自身が田舎で旧園庭の雰囲気のある保育園で育ったので。山はあるし自然はあるし危ない遊びはあるし。自分の子どもをそういうところがいいなとは思ってたんですけどあるわけないと思ってました。そういうことで正直どこでもいいや、原っぱ、野山が少しでも近くにあればそこでいいやぐらいの感覚で、諦めてたんですけど。で、いざ保育園の園庭見に行った時、わっと心が奪われましたね、もう一瞬ですね。」の発言から、【見学し、子どもを遊ばせたい園庭】で、自然に親しむ機会

を子どもに与えたいという親の保育方針が窺えた。首都圏近郊に住まう父親は、背景に多様な価値観があるものの、【父母協働での園検討】を行い、自然豊かな環境の保育園に子どもを入園させていた。日々の子育ての実際と、保育園の情報収集は母親が担っているものの、子育て感や子育て方針は、子どもの育ちを保証できる豊かな環境であり、見学を通し実際を確認してから、父母で決定するなど、一貫性を持っていることが窺えた。

第2 保育参画へのわからなさから体験的理解への変化

保育園では、豊かな環境を維持するため、保育への関わりの説明と家庭教育重視による同意を得て、入園する形をとっている。父親①「まあそうですね。実際他の保育園を知らないですし、どれぐらいの範囲内でその自分たちが協力をするものなのかという想像もつかないのがあったんですけど、この一番最初に紹介してくれたお父さんが 結構父母の協力が必要なんで、もしかしたら大変かもしれないですよっていう話を色々してくれて。僕もどっちかという、預けたら預けっぱなしっていう話 聞くじゃないですか。そういうのも正直嫌いな方なので、なので逆にそうやって参加して、どんな形でも協力できるのであれば全然そっちの方が良いじゃんという話、それぐらいの 軽い気持ちという感じで。」と、入園当初は、母親同様に、園からの保育参画についての説明に同意をしていら。【預けっぱなしは本意ではなく、自主性を尊重した保育への関わりの呼びかけに協力したいという軽い気持ちを持つ】ことが窺えた。「例えば小学校だったら、よくテレビのニュースとかでも出ると思うんですけど、例えばしつけまで学校にとかっていうのを聴いたりして、いや学校って勉強しに行くところだ、半分遊びに行くところだ、しつけは親がするものじゃないの。それだったら先生たちはもしかしたら補助ぐらいはしてくれるかもしれないけど期待しちゃダメじゃないですか。というような感じがあったので。」と、【学校は勉強と遊びをするところで、しつけは親がするもので学校は補助をする】考えを持っていた。保育は親の肩代わりではないことを認識し、仕事と保育の関わりとの兼ね合いに肯定的な考えを持っていると言える。

父親は実際に入園し保育参画をするが、父親②「うんー。聞いてはいましたけど、全然イメージが湧かない、ま、今だったらわかりますけど、正直言われて想像と全然違うのはありましたけど、まあいいんじゃないのっていう感じは。」と【保育への関わりの説明にイメージがつかない】という受け止めをしていた。ほかに【想像以上の関わりは、親が期待されているということ】、【想像以上の活動の多さで、慣れるのに時間を要した】と、様々な受け止め方をしていた。「うん結構丁寧に、園長が説明したりとか、お便りが出たりそういうのすごい丁寧にやってるんで。それをちゃんとどっぷりやってるとわりと自然に入っているのかなって感じがする。」から、【丁寧に説明で関わってみたら楽しい】と肯定的に受け止めて

いた。なぜ関わるのかという園からの保育参画への説明という理論が、次第に活動に慣れて楽しく満足感を持ったという実践と統合されたと考えられる。

入園前の見学で、自然豊かな保育環境に感じた自分が子どもだったら楽しいという思いが参画を通し体験的に理解したからではないかと考えられる。

父親は保育への参画を通して、【子育てのイベントは楽しみ、体力面では大変】と感じている。父親②の「この保育園スタイルがいいというか、助け合うという環境は、他のところには多分ないんじゃないかという感じがするんですね。こういう結構色々講演会とか教育だったりそういう情報を園から発信してくれる場があるんですね。」と【子育て仲間との助け合う環境と園からの情報発信】、【保育士への発達相談による安心】を得ていることが窺える。

保育に関わり環境を整えている中で、例えば、父親①の「ここもそうかもしれないけど、自主性をとにかく大事にするじゃないですか。今なんかちょっと出てたりなんかしても、こっちがちょっと危ないなと思って今ちょっとここ潰しとこうかなって。でも副園長からすると、そういうの残しとけてるじゃないですか、そういう感覚なんですね。それがもしかしたらちょっと危ないことかもしれないんだけど、でもそんな些細なことでも子どもたちの遊びになるし、それで危ないって気づきになるし、じゃあそれ（子どもが自分で危ないと気づくこと）がありますかって。」と、子どもが転びそうな箇所があっても、【子どもの自主性を尊重し先回りせず危険を見守ることを学んだ】。大人が危険を回避するのではなく、子どもが危険な場面に遭遇したときに、自分自身で気付けるように注意深く見守ることで危険回避の感覚を肌で養っていく機会を大人が奪わないように配慮することが子ども中心の保育だと理解した場面だと考えられる。

昨今は、子どもが病気にかかった際には、親の就労の工面に困難が生じることがある。そのような状態のときこそ、親の養育が必要だとする保育園の姿勢、すなわち子どもの体調を優先することを父親は園から教わる。例えば、父親1の「完全にそうだと思います。そうそう。最近なかなか知らないことが多いじゃないですか、親同士の関わり少ないから。なんか結構巷で保育園でも病気の時も預かってくれるみたいな、それを良しとされているうちは、病気しても子ども預かりますみたいな、そういうのプラス面で言われてますけどね、そういうのって違うんだなって。病気の時は親が見てあげないって。そういうの最初は知らなかったことだし。そういうのこだわって最初に教えてくれるし。世の中とちょっと違うところっていうのは、ありますよね。」と、【子どもの体調を優先することを教わった】ことから、子どもの状況を考慮できるようになっていくと考えられる。

父親は、自身の休日の都合に子どもを合わせるのではなく、保育園でその時期に応じた過

ごし方を大切にしていることを知る。振り返ることで【子どもの普段の生活を優先する保育】を理解していったことが窺える。子どもにとって、季節に応じた普段大切にしている過ごし方が優先されるのであって、親の都合が優先されるのではないという保育方針を時間をかけて理解していったものと考えられる。

自然豊かな中、危険な箇所や場面がある中で、父親は先回りしたいところを注意深く側にいることで、【手を出さずに子どもの遊びを見守る】これまでに【培われてきた子どもの力を見守る】ことを学んでいった。父親は、これまで子どもにどの様に関わればよいのか、自分の立ち位置や距離のとり方かどうか思案していた中で、保育参画を通して、子どもの力を信じ見守る保育を学び、体験的理解へと変化し、子育ての価値観、子どもへの関わり、子育ての方法の変化につながったと考えられる。

第3 父親の葛藤と保育へのコミットメントの濃淡

保育に賛同して入園させたものの、父親②の「まあ今日も、園庭の池解体があって、来る人は来るし、ちょっと決まっちゃっているんですよ、もう。来ない人は来ないし。で、来ない人はそういう園外もあんましこないですし、もちろん花火師ではないですし。来る人は来る。来ない人は来ない」。から、【保育に関われる父親、関われない父親】がいる。「みんな言っちゃってるよね。自分が辛いことで嫌だ嫌だって。」と【自分の守りたいものと関わり方に生じる葛藤】を抱えていると推測される。

「今は、花火師というところに所属することで達成感を、父親たちの団体に参画するかしらないかだけになっちゃうから、現父親たちで、花火師がなくなりましたよってなったら、どう働きかけるのかちょっとわかんないですね。今は花火師に参加して一体感が高まってくプロセスになっちゃってるから。どういうふうに行っているかっていうのは、どこかに所属することとか、保育園に対して協力的かそうじゃないかってなると、二分割されちゃっているのは、ありますね。」と、【所属による父親同士の一体感と、保育への協力と協力の出来なさ】があることが窺える。

ここでは、参画する父親から「自分がこうしたい、自分が何したい、自分は仕事でこうなんだ、家事でこうなんだからと守りに入っちゃうと多分そういうのってストレスになるんじゃないか。だからあまり思わないのがいいけど。」と【自分の守りたいものと子育ての間に生じる辛さ】があると、【自分の守りたいものと関わり方に生じる葛藤】によって、コミットメントに濃淡が生じることが考えられる。

【母親から父親仲間への参入の提案】なされることも保育にコミットメントするきっかけになっている。【保育に関われる親の特異性】は、父親①の「嫁さんが自分を惹きつける

ために言ったんだと思うんですけど、お父さんの協力の中で、花火師とかあるらしいよ、あなたそういうの好きでしょって。よくわかってんじゃないかと思いつながら。好きで入りました。」と、【母親から花火のお手伝いを薦められ、好んで入る】といった父母共に関わられるかどうか関係することが窺える。

第4 保育参画への関与の深化とその楽しさ

父親②は【足を踏み入れるか否か】、コミットメントするかどうかが自己決定する。一旦足を踏み入れると、「でも花火師になり、園庭キャンプとか手伝いに行ったりすると、なんかこう、自発的とかやってやるぞっていうのが出てくるので。結局慣れっていうのがあるのかもしれない。」「ここの園の子だからなのか、誰々のお父さんって聞いて壁作んない。多分誰かが来たら、誰のお父さんって絶対聞いてるから、そういう雰囲気の中に父親達はすぐ入って行けてっていう。最初は強要はないから、行く人が行く的な参加だから、基本は自分で、お便りとか見てこの日は行ける。」と、【子どもの親密性と楽しみによる関わりへの意欲】がかきたてられている。父親本人の変化としては、【行動への慣れと自発性の向上】を実感するようになっていた。

父親と周囲の関係性については、【構築された父親仲間への参入と、参画の作業に時間をかけて馴染んだ】とされていることから、ゆっくりと時間をかけて人間関係を構築していると考えられる。父親2の「これが当たり前だから、でも僕あの15、6年前に行ったときはもっとお父さん濃い人ばかりで、すごいなんか仲間意識が強かった。そこに馴染みづらかった。お風呂みたいにゆっくり馴染んできた感じです。年を追うごとにゆっくりと入っていった。(家が)〇〇で遠かったしで。この園はあの年中になるとお父さんの連動がぎゅっとなる。」との発言から、【構築された関係性の中に入ることの躊躇】は、【年月をかけて慣れる】ことが窺えた。

父親7の「最初作業あるっていうのを事細かに聞いてなかったの、入ってみてそういうものかなって、まあやって楽しかったです。結構ここの保育園に親も育ててもらったっていう面がすごくあるかなって思って、やっぱり活動に参加して、保育園もそういうの意図していると思うんです。親が変わないと子どもも変わらない。そういうところは、参加しながらいろんなこと教えてもらって、すごく良かったなって思ってますけど。」と、まず「活動に参加し親が変わる」ことから【関わりで成長を実感できる】までに至っていた。

父親②の「難しいですけど、なんなんだろう。結局は自分が楽しいからってことになっちゃう。まあ、園外活動も結構父の協力で、たまに行くんですけど、やっぱり子どもたちが楽しんでいる姿、自分の子どもも見れるし他の子どもも見れるし。直感とか、目で見て感じ取

れるんで、いい経験だなんていうのを。なんでかっていうのそんなに考えたことないです、行きたいから行ってっていう、自分が楽しいからなんだろうなと思うんですけど。」と、【仲間と保育参画する楽しさ】を体感し、子育ての喜びと満足感を持っていた。

【保育参画の多さによる家庭生活とのバランスの取れなさ】という時間面での苦慮も見受けられる。父親①は「なんか協力すると言うか、ずっと好きで半分好きで手伝いに来ていられることあるので、要請があったから行くっていう感覚があんまりないんです。例えばこの日手伝いあるんで仕事休みにしていこうかな、予定表みて、お便りが来て、お父さんの力募集してますというのがあると、あ、行かなきゃ、あ、予定ない、じゃ行こうかな。極力行けるところは行って。あんまり行き過ぎると今度子どもと遊べない。」と、「休みを取得し好きで保育に関わるが子どもと遊べないジレンマもある」ことから、時間のマネジメントによって、参画時間と家庭での養育時間との調整を図る必要があることが窺えた。

このように、【父親仲間との保育参画で家庭生活との兼ね合いはあるものの、楽しさと達成感と満足感を得る】ことが明らかとなった。

母親は、保育参画により仲間を得て子育ての負担感や孤独感がなくなるなど、心理的なストレスを乗り越えていくのに対し、父親の保育参画は、保育士による促し、特に母親からの提案で保育参画に足を踏み入れるが、関われる・関われない状況と葛藤があることが窺えた。関われる父親には特異性があり、父親自身、構築された関係性の中に入ることの躊躇はあるものの、子どもの親密性と楽しみによる関わりへの意欲から、参画の作業に時間をかけて周囲と馴染んでいった。行動に慣れて参画が深化していくうち、自発性の向上、仲間と保育参画する楽しさ、成長の実感、子育ての喜びと満足感といった心持ちの変容が導き出された。

第5 公私のバランスと保育参画の充実

父親は、【保育参画の多さと時間調整のマネジメント】について、休暇取得を利用していることが多かった。

対職場では、【保育参画を理由とする休暇取得の容易さや困難さと職場への理解を得る大切さ】を実感している。父親5「完全にもう常に職場の人に言って、理解をどんどんつけておいてって感じ。そもそも月に3日しか休みもらえないから。夏休みって毎週土日花火で使わなきゃいけないんですよ。7月8月はまず無理なんですって、そう言っという休みもらう、そうなんであと何年なのって毎年聞かれます。上司にはあと何年やるの、それは。やめたんで今年仕事場でも色々やらされる、これはあります。やっぱり言っという理解を得るのは、結構大事だったかな。」と、「保育に関わるための休暇」について、職場が納得

できるように状況と期限を説明し、【休暇取得のための理解を得る大切さ】を実感していた。

有給休暇取得にあたっては、必ずしも理由を明確にする必要性はないものの、職務内容によって繁忙期や人員調整は様々であるため、父親は、なるだけ職場に負担にならないよう配慮していると考えられる。

対家庭では、仕事と保育参画による多忙さでの家事時間の取れなさを挙げている。父親②「まあ一年目はそんなに。仕事もちょっと忙しい時期だったんで、そこまで1年目はやってない感じですけど。まあやればやった分だけ交流は深まったから、まあ2・3年今は結構積極的に参加していますね。母があんまりやめてくれと、笑い、(2人で関わると)忙しいからと。」、父親2の「確かにつらいってなんだろうな、3人うちも在園していたことがあって、夫婦間は仲悪かった。笑い。やっぱりお互いが年数を兼ねてくると、立ち位置が園の中でもいろいろ役割が出てどっちを優先するかとかそういうのが出て来ちゃったり、まあ家のこととかもおろそかになるじゃないですか。そっちのせいだとか。だからつらいのは割と家庭の中でのぐちゃぐちゃかな、園に関しては絶対2人とも出ればいいんですけど、というのはこの園の特徴かも。」の発言から、家事時間とのやり繰りに苦慮していた。

そこで、父親①「で今、週4保育なんですけど、下の子が、まだ。その時は土日と週の真ん中で休んで、そしたら次は自分が寝ているとしたら一緒に起きるとか。そういうふうにして行かないと、子供と遊ぶ時間もそうですし。そうしないと嫁の負担が。夜は任せちゃってるし。夜ご飯からお風呂寝かしつけまで、自由な時間も含めてこの辺は協力しないとと思います。」の発言から、「子どもに合わせた生活サイクルと母親の負担の軽減」を図るなどの工夫をしている。一日の時間のうち、調整可能な時間として【睡眠時間を家族との時間に充て、母親の負担を軽減する】方略をとっている。「だって、子どもいるんだから子ども優先にするの当たり前じゃんって。でも仕事もしなきゃいけないから仕事を優先するときもあるし、もちろん嫁さん大変だから、嫁さん優先しなきゃいけない時もあるし、じゃあどうしよう。そうなったら、自分の部分を削るしかない。24時間は決まってるし。だから、そこを、自分を引ければ。うん、よく言うじゃないですか。女性が強いほうが上手くいくって、笑い。(略)でもそういうふうな関係性が出来てるほうが、溜め込まないじゃないですか。」と、「子ども優先時期は、自分の時間を引くバランスの取れた関係性を持つ」ことで、多忙な中で子どもと過ごす時間を捻出し、家族との良好な関係性を保つことで、公私のバランスをとっていると考えられる。

家族成員内の心理面については、【家族との限られた時間で子どもの気持ちに配慮する】ことが窺えた。父親①「母親が子どもに言ったことは父親は追い打ちをかけて言わない」、家族が増えた場合には、父親②「最近はないですけどね。年中の時は弟が生まれたのもあつ

て、ちょっと精神的にバランス取れてない時もありましたけど、そういうのあると子どもメインに。落ち着いていれば様子見ながら。」と、赤ちゃん返りなどに配慮するといった子育て期に必要な子供の気持ちに寄り添った言葉がけや養育を実践をしていた。

父親①の「もちろん皆それぞれ仕事もしてるし育児もしていました。皆が大変だからちょっと皆で尊重し合おうじゃないですか、気づかいをしあおうよ っていう話をして。ありがとうごめんなさいをきちんと言おうよっていう話を子どもたちの前でして。それでなんかわだかまりが溶けて、じゃあお願いします、わかりました、行ってらっしゃい、これが普通にできるようになった感じです。」「仕事の繁忙期と家庭と保育園のイベントが重なり、ストレスを表出し合える機会になった」から、【大変なときこそ、自己表出し家族で声を掛け合うことで乗り切れる】と、父母間の他者尊重や自己開示をするコミュニケーションで、多忙さからくる心理的なストレスの軽減に努めていた。

子育て時期のストレスコーピングとしては、【乳幼児の子育てに対する大変さの認識と気にかけない気持ちの持ち方】を挙げている。父親①の「2歳児3歳児のところなんて、そんなものだし、しょうがないな と割り切りつつも、でもやっぱり 母親以上にはないと思うんだけど、母のほうが全然強いですし、まあ俺より全然こっちの方がストレス感じてるんだけど、別にそんなのそれは気にしちゃいけないと思ってるんですよね、はい。」の発言から、子育てとは、ストレスを抱えるものだという受容は、日常における自分自身の気持ちの持ちようにも影響すると考えられるため、認識の仕方、物事の捉え方は心理的なストレスの軽減のために必要なストレスマネジメントと考えられる。

繁忙期など【仕事と重なるストレスは趣味で対処】したり、日々の工夫として、【子どもが就寝した後のリラックスタイムで好きなことをする】など私的な側面である家庭生活における調和と、公的な仕事の時間の充実に欠かせないものと考えられる。

共働きの増加による働き方の多様性、時間管理能力は今後も引き続き、そのバランス能力が必要とされていくことが考えられる。【公私のバランスと保育参画の充実】のためには、職場に応じて、保育参画の状況、時期などを説明し、参画の終了後の業務量で調整するなど、周囲の理解を得るための対人コミュニケーション能力と交渉力が必要と考えられる。また、子どもの気持ちに寄り添った家庭生活との公私のバランス能力と、家族成員同士の他者理解を通じた役割負担の軽減、心理的ストレス緩和のためのストレスマネジメントが必要と考えられる。

第6 仕事以外のコミュニティでの楽しみ、成長、主体的な継承

保育参画をすることによって、【親子で仲のいいグループの存在】が見受けられる。父親

の主な人間関係は一日の大半を職場で過ごすことから限局的であるのが一般的である。保育参画をすることで、父親①の「でやっぱ職場のお父さんたちに聞いても、まず自分の子が行ってる保育園の同じクラスのお父さんの名前も知らない顔も知らない、これが当たり前になっちゃってるじゃないですか。ここの保育園だったら同じクラスどころか、縦のクラスから卒園したお父さんまで知っている。これをこの年になって仕事以外で、コミュニティを持てるとは思ってなかったし。」「なんですかね、でもみんな多少方向性が違っても同じような気持ちを持ってここに来てる、というはなからベースが、揃ってる。考え方のベースがほしい近いものもあったりするので、子どもの話なんかしても、いいアドバイス、ヒントなんかももらえたりする、そこら辺の相談も気軽にできるかな、保育園のお父さん同士で子どもについて話をしているのってないと思うんですよね。普通の環境だったら。」と、父親1の「なんとなく、コミュニティが一個増えたこと、それは人生にとってプラスだったと思います。自分が持ってた会社とプライベート以外に保育園というコミュニティができたのは、子どもも家族も全部。あんまりマイナス面として捉えてないですね。ちゃんと家族共々成長させてもらった。大変だったのはちょっとしたことはいっぱいあった、今思い返してあれがつらかったとかないですね。」、の発言から、親子で顔と名前がわかりあえ、対個人、対仲間という集団における日常での関わりの深度が増していく中でコミュニティにおける相互扶助の関係性から、楽しさを感じ、成長というポジティブな側面が引き出された。【仕事以外での相談できるコミュニティと成長】への過程を経た心理的社会的な影響と考えられる。

祖父母が遠方で都市化による核家族化の中で、預け合いのできるコミュニティを持つことは注目に値すると思われる。父親は、保育士との協働により、保育環境設定でキャンプ等力仕事を担うこともあり、【体力的時間的な大変さはあるものの、精神的なストレスや孤独感はない】ことが明らかとなった。それは相互扶助のコミュニティでの仲間との活動の楽しさや充実感により、孤独感のような心理的ストレスはなく、自己肯定感が高まり、自己成長、家族成員による協力や相互理解から、家族の成長ができた実感しているためと考えられる。

父親の中には、公私のバランスのやりくりをしてきた中での【保育参画での楽しさから卒園する辛さを感じた】いる人もいる。親育ち子育ての保育方針と保育参画の実践を経て、【卒園後、理論と経験の合致への気づき】を得ていることが窺えた。【卒園後の自由な時間を実感】しつつ、周囲からなぜ卒園しているのに未だに保育園に関わっているのかと驚かれることが窺えた。

卒園時の父親たち1～7は、「それは決まり、笑い。でも長年やってなかったんですよ。

これ、卒園制作もう 6 年以上前からやってなくて。要は転園するからやらなくていいって言われてやってなかったんですね。うちの代やってないんで、今 6 年生。だから久々です、6 年ぶりぐらい。一年前はちょっと中途半端になっちゃったもんね。そうそう。最初からあるよ、卒園制作はセットなんです。母たちは卒園制作で色々やってるじゃないですか、だから父達も卒園制作。だから俺はまだ義務だと思う、笑い。あるものだと思うって。」

長年、保育園で継承されている【卒園後の制作で関わりの稀有さと集う楽しさを認識】している父親もいる。自分の子どもだけでなく周囲の子どもに視野が広がり、豊かな保育環境を次世代へと【主体的に継承】していく姿が見受けられる。振り返ることで、自分自身の成長の糧としているように考えられる。

このような相互扶助のコミュニティが形成された後は、来る【学童期での子育てを学ぶ場のなさへの不安】を感じる父親もいる。コミュニティの小学校へのスムーズな接続が必要と考えられる。

次世代に向けて、父親は【仲間との経験から子育てがスキルアップし、悩みを開示し、保育を学んで視野を広げて子どもを捉えることを指南する】。「理想の育児を信じると悩む」、育児書やインターネットで調べても正解は出てこないとし、実際に様々な子どもと関わる中で、【理想ではなく現実重視で子育てに悩むほうがいい】と提案していた。

また、父親 7「抱えないで、誰かに何か友達でも誰でもいいから、言ったほうがいい。自分で抱えないほうがいい。おじいちゃんおばあちゃん、友達。あと、ちょっとインターネットで調べる。いやでもそうやって吐き出さないとストレスになって。(他の親 それはここの園でやってた実践編?) いやいやそれはないけど。今、思いついたアドバイス。ただ誰かに吐くと いうだけで 解決になってないけど、まあ軽減される。」と、一人で抱えないこと、誰かに話すこと、抱え込まないようにするにはインターネットを利用するのも一つの手段と提言している。話すことは、自分の内面にあるストレスを表出することであり、「抱えず誰かに話す」ことで、【悲観せず自己開示すると相互でピアサポートしあえる】ことから、その方略は一つでも多いほうがよいと提案していた。

卒園児を持つ父親の「子育てに求めるものが、例えば英語ができるとか。悩むことって結構子どもへの過剰な期待があるのかなという、そう思うんですけど。子どもにとっては良くないと思うし、親が大切に重視しているものっていうのが、今世の中全般的にずれてるような気がしてて。ここの園でも薦められたんですけど、子どもへのまなざし、あれ読んでみるのがいいのかなと。」との発言から、【親の価値観や親の重視するもので子どもに過剰な期待をしていないか】、自己を客観視することも提案し、子どもの発育・発達に応じた適切な養育環境とは何かを見極める力を持つことが必要と考えられる。父親②は、「ただ通わせれば

父親は、母・祖母が主導、または、父母協働で、【多様な価値観での子どもの入園】する保育園を検討していた。どの世帯にも共通しているのは、実際に園庭を見学し、自然豊かな環境に賛同し、子どもに十分に外遊びをさせたいという方針により入園を決定したことである。

親育ち子育ての保育方針と豊かな保育環境の維持のため、園からの保育参画への説明に対する同意後、父親は、子どもとあまり接する機会がなく、雇用労働といった就労時間との兼ね合いから、関わりたくても関われない状況だったり、実際の関わりのわからなさから、保育への関わりで子育ての学びを経て、【保育参画へのわからなさから体験的な理解への変化】が見られた。保育への関わりには、仕事や自身の価値観との兼ね合いから、「園庭の池解体があって、来る人は来るし、ちょっと決まっちゃっているんですね」と、【父親の葛藤と保育へのコミットメントの濃淡】があり、個人差が見受けられた。ここでは、参画する父親からの発言として「自分がこうしたい、自分が何したい、自分は仕事でこうなんだ、家事でこうなんだからと守りに入っちゃうと多分そういうのってストレスになるんじゃないか。だからあまり思わないのがいいけど。」と、コミットメントの濃淡について考えている。しかし、実際に保育参画に消極的な父親の発言ではないため、推測の域を出ない。

保育に関わる父親は、【保育への関与の深化とその楽しさ】の過程をふんでいた。【足を踏み入れるか否か】、コミットメントするかどうかが自己決定する。

「でも花火師なり、園庭キャンプとか手伝いに行ったりすると、なんかこう、自発的というかやってやるぞっていうのが出てくるので。結局慣れっていうのがあるのかもしれない。」
「最初は強要はないから、行く人が行く的な参加だから、基本は自分で、お便りとか見てこの日は行ける。」と、【行動への慣れと自発性の向上】を実感するようになっていた。

父親と周囲の関係性については、「年を追うごとにゆっくりと入って行って。(家が)〇〇で遠かったしで。この園は、年中になるとお父さんの連動がぎゅっとなる。」との発言から、【構築された父親仲間への参入と、参画の作業に時間をかけて馴染んだ】ことが窺えた。

大勢の子どもを見ることによる子どもへの関心、子ども中心の保育への理解、家庭での養育、子育ての深化に至り、【父親仲間との保育参画で家庭生活との兼ね合いはあるものの、楽しさと達成感と満足感を得る】ことが明らかとなった。

父親は【公私のバランスと保育参画の充実】のため、休暇取得を利用していることが多かった。「完全にもう常に職場の人に言って、理解をどんどんつけておいてって感じ」と、時間調整、時間管理、家族成員との家庭生活での協力体制、子供の気持ちに寄り添う、子どもとの時間の確保といったマネジメントを行っていた。

継続的な保育への関わりのために、父親は、公私のバランスに加えてストレスコーピング

や家族間での自己開示のコミュニケーションなどにより、自己、家族の心理的健康の保持に努めている。例えば、【睡眠時間を家族との時間に充て、母親の負担を軽減する】という時間の使い方をしている父親がいた。また、「2歳児3歳児のところなんて、そんなものだし、しょうがないな」と割り切る」という認識の仕方、物事の捉え方をしたり、【仕事と重なるストレスは趣味で対処】と、心理的なストレスの軽減の方略をとっている父親もいた。

父親は、【仕事以外のコミュニティでの楽しみ、成長、主体的な継承】という過程が見られた。「ここの保育園だったら同じクラスどころか、縦のクラスから卒園したお父さんまで知っている。」「子どもの話なんかしても、いいアドバイス、ヒントなんかももらえたりする、そこら辺の相談も気軽にできるかな」と、父親のコミュニティ形成と仲間との相互扶助の喜びを感じ、保育の学びを通して養育スキルが向上し、家庭やコミュニティ内で子育て力を活かすことにつながった。

父親の保育参画は「親も保育を勉強して、自分の子どもがこうなんだというようにしつつ、他のこととかも共有しあうと、小さな枠組みじゃなくて大きな枠組みで自分の子どもとか、保育の感じを捉えていくと、開けていく感じはしますね。」と、自己肯定感という自身の成長だけでなく、母親を始め家庭、保育園に好影響を与えたことが導かれた。

仲間との関わりを通し、保育参画によって、主体的な子育ての獲得や相互扶助による活動を楽しみながら卒園後の制作活動を通して次世代に継承していることが明らかとなった。

終章 保育参画とその促進による心理的社会的影響および、今後の展望

第1節 本論文で行った調査の知見

知見1：園長は、孤立しない親育て子育てのため、保育園での保育参画の仕組みを形成した。子育ての場における保育参画促進の仕組み作りとして、保育士はいつでも相談できる子育てに関する窓口を作りそれを他の親に広げていくために、親が保育に関わる機会を持つよう日常の保育の場面で呼びかけていた。そして、親同士で助け合えるピアサポートという仲間作りの橋渡し役を担っていたことが明らかになった。保育士と親との信頼関係の構築されたつながりは、さらには、保育士の橋渡しにより親同士のつながりと拡大し、困っているときは我慢せずに助けを求める援助希求の容易性や、時間を共有し保育に関する活動に関わることで、子どもの様子や成長していく姿を知ることができ、子どもの力を信じ、主体的に遊ぶ姿を見守る子育ての大切さを知ることにつながった。

園では、文脈から背景を察することが苦手な世代とのコミュニケーションの工夫として、連絡ノートに頼るだけでなく、直接対面による接し方で、時間を確保し、表情をみながら、ノンバーバルコミュニケーションを用いながら、具体的に保育に関する内容、親の子どもへの関わり方といった子育ての方法の指南を繰り返し話すことを心がけることで、親育ち子育ての保育への理解と、子ども中心の保育観への理解につながっていった。

さらに、父親が保育士や母親らの促しによって保育に参加することで、親同士が友人関係を構築したこと、主体的に保育に関わる参画の楽しさを知ること、保育士の力だけでは設定できない自然を生かした保育環境が整えられたこと、自分の子どもだけでなく、仲間全体の子どもを見られるようになること、お互いの子どもを見合うこと、これらのことから、子育てが深化したこと、卒園してからも親子でつながりを持つことに広がっていった。他者に対する主体的な働きかけにおける相互関係では、ソーシャル・キャピタルにおける一般的な互酬性が成熟していると考えられた。

知見2：親の保育参画は、就労との兼ね合いによる時間的な困難さ、負担はあるものの、子育ての学びの場として非専門家同士で協力体制を形成し、コミュニティメンバーとして協働し、お互いに弱さを表出し、強みを活かし子育てに関するストレスや困難を乗り越え、豊かな保育環境を創り出し、保育者・親・子どもと環境の適合状態につながった。人と環境の適合は、生活対体としての集団が、物理—社会的要素を含む生活環境との間で、調和した機能的関わりがもてる状態にあることを指している（北島，2000）。

自然豊かな保育内容に賛同したことによって契約をし、子どもを預けサポートを受けるだけでなく、時間をマネジメントし親が保育に参画することで、保育士だけでは困難な保育環境の設定が可能となった。

保育参画は、保育の質に影響するだけでなく、孤独感がなく、子育ての負担感、不安が軽減するなど、親の心理的ストレスの軽減が見られた。また、子どもの理解、子育ての方法の肯定的変化、価値観の変化など親としての成長、親同士協働して保育を行い、悩みを開示し合う相互扶助的なコミュニティの形成といった心理的社会的な影響がみられた。親の就労の有無に関わらず、周囲と知恵を出し合い工夫することで保育参画は、保育の質の向上と親への効果が期待できると考えられる。幼保一元化がさらに進んでいく中で、就労の有無に関わらない父母の保育参画により、保育の質の向上は実現可能と考えられる。

保育士による保育参画の促しは、保育士と親との協働活動、親のコミュニティにおける相互扶助、子育ての指南と多重構造のサポートによる子育ての深化、親の心理的社会的成長へと導く可能性が示唆された。保育参画促進は、従来の子育てサポートシステムに対して、付加的な要素を持つ効果的なサポート方法であることが示唆された。

第2節 総合考察

第1部では、我が国の幼児教育・保育の分岐となった経緯を概観した。近年の少子化、共働きの増加といった社会情勢の変化に伴い、保育所の在園児数が幼稚園の在園児数を上回り、様々な受け皿対策が取られている。また、就労の有無に関わらず、就学前の一貫した保育へのニーズが高まった。幼児教育と保育における幼保一元化の流れと現状を概観し、今後の一層の増加が見込まれた。

我が国では、保護者は子育て支援のサービスの受益者として捉えられているが、先行研究で、母親の孤立・孤独な子育てによる心理的ストレスから、保育施設において子育てを学ぶ場が求められていると捉えられる。保育者による親に対する保育への促しによって親が保育に参画することで、子育てを学ぶ場で、保育と子どもの理解へとつながり、不安が軽減されるなど良い影響があることが導き出された。

課題としては、保育の質の確保、父親への参画の促し、心理的ストレスの軽減のための父母のネットワーク、相互扶助のコミュニティ形成の必要性が挙げられた。

そこで、本研究では、こうした課題の解決に向け、保育園の運営者および保育士による親への保育参画促進について取り上げた。運営者および保育士による親の保育参画促進の仕組みおよび形成・維持の過程、参画による親に対する心理的社会的影響について検討することとした。

第2部では、保育参画を効果的に実現しているA保育園の事例に着目し、実践の影響を探索するために、園長と主任に、親の保育参画を促進する目的と具体的な仕組みについてインタビュー調査をした。また、臨床で保育を実践する保育士に、保育参画の具体的な促進と

親への影響や効果についてインタビュー調査を行った。さらに、保育参画をしている母親と父親に保育への参画の過程やその心理的社会的影響についてインタビュー調査を行った。

昨今の核家族化による血縁からの扶助の受けにくさへの対処として、保育園における子育てに関連した仲間（以下、ピアサポーター）という集団社会に参画する機会の設定、子育ての学びの場の提供、保育士や経験者から子育てのコツを得られたこと、保育士や他の親との信頼関係の構築と相互扶助への深化、それらによる孤独感、心理的負担、不安といったストレスの軽減、対他者とのコミュニケーションを行う個人の成長、主体的で能動的なピアサポーターとの活動への発展という心理的社会的影響と効果を得ることができたと考えられる。

本調査での園長と主任に対するインタビュー調査の結果では、園長は、幼保一元化以前から保育園における“幼稚園教育のニーズ”に対応し、就労形態の自由度が高い、あるいは、保育に積極的に関わる親がいることで、保育の質維持の経営を継続するという稀な保育経営をしていることが捉えられた。そして、次世代育成による保育人材の確保と、保育に積極的に関わる親の確保により、保育の無償化による懸念を軽減し、保育の質の維持を必要としていることが問題点として捉えられた。園長は核家族化における孤独な子育てを防ぐため、また、子育てを学ぶ場として、親育ち子育ての保育方針を打ち立てて保育参画の仕組みを形成していた。園長と主任は、親が保育に参画する場と機会を形成した。保育士から子育ての指南を伝授し、親仲間というピアサポーターを得て関わり合いと助け合いの中で、子育ての悩みを共有し心理的ストレスの軽減を図っていること、また、子ども理解を通して親が成長し、自己肯定感を持つことで子ども中心の生活を送れるようサポート体制を形成していたことが窺えた。

園長と主任の結果と共に、保育士からの結果では、共働き世帯の増加と多様性を持つ親は保育に参画しにくい傾向を持つ。その参画への葛藤の軽減を図るため、主任は相互理解へのコミュニケーションの窓口を作り、傾聴し歩み寄りの姿勢を持つことに努めていた。園長は、共働き世帯にとって参画は負担であることを認識しているものの、子育てを通して得られたことがらを記録することは、将来の親子の成長を振り返る楽しみとなると考えていることが窺えた。そこで、保育士によって丁寧に繰り返し保育に関わることをサポートすることで、時間の経過と共に親は子ども中心の保育を理解するようになり、主体的に活動する親は委員会で講演会を開催するなど主体的に企画立案し、保育に関わる様子が見受けられるなど変容が窺えた。親たちは、家庭生活においても子育てがしやすくなり、父親の子育ての関与が高まったことから、親子での良い時間を過ごせるまでに至った。また、卒園児は仲間と共に園を訪問していることから、保育園時代の良い時間を振り返って楽しんでいる様子

が窺えた。

保育士は、自然豊かな中で子どもが生き生き遊ぶ園に感銘を受け、就職していた。保育の質維持のための時間を捻出し、園長や周囲のサポート的な関わりから、保育士も親も子どもも、一緒に育ちあう園で、保育の質を向上していく様子が見られた。子育てを学ぶ場として、豊かな保育環境に親の協力は欠かせないとし、保育に関わる説明への同意後、多様な価値観を持つ親は葛藤を抱えている。その背景として、保育園は就労し保育に欠ける子どもを預かる施設として認識しているのではないかと考えられる。保育参画と就労との兼ね合いによる時間的な困難さや関わりの深さという現実には困難感を抱いていたと考えられる。

保育士は、直接関わる機会を授けるなどして、親の葛藤へ対応を重ねていた。園に来る機会と活動を呼びかけ、保育参画の仕組みによって母親は保育士や経験者というピアサポーターから子育ての指南を得て、子どもとの関わり方や捉え方、子育ての肯定的評価ができるようになるといった子育てが深化していくと捉えられた。

父親の参画については、園と母親からの促しによって保育に参画し、仕事以外の仲間ができたことによる参画の活動への楽しさから、子育てに関心を持つようになり、大勢の子どもと接することで子育ての当事者として役割が増し、存在感が大きくなったと捉えられる。

子どもへの影響としては、父親の存在と見守りで、子どもは意欲的になり、母親は父親の存在感が増したことから、家庭での養育である子育てがしやすくなり、父親の参画は、周囲へ良い影響を与えていることが明らかとなった。

保育参画により、父親自身子育てに興味を持つようになり、その学びを通し、子育ての当事者になったこと、仲間を得て楽しみを持つようになったこと、子育ての方法の変化、価値観の変化といった心理的成長をしたことなど、保育士から見て大いに心理的社会的影響があったと言える。

一方、核家族化、共働きの増加、保育や子育てに関する多様な価値観により、保育参画拡大と一般化への課題は、依然として存在する。共働きの増加、就学前の教育の機会均等のニーズなど、誰もが保育施設での質の高い教育を望んでいると考えられる。保育に参画し、心理的社会的に良い影響が得られる状況になるよう、今後も子育て世代のワークライフバランスを考慮した子育ての学びへのサポート体制の構築が必要と考えられる。

母親は、都市化によるコミュニティにおける対人関係の希薄化から、孤独な子育てで負担を感じていることが多い。初めての親子での集団生活の場となる保育園で、保育士から子育ての指南を伝授される機会を得たこと、大勢の子どもを見ることで、我が子を客観視すること、相互扶助のピアサポートコミュニティの形成によって、相互で子供の預けあい

をするなど、挨拶程度の付き合いでは得られない相互扶助による助け合いが可能となった。当初は保育士からの子育てに関する負担軽減のサポートが多かったが、次第に保育士と保育において協働するようになり、次の段階として、親同士で主体的に協働するに至ったことから、子育てのストレスによる負担の軽減だけでなく、親のコミュニティにおける相互扶助を通して親の成長がみられるまでになったと考えられる。

父親は、入園当初は子育ての当事者意識が母親ほどには持っていなかったが、それは、子育ての機会の少なさから生じたものであり、父親が子育てを母親に任せきりで養育の役割を担わないという意味ではない。父親は、保育士や母親の働きかけで足を踏み入れることで、保育に対する関わりが始まっていた。保育参画の経験者の人間的魅力や仕事以外で大人になってから利害関係のない友だちができるなど、楽しさを感じながら、保育により深く関わる参画へと深化していく様子が窺えた。卒園後も休日を利用して集まり、園庭で卒業制作に携わるのは、制作する義務を超えた、仲間との関わりを楽しさを能動的に求めていたことによるものと考えられる。これまで引き継がれてきた季節の行事への企画や活動を、経験者から次世代に引き継がれていく様子が窺えた。

保育職、父母へのインタビュー調査に対し質的研究でのKJ法を用いた分析により、保育参画による影響と効果、親の心理的負担の軽減を生み出している要因について、保育士という子育ての専門職のサポート体制が、一種のグループと捉えることができると考える。その後のbridging型（橋渡し型）の形成の一つとして、卒園後に声を掛け合い、様々な小学校区域に属する有志の集いである父親の卒園制作グループが、bridging型に該当すると考えられる。卒園してからの参加は義務ではないため、卒園後の集まりに参加しづらい父親に対しては、卒園児を中心とし親は見守るといった形のコミュニティとして継続するとよいのではないかと考えられる。

古城（2017）の保育園児の保護者を対象とした抑うつに関連する研究で、ソーシャル・キャピタルが母親の精神的健康への有効性が認められたことを前述したが、A園では、保育に参画する親において、孤立や孤独を感じる親は、ほぼ見あたらず、サポートを要する親がいた場合は、保育士と他の親が窓口となって声を掛け合い、サポートしていたことから、彼らがソーシャル・キャピタルとしてうまく機能していた事例と考えられる。

A園では、他の子どもの親、近隣のサポートは、母親におけるソーシャル・キャピタルの一形態となっていた。これらのサポートは保育園からのサポートによって促進されており、保育園による保育参画の仕掛けが母親の孤独感、負担感、不安などの心理的ストレスに対する間接的な軽減要因となっていたことが示唆された。父親は、就労との兼ね合いから時間的な負担があり、子育てに関わりたくても関われなかったり、母親が主に子育てを

担っている家庭では、子育てに対するわからなさはあったが、孤独による不安や負担という心理的ストレスは見受けられなかった。A園は、地域の子育て世帯が安心して子育てができるよう身近な支援者として、保育職という専門職だけでなく、非専門家である父親・母親というピアサポーターが、保育職と協働して子育ての悩みや親子関係に関する相談・援助・情報提供等、それぞれの強みや経験を活かした相互支援がなされたのではないかと示唆された。

A園をソーシャルキャピタルとして捉えると、そこに属する成員間の信頼や関係性のなかで互酬性が見受けられたと考えられる。

先行研究では、活動を重ねるごとに養育態度や自身に対する評価が肯定的に変化し、参加者同士の互酬性高まることを見出していたが、A園においても、親が保育サービスの受益者だけでなく、子育てを学ぶ主体者として仲間と共に保育参画を実践している好事例としての意義と可能性が示唆された。

対象者の父母は、当初、保育参画の負担の多さに戸惑うこともあったが、保育に関心が高く、保育参画に賛同し、保育参画に積極的に取り組む人たちであった。自己開示ができる、対人関係スキルが高い、物事を肯定的に捉える、子どもを持つ大変さを含めた現実を受容する、感謝の気持を持つ、利他的態度といった傾向を持っていた。また、母親は、優先順位は子育てで、仕事とのバランスを取るといった傾向を持っていた。こうした適応的な特性を持っていた親にとっては、A園の保育参画の仕組みが適合していたと言え、保育参画を通して、他者との関係が形成され、自己開示と援助希求によってサポートが得られていたと考えられる。また、子育ての困難に対しても、保育士や他の親と共有し、適切な対処を行うことで、その心理的ストレスを乗り越えられる心理的なストレングスを発揮し、その結果、子育てにおいて、心理的に肯定的な変化が生まれたと考えられる。

反対に、保育参画に消極的な父母は、仕事の優先度や就労の拘束性が高い結果、子どもの養育を保育士に一任するといった傾向があったと考えられる。

保育への参加に積極的もしくは負担があるといった親の意識は、母親の就労の有無に左右されない(下村, 2015)という知見が得られている。本研究においても、サンプル数は限られているが、先行研究の知見と一致が見られた。保育参画に消極的な親が、仕事への拘束性の高さから関わりたくても関われない状況なのか、保育参画の意義を感じていなかったために消極的であったかは定かでないが、保育参画に否定的な態度の親は、それぞれの子育て環境や本人の価値観に基づいて、仕事、家事、子育てとのバランスを取っているために、保育参画に費やす時間や労力を少なくしているのではないかと考えられる。

就労の負荷が高かったり、実家が近隣でなくサポートが得られないなど、子育ての役割

負荷が高い親は、保育参画の機会が少なくなり、子育ての仲間との交流が限定され相互扶助を受けにくくなる。その結果、ストレスの解消も難しく、子育ての方法を学ぶなどの成長もしにくいという悪循環が生じているかもしれない。

A園は親の孤立化による孤独感の軽減を図り、親育ち子育ての保育を維持するため、保育参画に対する説明と同意の上での入園という方略をとっている。参画によって得たピアサポーター同士の相互扶助による子どもの預け合いに抵抗を持つ親にとっては、情緒的サポートよりも道具的サポートが有効と考えられる。その一つとして、役割負荷の低減のため、母親自身がリフレッシュする時間を確保するための預かり保育を実施するといったサポートが考えられる。他には、豊かな保育環境の保持のためには、自宅でできる制作に携わるなどの方法によって、対面にこだわらない形態での参画が可能となり、それが保育の質を向上させ、子どもに還元されるのではないかと考えられる。

今後、幼保一元化がさらに進むと予想される。就労の有無に関わらず親が保育へどのように関わればよいのか、本論文は、保育参画を行っている先駆的な事例として、A園の活動を取り上げ、保育者の親に対する保育参画の促進と親への影響について考察した。長年培ってきたA園での実践は、今後の認定こども園での親の子育ての学びの場や活動の場として、ソーシャル・キャピタルの形成による人と環境の適合状態を生み出す方法として、参考になる可能性を示している。

以下に研究Ⅰ～Ⅳを統合した親の保育参画促進の過程とその影響について示す。(図1参照)

親の保育参画促進におけるコミュニティ形成過程と子育てに対する心理的影響

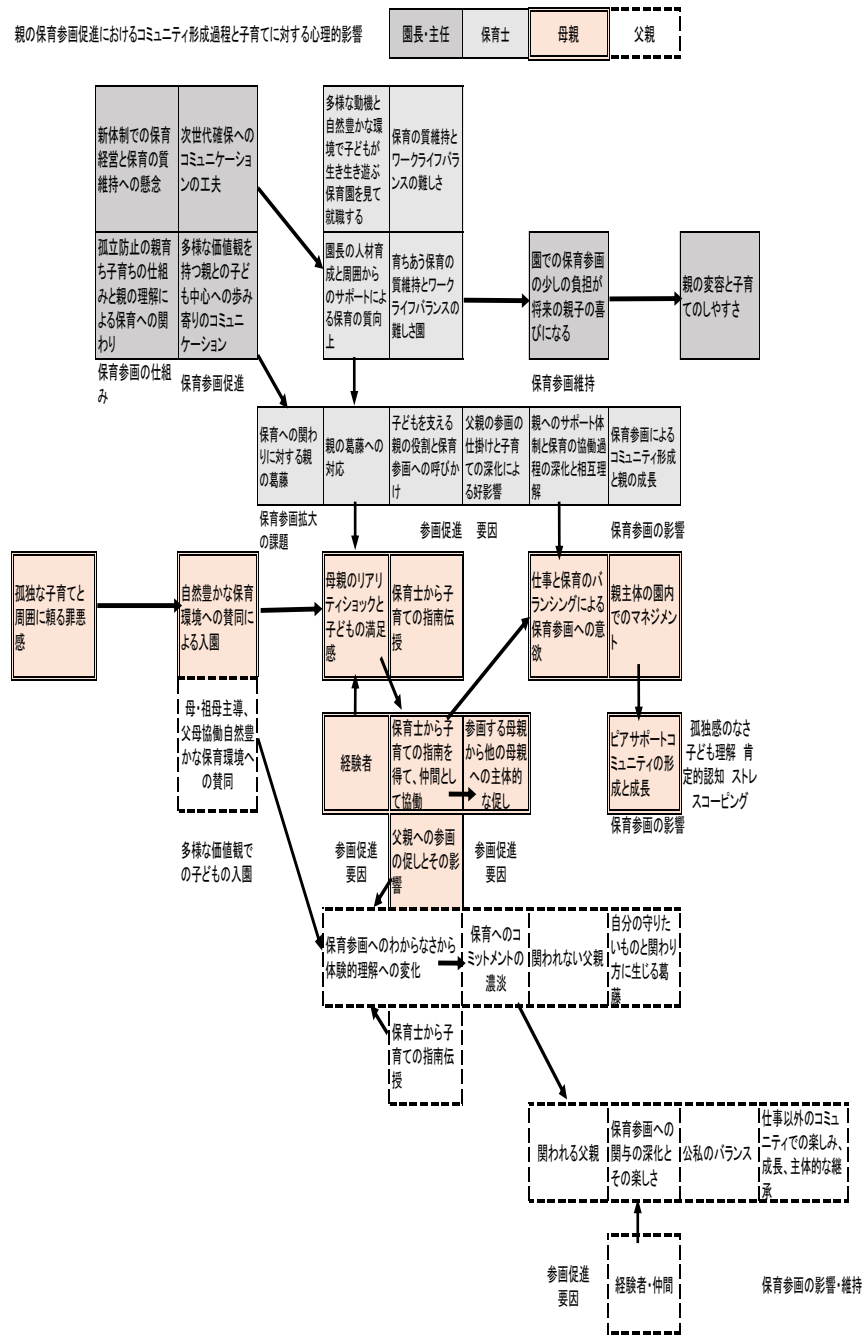


図1 親の保育参画促進におけるコミュニティ形成過程と子育ての心理に対する影響

第3節 今後に向けて

今後、幼保一元化が推進される中で、保育者が、親の就労形態や保育に対する価値観の違いなどによる多様な保育へのニーズに対応しながら保育参画を促進するための提言を行いたい。

幼稚園と保育所の保育参加の実施状況では、幼稚園・保育所に関わらず、保育への参加に積極的もしくは負担があるといった親の意識は、母親の就労の有無に左右されないという知見が得られている(下村,2015)。また、プレイセンター、幼稚園、大学内の通学型幼児教育施設における保育参画に関する先行研究では、親の保育への関わり方の肯定的な変化が見られた(青井・小川,2009;小林ら,2006;佐藤,2016;山本,2011)。

本研究でも、先行研究が少ない保育所における保育参画の先行事例を取り上げ、保育参画が、常勤、在宅勤務、時間勤務といった様々な就労形態の父母に対して、心理的社会的に好影響を及ぼしていたことが示された。

保育参画によって保育の質を向上させるためには、保育者が子育ての学びや相談ができる場を提供し、保育者との協働関係と親同士の相互扶助的なコミュニティの形成を促すという社会的仕掛けを設定することが有効である。こうした仕掛けは、親の子育てにおける孤立を防ぎ、心理的ストレスを低減するだけでなく、子どもの理解や子育ての方法を深化させ、自己肯定感を向上させるなど、親が子育ての悩みを乗り越えて心理的成長を果たすことにつながると期待できる。

そして、就学前の保育におけるコミュニティ形成の仕掛けを、就学後の学童へのスムーズな接続においても活用し、学童を持つ父母のネットワーク作りのサポートとすることによって、学童教育の場に対しても好影響が生まれると考えられる。

第4節 知見を踏まえた保育参画の意義

本研究では、父母が主体的に企画・運営に携わる保育参画の活動によって、親たちが保育施設へ足を運び、保育の内容を理解していったこと、保育者が悩みを持つ親に対し相談窓口となっていたこと、仕事との両立に悩みながらも時間管理のスキルを獲得し、協働して保育を行っていたこと、また、親同士に、子どもの預け合い、傾聴と受容といったピアサポートを行うコミュニティが形成され、ソーシャル・キャピタルとして機能していたことが示された。

こうした活動を通して、母親においては、子育ての孤立化を防ぎ、子育ての負担や不安といった心理的ストレスが軽減されると共に、子育ての学びの場が提供されることで、子どもへの理解を深め、子どもを見守る関わりが生まれるなど子育てが深化し、子育てへの肯定的

評価や自己肯定感も生まれていたことが示された。

父親においては、保育に関わることで、子どもに興味をもち、大勢の子どもをみることによって、子どもへの接し方を理解し、子どもを預け合うなど子育てが深化したと同時に、父親仲間との活動に参加し、利害関係のない友人を得ることにつながっていた。

このように保育参画は、時間管理と協働のスキル獲得、相互扶助的なコミュニティの形成、子育てのストレス緩和と満足への変容、子どもの理解や子育ての方法の向上など、心理的社会的に望ましい影響を、父母に与えることが示唆された。保育参画は、従来の子育て支援の質をより高めるのみならず、保育者との意思疎通の深化と他の親との連帯感の醸成を通じて、より良い子育て環境への形成に繋がる可能性がある。

第5節 限界と課題

本論文は、保育参画を実践している1つの保育園における、保育者と親合わせて26名を対象としたインタビュー調査を行い、彼らの語りを質的に分析した事例研究である。このため、研究対象となる保育園と対象者の数、言語データの解釈やカテゴリー化などの分析における客観性の保持に課題がある。

また研究協力者は、積極的に保育参画を行っていた能動的な親が対象であり、保育参画に対する内的動機づけが高かった。こうした特徴が、保育者や他の親との対人関係形成やコミュニティへの参加、子育てやその心理における変化に影響を与えたと考えられる。

一方、就労状況によって保育への参画が困難な親や、保育参画に消極的な態度を持つ親に関しては、保育者や親の語りから間接的に得られた情報に基づいた限られた分析しか行われていない。こうした親にとって、保育参画がどのような影響を与えるのか、どのような形での支援が必要なのかについては十分明らかにできなかった。

そこで、保育参画や類似の活動を行っている多くの保育園を対象として取り上げ、また様々な就労形態や家庭状況の親、保育や育児に対する多様な価値観を持つ親を対象とした調査を行っていくことが求められる。こうした研究によって、本研究で得られた知見の一般性について検討を行う必要がある。

第6節 保育の課題

保育の課題として、ワークライフバランス、次世代の人材確保、子育てサポートの技能の伝授、共働き増加による保育参画の活動内容の検討が挙げられる。

本研究では、保育参画の好事例について詳細な知見を得ることができたことから、これらの知見に基づいて、他の保育関連施設に対しても適用可能な「保育参画の導入モデル」

を構築すること、親に対する臨床心理学的、社会心理学的なサポートの方法を検討することが、保育の質を向上させる上で必要と考えられる。

引用文献

- 秋葉理江, 田口(袴田)理恵、河原智江, 今松友紀, 糸井和佳, 臺有桂, 田高悦子(2013):孤独感を抱えていた初産婦が近隣住民とつながりを築いていく過程, 日本地域看護学会誌, 15(3), 23-31.
- 青井倫子, 小川敦子(2009):幼稚園における保育参画の意義と課題—愛媛大学教育学部附属幼稚園の取り組みから, 愛媛大学教育学部紀要 56, 91-100.
- 荒牧美佐子, 田村毅(2003):育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因, 東京学芸大学紀要 6 部門, 55, 83-93.
- 安梅勅江(2007):ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開, 医歯薬出版株式会社, 東京. p68.
- 馬場千恵, 村山洋史, 田口敦子, 村嶋幸代(2013):「乳児を持つ母親の孤独感と社会との関連について 家族と友達とのソーシャルネットワークとソーシャルサポート, 日本公衆誌, 60(12), 727-737.
- California Council of Parent Participation Nursery Schools (CCPPNS), <https://ccppns.org/>(参照 2021 年 10 月 31 日).
- Campbell Parents Participation Preschool, <https://www.cppp.com/>(参照 2021 年 10 月 31 日).
- Chicago Parent Program of Rush University, <https://www.chicagoparentprogram.org/>(参照 2022 年 1 月 2 日).
- 藤崎康彦(2014):非言語コミュニケーション研究再考, 跡見学園女子大学機関リポジトリ, 8,
- 古田雅明(2016):第2章 K J 法の臨床応用-実践的な指針の探索, 福島哲夫編(2016):臨床現場で役立つ質的研究法 臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで, 新曜社, 東京. 17-26.
- 古木弘造(1996):寺崎昌男・久木幸男監修, 日本教育史基本文献・史料叢書 37 幼児保育士, 大空社, 東京.
- 裴海善(ベヘション Haesun BAE)(2014):韓国の保育政策と保育所利用実態, 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, (9), 165-177.
- HOANG Seong-Ha(黄星賀)(2003):韓国の保育所(オリニチップ)に関する研究(1), 佛敎大学大学院紀要, (31), 305-314.
- 長谷川孝子(2015):保育参加導入に関する保育者の意識についての研究Ⅱ ~保護者の保育士体験を中心として~, 清泉女学院短期大学研究紀要 34, 32-42.
- Hornby, Garry. (2011):Parental Involvement in Childhood Education, Building:

Effective School-Family Partnerships Springer, New York.

池本美香(2014):序章日本の幼児教育・保育制度における親の参画の現状, 池本美香編

(2014): 親が参画する保育をつくる 国際調査をふまえて, 1-20, 勁草書房, 東京.

池本美香(2014):12章親と子と保育者が共に学ぶ保育, 池本美香編(2014): 親が参画する

保育をつくる 国際調査をふまえて, 191-201, 勁草書房, 東京.

池本美香(2016): 保育の質の向上に向けた監査・評価の在り方, JRI レビューvol. 4, No. 34

石曉玲, 桂田恵美子(2010):保育園児を持つ母親のディストレス:相互協調性・相互独立性

およびソーシャルサポートとの関連, 発達心理学研究, 21(2), 138-146.

伊藤哲司, 能智正博, 田中共子編(2005):動きながら識る, 関わりながら考える心理学に

おける質的研究の実践, ナカニシヤ出版, 京都.

岩淵祥子, 奥澤聡子, 神川洋平, 川崎有亮, 中西恵美, 贅裕亮, 稗田太郎, 津田洋子, 和田敬仁,

野見山哲生, 母親の育児負担感への寄与因子の検討に関する研究, 信州医誌, 57(5), 155-161.

笠原広一(2008):子供芸術大学による芸術教育の試み-対話と協同による学びと育ちの関

係性の創造-, 美術科教育学会誌, 29(0), 153-163.

Kathy Sylva, Edward Melhuish, Pam Sammons, Iram Siraj-Blatchford and Brenda

Taggart(2004): The Effective Provision of Pre-School Education (EPPE) Project:

Findings from Pre-school to end of Key Stage1, Sure Start, 1-9.

<https://dera.ioe.ac.uk/8543/7/SSU-SF-2004-01.pdf> (参照 2022年1月2日).

神奈川県(2021):『虐待はなぜ起こるのか?』

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/he8/cnt/f533519/p1204633.html> (参照 2021年10月11日)

川喜田二郎(1967):発想法-創造性開発のために 改版, 中央公論新社, 東京.

川島典子(2018): 結合型ソーシャル・キャピタルと橋渡し型ソーシャル・キャピタルに着

目した子育て支援に関する研究, 同志社政策科学院生論集, (7), 13-21.

韓松花(2014):7章韓国:親の参画を通じた保育の民主化の模索, 池本美香編, 親が参画す

る保育をつくる 国際調査をふまえて, 113-128, 勁草書房, 東京.

北島茂樹(2000):1章 人と環境の適合, 山本和郎・原裕視・箕口雅博・久田満編著

(2000): 臨床・コミュニティ心理学 臨床心理学的地域援助の基礎知識, p22.

小林功, 高柳恭子, 岩淵千鶴子, 五十嵐市郎, 大場美穂子, 前原由紀, 稲川知美, 星野さやか

(2004):今後の課題(今、求められる幼稚園像:協同的な学びに向けて), 幼稚園研究紀要 48, 62-64.

小林功, 高柳恭子, 岩渕千鶴子, 五十嵐市郎, 大場美穂子, 前原由紀, 稲川知美, 星野さやか
(2006) : 保護者との協働的な関係を築くために, 宇都宮大学教育学部 教育実践センター
一紀要(29), 395-404.

公益社団法人日本PTA 全国協議会『日本PTA 歩み』
<http://www.nippon-pta.or.jp/jigyou/ayumi/ayumi01.html> (参照 2021 年 6 月 21 日).

古城恵子(2017) : 保育園児の父母の抑うつと関連要因, 小児保健研究、76(4), 345-355.

厚生省 (1947) : 『児童福祉法』 昭和 22 年 12 月 12 日,
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=82060000&dataType=0&pageNo=1 (参照 2021
年 12 月 30 日) .

厚生省 (1998) : 『平成 10 年版厚生白書』
https://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/kousei/1998/dl/05.pdf (参照 2021
年 10 月 21 日) .

厚生労働省(2006) : 『平成 18 年度 子育てに関する意識調査報告書』
https://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/01/dl/s0108-4b_0159.pdf. (参照 2021 年 12 月
31 日) .

厚生労働省 (2007) : 『子ども虐待対応の手引き』 第 2 章発生予防,
[https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/dl/1308
23-01c_004.pdf](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/dl/130823-01c_004.pdf) (参照 2021 年 10 月 12 日) .

厚生労働省(2018) : 『平成 29 年国民生活基礎調査の概況』 [http://www.mhlw.go.
jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa17/dl/10.pdf](http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa17/dl/10.pdf) (参照 2018 年 10 月 20 日) .

厚生労働省 (2018) : 『平成 29 年度雇用均等等基本調査の結果概要』
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-29r/07.pdf> (参照 2018 年 10 月 30 日).

厚生労働省 (2018) : 『保育所保育指針解説』
[https://www.mhlw.go.jp/file/0SeisakuJouhou-11900000-
Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/0SeisakuJouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf) (参照 2021 年 4 月 18 日)

厚生労働省 (2019) : 『令和元年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数』
<https://www.mhlw.go.jp/content/000696156.pdf> (参照 2021 年 6 月 14 日)

厚生労働省(2020) : 『保育所等利用待機児童数調査における除外 4 類型について』 待機児童
等の状況 (年齢別) <https://www.mhlw.go.jp/content/11922000/000666988.pdf> (参照
2021 年 6 月 14 日)

厚生労働省 (2021) : 『平成 30 年度福祉行政報告例の概況』
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/18/dl/gaikyo.pdf> (参照 2021 年

10月12日)。

内閣府(2002)：『平成14年度ソーシャルキャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』，内閣府国民生活局市民活動促進課，委託先：株式会社日本総合研究所
https://www.npo-homepage.go.jp/pdf/report_h14_sc/3-1.pdf (参照2019年3月16日)。

内閣府(2003)：『経済財政運営と構造改革に関する基本方針2003(基本方針2003)』新しい児童育成のための体制整備，
<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/cabinet/2003/0627kakugikettei.pdf> (参照2021年12月30日)。

内閣府(2007)：『多様な子育て支援サービス』『子どもと家族を応援する日本』重点戦略検討会議について，第3回「子どもと家族を応援する日本」重点戦略検討会議「地域・家族の再生分科会」議事次第，
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/meeting/priority/saisei/k_3/19html/s1_2.html (参照2021年10月12日)。

内閣府(2011)：『幼保一体化について(案)』子ども・子育て新システム検討会議作業グループ 幼保一体化ワーキングチーム(第6回)平成23年1月24日
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/meeting/review/wg/youho/k_6/pdf/s1.pdf (参照2021年6月10日)。

内閣府(2012)：『24年版子ども・子育て白書』
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2012/24pdfhonpen/24honpen.html> (参照2021年6月10日)。

内閣府(2014)：『平成25年度家族と地域における子育てに関する意識調査報告書概要』
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h25/ishiki/pdf/gaiyo.pdf> (参照2018年3月30日)。

内閣府, 文部科学省, 厚生労働省(2014)：『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説』
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/law/kodomo3houan/pdf/s-youho-k.pdf> (参照2021年12月30日)。

内閣府(2018)：『共同参画2018年5月号』仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)レポート2017(概要)多様で柔軟な働き方で、みんなが変わる、社会が変わる～はじめの一步は男性の家事・育児・介護から！～男女共同参画局仕事と生活の調和推進室，
https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2018/201805/201805_02.html (参照2021年10月12日)。

- 内閣府(2019) : 『子ども・子育て支援新制度』
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/sukusuku.htm> (参照 2018 年 4 月 30 日).
- 内閣府 (2021) : 『令和 2 年度少子化社会に関する国際意識調査報告』
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/r02/kokusai/pdf/zentai/s2_4.pdf (参照 2021 年 10 月 14 日) .
- 内閣府(2017) : 『「平成 28 年社会生活基本調査」の結果から～男性の育児・家事関連時間～』, 平成 29 年 10 月内閣府男女共同参画局, (参照 2021 年 10 月 31 日).
http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/k_42/pdf/s1-2.pdf. (参照 2021 年 3 月 11 日).
- 永井知子(2016) : 子育て支援領域における援助要請研究の概観と今後の課題, 四国大学紀要, (A)46, 69-80,
- New Zealand Government (2018) : Building genuine learning partnerships with parents, Teaching approaches and strategies that work He rautaki whakaako e whai hua ana, Education Review Office,
- 日本小児科学会(2014) : 『マルトリートメント症候群の長期予後』, こどもの生活環境改善委員会, https://www.jpeds.or.jp/uploads/files/abuse_27.pdf. (参照 2021 年 12 月 28 日).
- 小崎恭弘(2017) : 父親の子育て支援とは何か, 小崎恭弘, 田辺昌吾, 松本しのぶ編 : 別冊発達 33, 家族・働き方・社会を変える父親への子育て支援 少子化対策の切り札, ミネルヴァ書房, 京都,
- 小原美紀(2019) : 子どものいる労働者の家計内時間配分の決定, 日本労働研究雑誌 No. 707/June 2019 47-59.
- 大内義広, 野澤義隆, 萩原康仁(2019) : 母親の育児ストレスを軽減させる保育所や保育士の取組みの研究, 科学研究費助成事業 研究成果報告書.
- 大森洋子, 友定啓子, 清水智子, 中村万紀子, 高田和宣, 川崎徳子, 黒川愛, 藤井典子, 祖父江あゆみ, 荘司康弘, 白石敏行(2004) : 幼稚園における保護者サポートシステムの研究(3), 山口大学学部・附属教育実践研究紀要(4), 173-189.
- 小田豊, 神長美津子, 森真理共編著(2016) : 改訂保育原理 子どもと共にある学びの育み, 光生館, 東京.
- 東社協保育部会調査研究委員会編(2007) : 保育園を利用している親の子育て支援ニーズに関する分析と提言～親から寄せられた「自由記述」の分析から～ 社会福祉法人東京都社会福祉協議会, 東京.

- 隣谷 正範, 大谷 誠英, 川上 ゆかり, 牧田 和美, 丸山 博美, 黒江 美幸, 美谷島 いく子
(2016): 保育現場における保護者の気付きの質に関する研究- 保育参加及び保育参観後の自己分析から -, 松本短期大学研究紀要 25, 13-21.
- Đurišić Maša, Bunijevac Mila (2017): Parental Involvement as a Important Factor for Successful Education, ceps Journal 7(3), 137-153.
- 町野朔, 岩瀬徹, 丸山雅夫, 山本輝之, 栗原直樹, 小西聖子, 水野紀子, 久保野恵美子, 橋爪幸代, 西希代子, 渡辺一弘, 水留正流, 柑本美和, 和田一郎 (2018): 児童虐待システムの総合的検討-児童虐待の防止と児童の保護-, 化学研究費助成事業 研究成果報告書, <https://kaken.nii.ac.jp/file/KAKENHI-PROJECT-22330026/22330026seika.pdf> (参照 2021 年 7 月 22 日).
- 水田聖一(2010): 子ども育成学・序説 ;ロバート・オウエンに見る教育・保育・福祉思想, 富山国際大学子ども育成学部紀要(1), 75-100.
- みずほ総合研究所(2008): 子育て負担感の所在を踏まえた子育て支援の望まれる姿〜「子育てしやすい社会」への変革に向けた課題とその対応策〜, みずほ政策インサイト
- 森川敬子(2020): 第7章 戦後保育体制転換の胎動―失われた20年のもとで「子ども・子育て支援新制度」へ―: 日本の保育の歴史 子ども観と保育の歴史150年, 汐見稔幸, 松本園子, 高田文子, 矢治夕起, 森川敬子, 萌文書林, 東京.
- 文部省・厚生省(1963): 文部省初等中等教育・厚生省児童局長連名通達 各都道府県知事あて『幼稚園と保育所との関係について』 昭和三八年一〇月二八日 文初第四〇〇号・児発第一〇四六号
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00ta8961&dataType=1&pageNo=1 (参照 2021 年 6 月 6 日).
- 文部科学省(2018): 幼稚園教育要領解説
https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf (参照 2021 年 4 月 18 日)
- 文部科学省 (2020): 『幼児教育の現状について』 幼児教育の実践の質向上に関する検討会 (第8回) https://www.mext.go.jp/content/20200305-mxt_youji-000005395_08.pdf (参照 2021 年 10 月 22 日) .
- OECD(2018): Starting Strong Teaching and Learning International Survey2018, 国立教育政策研究所編(2020): 幼児教育・保育の国際比較 OECD 国際幼児教育・保育従事者調査2018 報告書 質の高い幼児教育・保育に向けて, 明石書店, 東京.
- OECD(2012): Starting Strong III: A Quality Toolbox for Early Childhood Education and Care, 秋田喜代美, 阿部真美子, 一見真理子, 門田理世, 北村友人, 鈴木正敏, 星美和子訳

- (2019): OECD 保育の質向上白書, 人生の始まりこそ力強く : ECEC のツールボックス, 明石書店, 東京. 236-303
- 大橋節子, 内田伸子, 上田俊丈, 中原朋生(2018): ニュージーランド保育関係者は 2017 年 テ・ファリキ改訂をどのように捉えたか, チャイルドサイエンス, 2018(16), 41-46.
- Owen, Robert. (1927): with an introduction by G.D.H. Cole.: A New View of Society and Other Writings, Everyman's Library; no. 799, London: J.M. Dent. 梅根悟, 勝田守一監修(1969): 世界教育学選集 社会変革と教育, ロバート・オーエン著, 渡辺義晴訳, 明治図書出版, 東京.
- ピア・サポート学会(2021): 『ピアサポートの理念』 <http://www.peer-s.jp/idea.html> (参照 2021 年 12 月 17 日).
- Parent Cooperative Preschools International (PCPI) (2017): Cooperative Education STARTS HERE, <https://www.preschools.coop/> (参照 2021 年 1 月 3 日).
- Putnam, R. D. (1993): Making democracy work: Civic tradition in modern Italy, Princeton, NJ: Princeton University Press, 河田潤一訳(2001): 哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造, NTT 出版, 東京.
- Putnam, R. D. (2000): Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community, NY: Simon & Schuster, 柴田康文訳(2008): 孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生, 柏書房, 東京.
- 総務省 (2017): 統計局, 『平成 28 年社会生活基本調査—生活時間に関する結果—』, <https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf> (参照 2021 年 12 月 27 日).
- 総務省 (2020): 『統計トピックス NO. 125』 我が国のこどもの数 —「こどもの日」にちなんで— (「人口推計」から No. 125, <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/topics/topi1251.html> (参照 2021 年 10 月 19 日)).
- 齋藤克子 (佳津子) (2008): ソーシャル・キャピタルの一考察—子育て支援現場への活用を目指して—, 現代社会研究科論集(2), 71-81.
- 佐々木正美(2009): 子どもへのまなざし, 福音館書店, 東京.
- 佐藤純子(2010): 日本およびニュージーランドにおけるプレイセンターのソーシャルキャピタル効果に関する事例研究—参加する親達の精神性や行動特性を手がかりにして—, 海外社会補償研究, winter2010, (173), 16-27.
- 佐藤純子(2010): 保育・介護労働の現状と課題 その 4 -保育所における地域子育て支援の実態調査を通して—, 淑徳短期大学研究紀要, (49), 99-110.

- 佐藤純子(2014):10章 ニュージーランド:親も学ぶ幼児教育施設, 池本美香編, 親が参画する保育をつくる 国際調査をふまえて, 161-176, 勁草書房, 東京.
- 佐藤純子 (2016): プレイセンターにおける乳幼児期の親子参画の在り方に関する研究: SPACE プログラムを実施することの意義と今後の方向性, 淑徳大学短期大学部研究紀要, (55), 65-79.
- 佐藤拓代(2017):日本の小児虐待の現状と対策 虐待をする親の背景と理解, 第64回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム1, 76 (6), 535-537.
- 下田一彦 (2015): 保育所・幼稚園での保護者との連携-山形県における保護者の保育参加の現状を中心に-, 東北教育学会研究紀要第 (18), 15-28.
- Susan M. Breitenstein, Deborah Gross, Louis Fogg, Alison Ridge, Christine Garvey, Wrenetha Julion, Sharon Tucker, The Chicago Parent Program: Comparing 1-Year Outcomes for African American and Latino Parents of Young Children, Res Nurs Health. 2012 Oct; 35(5): 475-489.
Published online 2012 May 24. doi: 10.1002/nur.21489
- 汐見稔幸, 松本園子, 高田文子, 矢治夕起, 森川敬子(2020):日本の保育の歴史 子ども観と保育の歴史150年, 萌文書林, 東京. P2, 77, 93, 111, 160, 180-184, 252-257.
しんぼれん(新しい保育を考える会) <http://shinporen.web.fc2.com/> (参照2021年10月28日).
- 菅野幸恵, 米山晶(2016):子どもとなりで育ちを見守る-ある保育者の語りから見る自主保育という育ちの場, 質的心理学研究, (15)26-46.
- 住田正樹, 中村真弓, 山瀬範子(2009):幼児をもつ親の役割意識に関する研究, 放送大学研究年報, (27), 25-33.
- 梶瑞希子 (2016): 7章 保育の歴史を知る:改訂保育原理 子どもと共にある学びの育み, 小田豊, 神長美津子, 森眞理, 光生館, 東京.
- 高橋一郎, 加藤あや美(2017): ニュージーランドにおける保育制度の現状のまとめとその検討, 名古屋短期大学研究紀要(55).
- 高橋靖子, 木野和代(2020):保護者の望む「保育者の共感的関わり」に関する質的検討 母親へのインタビューに基づいて, 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 vol. 5, 69-75.
- 手島聖子, 原口雅浩(2003):乳幼児健康診査を通じた育児支援: 育児ストレス尺度の開発, 福岡県立大学看護学部紀要, 1, 15-27.
- 友定啓子 (2004): もう一つの子育て支援 保護者サポートシステム, フレーベル館, 東京.

- 渡辺弥生, 石井睦子 (2009) : 乳幼児をもつ母親の育児ストレスにソーシャル・サポートおよび自己効力感が及ぼす影響について, 法政大学文学部紀要, (60), 133-145.
- 矢治夕起 (2020) : 第6章 戦後保育制度の確立と展開 : 日本の保育の歴史 子ども観と保育の歴史 150年, 汐見稔幸, 松本園子, 高田文子, 矢治夕起, 森川敬子, 萌文書林, 東京.
- 吉田弘道 (2012) : 育児不安研究の現状と課題, 専修人間科学論集 心理学編, 2(1), 1-8.
- 全国保育協議会 (2008) : 全国の保育所実態調査 報告書 2008 5,
<http://www.zenhokyo.gr.jp/pdf95DB88E78F8A82CC8EC091D492B28DB8814095F18D908F912E706466>(参照 2021年6月27日).

謝辞

本論文は、東海大学大学院文学研究科コミュニケーション学専攻博士課程後期における研究で得られた結果を積み重ねたものです。

本論文をまとめるにあたり、多くの先生方のご指導を賜りました。指導教員である東海大学芳川玲子先生には、常に研究の目的に沿った的確な道筋を示して下さい、研究の意義を見いだせるご指導をいただきました。また、研究を継続するにあたり、励ましと労りの言葉を掛けていただき、長い道のりを歩める力を与えて下さいました。どのような時にもそれらの言葉が自分自身を前進させる糧と力になりました。心より感謝申し上げます。

また、本論文の提出にあたり、主査である東海大学浅井千秋先生には、論文をご精読下さり、様々なご指南をいただきました。審査にあたり、最後まで様々なご調整の労をお取り下さったことを深く感謝申し上げます。さらに、本論文をご精読いただいた日本ウェルネススポーツ大学近藤卓先生、東海大学菅沼真樹先生、東海大学中島由宙先生には、様々なご指南をいただき、論文提出へと導いて下さいましたことを厚く御礼申し上げます。先生方からいただいたご鞭撻をもとに、今後、さらに研究を深めていく所存です。

本研究の調査におけるデータ収集に際しては、保育施設において、多忙な中、園長先生はじめ、保育職員の皆様、父母会の皆様に多大なるご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

事務に関する手続きに関し、事務局の皆様にお世話になりましたことを感謝申し上げます。執筆にあたり、道標として様々な面で助言いただきました先輩の方々、励ましあつた

同期、見守り支えて下さった職場の皆様、励まし見守り続けてくれた家族、友人知人、関係者の皆様全てに、この場を借りて感謝申し上げます。

巻末資料

資料 1 : 研究参加への説明書 (園長用)

資料 2 : 研究参加への同意書 (園長用)

資料 3 : 研究参加への説明書 (保育士用)

資料 4 : 研究参加への同意書 (保育士用)

資料 5 : 研究参加への説明書 (母親・父親用)

資料 6 : 研究参加への同意書 (母親・父親用)

資料 7 : 録音および音声データ使用に関する承諾書

資料 8 : 半構造化面接における質問事項 (園長用)

資料 9 : 半構造化面接における質問事項 (保育士用)

資料 10 : 半構造化面接における質問事項 (母親・父親用)

資料 1

年 月 日

法人
様

研究参加への説明書

園長 充て

1. 研究目的と内容および研究期間について

本研究は「親の保育参画の促進に関する研究」です。親の保育参画の仕組みがどのように形成・維持されているのか、保育参画によって親の心理的負担の軽減の理由について明らかにするために調査を行います。

【研究内容】 インタビュー調査を実施し、保育参画の形成過程と維持、その背景、およびその実際を把握します。保育参画によって親の心理的負担が軽減される理由について明らかにします。そしてその結果を踏まえて、他の保育園での保育参画実現のための適用可能性を考察します。

データの解析・分析等を含め研究期間は 2019年4月20日～2021年3月31日です。

2. 貴園の親と保育者に研究参加をお願いする理由および調査の実施方法等について

本研究では、保育参画の実態を具体的に把握するために、園長・副園長をはじめとした保育者および子どもの親（卒園児の親を含む）を対象としたインタビューを実施させていただきたいと考えています。自由意志で研究にご参加いただける親と保育者の公募の許可をいただき、対象者へのインタビューでは、保育参画の実際と、保育参画することに対するお考えをお聞きし、保育参画の形成と維持、その背景、親の心理的負担の軽減の理由を調査します。インタビューの方法と時間は、園長はじめ保育者の方々、親の方々それぞれに個別で約30分から1時間程度実施します。調査の際には、対象者の方々のプライバシーを最大限に尊重し、対象者それぞれの方の意向に沿った語りやすい空間を工夫します。日常業務と保育に支障のない場所の提供をお願いしたいと考えております。これらのことについて必要があればさらに詳細をご説明させていただきます。なお、研究実施者が保育に支障のない時間帯に参加協力いただける保育者・親を募ります。

インタビューと調査の実施期間は 2019年4月20日～2020年3月31日を予定しております。

3. 貴園の親と保育者の研究への参加について

本研究へのご参加・ご協力は全くの任意ですので、拒否されてもかまいません。また、研究開

始後でも、お申し出いただければ、いつでもご参加・ご協力をご辞退いただけます。拒否およびご辞退により、貴園の保育者と親に不利益が生ずることは一切ありません。また、インタビューや調査など本研究の遂行において、対象者に心理的問題が生じた場合は、直ちに研究担当者にお申し出いただければ、誠意をもって対処いたします。

4. データの管理、取り扱いおよび保管期間について

データは個人情報と切り離し、厳重に管理し、研究終了から5年後に完全廃棄します。個人情報の管理責任を含め、研究の責任者は東海大学文化社会学部心理・社会学科芳川玲子教授です。貴園の親と保育者から得られたデータに関しては他者に漏洩する事がないように細心の注意を払います。

データの保管期間は、研究終了から5年間（2026年3月31日まで）を予定しております。

5. 得られたデータの利用について

得られたデータは、氏名等個人が特定できない形に加工処理をした上で、それに基づく研究成

果を日本精神衛生学会および教育心理に関する学会にて発表し、また学術論文として公表する予定です。

6. 連絡先について

同意後であっても、疑問点や苦情等があればいつでも下記の研究責任者にご連絡ください。

なお、本研究は東海大学の『人を対象とする研究』に関する倫理委員会」の承認を得て行うものです。

研究責任者： 芳川 玲子 印

研究実施者： 尾近 千鶴 印

連絡先（電話番号等）0463-58-1211（内線 3034）

研究参加についての同意書

私は、研究計画「親の保育参画の促進に関する研究」において、以下の事項について、詳しく説明を受けました。

※確認のため、説明を受けた項目については、各項目に付した□の中にレ印を記入してください。

1. 研究目的と内容および研究期間について

研究目的

研究内容 インタビュー調査を実施し、保育参画の形成と維持、その背景、形成過程、およびその実際を把握します。保育参画によって親の心理的負担の軽減の理由について明らかにします。そして、その結果を踏まえて、他の保育園での保育参画実現のための適用可能性を考察します。

研究期間 2019年4月20日～2021年3月31日

2. 親と保育者に研究参加をお願いする理由および調査の実施方法等について

研究参加をお願いする理由

調査実施方法

調査場所

調査期間 2019年4月20日～2020年3月31日

3. 親と保育者の研究への参加について

親と保育者の研究への参加は任意であること

拒否、辞退にともなう不利益がないこと

4. データの管理、取り扱いおよび保管期間について

データの管理、取り扱い

保管期間 研究終了後5年（2026年3月31日予定）

5. 得られたデータの利用について

学会発表、論文等への利用

6. 研究に対する問い合わせ・苦情等の連絡先について

連絡先

以上の事項を確認したうえで、保育園の代表者である園長として本研究への参加に同意致します。

(西暦) _____年____月____日

同意者氏名：役職 _____ 印

連絡先 _____

1. 研究目的と内容および研究期間について

本研究は「親の保育参画の促進に関する研究」です。親の保育参画の仕組みがどのように形成・維持されているのか、保育参画によって親の心理的負担の軽減の理由について明らかにするために調査を行います。

【研究内容】 インタビュー調査を実施し、保育参画の形成過程と維持、その背景、およびその実際を把握します。保育参画によって親の心理的負担が軽減される理由について明らかにします。そしてその結果を踏まえて、他の保育園での保育参画実現のための適用可能性を考察します。

データの解析・分析等を含め研究期間は 2019年4月20日～2021年3月31日です。

2. あなたに研究参加をお願いする理由および調査の実施方法等について

この研究では、保育参画の実態を具体的に把握するために、あなたを対象としたインタビューを実施させていただきたいと考えています。自由意志で研究にご参加いただけるインタビューでは、親の保育参画の実際と、保育参画に対するあなたのお考えをお聞きし、保育参画の形成と維持、その背景、心理的負担の軽減を生み出している理由を調査します。インタビューの方法と時間は、個別またはグループで、30分から1時間程度実施します。インタビューでは、あなたのプライバシーを最大限に尊重し、あなたの意向に沿った語りやすい空間を工夫します。これらのことについて必要があればさらに詳細をご説明させていただきます。

インタビューと調査の実施期間は 2019年4月20日～2020年3月31日を予定しております。

3. あなたの研究への参加について

この研究へのご参加・ご協力は全くの任意ですので、拒否されてもかまいません。また、研究開始後でも、お申し出いただければ、いつでもご参加・ご協力をご辞退いただけます。拒否およびご辞退により、あなたに不利益が生ずることは一切ありません。また、インタビューや調査など、この研究の遂行において、あなたに心理的問題が生じた場合は、直ちに研究担当者にお申し出いただければ、誠意をもって対処いたします。

4. データの管理、取り扱いおよび保管期間について

データは個人情報と切り離し、厳重に管理し、研究終了から5年後に完全廃棄します。個人情報の管理責任を含め、研究の責任者は東海大学文化社会学部心理・社会学科芳川玲子教授です。あなたから得られたデータに関しては他者に漏洩する事がないように細心の注意を払います。

データの保管期間は、研究終了から5年間（2026年3月31日まで）を予定しております。

5. 得られたデータの利用について

得られたデータは、氏名等個人が特定できない形に加工処理をした上で、それに基づく研究成果を日本精神衛生学会および教育心理に関する学会にて発表し、また学術論文として公表する予定です。

6. 連絡先について

同意後であっても、疑問点や苦情等があればいつでも下記の研究責任者にご連絡ください。

なお、本研究は東海大学の『人を対象とする研究』に関する倫理委員会」の承認を得て行うものです。

研究責任者： 芳川 玲子

研究実施者： 尾近 千鶴

連絡先 (電話番号) 0463-58-1211 (内線 3034)

研究参加についての同意書

私は、研究計画「親の保育参画の促進に関する研究」において、以下の事項について、詳しく説明を受けました。

※確認のため、説明を受けた項目については、各項目に付した□の中にレ印を記入してください。

1. 研究目的と内容および研究期間について

研究目的

研究内容 フィールド調査とインタビュー調査を実施し、保育参画の形成と維持、その背景、形成過程、およびその実際を把握します。保育参画によって親の心理的負担の軽減を生み出している理由について明らかにします。そして、その結果を踏まえて、他の保育園での保育参画実現のための適用可能性を考察します。

研究期間 2019年4月20日～2021年3月31日

2. あなたに研究参加をお願いする理由および調査の実施方法等について

研究参加をお願いする理由

調査実施方法

調査場所

調査期間 2019年4月20日～2020年3月31日

3. あなたの研究への参加について

あなたの研究への参加は任意であること

拒否、辞退にともなう不利益がないこと

4. データの管理、取り扱いおよび保管期間について

データの管理、取り扱い

保管期間 研究終了後5年（2026年3月31日予定）

5. 得られたデータの利用について

学会発表、論文等への利用

6. 研究に対する問い合わせ・苦情等の連絡先について

連絡先

以上の事項を確認したうえで、本研究への参加に同意いたします。

(西暦) _____年____月____日

同意者氏名： _____ 印

1. 研究目的と内容および研究期間について

本研究は「親の保育参画の促進に関する研究」です。親の保育参画の仕組みがどのように形成・維持されているのか、保育参画によって親の心理的負担の軽減の理由について明らかにするために調査を行います。

【研究内容】 インタビュー調査を実施し、保育参画の形成過程と維持、その背景、およびその実際を把握します。保育参画によって親の心理的負担が軽減される理由について明らかにします。そしてその結果を踏まえて、他の保育園での保育参画実現のための適用可能性を考察します。

データの解析・分析等を含め研究期間は 2019年4月20日～2021年3月31日です。

2. あなたに研究参加をお願いする理由および調査の実施方法等について

この研究では、保育参画の実態を具体的に把握するために、あなたを対象としたインタビューを実施させていただきたいと考えています。自由意志で研究にご参加いただけるインタビューでは、あなたの保育参画の実際と、保育参画に対するお考えをお聞きし、保育参画の形成と維持、その背景、心理的負担の軽減を生み出している理由を調査します。インタビューの方法と時間は、あなたに個別で、30分から1時間程度実施します。インタビューでは、あなたのプライバシーを最大限に尊重し、あなたの意向に沿った語りやすい空間を工夫します。これらのことについて必要があればさらに詳細をご説明させていただきます。

インタビューと調査の実施期間は 2019年4月20日～2020年3月31日を予定しております。

3. あなたの研究への参加について

この研究へのご参加・ご協力は全くの任意ですので、拒否されてもかまいません。また、研究開始後でも、お申し出いただければ、いつでもご参加・ご協力をご辞退いただけます。拒否およびご辞退により、あなたに不利益が生ずることは一切ありません。また、インタビューや調査など、この研究の遂行において、あなたに心理的問題が生じた場合は、直ちに研究担当者にお申し出いただければ、誠意をもって対処いたします。

4. データの管理、取り扱いおよび保管期間について

データは個人情報と切り離し、厳重に管理し、研究終了から5年後に完全廃棄します。個人情報の管理責任を含め、研究の責任者は東海大学文化社会学部心理・社会学科芳川玲子教授です。あなたから得られたデータに関しては他者に漏洩する事がないように細心の注意を払います。

データの保管期間は、研究終了から5年間（2026年3月31日まで）を予定しております。

5. 得られたデータの利用について

得られたデータは、氏名等個人が特定できない形に加工処理をした上で、それに基づく研究成果を日本精神衛生学会および教育心理に関する学会にて発表し、また学術論文として公表する予定です。

6. 連絡先について

同意後であっても、疑問点や苦情等があればいつでも下記の研究責任者にご連絡ください。

なお、本研究は東海大学の『人を対象とする研究』に関する倫理委員会」の承認を得て行うものです。

研究責任者： 芳川 玲子

研究実施者： 尾近 千鶴

連絡先 (電話番号) 0463-58-1211 (内線 3034)

研究参加についての同意書

私は、研究計画「親の保育参画の促進に関する研究」において、以下の事項について、詳しく説明を受けました。

※確認のため、説明を受けた項目については、各項目に付した□の中にレ印を記入してください。

1. 研究目的と内容および研究期間について

研究目的

研究内容 フィールド調査とインタビュー調査を実施し、保育参画の形成と維持、その背景、形成過程、およびその実際を把握します。保育参画によって親の心理的負担の軽減を生み出している理由について明らかにします。そして、その結果を踏まえて、他の保育園での保育参画実現のための適用可能性を考察します。

研究期間 2019年4月20日～2021年3月31日

2. あなたに研究参加をお願いする理由および調査の実施方法等について

研究参加をお願いする理由

調査実施方法

調査場所

調査期間 2019年4月20日～2020年3月31日

3. あなたの研究への参加について

あなたの研究への参加は任意であること

拒否、辞退にともなう不利益がないこと

4. データの管理、取り扱いおよび保管期間について

データの管理、取り扱い

保管期間 研究終了後5年（2026年3月31日予定）

5. 得られたデータの利用について

学会発表、論文等への利用

6. 研究に対する問い合わせ・苦情等の連絡先について

連絡先

以上の事項を確認したうえで、本研究への参加に同意いたします。

(西暦) _____年____月____日

同意者氏名: _____ 印

録音および音声データ使用に関する承諾書

東海大学医療技術短期大学

尾 近 千 鶴 殿

東海大学文化社会学部

芳 川 玲 子 殿

私は、以下の条件のもとに、インタビューの録音及び音声データの使用を承諾します。

- 1 インタビュー録音は、私が協力する研究実施者の説明した条件のもとで行われること
- 2 インタビュー録音は、私の協力する研究実施者の承認を受けた人が行うこと
- 3 録音された音声データは、研究終了後 5 年間保管された後、消去廃棄処分されること
- 4 録音された音声データは、他の研究資料と同様に第三者に漏洩することがないよう厳重に管理すること

年 月 日

研究参加者氏名

A. 保育参画の背景

- 1) 主体的に企画や運営に携わる保育参画について、知るところを教えてください。
- 2) どういった経緯で保育参画をする保育園を目指したのですか。
- 3) 保育参画に対する期待や施設管理者としての目的はどのようなものでしたか。

B. 保育参画のプロセスについて

- 1) 子どもの入園当初、親の保育参画にどのような印象をもちましたか。
- 2) 保育園の経過における保育参画の「はじめ」から「現在」までを通して、あなた自身について思い出されることはどんなことですか。

C. 保育者について

- 1) 保育者について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 保育者はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画全体の「はじめ」と「現在」までで、保育者の印象は変わりましたか。

D. 親について

- 1) 親について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 親はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画全体の「はじめ」と「現在」までで、親の印象は変わりましたか。

E. 保育参画を構築した生活体験について

- 1) 保育参画構築は、あなた自身の理解に役立ちましたか。
- 2) 保育参画構築は、あなたの人生観に何か影響がありましたか。
- 3) 保育参画構築は、あなたの身近な人との関係に何か影響がありましたか。
- 4) 保育参画構築は、あなたの仕事（家庭生活）に何か影響がありましたか。
- 5) 保育参画構築は、あなたの仕事上（家庭生活上）の人間関係に何か影響がありましたか。
- 6) 保育参画を構築することと保育の質にどのような関係がありましたか。

F. 保育参画と保育の質の振り返りについて

A. 保育参画の背景

- 1) 主体的に保育の企画や運営に携わる「保育参画」について知っている事柄を教えてください。
- 2) 保育参画を実施する保育園に就職した経緯を教えてください。
- 3) 親が保育参画することに、どのような目的があるか教えてください。

B. 保育参画のプロセスについて

- 1) 子どもの入園当初、親の保育参画にどのような印象をもちましたか。
- 2) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、あなた自身について思い出されることはどんなことですか。
実際と運営について、工夫と改善について

C. 他の保育者（上司・同僚）について

- 1) 保育参画を促進する上で、他の保育者について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 保育参画を実施する保育者はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、保育者の印象は変わりましたか。

D. 親（園児の父母）について

- 1) 保育参画を促進する上で、親について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 親はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、親にどのような変化がありましたか。

E. 保育参画の実施について

- 1) 保育参画の実施によって、あなたの保育観はどのように変化しましたか。
- 2) 保育参画の実施は、あなたと他の保育者と園長と親の間にどのような関係を生み出しましたか。

3) 保育参画の実施は、あなたの仕事（家庭生活）に何か影響がありましたか。

F. 保育参画の振り返りについて

1) 保育参画を振り返って、以下のことを教えてください。

親の心理的負担感が軽減されましたと感じますか。

親の自己肯定感にどのように変化が生じたと感じますか。

A. 保育参画の背景

- 1) 主体的に保育の企画や運営に携わる「保育参画」について知っている事柄を教えてください。
- 2) 保育参画を実施する保育園に子どもを入園させた経緯を教えてください。
- 3) 親が保育参画することに、どのような目的があるか教えてください。

B. 保育参画のプロセスについて

- 1) 子どもの入園当初、保育参画を実施して、どのような印象をもちましたか。
- 2) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、あなた自身について思い出されることはどんなことですか。
実際と運営について、工夫と改善について
- 3) 他の親にこの園をお勧めしますか。

C. 保育者について

- 1) 保育参画を促進する保育者について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 保育参画を実施する保育者はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、保育者の印象は変わりましたか。

D. 親（園児の父母）について

- 1) 保育参画を促進する他の親について思い出されることはどんなことですか。
- 2) 他の親はあなたにとってどんな存在でしたか。
- 3) 保育参画の導入当初から現在までを回顧して、他の親にどのような変化がありましたか。

E. 保育参画の実施について

- 1) 保育参画の実施によって、あなたの子育て観はどのように変化しましたか。

2) 保育参画の実施は、あなたと他の親と園長と保育者の間にどのような関係を生み出しましたか。

3) 保育参画の実施は、あなたの仕事（家庭生活）に何か影響がありましたか。

F. 保育参画の振り返りについて

1) 保育参画を振り返って、以下のことを教えてください。

心理的負担感が軽減されましたと感じますか。

自己肯定感にどのように変化が生じたと感じますか。